



即刻開悟の鍵5

スプリームマスター チンハイ

即刻開悟の鍵 5

スプリームマスター チンハイ

目 次

スプリームマスター チンハイのプロフィール 愛の道	5
1 超世界の音	11
2 超世界の光	39
3 観音法門の修行の利益	71
4 カルマはどこから来るのか	105
5 すべての修行法門は観音法門である	135
6 智慧眼の奥義	161

	7	阿修羅の衆生	191
	8	悟りを開くとは何か	231
	9	仏陀とは何か	263
	10	三界以下の概況	297
		印心―観音法門	331
		出版物の紹介	335
		私たちへの連絡方法	339

スプリームマスター チンハイのプロフィール 「愛の道」

スプリームマスター チンハイは、世界的に有名な靈性の指導者であり、芸術家、慈善家です。彼女の愛の心は、あらゆる文化と人種の壁を越えて、世界中の隅々まで届けられています。彼女はオウラック（ベトナム）の中部に生まれ、青年期にはヨーロッパに留学し、その地の赤字に勤務しました。すぐに彼女は世界の至る所が、苦難に満ちていることに気づきました。それゆえ彼女は苦難から救う方法を探す決意をし、このことが人生の最も重要な目標となりました。当時スプリームマスター チンハイはドイツ人の医師と結婚していて、幸福な家庭生活を送っていました。別れることは彼女らにとって極めて困難な選択でしたが、それでも夫の祝福のもと、彼女は自己の理想の実現のために旅立ちました。スプリームマスター チンハイは求道の旅を始め、靈性の開悟を追い求め、最後にヒマラヤで悟りを開いたマスターから、内面の光と音を観るメディテーション法門を伝授されました。これは後に彼女が伝授している「観音法門」です。彼女はある期間、修行に精進し、完全に悟りを開きました。

一九八〇年代に、スプリームマスター チンハイ インターナショナル アソシエーションが発足されました。マスターの教理が主旨となっています。そして人々の心からの懇願により、ス

プリームマスター チンハイは人々に「観音法門」を伝授し始め、自分の内面の偉大な本質を見つけて出すよう、励ましてきました。まもなくアメリカ、ヨーロッパ、アジア、オーストラリア、アフリカの五大州と国連の招聘に応じ、現地に赴き講演をしました。

スプリームマスター チンハイは慈悲にあふれ、貧困弱者に対して、すみずみまで行き届くよう援助しています。彼女の慈善活動は世界のあらゆる境界を越え、世界各地の貧しい人々や、苦しい状況にある老人、受刑者、心身障害者、ホームレス、アメリカの退役軍人たちにまで及んでいます。また現在、地球温暖化がさまざまな危機を引き起こしています。スプリームマスター チンハイは数百万ドルを寄贈して、人道的援助を行うと同時に、インタナショナルアシナショナル シェアリングのメンバーに世界各地に赴き、数多くの被災者を助けるよう指示してきました。その他スプリームマスター チンハイの愛は、地球上の貴重な友である動物や生態環境にまで及んでいます。慈悲深い愛に、世界の多くの人々が感動しています。彼女は人々に無私の愛の手本を示しているのです。彼女はまた、絵画、ランプのデザイン、ファッションデザイン、ジュエリーデザインなどの芸術創作活動による収益を、援助を必要とする神の子たちのために使っています。

近年、スプリームマスター チンハイは三部作を出版しました。「バード イン マイライフ」「ドッグ イン マイライフ」「気高い野生動物」です。この三部作はいずれも国際的にベストセラーとなり、さまざまな言語に翻訳されました。これらの本はマスターが霊的なコミュニケーション

シヨンと洞察力をもって、人類の友である動物たちの情感と考えを記録したもので、動物たちの高貴な精神と無私の愛を表したものです。

また道徳を広め、優秀な人たちを見習うよう、人々に励ますために、スプリームマスター・チンハイは二〇〇六年三月に「輝く世界の指導者賞」を設け、後にまた、「輝く世界の英雄賞」「輝く世界の愛情賞」「輝く世界の誠実賞」「輝く世界の発明家賞」などを設けました。これらの榮譽ある受賞者は、個人のほかに国家や団体も含まれています。彼らは世界に手本を示し、平和と美しい地球の持続的発展のために大きな貢献をしました。たとえば、スロバニア共和国の第二代大統領ヤネス・ドルノウシエク博士、アメリカの第四五代副大統領アル・ゴア氏（国連気候変動に関する政府間パネルと共同で二〇〇七年ノーベル平和賞を受賞）、国連気候変動に関する政府間パネル議長、インドのエネルギー研究所の所長のラージェンドラ・パチャウリー博士（二〇一〇年にUN-HABITAT 都市スピーチ賞を受賞）、NASAゴダード宇宙科学研究所主任研究員ジェームス・ハンセン博士（二〇〇九年にロスビー研究賞を受賞）、イギリスの有名な霊長類学者ジェーン・グドール博士です。

スプリームマスター・チンハイも「輝く世界の英雄賞」「輝く世界の知性賞」を人類のよき友である動物たちにも授与しました。動物たちが危険を顧みず他の命を助け出した、無私の健全な行動を称え、動物たちの愛に満ちた勇氣と聡明さと思いやりの精神を称えました。

スプリームマスター・チンハイは霊的な面だけでなく、物質面でも世界に多大な貢献をしてい

ます。彼女自身はいかなる承認も求めていませんが、世界各国の政府や非営利団体は彼女の献身的な奉仕を称えて多くの賞を授与しました。たとえば、二〇〇六年グシ平和賞、二〇〇六年第二七回テリ―賞銀賞、二〇〇二年ロサンゼルス・ミュージック・ウィーク表彰、一九九四年世界精神指導者賞、一九九四年世界市民人道主義者賞などです。この他にアメリカ政府の官僚により、二月二二日と一〇月二五日をチンハイデーと定められました。今でも彼女はこの世界を助けるために全力を尽くしています。数多くの世界のリーダーと民衆は、彼女に対し感謝しています。

スプリームマスター チンハイは環境保全の先駆者としても有名です。彼女は智慧と勇氣をもって、気候温暖化問題に対し、警告を發しました。実際、彼女は二十数年前から、すでに環境保全を呼びかけています。彼女が「もう一つの生き方」、「SOS地球温暖化を阻止しよう」という活動を地球規模で展開し、地球温暖化阻止国際会議にも出席し、ゲストとして基調報告を行い、人々に現在世界的に頻繁に起きている、災害の根本的な原因と解決の道を示しました。それはつまり、慈悲にあふれるビーガンライフスタイルです。現在、人々によく知られているスローガン、「ビーガンになって、平和な世界を創る」は、スプリームマスター チンハイが發案したものです。

食生活が気候に大きな影響をもたらしていることから、人々に慈悲に満ちた持続可能なライフスタイルを提供するため、ビーガンレストラン「Loving Hut (ラブングハット)」はスプリ

ームマスター チンハイの呼びかけに応じて大きく発展しています。これらのレストランは人気になり、世界各地にチェーン店があり、安くて美味しく、しかも栄養バランスのとれた、さまざまなビーガン料理を提供しています。人々に健康的な食生活を勧め、最も有効な温暖化阻止の道を示しているのです。それにより、この地球と住んでいる人々、そして生きとし生けるもの、私たちの子孫を保護し、地球温暖化によってもたらされる、絶滅的な影響を免れるのです。

この時代において、スプリームマスター チンハイは無私の奉獻をし、苦勞をいとわず、世界の人々を助け、貴重な地球のために、光り輝く未来を切り開いています。

メッセージ

霊性の師であり、芸術作家でもあるスプリームマスター チンハイは、内面の美を表現することをこよなく愛しています。そのようなわけで、彼女はベトナムを「オウラック」、台湾を「フォルモサ」と呼んでいるのです。オウラックはベトナムの古称で「幸福」を意味し、また、フォルモサの名はその島と人々の美をより完全に表しています。マスターはこれらの名称を使うことで、その土地と住人の霊性を上昇させ、福報をもたらすと感じているのです。

ビーガンのライフスタイル

スプリームマスター チンハイは講義の中で菜食について言及しています。二〇一〇年からは「ビーガン食生活」を人類の理想的なライフスタイルとして力強く、熱心に、強く推進しています。これも博愛の精神によるもので、ビーガン生活は動物たちが受けている大きな苦しみをなくし、人々が病気による苦しみから免れるためでもあります。また二〇一〇年四月十四日からビーガン食生活を印心の条件の一つに定めています。（ビーガンとはまったく動物性成分を含んでいない食べ物のことを指します。つまり乳製品、魚、肉類と卵（受精卵、未受精卵）なども含まない食べ物です）



超世界の音

スプリームマスター チンハイ フォルモサ・澎湖

一九八七年四月二十四日

徳の高いみなさん、良き友のみなさん、私たちは初めてお会いしますが、仏教の因果から言
うと、私たちは良き友です。前世ですでに良き友だったので、それで今、みなさんに再びお会
いできて、私はとてもうれしいのです。みなさんはうれしかどうかわかりませんが。(聴衆「う
れしいです」と答える) 「甘夏(ガムシヤ。マスターは台湾語で感謝と答える)」(笑い)

仏教の言い方によれば、私たちはどうやらとても縁があるようです。縁とは何でしょう。そ
れは前世において一緒にいて、互いに何か関係があったのです。私たちが人間として生まれて
来たのは一回だけではありません。行ったり来たり何回も輪廻を繰り返して来ました。その間、
私たちには多くの友人、親類、夫、妻などがいました。それで今、みなさんがここに集まって
いるのです。私たちは決して見知らぬ人ではなく、ただ衣服を取り替えただけです。これ(マ
スターは体を指して)は衣服です。私たちの内在の本当の主人はこの肉体ではありません。毎
回生まれて来るたびに違う衣服を着ているので、互いにわからなくなっただけです。でも、私た

ちがたくさん修行をすると、過去、現在、未来のことは見ることができ、すると私たちは互いに関係があることがわかります。今一緒にいるということはまさに関係があるからです。

ここに講義を聞きに来ている人の中には、さまざまな宗教の代表者や信者がいるかもしれませんが、実はイエス・キリストも「因果」について述べています。聖書で「私は古代のある大師の化身、あるいは生まれ変わりで」と言っています。また「大師たちは常に化身してこの世に来て、私たちと一緒に暮らします。でもみなさんは大師たちを知らないのです」と言っています。キリストの言っている意味は明らかに因果、輪廻を指しています。また“*As you sow, so shall you reap.*”と言っています。この意味は「汝がまいた種は自ら刈り取らなければならぬ」です。これが因果でなくて何でしょう。仏教の言い方と違いはありません。

道徳経(どうとくきょう)の中でも因果について述べていますが、古文はわかりにくいので、みなさんはわからないかもしれないかもしれませんが、詳しく読めばわかると思います。例えば老子は「這個道本来很中立的,但是祂會傾向善良的人」(道徳経第七十九章 天道無親,常與善人。)(この道は本来とても中立であるが、しかし、善良な人に傾いている)と言っています。この意味は因果を指していて、この「道(タオ)」は良い人にだけ援助し、福をもたらす、ということなんです。これも「原因があれば結果がある」という意味が含まれています。

ですから、私たちはよく考えればわかります。どんな宗教もみんな同じことを言っています。

私の言った道理と違うところはあります。イスラム教も同じことを言っていますが、今日私たちの目的は宗教の討論会を行うことではないので、ここまでにしめしめよう。

なぜ、私は多くの宗教はすべて同じであることを最初に話したのでしよう。この重要な点を説明しないと、今日ここにいらした何人かの聴衆は、私がここでみなさんを改宗させて、仏教徒になるようにと勧めているのではないかと思うからです。違います。私はそんなことは望んでいません。私から見た場合、どんな人もすべて仏教徒ですが、ただ名称が違うだけである、というものです。私は仏教、キリスト教、道教、イスラム教はすべて良い宗教だと思っていますが、ただし、私が思うに、今日の仏教徒、キリスト教徒、道教徒、イスラム教徒などのほとんどの方が、教主の教理を誤解しているということです。それで多くの宗派に分かれ、論争が絶えないのです。自分の宗教の中でさえ、見解が異なり、論争が絶えないのに、他の宗教間での衝突はもっと激しいことは言うまでもありません。これはとても残念なことだと、私は遺憾に思います。

教主がこの世界を離れたあと、真理を伝える高僧がいなくなり、それでだんだん変質して、現在に至り変わってしまいました。私たちはあらゆる宗教はすべて同じではないと思っていますが、実際、本来は同じだったのです。私たちが本当にこの教主たちの教理を理解できたら、真理はすべて同じであることがわかります。宗教は異なっているかもしれませんが、修行の法門はすべて同じです。

私の言っている意味は、どんな宗教を信じるにせよ、すべて観音法門を修行できる、ということ。どうして観音法門を修行しなくてはならないのでしょうか。修行しなくてもいいのではないですか。当然いいですとも。宗教信仰はなくてもいいですが、修行はしなくてはなりません。けれども、もし私たちに問題意識があるなら、「私はどこから来たのか。死んだらどこへ行くのか。どうしてこの世界に来て人間になったのか。人間になるとこんなに苦しいのか。人間になりたくないが、それは可能だろうか。この世界以外に他にもっと良い所はないだろうか。私には自由に選択できるだろうか。この世を離れようとすれば、自由自在に離れ、他の境界（きょうがい）に（住みたければ、いつでもそこへ行ける、そんな自由自在のレベルになり、生と死に苦しみが無いレベルになれるのだろうか」などと、いつも自問するでしょう。

もし、私たちにこんな問題があれば、当然この問題に答えられる人を探します。それでほとんどの人が宗教の指導者を探します。例えば、キリスト教の信者であれば、神父かシスターの所へ行き、仏教徒であれば、僧か尼僧、在家菩薩を訪ねて、彼らに教えを請いたり、勉強したりします。けれども、たとえ私たちがそのような宗教の所を訪れても、ほとんどの人は満足できる答えは得られません。それで答えを求めてまた他の所へ行くのです。そこで、私たちは智慧のある人、悟りを開いた師と呼ばれる人に出会って、その人について勉強しようとしています。そういう先生は、はっきりと答えを教えてください、私たちの問題を解決してくれるからです。

もし、あなたに生死の問題があつて、答えてくれる人を渴望しているなら、観音法門を修行

すべきです。一人の智慧のある人を探し出し、「観音法門」を伝授してもらうことです。観音法門は唯一無二のカギで、あらゆる宇宙と生死の問題を解明できて、私たちが自分で答えを見つけることができるようにしてくれます。答えは必ず自分で悟らなければならず、他人の言うことを聞くだけはいけません。また、私たちがこの世を離れたくても、自由に離れられるものでなく、他の境界（きょうがい）に遊びに行こうと思っても、いつでも行けるものでもないのです。

必ず先に最高の法門を探し出し、毎日修行をしなければなりません。私たちはそれから自在になり、解脱して行きたい所へ行けるのです。これは私たちが自由にあらゆる国に行ける、ビザのようなものです。必ずしも永遠にフォルモサ（台湾）に住まなくてはならないのではなく、ありません。観音法門を修行すると、私たちは自分がどこから来て、この世を離れてからどこへ行かを知ることができます。

普段、逆境に出会わないときは、何の問題もないかもしれませんが、病気のとときや家族が往生したときは、私たちはとても弱く、とても無力で、その人を助けるわずかな力もなく、この世に引き止めようとしてもできません。私たちの両親もいつ往生するかわかりません。誰もそれを引き止めることはできず、彼自身が死にたくなくても止められません。時が来たら、あらゆる人が、貧富、貴賤を問わず、みなこの世を去らなければなりません。その時は選択の余地がないのです。ですから、とても苦しいのです。心の中でこの家族に未練があっても、留まる

ことはできません。

あなたが在世のマスターについて観音法門を修行してこそ、たとえ修行したばかりで、まだパワーが足りなくても、往生のときに自在にこの世を去ることができなくても、マスターは永遠に自在な所へ連れて行ってくれます。観音法門の修行が成就したあとは、人を救おうと思えば救えます。この世を去ってから、この世に再び戻って来て、困っている衆生を救うこともできます。その時あなたは自在な人になっていて、完全に自由自在な身で、来たければ来られるし、行きたければ行けます。ですから、観音法門はとも不可思議で、唯一無二の法門です。これは創造主のパワーで、永遠に存在し、最高で最も根源のパワーです。

普段、修行をしていないと、私たちの家族がこの世を去るとき、私たちは「どうして行かなければならないのか。どうして他の人ではなく彼なのか」と自問するでしょう。そして、私たちはこの答えを探し出そうとします。というのは、人間になるのは楽しくないことで、特にすることもなく、毎日ご飯を食べ、仕事をして、寝て、五、六十年、長くて百年経つとこの世を離れてしまうのです。どうしてこうなのかもわかりません。ですから、私たちは解脱して悟りを開かなければならないのです。

悟りを開くとは何でしょう。悟るとはわかるということですが。どうして人間にならなければいけないのか、どうして世界はこんなに苦しいのか、どうして戦争があるのか、どうしてこうなのか、どうしてああなのか、ということを知らなければなりません。大部分のキリスト教の

信者は、このような問題があるときは教会へ行つて、神父やシスターと一緒に歌を歌い、神の助けを求めたり聖書を読んだりします。こうするしかありません。他に方法はありません。当然、これは私たちの心にとつて助けになり、私たちの苦しい渴望の心を慰めてくれます。時には感応が少しあります。私たちが病氣や苦しいときには、より真心を込めて祈るので、状況は少し改善して、少し楽になります。

仏教徒であれば寺院に行つて礼拝します。すると寺院では、朝晩のお勤めをさせたり、呪文を唱えさせたり、阿弥陀仏や観音菩薩を唱えさせたりします。大体こんなものです。少し高いレベルの僧侶は、私たちに座禅や禅問答を教えてくれます。例えば「私は誰か」という禅問答を出しては、それをあなたが自分に問いかけるようにします。これがいわゆる禅問答です。私が「私は誰か」がわかつたら、師を探して尋ねる必要がありますか。そうでしょう。禅問答をして、ほとんどの人は何の結果も得られません。相変わらず自分は誰かがわからないのです。例えば、今のが渴いて死になつていている人がいたとして、水を飲ませてくださいと頼んでいるときに、あなたは水をあげないばかりか、「水とは何か」「水はどこにあるのか」「もうどうでもいい、ほつときなさい、水を考えるな」と言つたら、のがが渴いて死にそうな人に対して、とても残酷ではありませんか。けれども、観音法門のマスターならすぐ水を飲ませます。しかもどこに水を探しに行つたらいいかも教えてくれます。毎日マスターに頼つて水を飲ませてもらわなくても、自分で水を探せます。この水のがが渴いた人を救うこともできます。こ

れが観音法門を修行して直ちに得られる、うれしい結果なのです。

たとえ努力して禅問答をしても、答えのある体験が得られるとは限りません。他の方法で修行しているいろいろな体験があっても、これらの体験はまだ究極ではありません。例えば、見えたのはすべて第二流の光で、見えた境界（きょうがい）はすべて低いレベルに属しています。これは低いレベルです。これは他の宗教の経典を参考にしてみると、すぐわかります。

そして、誰でも禅問答ができるわけではありません。ごくわずかな人しか修行できません。禅問答を修行したければ、まず先に多くの知識をもっていなければなりません。知識があまりない人は修行できません。今の禅は以前と同じではありません。もし、禅問答をする人について修行するならば、体が健康でなければならず、病気の人は修行できません。あぐらをかくことができないと禅師は受け入れてくれないからです。

私はアメリカでこのようにいわゆる「禅師」に会いました。ある人が「禅師」に「私はあぐらをかくことができなくて、金剛座に座ることができないが、あなたについて勉強できますか」と聞きました。禅師は「できません」と答えました。その人はまた「椅子に座って修行できますか」と聞きました。禅師は「できません」と答えました。ですから、私たちが見たところでは、今日のいわゆる禅の系統では、今の時代において、修行を渴望している多くの人たちには適合してはいないと思います。あぐらをかくことができない人がいるからです。誰でも生まれつきあぐらをかけるとは限りません。あぐらは長い間訓練してやっとできるのです。年を取り、

中年になって、今までにあぐらをかいたことがなければ、今すぐにあぐらをかけといっても、どうやってできるのでしょうか。修行は体だけを使うのでなく、「心」で修行するのが最も重要なのです。

このように体が原因で修行できないのは、実に理にかなっていません。本当に良い法門であれば、あらゆる人すべてが修行できるものでなければいけません。子どもも修行できます。私の弟子の中には六歳の子どももいます。子どもたちはよく修行していて、境界（きょうがい）も高いです。年を取った人も修行できます。私の弟子の中で、最高齢者は八十歳を超えています。修行も良く体験もあります。病気であぐらをかくことができない人でも、同じように修行ができます。ある老人が私に「あぐらがかけないのですが、修行することができませんか」と聞きました。私は「できますよ」と答えました。そしてその人は体験があり、智慧を開くことができました。修行できない人などいません。

ですから、どこでも良い師に巡り会えなければ、必ず問題が生じます。年をとった人を受け入れない禅師がいます。私がアメリカで会った禅師もお年寄りを受け入れませんでした。六十数歳になれば大体受け入れません。その禅師と一緒に七日間座禅に参加することもできないし、その禅師と一緒に座禅することも許されませんが、そういう年を取った人たちには阿弥陀仏を唱えることを教えるのです。本当はお年寄りでも修行することができません。お年寄りだから阿弥陀仏しか唱えることができないというわけではありません。

お経や仏陀の名を唱えることはそれなりに効果があります。聖歌を歌ったり、イエス・キリストや聖母マリアに祈ったりしても効果はあります。しかし永遠に解脱したいなら、最高の境界（きょうがい）に達することです。永遠にもう戻って来たくないなら、さっきのようなやり方では足りません。それには観音法門を修行しなければなりません。そうでなければ、釈迦牟尼仏の時代、インドには多くの経典があつたのに、なぜ釈迦牟尼仏はお経や仏陀の名を唱えることだけに頼らなかつたのでしょうか。あんなに努力して座禅し、六年も苦行をする必要はなかつたはずですよ。その後、釈迦牟尼仏は大弟子や衆生に観音法門を修行することを強調しました。

イエス・キリストも同じです。キリストは宗教的な家庭に生まれました。幼い頃からすでに菜食でした。イエス・キリストの生涯を研究すればわかりますが、キリストは Essene clan（エッセネ派）の家庭に生まれました。その宗派は何千年もずっと菜食です。インドのバラモンの家庭と同じで、バラモンの家庭では小さいときから菜食です。イエス・キリストがエッセネ派の家庭に生まれ、菜食なのに、どうしてまたインドへ行つて苦行をする必要があつたのでしょうか。彼はヒマラヤで十数年修行したあと、道（タオ）を得たのです。

ということ、経を唱える、念仏する、祈る、歌を歌う、聖書を読むということだけでは足りないのです。これらは粗いカルマを少し消去することができますが、とても細かな、とても微細な、自分でさえ感じることのできないカルマは消去できません。観音法門を修行しない限り、この永遠に存在する「音流」できれいに洗わない限り、私たちはこの生死輪廻から離れる

ことができませぬ。ですから私が再度にわたって、観音法門を修行すべきだと、強調しているのです。

私たちがどんな名を唱えても、どんな経を唱えても、すべてこの世界の言語に属し、この世界のものに属しています。この世界の道具を使つて、どうやって超世界に達することができるとでしょうか。私の言っている意味がわかりますか。例えば、澎湖（ほうこ：台湾の地名。多数の島からなる諸島）の陸地にいるなら、私たちはオートバイや、自転車や、車を使うべきです。しかも歩くこともできます。けれどもフォルモサ（台湾）に行くのなら、必ず海峡を越えなければいけません。その時私たちは陸地で使う乗り物が使えますか。当然使えませぬ。ですからフォルモサへ行くのなら、飛行機に乗りかえるか、または船に乗ります。そういったものは空間を越えられる乗り物だからです。船に乗れば海を越えることができるし、飛行機に乗れば大空を越えることができます。

同様に私たちがこの世界を超越しようとするなら、この世界の道具や、この世界の言語を使つてはいけません。身、口、意（体、言葉、考え）に属するものは、みなこの世界の道具で、凡人の道具です。南無阿弥陀仏を唱えることや、キリストを唱えることなどは、みなこの世界の言語を使っています。經典もこの世界の言語で書かれていて、これらはすべて無常のものです。無常の法門を使えば、当然、無常になってしまいます。

どうして音はそんなに重要なのでしょうか。今、私はまず凡人世界が私たちにどんな影響を与

えるかを説明して、その後また超世界の不思議な影響と比較してみましよう。

みなさんはご存じのように、子どもは生まれたときから、とても音が好きです。子どもが泣くと、母親はゆりかごを揺らして、歌を歌えばすぐ泣きやみます。また泣いたら、母親は小さい鈴を振るか、音の出るものを子どもにあげればすぐに泣きやみます。

どうして子どもはこんなに音が好きなのでしょう。母親のお腹の中で、この超世界の無形の音と通じ合っていたからです。「神」「道（タオ）」「根源の大きなパワー」あるいは「仏陀のパワー」と通じ合っていたからです。この音は仏陀のパワー、つまり「創造主」のパワーなのです。胎児はお腹の中で何も食べていません。中には空気もないし、太陽もありません。しかも体が逆さまになっても死ぬことはありません。胎児は魚ではありませんが、母親の体内の水の中で泳ぐことができ、溺れることはありません。何も食べませんが、この期間の成長は一番速いのです。生まれた後もお腹の中の成長速度と同じなら、すぐに天まで届くほど成長するでしょう。（笑い）意味がわかりますか。

それはお腹の中にいるときはこの超世界の音と一緒にいて、この音は胎児を養い保護していました。この世界に生まれて来るとこの音と遮断されるので、それで赤ちゃんはとても苦しく、楽しくなく、すぐさま孤独と、恐怖と、苦痛を感じるので、それで生まれるとすぐ泣き出します。生まれて来るときに笑顔で出て来る子どもはいません。みなさんが生まれてきたとき泣いていましたか。笑っていましたか。（ある人が「もちろん泣いていました」と答える）そうで

す。ほとんど泣いています。それはこの胎児を養うパワーとの繋がりを失ったため、赤ちゃんにとつての最大の慰めと支えを失ったので非常に寂しく、苦しく感じるので。とても敏感な体がこの世界の空気と接触すると痛みを感じるので、生まれるとすぐ泣くのです。けれども、赤ちゃんは何も話せないのです、私たちにはわからないのです。

生まれたばかりの赤ちゃんは、何かの音を聞くとあの内在の音だと思い、しばらくは慰められ泣きやむのです。精神的に脆弱な人が病院に行くと、医者は精神が安定するように比較的柔らかない音楽を聞かせます。私たちは毎日の仕事でとても疲れています。家に帰って少し休憩し、音楽を聞くとリラククスできるでしょう。ですから、音楽は私たちの世界ではとても重要なのです。昔から今日まで、音楽は人類にとつて必要なものです。こんな凡人の声でさえ、私たちにとつて重要なのですから、超世界の音は私たちにとつてもっと重要で、もっと必要なのです。

週末、家でテレビや、ラジオや、たくさんビデオテープや、または流行歌を聞けますが、私たちはやはり郊外に行き、大自然の中で、小鳥の鳴く声、水の流れる音、海潮音、風が梢をゆさぶる音、雨が葉をたたく音、カエルやセミの鳴き声などを聞くと、とても気持ち良くなり、音楽を聞くより気持ちが良くなるのです。

ある人たちは都会の味気ない雰囲気になれないので、家で小鳥、子猫、子犬を飼ったり、野菜を栽培したり、盆栽を植えたりします。自然の雰囲気や、自然の音がとても好きだからです。けれども、私たちはいつも森の中へ行って小鳥の鳴き声を聞くわけにはいかないし、風が

吹いている小川のせせらぎを聞くわけにもいきません。ですから、そういったものを栽培するのは。少なくとも、そういったものは自然の雰囲気を少し表しているからです。私たちの内在の本性に適していて、私たちの心を慰めてくれるからです。そうでないと私たちは耐えられないかもしれません。ですから、今、どの国でも自然生態の保護を提唱し、自然の景観を守り、多くの国は木の伐採や野生動物の狩猟を禁止しています。これはすべて自然生態のバランスを保護するためです。

たとえこんな凡人世界の音でさえ、私たちにとつて、こんなに魅力があるのです。けれども、私たちには他に不思議な超世界の音があり、それは「万能」で、しかも私たちのあらゆる渴望を満足させ、あらゆる問題を解決してくれます。どうしてでしょう。私たちと万物すべてが、この音から創造されたものだからです。聖書にはこう書いてあります。「初めに言(ことば)があった。言(ことば)は神と共にあった。言(ことば)は神であった。すべてのものはこれによつてできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった」*In the beginning was the "Word"(Sound), and the Word was with God, and the Word was God, everything was Made by this, and nothing was not made by this.*

みなさんは帰って聖書を読めばわかります。この意味は、宇宙が始まったときからこの音があり、「言(ことば)」は音を指していて、この音は神と共にあり、この「音」は「神」であり、宇宙の万物はすべてこの音から創造され、この音から生まれないものはない、ということなのです。

仏教でもこの音について語っていて、楞嚴經（りよごんきょう）ではこう述べています。「すべての仏陀はこの『音流』に沿って降りて来て衆生を救い、菩薩と衆生はこの『音』を頼りに源に帰る」（八巻：如來逆流，如是菩薩順行而至，實際入交名為等覺） 普門品（ふもんぼん：觀音經のこと）では「梵音海潮音、勝彼世間音（梵音海潮音はこの世の音に勝る音である）」と言っています。法華經の法師功德品（ほつしくどくほん）の中でもその内在の音について語られています。例えば、鐘の音、鼓の音、シンバルの音などはすべて内在の音ですが、それらはまだ高いレベルの音ではありません。それは初級レベルの境界（きょうがい）の音にすぎません。高いレベルの音については、私はここで話すことはできません。

高いレベルの音は高いレベルの世界を表しています。私たちはその音を聞くと体全体が変化します。この音は私たちの生命全体に影響を与え、私たちの生活様式を変えます。私たちのカルマの鎖を解き放つてくれます。私たちが自在に幸せにして解脱させます。こういった影響はごく短い時間内に体験でき、何年も待たなければならぬものではありません。私たちは耳でこういった音を聞いているだけではありません。潜在意識までもこの音によってきれいに洗われ、過去世のカルマや良くない記憶もすべてきれいに洗われます。水流が衣服の汚れを洗い落とすのと同じで、内在の「音流」も私たち自身のカルマを洗い落としてくれます。

カルマとは何でしょう。それは良くない事柄を指しています。私たちの過去世において行っていたいろいろな良くないこと、または世々代々、取り巻く環境から影響を受けた、悪い記憶のこ

とです。現在、そのことを知っている人は誰もいませんが、私たちの頭脳はそれを全部記録しています。それを仏教では「カルマ」と言い、キリスト教では「原罪」と言います。私たちは生まれたときからすでに原罪、または過去世のカルマを持っています。あとでみなさんに講義録を配りましょう。参考にしてください。私は他の所であらゆる宗教はすべて観音法門であることについて述べました。ただ彼らが使っている名称が違うだけで、実際すべてはこの内在の音を指しています。あとでみなさんは持ち帰って参考にしてください。今はもう話しません。ただこの音の効用について話しましょう。

どうしてこの音がそんなにたくさんのカルマを洗い落とすことができるのでしょうか。それはあらゆるものほすべて、この音から創造されたものだからです。この音は振動力であり、大きなパワーですが、振動力が粗いときは音に変わります。高いレベルの音は「内在の智慧」でしか聞けません。比較的低いレベルでは、小鳥の声、水流の音、または風の音、雷の音などが聞こえます。これは私たちのこの世界の音と同じです。もう少し高い世界にはより高い音があります。けれども、私たち凡人はこの世界の住民なので、そのような高いレベルの音は聞けません。聞きたければ、必ず私たちのレベルを上昇させなければなりません。高いレベルの世界の住民と同じになれば聞こえます。

今、私たちはこの部屋にいます。みなさんは私の声しか聞こえません。もし海潮音を聞きたければどうすればいいのでしょうか。海辺へ行かないと聞こえないですね。同様に、私たちが高

いレベルの音を聞いて、高いレベルの境界（きょうがい）を見たければ、そこへ行かなければなりません。そこへ行くにはどんな方法を使いますか。この「音流」に頼ってこそ聞こえるのです。すべての世界はこの音で繋がっているのです。みなこの音流から生まれて来たからです。カルマもこの音流から来たのです。ですから、元々なかったカルマを、私たちは「音」で洗い落とせるのです。

例えば、私たちは何回も生死輪廻を繰り返しました。ですから、多くのカルマがあります。けれども、その最初はカルマなどあるわけではありません。ですから、カルマは元々ないので。すべてのものはこの音から作られたので、私たちが罪を犯したとしても、それは多くの悪いことに影響されたからです。すべてのものがこの音から作られたとしたら、「罪」も例外ではありません。ですから、その罪も私たちの過ちではないのです。私の言っている意味がわかりますか。

みなさんは今、私のこんな話を聞いていますが、しかし、みなさんのカルマはそんなに早くは消されるものではありません。みなさんは頭でわかっているだけです。カルマを消すには、やはりこの音で洗い落とさなければなりません。もちろん、私の講義を聞いてもみなさんの粗いカルマを少し除去できません。それはみなさんの目には見えませんが、みなさんが私を信じてくれることを期待していません。でも、みなさんに理解してもらうために少し話すだけです。どうぞ参考にしてください。

私に会ったときや私と一緒にいるときは、当然、粗いカルマは洗い落とすことができます。でも微細なカルマは見えないし、触ることも感じ取ることもできません。そのような微細で、根深く悪い記憶は、必ず目にも見えない、また触ることもできない微細な音流を使わなければきれいに洗えません。それはこの音流には不可思議なパワーがあるからです。もしそれと繋がれば、どんな汚れたところも、ことごとく浄化されます。

いわゆる見えないパワーとはこの音を指しています。普通の目では見えません。普通の耳では聞けません。必ず私たち自身が少し高いレベルに上昇して初めて、あの高いレベルの音が捕えられるのです。この世界では、私たちには普通の音しか聞こえません。例えば、鳥や、虫の鳴き声や、海潮音、または私たちの世界の音楽などです。

高いレベルの音楽が聞きたければ、レベルが高くならなければなりません。レベルが高くなりたければ、必ず、すでにレベルが高くなった人を探して、指導してもらわなければなりません。その人は私たちのために、ドアを開けてくれて中に入れてくれます。まるで環境をよく知っているガイドのように、部屋がそこにあることを知っていて、しかもカギを持っているので、私たちが入りたいと望めばドアを開けてくれるのです。意味がわかりますか。

ですから、私たちはマスターを探さなければなりません。高いレベルに行きたければ、経を読むだけではあまり役に立ちません。ただある低いレベルにしか達することができず、そこに留まるだけです。経を読む利益は、私たちの気持ちを少し楽にしてくれるだけです。けれども

超世界へ行きなければ、必ずマスター、すなわちそのカギを持っている人を探し出さなければなりません。高いレベルのドアを開けてくれて、私たちを入れてくれます。ドアがどこにあるかを知っているのです、その人が開けると、私たちは高いレベルの音とその境界を体験することができます。

どうして「カルマ」は私たちの過ちではないと言うのでしょうか。どうしてカルマは元々なかったと言うのでしょうか。先ほど話したように、あらゆるものはすべて、この音から出てきたので、カルマもそれ自体が作り出したのです。(マスター笑う) ですから、それ自体に自分の過ちを改めさせなければなりません。これでみなさんは理解できましたか。私たちには元々カルマはなかったのです。罪もなかったのです。

例えば二日前のことです。私たちの修行仲間の医者は私のことが好きで、私が小さいときサボテンを食べた話を聞き、サボテンが大好きだと知って、すぐサボテンを採って来て食べさせてくれました。みなさんもご存じのようにサボテンにはたくさんのトゲがあります。医者にはサボテンを採って皮をむき、私に持って来てくれました。心を込めて持って来てくれたので食べました。するととても細かい見えないトゲが刺さりました。舌に刺さったのです。その時すぐに痛みを感じました。この痛みはどこから来たのでしょうか。もともと痛かったのですか。違います。そのトゲが舌に刺さっているから痛いのです。今どうやってこの痛みを取ればいいのか。違います。アスピリンを買ってくると良くなりますか。頭痛なら効き目がありますが、これは内側

が痛いのではなく外側の痛みです。それではどうしましょう。トゲを抜き取れば良くなります。

私たちはよく自分にカルマがあると云います。どうしてわかるのでしょうか。それは生活がとても苦しいからです。ある時、何の理由もなく苦しみます。生活は順調でお金もあり、夫もいて、奥さんもいて息子もいて、見た目ではとても順調ですが、やはり苦しいのです。それは私たちが過去のカルマの影響を受けているからです。その上、私たちはこの源の大きいパワーと繋がり絶たれ、孤独に感じ、不満足で、この世界の何かをもらっても満足できません。たとえ国王になっても満足しません。みなさんは国王が幸せなのを見たことがありますか。とても少ないです。高い地位にいるほど責任も重いので、私たちから見て、世界の地位が高い人はそんなに幸せではありません。

それはこの世界の地位は究極のものではなく、私たちが探そうとしているものではないからです。たとえ一国の元首になったとしても、その地位に五十年いるだけです。私たちは百歳まで生きられればもう最高です。ですから、世俗のものは何一つとして永遠ではなく、永久ではないのです。ですから、私たちの心は相変わらず不安で、毎日もんもんとして楽しくないので。ただその根源の音と一緒にいるときだけが幸せなのです。

例えば、私たちは本来完全な人間です。もし誰かが私たちの腕を切り落としました。腕はうれいでしょうか。その腕は私たちの腕に間違いなく、腕としては何も変わりはありませんが、私たちの体から切り離されて、もう活力がなくなり、とても孤独で、少しも元気がなく、

時間が経つと壊死して使えなくなります。腕の活力を回復するには、再び接合しなければなりません。

ドイツでは医者には切り落とされた腕を接合することができます。これはとても難しい細かい外科手術です。一本一本の血管と神経を縫い合わせます。少し時間が経つと、この腕は前と同じように自由に動かせて、何の違いもないようになります。その時、私たちの腕はうれしくなります。活力があつて体のその他の部分も生氣を得てはつらつとします。

私たちの霊体も同じです。もし宇宙の万物の大きなパワーとの繋がりを断たれたら、私たちは苦痛を感じます。もしそれが再び繋がったら、うれしくなるのです。私たちがこの大きなパワーとの繋がりを断たれると、多くの問題が起きます。例えば、交通事故で腕が切断されたとします。事故の現場にはほこりや、石ころや、その他の汚物があり、腕は変形して醜くなります。これは決して腕の過ちではありません。その災難でこんなになったのです。そうでしょう。

私たち人間も同じです。私たちは生まれて、その大きなパワーとの繋がりを断たれてしまいました。それで、私たちには多くの問題が起きます。たとえ嫌でも起きます。問題は自ら私たちの所へやつて来るのです。例えば、ある人がいたとします。盗人ではありません。けれども、家が地震か台風で壊れ、仕事もなく、財産も全部使ってしまった。こんな時どうしたらいいのでしょうか。托鉢にも行きません。ある日とてもおながが減り、息子か奥さんが病気で苦しんだり、おなかをすかしたりして、やむを得ず、食べ物を盗んで家族に食べさせ

ました。これはこの時の状況に迫られたのであり、不本意でやったのです。本来そうしようと思っただけではありません。

同じ意味で、私たちには元々カルマはなかったのです。根源のパワーと繋がるとカルマはなくなりません。ですから私は、カルマは洗い落とすことができると言っているのです。まだこの「パワー」(音流)と繋がる前に、私たちがすでにこの大きなパワーと繋がった人に出会えば、私たちも自然に加護のパワーの影響を受けます。ですから、先ほど私が言ったように、私の講演を聞いても粗いカルマは消されませんが、最も良い方法は、自分で川の中へ入って洗った方がもっときれいになります。私は川の流れと繋がっていて、たくさん水をみなさんへあげることでできます。しかし、みなさんには水が少ししかないのです、もし私があれば、なくなってしまう。そうでしょう。もし、みなさんが自分でこの水流と繋がれば、水源がわかれば、自分で欲しいだけ持って帰ることができます。自分が使えるばかりでなく、他の人に分けることもできます。永遠に使い果たすことはありません。

先ほど話をした切断された腕についてですが、もし体と繋ぎ合わせなければ、だんだん醜くなり、色はだんだん黒くなり細胞は徐々に死んでいきます。時間が経つと繋ぐことができなくなり、もう使えなくなりますが、他の国でこんな精密な手術ができるかどうか知りませんが、ドイツではこうやります。車の事故や災害で腕が切り落とされた人がいると、直ちにそれを氷と一緒にビニール袋に包んで、その人と一緒に切り落とされた腕を持って特別な病院に行きます。

ドイツでもこのような病院はあまり多くありません。そしてこういった手術ができる医者もそんなに多くはいません。縫合手術には何年かの勉強が必要ですから。少なくとも十二年勉強してから、あのような精密な縫合手術ができるのです。一本一本の血管と神経を縫い合わせるのです。そうでないと血液が流れず、細胞は壊死して機能が失われます。ですから、そういった仕事をする人は大変努力して学ばなければなりません。ドイツではこのような医者を神のようにとても尊敬し、病人は当然もつと尊敬しています。

そのような専門医はとても少ないのです。努力して学ぶだけではなく、仕事をするときはもつと大変です。立ったままで少しも動けません。十六時間、十八時間、時には二十四時間も神経を集中して、他の人と交替もできません。時には手術が終わるまで、休憩にも行けないし、食事にも行けません。万一向まう行かなかつたら、その腕はダメになります。ですから、とても慎重でなければなりません。一本一本縫い合わせます。腕の中には骨もあるし、全部縫い合わせないと機能は回復しません。以前と同じように自由に動かせるのはとても不思議なことではありませんか。縫い合わせると血液が流れ始め、皮膚もだんだん赤くなってきます。

私たちの状況も同じです。長くても百年しか生きないのに、多くの苦痛、多くの悩み、お金はあっても、きれいな奥さんがいても、立派な家があっても、いい仕事があっても、やはり満足できません。それはこの大きな「真体」と切り離されているからです。あの切断された腕と同様に、早く縫合しないと時間が経つと壊死してしまい、廃物になり、ごみ箱に捨てられ、腐

って誰も近づけなくなり、土の中に埋めるしかありません。

私たちも同じです。私たちが縫合してくれるマスターが必要です。孤独な私たちを大きなパワーの「真体」と繋げてくれます。この大きなパワーの真体を、ある人は最高の「神」と言い、ある人は「仏性」、「本心」、「道（タオ）」と言い、または「大我」、「大智慧」などと言っています。今、私たちは「小我」で、この「大我」の小さな一部分なのです。あの「大我」と離れているからこんなに苦しく、こんなに寂しいのです。あの切断された腕と同じです。見た目では乾いていて、元気がなく、活力ありません。縫合して、血液が流れると腕は素早く活力を回復します。

「音流」も同じです。「音流」は宇宙全体を繋げ、すべてのものが音流の中に含まれています。しかし、私たちは「音流」との繋がりがほとんど断たれ、ほんのわずかししか繋がっていません。もし縫合しなければ、私たちはすぐにこの音流と完全に断絶されます。なので、私たちは輪廻を繰り返し、「六道」（ろくどう：天上、人間、阿修羅、畜生、餓鬼、地獄のこと）の中に置き去りにされ、苦しむのです。そして高いレベルの境界（きょうがい）に行くことができません。このように他人の肢体を縫合する専門医になるのはとても難しいことです。必ず卒業成績が優秀な医者でなければなりません。しかも他人に対して「博愛の心」を持っている人しか選ばれません。選ばれたあとも長い間待たされてから、次の訓練を受けるのです。それはあのような技術を教えられる先生が少ないからです。万一、学生が多い場合、そばに立って見るだけで、

実際に実習するチャンスがないのです。

ドイツではこのような病院は一つしかありません。ですから、とても有名です。国際的にも有名です。そこへ行って勉強したければ、何年も待たなければなりません。先生の他、学生も実習に行けますが、長い間待たされて一回しか実習できません。人が多すぎるので交替で他人のやるのを見ながら、自分も練習するのです。そしてその後、先生になるのです。ですから、勉強することも簡単ではありません。このような専門医になることはもつと大変です。有名になることはもつと難しいことです。一度その技術を身につけると、人を救う能力だけでなく、人に教える能力も身につきます。ですから人々がなぜ専門医を、神のようにとっても尊敬しているのがわかります。当然専門医もこういう榮譽を得るに値します。

腕を縫合するのがこれほど簡単ではないのですから、「靈魂」を縫合することは当然もつと難しいことです。こういう医者が手術をするときはとても大変です。一日中立ったままで、一言も話すことも動くこともできません。精神を集中させ、少しの間違いも許されません。時間も限りがあります。腕が病院まで運ばれたときにはすでに時間をたくさん費やし、氷袋の中で長い時間経っているのです。さらに時間を費やすと腕は活力を失い、使えなくなりません。人手不足と時間を争う状況下で、当然ながらとても大変です。立ったまま十数時間、休憩もできず、精神を全部集中しています。本当はその医者はそんなに苦労しなくてもいいのです。そうでしよう。しかし怪我人のためにあんなに苦労しなければならないのです。苦労して学び、仕事のと

きはもつと苦勞し、苦勞ばかりしているのもすべて怪我人のためです。

医者が勉強するのは自分のためではありません。自分を縫合することはありません。たとえ自分が負傷しても、自分を縫合することはできません。学んでいるとき、頭の中に「私」は存在しません。思いはすべて他人のためです。努力して勉強し、卒業後もやはりあんなに苦勞して、手術室で病人のために苦勞しているのです。

これは偉大なマスターと同じです。偉大なマスターが人を救うときも、多くの苦しみを受けます。衆生のためにカルマを背負い、衆生のカルマをきれいにします。しかしマスター自身は良くない雰囲気に影響されません。怪我人はだんだん良くなりますが、医者はだんだん疲れて、いつも精神を集中するので、もつと疲れます。でも医者は文句を言いません。これが仕事であり、自分がやりたいことだからです。どんなに苦勞しても縫合手術が成功すれば、医者はとてもうれしいのです。

昔から今日までの大マスターも同じです。勉強して卒業すると、自分の智慧、パワー、福報を全部ただで他人に分け与えます。惜しみなく、直ちに分け与えるので、とても苦勞します。もしみなさんが靈魂の医者、または精神の医者になりたければ、私に従って学ぶことを歓迎します。みなさんの方が私よりもうまくできるかもしれません。手先が器用な人がいて、勉強したら、その人のマスターよりもうまくできるかもしれないからです。私はあまりうまくないので、多くの人が学びに来てくれるとうれしいです。そうすれば、多くの人が利益を得るからで

す。靈魂を縫合する医者是比较的少ないので、もっと多くの人が学びに来るのはいいことです。まだ多くのけが人が、私たちが救済に行くのを待っています。

(Mはマスターの答え、Qは聴衆の質問)

Q マスターにお伺いします。私は一日目に講義を聞いてから家に帰り、講義録を読みながら、マスターが加護してくださったものを食べました。すると体の中にあるパワーが出たように感じました。お伺いしますが、あの加護してくださったものの中にパワーがあるのでしょうか。

M もう感じたのに、何で聞くのでしょうか。あなたは自分で答えました。そうでしょう。(笑い) 私から貰ったものを食べると当然パワーがあります。さもなければ、どうやって感じたのでしょうか。私の講義やテープを聞いても加護の力があります。私のあげたものを食べるのは危険ですよ。今後はもう食べないように。(笑い) 食べたなら、もうこの世界へ戻れないかもしれませんか。もしまだ戻りたいなら、食べないでください。

Q 私は前にメデイテーションを練習したことがあります。ある音が聞こえて来ました。それで直ちにメデイテーションを止めました。悪い影響がでるのではないかと心配になったのです。

M 音にも本物と偽物があります。マスターについて勉強しなければ、本物と偽物の区別がつかみません。ですから、あなたのやり方は正しいです。放っておくことです。もし本物か偽物かを知りたければ、私に従って学べばわかります。でも、私はここで公には話すことはできません。伝法は公開できないのです。ここには学びたくない人がたくさんいるので、その人たちに無理やり聞かせることはできません。伝法はとても荘厳で、とても神聖なことです。安売りするものではありません。そして多くの弟子を獲得するために、いい加減に行うものではありません。人を見て、本当に一世で解脱を渴望している人、智慧がある人で、観音法門の無上の価値を理解し、それを大事にし、修行に励む人は伝法するに値します。私の言っている意味がわかりますか。



超世界の光

スプリームマスター チンハイ フォルモサ・澎湖

一九八七年四月二十五日

今日も観音についてお話しますが、昨日話したことと少し違います。今日は音と光について話します。先ほど私たちは阿弥陀仏讃を歌いました。阿弥陀仏のサンスクリット語は Amitabha (アミターバ) で、その意味は無量光です。この无量光はどこから来たのでしょうか。やはりこの音から来ました。ごく細かい音が光に変わります。私たちにとつては光もとても重要です。昨日、私は音がとても重要であると言いましたが、今日は光もとても重要であるということについて話します。このことをみなさんはすでに知っていると思います。

明かりがないと私たちは生活できません。太陽がないと私たちは生存できません。野菜も育ちません。ビタミンDが不足すると子どもは成長しません。夜でも月が必要で、昔の人は油のランプを使い、今は電灯を使っています。どうして昨日は音について話し、今日は光について話すのでしょうか。それはこの二つのことは関係があるからです。観音法門を修行するには必ず光の法門を修行しなければなりません。昔から今日に至るまで、すべての宗派のマスターた

ちは、みなこの「光」と「音」を強調しています。音については昨日すでに話しました。今日は光について話さなければなりません。そうすればみなさんはわかるでしょう。

どんな偉大な修行者もみな光について話しています。「悟りを開く」の「悟」は「明」という意味を含んでいます。「明」は「日」と「月」が一緒になっていて、それは光り輝くという意味を代表しています。光がなくてどうして悟りを開くことができるのでしょうか。ですから、「悟りを開く」ことは光があることを含みます。光を見るか、自分が発光するか、自分がこの光と通じ合うかです。明かりも重要です。昨日私が話したように、泣き叫ぶ赤ん坊は、鈴の音を聞くときに泣きやみません。時々子どもが泣くのは、私たちが明かりを消したために、暗い所に一人で寝ていて怖かったからです。明かりをつけると怖くないのです。また、赤や緑の色鮮やかなピカピカ光るプラスチックのおもちゃを与えると、それを見るとすぐに泣きやみません。

ですから、「光」と「音」は私たちにとって、赤ん坊のときからすでにとっても重要でした。どうしてでしょう。それは子どもが母親のお腹の中にいるときから、すでに光と関係があったからです。この光が赤ん坊を養って来たのです。光と音は同じ物ですが、特徴が違います。

例えば、水と氷、あるいは水と空気はみな大体同じ成分です。空気にもH₂Oがあり、水素と酸素が一緒になっています。水もそうです。でも水は空気ではありません。空気も水ではありません。でも私たちはこの両方とも必要とします。私たちには空気が必要なので呼吸をします。水が必要なのは水を飲んだり、ご飯を炊いたり、お風呂に入ったりますからです。水にはさま

さまざまな役割があります。ですから、この両方とも私たちに必要なものです。その成分は水素と酸素の結合されたものですが、水は空気ではなく、空気も水ではありません。私たちはのどが渴いたとき、空気を手にして飲むことはできません。呼吸をするときも水を使って呼吸することはできません。水泳のときは水に触れたりしますが、それでもやはり酸素が必要です。呼吸をしなければならず、さもないければ、すぐ水におぼれて死んでしまいます。

この世界に住んでいて、たとえどんなに楽しい生活をしていても、どんなにのんきに過ごしていても、長くて百年の時間しかありません。ましてや実際のところ、人生には「苦しみが多くて、楽しみは少ない」のです。何もいいことはありません。けれども、多くの人は大きな家を頑丈に建てて、内部も豪華に装飾して、永遠にそこに住むつもりですが、結局のところ、そんなに長くは住んでいられないのです。どんなに裕福で長生きしても、長くても百年しか住めません。残念なことです。私たち自身の内面の宮殿はとても美しく頑丈で、何でもそろっていますが、私たちはそれを享受しようとしなくて、みな忙しく外の無常の生活を求めるのです。光と音は私たちにとっても重要です。光がなければ私たちは生存できません。太陽がなければ、この世界は存在できません。私たちはみなこのことを知っています。子どもでも太陽が大好きで、明るいものが大好きです。子どもが生まれてお祝いに行くときに、鮮やかで明るい色の服を着て行くと子どもは喜びます。そうでしょう。子どものいる人は知っているはずで、私が観察して発見したことです。子どものおもちゃの色はすべて鮮やかで、明るいもの

ばかりです。大人は子どもに灰色や黒っぽい玩具はあげません。子どもの玩具はすべて真っ赤、真緑、真っ白、またはその他のとても強烈な色です。子どもはそういう明るいものが大好きなのです。

どうしてでしょう。母親のお腹の中で、すでにこの光と通じ合っていました。何も食べなくても順調に成長したのは、この「光」と「音」が胎児を養っていたからです。けれども、赤ん坊は生まれるとすぐに光との繋がりを断たれます。仏教の「胎蔵経(たいぞうきよう)」を読めばわかります。その中には次のように書かれています。子どもが胎内で成熟する前は、靈魂は空間と時間の感覚のない状況で浮遊していて、最後に光があるところに入り込みます。中に入ると胎児は成熟して生まれてきます。

母親のお腹の中にいるとき、この光はずっと胎児を守ります。けれども、生まれて来ると光はなくなりません。光は母親の胎内ではとても光り輝いています。胎児の目は刺激で痛むことなく、胎児の体や皮膚、生命も、強い痛みや感覚はありません。この光は「仏陀の光」「如来光(にょらいこう)」「本性の光」だからです。ですから、とても柔らかく、私たちの目を傷つけることもなく、私たちを怖がらせることもありません。胎児はその柔らかな仏陀の光と一緒にいることに慣れているのです。

けれども娑婆世界に来ると、ここには光はありませんが、太陽の光や空気や、あらゆる物質の光は、赤ん坊の体にはとても痛く感じて、赤ん坊の目には心地よくありません。ですから、赤

ん坊が生まれて来るとき、目が開けられないのです。まるでたくさん針に刺されたように感じ、体中もそんな感じがするので。地球上の空気は赤ん坊の敏感な体にとつて、とても荒々しく、とても苦痛なので、それで生まれるときに泣くのです。泣く原因は、体の苦痛とともに光との繋がりが断たれたからです。光を失ったとき、赤ん坊は不快に感じ、母親の胎内にいるような幸せな感じではないので泣くのです。大変苦しいからです。その後だんだん大きくなって、周りの状況に慣れてきます。

多くの赤ん坊が泣き叫ぶときに小さい鈴をあげたり、部屋の電灯をつけて明るくしたりすると、赤ん坊は気分が良くなつて、すぐに泣き止みます。断たれた光が再び現れたと思うのです。小さい鈴の音を聞いて、あの内在の音を見つけたかと思つて、しばらく泣くのをやめて注意して見たり聞いたりします。でも、それが偽物だとわかつて、靈魂を慰めることもできないとわかつたら、また泣き出します。すると大人はたくさん鈴の付いているおもちゃを探してきて、さらにもっと長い時間、音を鳴らして赤ん坊をあやします。すると赤ん坊はもう一度泣き止みますが、少し経つとこれもまた偽物だとわかり、再び泣き出します。このように赤ん坊は一日中泣いたり、泣き止んだりしています。

時には理由もなく泣き出すときがあります。それは気分が悪いから泣くのです。話すことはできませんが、生まれたばかりの赤ん坊は感覚がとても敏感で、智慧も純粹なので、ちよつとした心地よくないことでも、すぐに感じ取ります。赤ん坊は生まれたあと、私たちと一緒に

生活をなんとか過ごすことで、徐々にどんどん慣れていきます。それでも成長したあとも、やはりピカピカ光るものが好きです。ですから、女性を見ればわかるように、彼女たちはお化粧するのが好きです。これも彼女たちが母親の胎内にいるときの、あの光輝く記憶がまだ潜在意識に残っているからです。

ですから、一般的に流行の服飾品は色彩が比較的鮮やかです。また夏は比較的体が楽に感じ、気分も軽やかではないですか。でも冬になると気がふさぎます。それは空が薄暗く、光がないので、私たちの体も元気がなく、精神も気落ちしてふさぎ込むのです。これはみな外部の光の明るさの違いによるものです。

それで大きくなってから、光るものを探し続けます。赤や緑の鮮やかな色彩の服を探して着たりします。今日私がこの黄色い服を着ているのも、みなさんに自分の内在の光を思い起こしてもらいたいからです。インドではお坊さんはみなこういう服を着ています。それは輝いている人、光のある人、悟りを開いた人という意味を表しています。少なくとも彼らには太陽の光があります。ですから、黄色は開悟を表している色です。

まだ悟りを開いていない人も、やはり鮮やかな色が好きです。ですから、赤や緑のネオンの歓楽街は色とりどりの色彩で飾っているではないですか。鮮やかな場所ほど人々を引き付けます。客足がそれほどないときでも、明かりをつけてこそ人を引き寄せられるのです。そうでしょう。最も豪華な居心地のいい場所はいずれも、さまざまな照明で装飾して、私たちの目を引

き付けろのです。これは蛾が光を見るとすぐに飛んで行くようなものです。時には蛾は火に向かって飛んで行き、焼け死ぬこともあります。

どんな衆生もみな光を好みます。ただし、この種の光は外の世界の光です。ほかにもう一つの「超世界の光」があります。私たちはこれを修行の光と言います。修行者は多かれ少なかれみな光があります。ですから、釈迦牟尼仏、観音菩薩、イエス・キリストの頭上にはみな光があります。これは彼らの内なる悟りのレベルが、ある一定程度まで発展したため、そのような光を発するので。あたかも一本の木が成長すると、とても速くからでもその木が見えるのと同じです。

普通の人には光はあるのでしょうか。あります。とても暗い光の人がいます。(笑い) コーヒー色のような光の人もいます。または青、紫、赤、黄色の光を発する人もいます。けれども、大修行者は金色や、白い光など、いろいろな異なる光を発します。それは普通の色の光ではありません。智慧眼が開いていなければ見えません。智慧眼が少ししか開いていなければ、見える光も少なく、ぼんやりとした光に見えます。

大修行者はなぜこのような光があるのでしょうか。この光はきれいに見せるためではなく、体を裝飾するためでもなく、光はすなわちその人の体で、この光の内面のパワーが現れているからです。この光は人を救うことができるし、人を保護することもできます。私たちがこの光の中に入ると、とても心地よく感じます。ですから、光のある人は他の人を心地よく感じさせま

す。けれども、悪意を持っている人や魔の障害がとても重い人は、このような光には耐えられないかもしれません。悪意を持つ人たちは心地よくないと感じるので、少し離れた所にいると楽になり、光に近づくことと不快になるのです。

一昨日、ある人が私に「私はあなたのそば、あなたの周りに白い光が見えます。でも私はそれに近づくことができません。ただ遠い所から見ただけです」と言いました。その人は近づくことと不快に感じるのです。「もし無理に近づくこと、あなたの光に殺されるかもしれませんが」と言いました。私は「そんなことないですよ。あなたは私のそばに座っていますが、死んでいないじゃないですか。そう感じるだけです」と言いました。中には修行はして、少しの進歩があるものの、内面には魔の障害があり、まだ暗いカルマがきれいに洗い落されていない人もいます。魔は光っている人が嫌いなのです。決してこの光が彼らを嫌っているわけではありません。私の言っている意味がわかりますか。

例えば、犯罪者や問題のある人は警察を見るとすぐ緊張して、恐くてすぐに逃げてしまいます。警察は犯罪者たちに何もしていないし、まだ犯罪者を見つけてもいないのに、犯罪者はどう逃げたままです。これは二つの異なる観念、異なるレベル、異なる状況を表しています。一つは黒で一つは白です。警察は公平、法律を表し、犯人は暗闇、犯罪を表しています。ですから、警察を見ると緊張するのは、普通の人にはあの柔和な光の中に入ると、とても心地よく感じますが、犯罪者や、少し魔の障害がある人は、その光の中に入るとすぐに気分が悪くなり

ます。けれども何度も接しているうちに、だんだん心地よくなります。

それはその光が、その人の汚れている所、つまり「カルマ」または「魔の障害」を洗い落とすからです。洗い落とすとその人は問題がなくなり、心地よくなります。快適に感じるかどうかは、みなこの魔、または「カルマ」によるのです。光そのものが変わったのではなく、本人が変わったのもありません。彼自身は問題ないのですが、もともと純粋な人の内面に、ただ外部から見知らぬものが忍び込んだために、このようになったのです。

例えば、私たちは本来、冷水浴や温水浴をすると、とても気持ちがいいのですが、もし怪我や、やけどをして皮膚が剥がれ、真っ赤にたれた皮膚がむき出しになっていたら、お風呂に入ると気持ちいいでしょうか。当然、気持ち良くないです。そうでしょう。私はみなさんがこういう体験をしていないことを祈ります。みなさんが知っているように、体のどこかに少しでも傷があったら、お風呂に入るのは気持ち良くないです。これは水そのものが人を不快にさせるのではなく、傷があるから、不快になったのです。傷が治ったあとは、どんなに洗っても問題ありません。水は変わっていませんが傷が治っているからです。

魔に取り付かれた人や、またはカルマの重い人も同じです。大修行者に近づくと、初めは心地よくないと感じます。ずっと接していると心地よくなり、辛い感じがなくなります。ですから、修行者には警察の保護がなくてもいいのです。自分から呼び寄せなければ、誰も入って来られません。自然に保護壁ができていて見知らぬ人の進入を阻止します。この光が侵入者を追

い出すのではなく、自然に追い出されるのです。それは不浄なもの、そのものが光を好まないからです。光があれば暗闇はなく、昼には夜の暗闇がないようなものです。私の言っている意味がわかりますか。

例えば、南極と北極では半年間、暗い日が続きますが、その暗闇が何百年、何千年とどんなに長く続いたとしても、ある日太陽が昇ると、今までの暗闇が消えます。太陽の大きな光によって消えたのです。というのは、この二つの相反する性質は共存できないからです。

同様に、修行者は宇宙の中の純粋な光を代表していて、修行していない人や、カルマが多い人は暗い面を代表しています。このカルマは過去の悪い記憶の影響です。もしカルマがたくさんあったら、当然、光と共存できません。ちょうど昼と夜は二つの異なる面であるのと同じです。従って修行者は特に警察の保護がなくても大丈夫です。

「それなら、なぜイエス・キリストは人に殺されたのですか」と疑問に思う人もいるでしょう。どうしてなのか、みなさんは知っていますか。これはキリストが自ら受け入れたからです。彼はあの日、自分が殺されることを知っていたのです。弟子たちのカルマを背負うため、自分の体を犠牲にして、弟子たちのカルマを清算しなければなりません。そうでなければ、弟子たちは苦しい目に遭い、修行もできず、解脱もできなくなるからです。これはキリストが在世のときのことです。今、私たちがキリストを信じてても大して役には立ちません。というよりも、キリストが在世のときほどには役に立ちません。

それは在世のマスターと過去のマスターとは違うからです。ちょうど生きている医者と過去の医者が違うのと同じです。華陀（かた）と扁雀（へんじやく）は、当然最も有名な医者です。私たちは二人を尊敬して神医と呼びます。しかし二人はもうこの世を離れました。いくら私たちが二人を尊敬し、崇拜しても、私たちの目の前に再び現れて、病気を治してくれることはありません。私たちの今の病気を治すにはやはり現在の医者を探さなければなりません。

同様に、私たちは過去のマスターをとて崇拜していますが、過去のマスターと話すことはできません。過去のマスターから法門を学ぶこともできません。それで在世のマスターは最も重要なのです。イエス・キリスト、釈迦牟尼仏、老子は最も有名な大師で、他にも彼らと同じレベルの大師たちがたくさんいましたが、有名にならなかったため、あまり人々に知られていません。

例えば一部の医者たちは、ある種の病気を治し、そのことが報道されて有名になっていますが、他にもまだ良い医者がたくさんいます。その良い医者も同じく医学部を卒業して、医療技術も素晴らしいのですが、有名ではないので人に知られていません。また例えば、世界中には億万長者の富豪がたくさんいますが、私たちはロックフェラーや、オナシスの他に、何人知っているのでしょうか。ロックフェラーや、オナシスよりもっとお金持ちもたくさんいますが、有名ではありません。有名になる特別な理由がなかったからか、有名になりたくなかったからか、それとも国際的に特別な物を生産していないので有名にならなかったのです。

釈迦牟尼仏は有名です。それは釈迦牟尼仏が往生したあと、大きな影響力のある人がたくさん釈迦牟尼仏を崇拜し、彼らの影響力をもつて、釈迦牟尼仏の教理を各地に広めたからです。それで国際的に有名な宗教になったのです。

イエス・キリストもとても有名です。それはキリストの死に方は世界中で最も苦しいものだったからです。キリストが往生したあと、弟子たちも各地へ行つて教理を広め、徐々に有名になりました。それはイエス・キリストが衆生のカルマを背負つて、歴史上一番苦しい死に方をしたからです。キリストは死後また化身して現われ、弟子たちやその他の多くの人に見せたのです。ですから、イエス・キリストはますます有名になりました。彼の他にもレベルの高い大師がいましたが、そのような悲惨な死に方をしなかつたので、それほど有名にはなりませんでした。

その他の歴代の大師たちはみな釈迦牟尼仏とイエス・キリストのように有名ではありませんが、いつの時代にもそのような大師たちがいて衆生を教え導いてきました。それらの大師たちがいなくなつたら、私たちの世界はすでに滅亡していったでしょう。というのも、この世界は道徳心がなく、カルマが福報より多いので、陰と陽のバランスがとれないからです。陰陽のバランスがとれないと世界は存在できなくなり、地獄になってしまいます。私の言っている意味がわかりますか。

地獄とは何でしょう。つまりまったく道徳がない場所のことです。住んでいる人たちは全員

が悪人である、そこには刑罰と苦しみしか存在しません。天国とは何でしょう。天国には楽しみが多く苦しみが少ない所です。仏陀の世界は極楽だけで苦しみはありません。最も良い所です。

私たちの世界を見てみると、苦痛もあれば楽しいこともあります。ですから、陰もあれば陽もあります。陰は暗闇、苦しみの面を表し、陽は光明、道徳の面を表しています。大修行者は陽の部分に属していて、彼らには道徳、光、パワーがあり、衆生を救うことができるのです。そしてこの世界における善と悪のバランスをとっています。彼らは弟子たちを率いてまじめに修行し、この世界に光をもたらしています。そうでないと衆生の悪いカルマが世界をますます黒く染めていくばかりで、それを地獄に変えてしまいます。釈迦牟尼仏、イエス・キリスト、老子などは何世にもわたり大師であり、光明な品性を代表していて、私たちの娑婆世界の善と悪のバランスをとって来たのです。

光は私たちにとって、とても重要です。天国の人、または天使を見ると、みな光があります。魔は当然、暗くて光がありません。魔は暗闇を代表し、仏陀や天使は光を代表しています。娑婆世界には暗闇もあれば、光もあります。昼もあれば、夜もあるのと同じです。しかし、仏陀の場所には光がありません。地獄は全部、真っ暗です。地獄へ行ってみればわかりますが、そこにはまったく光がなく、毎日暗闇です。しかし私たちの世界は暗闇もあれば、光明もあります。苦しみもあれば楽しみもあります。光もあれば暗闇もあります。ある人は夜の暗闇が好きでなく、毎日光り輝くことを望んでいます。もし毎日光が欲しいなら、必ず観音法門を修行

しなければなりません。

観音法門には光があります。私たちは音を観るだけでなく、(音も光の一種です)「光」も観ます。光がなかったら、誰が私たちを案内してくれるのでしょうか。音だけ聞いて、それに付いて行くとしたら、光の案内がないのにどうやって行けば良いのでしょうか。真っ暗で路(みち)が見えません。ですから、私たちの観音法門には光があるのです。

悟りを開いた人の話によると、悟りを開いたその瞬間に、たくさんの光と大きな光を見るそうです。そうでしょう。その時、まるで体全体が消えてしまったかのように感じ、ただ光が存在しているだけです。その瞬間は五分、十分、また一日中続くこともあります。そういう悟りを開いた人は娑婆世界に住んでいます、仏陀の世界に住んでいるのと同じです。その人にとつては夜もとても明るく、そういう光が発散すると、他の人にも見えて、暗い部屋も明るくなり、明かりがなくても物が見えます。これは修行者だけが到達できるレベルです。けれども、その光はこの世界の明かりとは違います。

例えば、私は今ここに座っています。「仮に」私に光があるとします。みなさんも智慧眼が開いていたら、この時みなさんは私の光を見ることが出来ます。私たちが講義をする場所にはたくさんの明かりがありますが、この明かりは仏陀の光には及びません。ですから、この明かりがあっても、私たちはやはり光が見えます。私の言っている意味がわかりますか。仏陀の光は物質的な光とは同じではないからです。

どうして私たちはこの仏陀の光を探さなければならぬのでしょうか。修行しないで光を探さなくてもいいのではないのでしょうか。いいですとも。この世界が好きで、黒があり白があり、昼があつて夜があるのが好きならば、ここに留まつて修行しなくても構いません。しかし超世界の光、大きな利益のある、人を解脱させてくれる、妙なる光を求める人は、必ず大きな光がある「観音法門」を修行しなければなりません。この光は人を宇宙の最も偉大な、最も智慧のある衆生にさせてくれます。そうなるためには「観音法門」を修行して、この明るい場所を探し求めに行かなければなりません。

どうすればその場所が探せるのでしょうか。まず「明師（マスター）」を探さなければなりません。「明」とは何でしょう。マスターとはすでに明白な（はっきりとわかっている）人で、日も、月も、光も持つていて、その「光」を人々に少し分け与えることができる人のことです。そうでなければ、私たちはどうやってその人がマスターであることがわかるのですか。どんな人でも自分はマスターだと言えますが、しかし実際のところ、その人自身は何もわかっていないことがあります。

ですから、ある人が自分はマスターだ、明師だと名乗つたとします。マスターとは先生と父親の意味が含まれているので、彼は自分の財産を私たちに少し分けてくれるべきです。自分は富豪だと言っても、彼のお金を見たことがなければ、どうやって信じるのでしょうか。私たちは彼の全財産が欲しいのではありません。彼の財産は彼のものです。ただ少しお金を分けてもら

い、私たち自身の店を経営し始めただけです。

彼が私たちにお金をあげると言いながら、何もくれなかったら、彼が富豪かどうかをどうやって判断できるのでしょうか。たとえ彼が本当に富豪だとしても、私たちが困窮して餓死しそうになっても、助けてくれるどころか、反対に私たちからお金を取るような人であれば、その人が富豪かどうかにかかわらず、私たちには何も役に立たない人です。本当の富豪はきつと私たちを助けてくれるでしょう。

マスターも同じです。あるマスターが私たちに「悟りを開く」手助けをすると言ったとします。しかし、彼について学んでもまったく光が見えなかったり、仏陀の音も聞こえなかったりしたら、私たちはどうやって、自分が悟りを開いたかどうか分かるのですか。何をもって証明するのですか。以前とまったく同じで何も変わってないので、そのマスターに「悟りを開くとはどういうことですか」と質問すると、「必ず続けて修行しなければなりません。十年後にわかります」と答えます。しかし万一、私たちが五年後に死んでしまったり、明日往生してしまったりしたら、まだ悟りを開いてないし、光も探し出せてないし、悟りを開きたいという望みも満されていないとしたら、どうしますか。これではただの時間の浪費です。そうしているうちに、とつくに地獄へ落ちてしまっているかもしれないかもしれません。私たちを救ってくれる人は誰もいません。私の言っている意味がわかりますか。

ですから、真のマスターにはみなこの光があるのです。そのようなマスターが伝法するとき

に、私たちはすぐ開悟の体験をします。私たちはその印として、光を少し観たり、内在の音を少し聞いたりします。マスターの伝法によって、いくらか悟りを開きます。その後、必ず毎日まじめに修行すると、この「悟り」はますます発展して、いつかは完全に悟りを開くことができます。印心のと、毎日必ず修行すれば、この開悟の体験が毎日続きます。なぜなら、この光はすでに私たちの財産となったからです。この「光」と「音」があることが「観音法門」です。本当のマスターだけが私たちに体験させることができるのです。

私たちにはもともと光があり、内在の音があるのです。これは私たちの「本性」で、または「仏性」と言っても同じです。イエス・キリストは「天国はあなたの内にある」と言っています。釈迦牟尼仏は「仏陀は心にある」と言っています。老子も類似した道理を述べています。老子は私たちに外へ行つて「道（タオ）」を探しなさいとは言っています。山を拝んだり、水を拝んだりすると「道」が見つかるとは言っています。そうでしよう。道德経の主旨も、私たちは自分の内在の「道」を探さなければならぬという意味が含まれています。

過去の大師たちがこのように強調しているのに、どうして私たちはまだ外へ行つて探すのですか。どうして私たちは寺院に行つて探すのですか。どうして「反聞聞自性（自分の本性を聞く）」ではないのですか。どうして私たち自身の内性がどこにあるかを見ないのですか。内在の仏性を見るにはナイフで切り開いて見るのではなく、カギで開けなければなりません。本当のマスターはカギを持っています。もし開けることができなければ、本当のマスターではありま

せん。もし、そのマスターが私たちに少し開悟の体験をさせてくれなければ、それは本当の開悟した人ではありません。

観音法門は必ず光があります。光が路（みち）案内をして、私たちにどこを歩くべきかを教えてくれます。なぜなら、境界（きょうがい）はあまりにも多いので、光がなければ見えないからです。私たちが内在の境界を見るにしても、内在の宝物を見るにしても、光がなければどうやって見えますか。たとえこの世界でも光がなければ何も見えません。ましてや高い境界の所ではなおさらのことです。もし光の導きがなければ、私たちには見えないのです。ですから、光はとても重要です。

昔の修行者は悟りを開いたときに、後世の人に見せるために、自分の体験を書いて残しました。ですから、私たちは昔の修行者が悟りを開いたとき、みな光があることを知りました。多かれ少なかれ、みなあります。始めたときは少なく、その後大きな悟りを開くと大きな光が見えます。このような光は発散するので他の人にも見えるのです。ですから、釈迦牟尼仏に光があり、イエス・キリストにも光があるのはこういう訳です。

時には修行やメデイーションもせず、マスターの伝法がなくても光を見たり、突然、音が聞こえたりすることがありますが、これらは瞬間的に聞こえたり、見えたりするものです。マスターの伝法がなければ継続的に光を見たり、内在の音を聞いたりはできません。

昨日私が話したように、音には二種類あります。一つは「否定的な音」です。これは三界以

下の音を代表しています。もう一つは三界より上の音で「解脱の音」に属します。もし私たちが三界以下の音を聞いていると、再び輪廻して戻ってこなければなりません。三界より上の音を聞くと、その音は私たちを解脱に導きます。しかしマスターの指導がないと、私たちはその音の区別も判断できません。どんな音が本物で完璧であり、人を解脱させられるのか、どんな音が偽物で完璧でなく、人を解脱させられないのかがわかりません。

光も同じです。二種類あります。一つは私たちを解脱させ、もう一つは私たちに輪廻をさせるものです。ですから聞こえてくる音、見た光がすべて人を解脱させられるわけではありません。これがマスターの指導がなぜ必要かという理由です。なぜならマスターは肯定的な音と光と否定的な音と光とを、すべて識別できます。すべてわかっているのです、私たちに本物と偽物の区別を教えてください。すべてでなければ、私たちは自分でメデイテーションすれば良いので、マスターを探して指導してもらわないのではありませんか。みなさんは自分がメデイテーションをし、仏陀の名前を唱えれば十分だと思っただけではありません。もちろん、しないよりはいいですが、これは決していいやり方ではなく、人に大きな悟りを開かせることはできません。ですから昔から今日まで、大修行者はまだ悟りを開く前に、みな山を越え川を渡り、さまざまな場所に行つて「マスター」を探し回ったのはこういう理由です。もし自分で修行すればいいのなら、マスターを探す必要はありません。話によるとイエス・キリストは生まれたときから、聖人で神の子でした。それなら、なぜインドに行つて、多くの大師に従つて十何年も修行

する必要があったのでしよう。釈迦牟尼仏は生まれるとすぐに七歩歩きました。一歩歩くと蓮の花が一つ現れ、全部で七輪の蓮の花が足元に現れました。それは釈迦牟尼仏が菩薩として生まれてきたからです。大菩薩として生まれて来たにもかかわらず、やはりマスターを探して学び、その後六年、辛い修行をしてようやく悟りを開いたのです。

六祖慧能（ろくそえのう）は字も読めない木こりでしたが、人々が金剛経を唱えているのを聞いて、すぐに悟りを開きました。けれども、なぜ五祖弘忍（ごそくにん）に伝法してもらわなければならなかったのでしょうか。それから十六年隠れて修行して完全に開悟し、そうしてこそ他の人に伝法できたのはなぜでしょう。イエス・キリストも多くのヒマラヤの大師たちに従って修行して多くの道理が理解できました。釈迦牟尼仏には師が六人いました。釈迦牟尼仏が仏陀になったあと、師たちはみな往生しました。釈迦牟尼仏は帰って師に真理を説いて恩返しをしようと準備したのです。ですから、釈迦牟尼仏には師がいないと思っではいけません。釈迦牟尼仏には師が六人いたのです。どんな菩薩も生まれてから、必ずマスターを探して、修行して成就するのです。

光は二種類に分けられます。一流の光は仏陀のレベル、神のレベルに属します。この光は私たちを解脱させることができます。二流の光は人を、繰り返しいつまでも輪廻させます。もし私たちに本当のマスターの指導もなく、自己流にメデイテーションし、修行したとしても、ある日、突然あの内在の音が聞こえたり、意外にも光が見えたりして、少し智慧が出てくること

もありません。

けれどもマスターの指導がなければ、たとえ光が見え、音が聞こえてもそれは二流のものです。しかし本人にはそれがわからないので、とてもいいことだと思ってしまうのです。その結果この二流の光と音により、低い境界（きょうがい）に縛られて、高いレベルの体験を得ることができません。本当の大智慧を得ることができず、小智慧を得られるだけです。二流の智慧、つまり三界以下の智慧、六道（ろくどう）の智慧しか得られません。六道とは何でしょう。天、人、阿修羅、餓鬼、地獄、畜生（輪廻を繰り返す六つの世界）です。ですから二流の光が見えても、二流の音が聞こえても、私たちは真理を得ることができません。

たくさんの人が私に「ある人たちは肉を食べても光が見えるというのです。どうして人々に必ず菜食をしないとイケないというのですか」と質問します。答えはとても簡単で、先ほど私が話した通りです。わかりましたか。肉を食べている修行者でも二流の光が見えますが、真理を見つめることはできません。行ったり来たりして、みな六道の輪廻の中にいます。けれども、肉食者でも修行していれば凡人よりは少しは知っています。

例えば、汚れているコップがあるとします。誰もきれいに洗っていません。私がある中に何を入れても、私にとっては使い物になりません。もし私がそれで無理に飲んだとしたら、きつと病気になるでしょう。それはこのコップ自体がすでに汚れているからです。何を入れてもすべて毒薬になってしまいます。言っている意味がわかりますか。牛乳を入れると腐って苦くな

ります。ブドウ酒を入れるとまずくなり、たとえ水を入れても変な味がするでしょう。水がともきれいでも、ブドウ酒の純度が高くて、牛乳がどんなに新鮮でも、このコップが汚れているので、私たちが飲んでしまうと、良いことがないばかりでなく、反対に有毒な汚いものがお腹に入ってしまう。

同様に、もし修行者が自分の「身、口、意（体、言葉、考え）」をきれいに準備しなければ、修行がどんなレベルまで達していようと、どんな結果を得たとしても、修行は逆にそのレベルによつて問題がもたらされます。これはコップが汚いと水を汚すのと同じで、暗い光は自分自身が汚したものです。きれいな明るい光も、完璧な修行によつてもたらされるのです。

「身、口、意」はとても大事です。「口」の修行だけでは足りません。人の悪口を言わない、だけでは不十分です。それ以外に道徳的なことも重視すべきです。体に毒になるものさえ食べなければ、それでいいという訳ではありません。必ず栄養のあるものを食べるべきです。「意」だけを修行してもいけません。毎日、悪いことを考えないだけでは足りません。良いことをすべきです。例えば生き物の肉のような汚い食べ物や口に入れてはいけません。何を食べても私たちの「意」に影響するからです。

見てご覧なさい。小豚は小豚の餌を食べ、牛は草を食べ、馬は馬の飼料を食べ、鶏は鶏の飼料を食べます。私たち人間は人間の食べ物を食べるべきです。つまり植物性のもので、聖書にはこう書いてあります。「神はたくさんの果物と野菜を私たちのために作った」。それが私た

ちの食料です。

釈迦牟尼仏はあらゆる經典で殺生をしてはいけない、衆生の肉を食べてはいけないと強調しています。「肉を食べて修行している人は仏陀になることはできない。菩薩になることもできない。それは肉を食べる人には慈悲心がなくなり、肉を食べると私たちの慈悲の種子を断つことになるからだ。だから、どんなに修行しても、高くても魔の王にしかなれず、中ほどでは魔の市民に、低いレベルだと魔女になる」と言っています。この点について仏陀ははっきりと述べています。

ですから、どんな法門を修行しようと、私は菜食を勧めます。そうすると、少し見込みがあり、将来高い境界（きょうがい）へ行く機会に恵まれるのです。たとえ私について観音法門を修行しなくても、私のことを信じなくても、どんな法門を修行しようと、必ず「身、口、意（体、言葉、考え）」をきれいにしなければなりません。そうすれば、あのような良くない影響を取り除くことができるのです。例えば、ある薬を飲むとき、医者はず「薬を飲む間はコーヒーを飲んではいけません。この薬とコーヒーが一緒になると副作用を起こし、病状に悪影響を及ぼすからです」と強調します。時々私たちは頭痛薬を飲んだのに、お腹とか、他の所が痛くなるのと同じです。これはその意味です。

私たちが修行するなら、「身、口、意」をきれいにしなければなりません。私たちは毎日、お風呂に入って外面はきれいにしていますが、内面も必ずきれいにしなければいけません。一般

の人はみな忘れていますが、人間は本来菜食でなければなりません。でも毎日肉を食べることが習慣になり、今、「菜食に戻りなさい」と言っても、逆に困難なことになっています。みなさんは豚、鳥、鴨、牛、羊などの動物に近寄りたがらないのに、どうしてそれらの死体を口に入れるのですか。これは道理にかいません。

先ほど私は、肉を食べても光が見える、音が聞こえると言いました。これは間違ありません。けれども、これは本当に人を解脱させる音と光ではありません。これは高い境界（きょうがい）の光でもなく、高い境界の音でもありません。

釈迦牟尼仏が在世のとき、弟子たちはみな出家者で、当然菜食でした。インドは昔から今日まで、ほとんどの人が菜食です。ですから、多くの大師たちはすべてインドから来たか、インドと関係があります。釈迦牟尼仏の在家の弟子たちもみな菩薩です。ですから、楞嚴経（りょうこんきょう）の中の二十五菩薩は、その多くの人は在家菩薩です。

どうして彼らを菩薩というのでしょうか。それは菩薩戒（菩薩になるための戒律）を受けたからです。菩薩戒では、「菩薩戒を受けた者はすべて、絶対に肉を食べてはいけない」と規定しています。それらの在家の菩薩たちはすでに菩薩戒を受けていたので、釈迦牟尼仏は高いレベルの法門を伝法したのです。そうでなければ、普通の在家者にすぎませんでした。在家の菩薩は菩薩戒を受けると、もう肉を食べてはいけないのです。ですから、レベルはとても高いのです。楞嚴経には彼らが述べた個人の体験が書かれています。修行を始めたばかりなのにレベルがと

でも高いのは、肉を食べないからです。仏陀の出家した弟子たちはなおさら、当然肉を食べてはいけません。

私たちが知っているように、あらゆる経典の中には出家者は肉を食べてはいけないと書いてあります。本当はそうであるべきです。しかし今日の仏教では、肉食している修行者はごく少数で、肉食している仏教徒は、多分オウラック（ベトナム）、フォルモサ（台湾）と中国大陸にいくらかいます。その他、韓国では肉食している仏教徒は半分くらいで、日本ではもつとひどく、大体八〇パーセントの仏教徒は肉を食べています。

ですから、人がどんな修行をしているか、またはどんなに精進しているか、それだけを見てはいけません。その人の道徳面にもつと注目すべきです。それは「戒律」がなければ、本当の「禪定（サマデー）」もないからです。本当の「禪定」がなければ、真の「智慧」もないのです。ですから、戒律はとても重要です。戒律とは何でしょう。それは人間として良い人間になり、宇宙の法律を順守することです。自分が殺されたくないなら、動物を殺すべきではありません。人に殺されて食べられるのがいやなら、他の衆生の肉を食べてはいけません。衆生にはすべて生命があります。彼らも生きることを望み、死を恐れます。私たちが動物を殺すとき、動物はとても怖がり、とても苦しみ、怒りと憎しみが生まれ、体内に毒素を分泌します。

けれども、野菜や草木の意識はまだ生を望み、死を恐れるレベルまで発展していませんので、私たちがそれらを食べても大きなカルマはありません。もちろん少しのカルマはあります。ど

んな物を殺してもカルマがありますが、野菜や草木には復讐しようという気持ちがないので、私たちはそれらの怒りと憎しみの影響を受けないのです。私たちが観音法門の修行に精進して、毎日少なくとも二時間半の修行を続けていけば、小さなカルマはすぐにきれいに洗い落とすことができます。

しかし、動物のカルマはそう簡単にはきれいに洗い落とすことはできません。なぜなら、動物には意思があるので、復讐しようとして離れようとしません。従って衆生の肉を食べる人が高いレベルまで修行できないのはこのためです。というのは、「解脱」の意味は永遠にこの世界に戻って来ないということだからです。もし、私たちが衆生の肉を食べながら、また永遠に戻って来たくないと願うとしたら、誰がこの「肉のツケ」を払うのですか。意味がわかりますか。もし、肉を食べても解脱できるとしたら、これでは因果応報がないことになります。この宇宙の法律は「原因があるから結果がある」です。肉を食べたなら肉を返さなければなりません。というところで、肉を食べる人は高い境界（きょうがい）まで修行することはできません。

これは經典に基づいて話しているのです。決して私はみなさんを批判しているわけではありません。真理を述べる以上は本当のことを話さなければなりません。知っていることを話すべきです。もし人に喜ばれる話をするのなら、私は何も話す必要はありません。出家することも、講義もする必要はありません。ただ毎日人々に、「今日はとてもきれいですね。その服装はとても流行っていますね。好きなことを何でもやっていますよ。世界を享受したければそれも構

いません。ただ帰依すればいいです。肉を食べても酒を飲んでも構いません」というような話をすればいいのです。すると人々は喜ぶでしょう。経の講義をする必要もありません。

肉食者に対しても、「構いません。たくさん肉を食べなさい。健康になりますから」と言うこともできます。しかし、何日も経たないうちに、彼らは病院に行くことになるでしょう。肉食者は多くの人がガンになります。菜食者にはこんな問題はありません。今世紀の不治の病エイズも肉食者の病で、菜食者には絶対ありません。

ということ、みなさんはこのことを知っておくべきです。私がみなさんを喜ばせるために、経の講義をするとしたら、私はこれらの道理を話す必要があります。みなさんに再三にわたる菜食をすべきだと言わなくてもいいのです。菜食はみなさんの現在の生活習慣に反しているので、聞きたくない人もいます。けれども、修行者は必ず真実を正直に語り、それらの智慧を備えた人たちに言いせなければなりません。孔子もこう言っています。「君子は竹のように真つ直ぐでなければならぬ」と。ですから、私はみなさんの為になる良いことを思いつくと、それを話さなくてはなりません。人が聞いて喜ぶかどうかは関係ありません。

孔子はまた「己の欲せざる所は人に施す勿れ（自分がいやなことを他人に強要してはいけません）」と言いました。この言葉はみなさん良く知っています。好んで引用していますね。そうでしょう。どうしてみなさんはこの道理が好きなのでしょう。真理は私たちの本性に存在しているからです。良い道理はすべて私たちが望むもので、高貴な言い方や高貴な考えは、本来私た

ちの内面に潜在しているのです。人間は本来最も高貴な衆生でした。みなさんはすぐには菜食できないかもしれません。なぜなら、個人の状況により不便であったり、奥さんかご主人に妨げられたり、仕事の環境に制限されたりする人もいるからです。

それにしても、みなさんはやはり道徳のことや、真理を聞くのが好きです。私はみなさんの内面に、最も高貴なものがあると信じています。つまりみなさんの「仏性」です。この「仏性」、または「天国」が内面にあるのに、真理が嫌いなはずがありません。高貴な思想が嫌いなはずもありません。そうでしょう。(聴衆が「そうです」と答える) 今まで一度も真理の話聞いたことがないので、わからないのです。決してみなさん自身がしたくないものではありません。因果律はとても正確でとても厳しいものです。少しの誤差もありません。原因があれば、必ず結果があるのです。少しも逃れることはできません。いわゆる「天網恢恢，疎而不漏(天の網は目が粗いように見えるが、決して何一つ漏らさない)」とはこういう意味です。

昔、インドにカビールという大修行者がいました。ある日ある人が彼を訪ねて来ました。ちょうどカビールは留守で、彼の修行仲間(前は奥さんでしたが、現在は弟子なので、修行仲間と言います)「墓場へ行って師を捜してください。師は今、友人の埋葬に行っています」と言いました。その人は「私はどうやってカビール師を捜し出すのですか。私は本人を知らないのです」と言いました。インドの人はみな同じような顔をしていて同じ服を着ています。フォルモサの出家者のように同じ僧衣を着ています。

カビールの奥さんはその人に「そこに行つて、頭上に光がある人を見つけたら、その人がカビールです」と言いました。その人が墓場についたとき、みんなはちようど穴を掘っていました。棺を担いでいる人も穴を掘っている人も、埋葬の準備をしている人もいました。彼らはみな頭上には光があり、カビールを捜し出すことができませんでした。埋葬のとき、みんな黙っていたので聞くこともできず、また戻つてカビールの奥さんに「私はカビール師を捜し出すことができません。みんなの頭上に光がありました。どうすればいいのですか」と言いました。

カビールの奥さんは「いいですね。大丈夫です。もう一度墓場に行つてください。埋葬が終わつて帰るときに、ただ一人だけ頭上に光のある人がいます。その人がカビールです」と言いました。その人はまた墓場に行き、埋葬が終わるのを待つて一緒に帰るとき、確かに頭上に光のある人が一人いました。どうしてなのか、みなさんはわかりますか。どうして埋葬のときには全員に光があつたのに、帰るときは大マスター一人だけにしか光がなかつたのでしょうか。

それは死者を埋葬しているときは、友人全員がとても神聖なこと、「人はどうして生と死があるのか」というような想いに集中していて、その時一心に解脱のことを考えていたので、内面の良い品性が光として現われたからです。ですから、それでみんな頭上に光があつたのです。それはその時、生死輪廻は本当に恐いことだと体験し、この生活はとても無常であることがわかつて、その時は娑婆世界に対してあまり未練がなく、一心に修行して解脱しようと思つたら、内在の光明な品性が現れて光が見えたのです。

このような光はどんな人にもあります。でも埋葬が終わって帰るときにはもう忘れてしまったのです。凡人は毎日練習しないと、意識をコントロールすることができません。意識を私たちの思い通りにさせることはできません。わかりますか。時には私たちは北のことを考えようとしても、意識は南へ行ってしまう、西のことを考えようとしても、意識は東へ行ってしまう、頭の中は東西南北の雑念でいっぱいになって、混乱してしまいます。ですから、埋葬が終わって帰るとき、死体と棺が見えなくなり、意識がいか所に集中しなくなったので、考えはあちこち飛んでしまったのです。その時は生死輪廻のことを考えず、ただ夫、妻、食事、寝ること、遊びなど、世俗のことだけを考えたので光がなくなりました。

私たちが考えを生死輪廻の問題に集中すると、必ず光があります。みなさんは帰ってから試してみてください。あの人たちは埋葬が終わって帰るときに、心の中ではこの世界のものしか考えなかったのが光がなくなつたのです。というのはこの世界は真つ暗で、低いレベルに属しているからです。怒つたときはとても暗く、その時は地獄のレベルです。世界のことを思いめぐらしても暗くなります。修行のことを考えるときだけ光があります。

カビールは長い間修行していたので、いつでも意識を、修行や高い理想に集中することができたので常に光がありました。私たちはとても高い理想を考えると明るくなり、世界のことを考えると凡人になります。「貪り、怒り、愚かさ」のことを思うと魔になります。

先ほど話しました因果律はとても正確で、少しも間違ふことはありません。私のマスターの

マスターが在世のとき、ある弟子がいました。その弟子はとても努力して観音法門を修行しました。ある日外に遊びに行き、ミミズがたくさんのアリにかじられているのを見ました。ミミズはとても苦しそうで、もう死にそうで、逃げ出すことができませんでした。慈悲心から、このミミズを安全な所に運んで行ってアリの追いを払いました。

ところが、その晩メデイテーションしているときに、何万何千ものアリの群れが見えました。アリはあの粗雑な体ではなく、微細な霊体で彼に噛みつきました。アリの群れの霊体を見たとき、とても恐かったです。噛みつきながら恨み言を言い、アリの言葉で話しました。私たちが修行して高いレベルに達すると、動物の言葉がわかるのです。そのアリの群れは、彼に「本当はあのミミズが自分のカルマを受けていて、清算しなければならぬのに、なぜおまえは私たちのことに介入したのだ。これは私たちの因果応報なのだ。あのミミズは必ず自分の生命で、過去に作ったカルマを清算しなければいけないのだ」と言いました。

ですから、私たちが何をして、すべて因果があるのです。私たちが人を救うとしても、その人のカルマを背負わなければなりません。でも大きな福報があれば他人のカルマを負担しても大した問題はありません。もちろん少し病気になるたり、体の具合が悪くなったりということもあります。最も良くない状況はイエス・キリストのように十字架にはりつけにされて死ぬといった苦しい方法で、衆生のカルマを清算することです。または釈迦牟尼仏のように、人々に石を投げられ、誹謗され、釈迦牟尼仏を殺そうとする人がいたり、無実の罪を告げる人がい

たりして、さまざまなトラブルがあります。

仏陀になって大きなパワーがあっても、やはり無実の罪を告げられたり、誹謗されたり、殺害されたりするのです。どうしてでしょうか。それはたくさんの弟子を受け入れ、伝法し、カルマを背負い、凡人から聖人に変えるからです。弟子のカルマはみなマスターが清算してあげなければなりません。

ですから、私たちが布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧を修行するときはむやみに行つてはいけません。本当の状況を把握してからやるべきです。そうでないとトラブルがたくさん起ります。金剛経（こんごうきよう）にはいろいろなことについて書かれています。私たちにそれはできないかもしれません。凡人にはパワーがないからです。考えてもらいなさい。たった一匹のミミズを救つただけでもあのような恐い状況を引き起こしました。もし私たちが自分でカルマを作つたとしたら、それはどんな因果になることでしょう。

もう時間です。みなさん何か質問がありますか。私の最も大きな疑問は「なぜみなさんは修行したくないのか。なぜ修行したくない人があんなにたくさんいるのか」ということです。この世界は無常です。生命はとても短く、せいぜい百年にすぎません。多くの人は生活がとても苦しく、何の意義もない、毎日ただ食べて寝て、仕事して、また食べて寝て、仕事と、愚痴をこぼしていながら、やはりこの世界に未練があり、離れられず、捨てきれないのです。どうして人々はこんなに諦めがつかないのでしょうか。これが私の最大の疑問です。



観音法門の修行の利益

スプリームマスター チンハイ フォルモサ・台北

一九八七年三月七日

釈迦牟尼仏は四十九年間、伝法しました。それはすべて解脱の法門でした。あらゆる仏教の經典では、この観音法門についてふれており、賛美しています。昨日ある修行者が来て私に、「法華経（ほけきょう）は、何について述べているのですか」と聞きました。これについては、私たち修行仲間はずでに何十回となく、私の説明を聞いています。

法華経では観音法門のことを述べており、内在の音について話しています。みなさん帰ってから読めばわかるでしょう。しかし観音法門を修行していない人は、なかなか信じないかもしれません。法華経の中で、釈迦牟尼仏は観音法門を「法華法」「蓮華法」と言い、金剛経の中では「金剛法」と言い、阿弥陀経の中では「浄土法」と言っています。言い方が違うので、私たちは混同しがちです。人々の理解とレベルはそれぞれ異なるため、釈迦牟尼仏は違う名称を使って、同じ法門を解説したわけです。たくさんの法門があるのでありません。この点について、私はすでに澎湖（ほうこ：台湾の地名）で話しました。あとで講義のプリントを配ります

ので、みなさんは帰ってから、よく読んでください。そうすれば理解できるでしょう。今日は繰り返し話しません。

話し始めてから今日でもう四日目です。私は多くのことを話しましたが、その主旨は最高の法門は観音法門であることを、みなさんにわかしてもらいたいことです。私はやることなく、毎日好んでここで講義しているわけではありません。講義するのはみなさんに、なぜ普通の法門は究極の解脱の法門ではなく、観音法門だけが最高の法門であるかを本当にわかってもらいたいからです。しかし今までの話は、ただ観音法門を賛美し、紹介し、宣伝したに過ぎません。みなさんはこの法門が何なのか、まだよくわかっていません。そうでしょう。

法を伝授するとき、私は何も話をしませんが、弟子はこの法門を得られるのです。言葉で伝授するものではないために、経典の中でこの法門を見つけないことは不可能です。古代のすべての大禅師たちは「教外別伝、不用経典（言葉や儀式を用いない特別な伝授法。経典も使わない）」と言いました。なぜなら、経典では何も伝授することができないからです。経典はただ一種の記録にすぎません。昔の修行者の体験や考え、悟りを開いた後にどんなことを話したか、何を見たか等について書かれていたもので、これは後世の人たちが自分の体験と照らし合わせてみたり、参考にしたり、研究したりするのに使うものです。したがって、経典を用いて伝法することはできません。

西遊記には、玄奘大師（三蔵法師のこと）は経典と道（タオ）を求めて、中国大陸からイン

ドに渡る道中、どれほど苦勞したか、どれほど魔の障害に付きまとわれたか、彼の弟子、孫悟空がいかにか魔物を退治して、そして最後に經典を手にしたかについて書かれています。彼らが生じた經典は玄奘大師のものではありません。ですから、西遊記の話聞いても読んで、私たちは何の役にも立ちません。その經典を得ることもできません。また、当時の玄奘大師の苦痛を体験することもできないし、孫悟空の神通力も得られません。ただ話の内容を想像するだけです。そうではありませんか。

楞嚴經（りよごんきよう）、法華經、金剛經の中で、仏陀は繰り返し観音法門を贊美してありますが、私たちには観音法門とは何なのかわかりません。多くの人は楞嚴經を読んで、これが究極の法門であることがわかります。しかし、どのようにこれを修行するかを知っている人はごく少数で、大半の人は推測するだけです。

例えば、ある人は海潮音を聞くために海に行き、絶え間ない波の音を聞くことが観音であると思ってしまうのです。また、ある人は観音法門とは「南無觀世音菩薩（なむかんぜおんぼさつ）」と唱えることだと思つています。また、ある人は大悲呪（だいひじゆ）を唱えることが観音法門だと思つています。さらには、是非を見極めることが観音法門だと思つています。つまり、善し悪しはなく、人に罵られても、平然としていられるということです。これは内面を観ること、観音ではありません。また、観音法門は慈悲の心を観つめることだと主張する人がいます。例えばそこに座つて、自分の前には何があるか、後ろには何があるかと、右側には親戚、

友人がいて、左側は見知らぬ人がいると思いつつと観つめ、彼らに気高い理想と慈悲の心を発して、彼らの幸せを祈り、包み込み、寛容的に受け入れることが観音法門であると思ってしまうのです。

私たちは経を読んで、本当にその教義を理解すれば、ちょっと聞いただけで、先ほど言ったさまざまな推測には根拠がないことがわかるでしょう。そういつたやり方はいずれも凡人の頭脳で想像したものです。観音菩薩の慈悲は計りしれないものです。観音菩薩は菩薩なので、私たちがそのレベルに達していなければ、決して観音菩薩の慈悲の心がわからないのです。凡人の頭脳には限界がありますが、観音菩薩の慈悲は無量無辺で、言葉ではその慈悲の心を表すことはできませんし、人間の頭脳では想像できません。頭脳で想像でき、頭脳を使って観音菩薩になれるなら、修行する必要はありません。

大悲呪を何十万回唱えろと千手千眼の菩薩になるなら、フォルモサ（台湾）ではすでに多くの人が観音菩薩になっているでしょう。彼らはとても熱心で何十万回も唱えています。チベット人、オウラック（ベトナム）人もそうです。けれども、観音菩薩になった人はいません。彼らは大悲呪をたくさん唱えましたが、心はまだ平和になっておらず、慈悲の心もまだ足りません。申し訳ないですが、私は話さない訳にはいきません。これは真実だからです。

彼らはまだ「貪・瞋・癡（貪り、怒り、愚かさ）」が大きく、唱えれば唱えるほどエゴが大きくなります。というのは彼らほともすると、「私」は修行している、菜食している、「私」は念

仏して、仏陀を拝んでいる、「私」は慈悲心がある、「私」は何々であると、いつも思っています。常に「私は… 私は…」と言つて、「私」がますます大きく膨らんでしまい、どんな話も耳に入らなくなっているのです、彼らに教えられる人は誰もいません。また、新しい法門を伝授できる人もいません。なぜなら、彼らの頭は「私」でいっぱい、他のものが入る隙間が少しもないのです。彼は「自分は何でも知っている。何でもわかっている」と思っているのです。

ですから、真の法門を理解していないと修行は大変難しく、とても容易に「エゴ」にとり囲まれてしまいます。まだ修行していない人は少し謙虚な心がありますが、少し修行したことで、かえって厄介になっている人がいます。ある人は私に「読経すると福報が得られますか。読経は良いことですか」と聞きます。菩提達磨は「良くない」と言いましたが、私は「良い」と言っています。(笑い) なぜなら、私はみなさんと論争したくないからです。私はみなさんと友達になりたいのです。読経が好きなら、すればいいのです。

例えば、みなさんが酸っぱいものや甘いものが好きなら、もちろん食べていいです。私は反対しません。それと同じで、私が読経を止めさせることはしません。好きならそうしてください。読経は人を罵るより良いですし、人の善し悪しを言うより良いでしょう。ですから、私は「読経は悪くない。やってください。福報があります」と言います。けれども、読経は私個人にとっては福報が足りません。そのような福報は俗世間の福報にすぎません。經典の意味がわからなくても、読経すれば利益を得られるなら、テープレコーダーも仏陀になれます。(笑い)

テープレコーダーにも福報があるでしょう。テープレコーダーは私たちよりはつきり読経するからです。時々、私たちは唱えながら寝てしまいますが、(笑い) 機械は間違つて唱えることなく、寝てしまうこともありません。

ほとんどの人は、修行とはただ読経すればよい、または仏陀を拝めばよいと思つています。ですから、そのような傲慢な態度が生じるのです。もし読経や経を唱えることが、経典を理解したいため、真理を求めたいためなら、たとえ本当に教義がよくわかっていなくても、傲慢にはなりません。経を読んだり、唱えたりすることは悪くありません。少なくとも経典は私たちにとつて参考になり、昔の人がどのように修行していたのかがわかり、だんだんと私たちも彼らと同じように修行し、彼らと同じようになりたいと決意することがあるからです。けれども、読経は福報があると聞いて、その福報を欲しがつて、たくさん経を唱えたとします。唱えれば唱えるほど、「私」の福報はこんなにも大きいと思うのです。福報とは何なのかもわからず、見ることにも触れることもできないのに、自分には大きな福報があると思つてしまうので、「エゴ」は大きくなり、傲慢になります。これはとても危険です。

他の法門についても楞嚴經に書かれています。どんな法門もそれぞれの優れたところがあり、私たちが修行に集中できるように手助けしてくれます。自分の修行している法門を信じるなら、多少は結果が得られます。ないわけではありません。たとえ、自分の名前を唱えても効果がありません。帰つてからやつてみてください。集中して自分の名前を一週間唱えても、禅定(サマ

デー）に入ることができません。しかし、「集中」してこそ有効です。帰ってからやってみて下さい。しばらく阿弥陀仏を唱えるのを一週間休んで、自分の名前を唱えてみてください。（笑い）このようにしても福報はあります。

当然、阿弥陀仏を唱えたほうが自分の名前を唱えるより福報があります。なぜなら阿弥陀仏のサンスクリット語は *Amitabha*（アミターバ）であり、この音は宇宙の振動に似ていて、サンスクリット語の発音は宇宙の振動に近いからです。みなさんは内面の宇宙の振動を聞いたことがないですが、「集中」して仏陀を唱えて、梵天の振動（梵音）が聞こえたとき、少しは感じることができません。

中国には昔から大豆を使って「南無阿弥陀仏」と唱える風習があると聞いています。一回唱えるごとに大豆を一粒、片方に移し、たくさんたまったら、それを人に分けて食べてもらい、その人と縁を結ぶ、ということでした。これは私が聞いた物語ですが、あるお婆さんが毎日「南無阿弥陀仏」を唱えていました。普通は唱えたあと、大豆を人にあげて、また新しい大豆を買うのですが、しかし、彼女には大豆を買うお金がないため、使っていた大豆を毎日繰り返し使って念仏しました。一回唱えたら一粒を片方に置き、全部を使い終わると、また新たに一回に一粒ずつ元のところに戻しました。このように一定期間念仏していると、今度は大豆がひとりで移動し始めました。彼女が一回念仏すると、大豆は自分で片方に飛んで行くのでした。

みなさんは信じますか。この物語を聞いたことがありますか。なぜこのようになるのか、誰

か知っていますか。みなさんはそんなに長く阿弥陀仏を唱えているのに、どうして知らないのですか。フォルモサ（台湾）人で浄土法門を学んでいない人はまれです。彼らは阿弥陀仏の修行以外には、他に修行法はないと言います。ここにいる人の中で毎日、阿弥陀仏を唱えている人はいますか。（ある人が「彼女は念力がとても強いからです」と答える）しかし、多くの人が一生涯唱えているのに、なぜそのパワーがないのでしょうか。（ある人が「感応があるからです」と答える）感応はどこから来るのですか。なぜ他の人には感応がないのですか。中国の中で、彼女だけが思いを込めて念仏している、ということはないはずで、中国大陸はあんなに広くて、たくさんの人が念仏しているのに、なぜたった一人だけ念力があり、他の人にはないのですか。

修行が良くないのでわからないのです。修行すればするほど智慧眼が開き、宇宙には多くの他の衆生がいることが見えるのです。大きな衆生、小さい衆生、高いレベルの衆生もいれば、肉眼では見えない微細な衆生もいます。彼らは行ったり来たりして、時には、「料理が煮えすぎたよ」と教えてくれることもあります。しかし、あなたには見えないし、聞こえないため、彼らの存在がわからないのです。

そのような小さな衆生たちは、私たちが毎日、仕事で疲れているのを見ると、私たちと遊んでくれたり、何か手伝ってくれたりします。どうせ彼らにはやることがないのです。その中にはかわいいのもいれば凶悪なものもあります。彼らは悪意で故意に人を傷つけるではありません。

厳密に言えば、幽霊ではなく、大自然から化生（けしよう：母胎や卵からではなく、何もなしのところから生まれること）した「元素（Element）」です。自然に化生した衆生と言えば、みなさんにはわかりやすいでしょう。ですから、樹木、野菜にそのような衆生がいるそうです。自然から化生した衆生は至る所に満ちています。（仏陀は生命には胎生、卵生、化生、湿生の四種の形態があると言いました）。ですから、仏教は非常に科学的なのです。釈迦牟尼仏は二千年五百年前にすでに「私たちの生涯で、目には見えない衆生がたくさんいる」と言いました。釈迦牟尼仏は智慧眼で多くのものを見通していたのです。

私たちの肉眼では見えない、自然から化生した小さな衆生は比較的善良で、私たちの手助けをしてくれます。凶暴だったり、いたずら好きな衆生は事件を起こしたり、けんかさせたりします。ある衆生は善良な人が好きで、彼らと遊ぶのが好きで彼らを助けます。ある衆生は人けんかをさせるのが好きです。これは彼らの本性で、災いを引き起こすのが好きです。ですから、時々私たちが話しているところに、多くのそのような小さな衆生が駆け寄って来て、そこを取り囲みます。時にはそこが光っているのが見えます。修行していない人は仏陀や菩薩の光だと思っていますが、実際は私たちに見える光がすべていいものとは限りません。それは肯定的な光ではなく、否定的な光でネガティブなパワーに属する光です。その種の小さな衆生にも光がありますが、智慧眼が開かなければ見分けられません。

聖書にはこう書いてあります。「神は二種の光を造り出しました。一つは昼間の光で、もう一

つは真つ暗な光です」と。真つ暗なのになぜ光があるのでしょうか。神の言う意味は良くないパワーを指しています。わかりますか。それらの衆生はそんな場所に充滿しているのです。時には、私たちが線香をあげて願いをすると、彼らも寄つて来て線香で遊ぶのです。すると私たちは仏陀や菩薩が自分の願いを聞いてくれたと思ってしまうのです。実はこれも大したことはありません。ただ彼らはいたずら好きなので、遊んでいるだけのことです。このようなことはたくさんあります。

例えば、私たちは普通に路（みち）を歩いていたところ、突然、交通事故に遭つたりします。これはすべてそれら衆生たちの仕業によるものです。一回交通事故のあつた場所では、それ以後もよく事故が発生します。ですから私たちはよく、その場所は「邪気が強い」、そこを通るときは押んだほうがよい、さもないければ交通事故に遭うと言うのを聞きます。一、二度事故があつた場所には、それらの衆生たちがよくそこに集まります。わかりますか。彼らは衝撃的で、悲しい雰囲気や、大混乱の雰囲気が大好きなので、そこに集まり住みつくのです。そして車が走つて来ると破壊的な工作をしたりします。すると車は故障して走行不能になったり、または思いがけない事故が発生したりします。すると彼らは側で笑っているのです。

私たちの中には、憂鬱な性格の人もいれば、かつとなる短気な人もいます。昨日、私は磁場 (Magnetic Field) のことを話しましたが、良い磁場も悪い磁場も、すべて自分で造り出したものです。いずれも私たちが良い元素 (Element) を吸収したか、悪い元素を吸収したかによ

って形成されたものです。あるいは、その他の特別な状況によるものです。修行者はそのような災いにあうことは少なく、病気も少ないです。観音法門を修行する人は最も安全で、これは私自身の体験から言えることです。なぜなら、観音法門を修行すると最高のパワーと一緒にいるからです。昨日、私は「音」について話しました。この「音」は創造主のパワーであり、楞嚴経では「音流」と言い、聖書ではこの音を (the Word) 言(ことば)と言っています。仏陀や菩薩はこの音流にそって下りて行って衆生を救い、そしてこの音流にそって上がって行く(帰る)のです。この「音流」は「道(タオ)」であり、老子が言っている「名不可名(言葉で言い表せない名)」なのです。

したがって、この「名不可名」、この「音流」とつながらないと、私たちはとても孤独で、孤立しているように感じます。それは他の助けてくれるパワーがなく、たった一人だからです。しかしこの音流の中に入ると、私たちは自分が大きな団体の中にいるような感じになります。大きな団体そのものは大きなパワーの持ち主です。一人のパワーはとても小さいですが、この自由な大団体の大パワーと一緒にいけば、他の良くないものは入って来られません。この世界には黒があれば白もあり、良いものがあれば悪いものもあります。私たちは良いパワーと一緒にいれば、悪いパワーの影響を受けません。なぜなら、私たちはもう悪いパワーの団体から離れて完全に離脱していることを、彼らも知っているからです。私たちは永遠に彼らから離脱したのです。

ですから、私たち観音法門の修行者には死後、魔や閻魔王は近づきません。それは観音法門の修行者の「磁場」が違うからです。以前とは違って、良いものだけを吸収して、悪いものは吸収しないからです。この「音流」は、私たちの悪い磁場を洗い清めてくれるので良いものだけが残るのです。前は私たちの磁場は穴だらけで、良い場所も悪い場所もありました。良い場所は良いものを吸収し、悪い場所は悪いものを吸収します。今は宇宙の「音流」、つまりこの創造のパワー、源のパワーを使って磁場を修理し、悪い面をすべて洗い落としています。手術を受けるようなもので、悪い組織を取り除いたあと、傷口を縫い合わせれば、しばらくすると病気が治り、体も健康に回復するのと同じです。

観音法門の修行も同じです。この大きなパワーを使って私たちの弱い部分を修理します。それで、すべてのものがきれいになり、災いもなくなるのです。真面目に修行しなかったり、気がゆるんで真剣にこの法門を修行しないで、マスターの指示に従わなかったりする場合を除いてです。しかし、そのような状況も少ないです。一度あの大きなパワーと繋がれば、永遠に繋がっていて切れることはありません。しかし、私たちが使うのが多くなければ、当然少しのパワーしかありません。

例えば、父親が亡くなったあと、たくさんの財産を残してくれたとします。けれども、あなたが怠けて、それを使わなかったり、銀行にお金を引き出しに行かなかったり、または財産を置いてある場所まで出かけてお金を取ってこなければ、当然お金はありません。しかし実際、

あなたはお金持ちであることは、みんなが知っていて、誰もあなたのことを貧乏人だと言いません。彼らはみんな、あなたが資産家であることを知っているからです。その財産を使うかどうかはあなた次第です。もし、あなたがたくさんの財産を使えば、生活は当然より快適です。いろいろなものを買えるし、さまざまなおいしいご馳走を楽しめます。もし、あなたが怠けて使わなかったり、使う勇気がなかったりすれば、当然あなたが持っているものは少ししかなく、生活は前とほぼ同じです。けれども、他の人たちは、あなたがお金持ちであることを知っています。親戚、友達や隣人は、父親からたくさんの財産をもらったことをみな知っています。

印心を受けて観音法門を修行する人は、マスターからの伝法により、このパワーと繋がります。宇宙の最大の団体に入ったことになります。しかし、徐々に成長していかなければなりません。印心を受けたあと、私たちは本当の意味で人間の品性を発展させていくことになります。以前は半人前でしたが、今は一人前の完全な人間になったのです。しかし、努力して修行しなければ、当然運命も生活も個性もそれほど変化はなく、一目ですぐわかるような変化はないでしょう。

けれども、本当に真面目に修行している人なら、短期間で、一、二日または一週間で、すぐに修行の利益や観音のパワーがどういふものが認識でき、個人の生活、個性の変化や智慧の発展が感じられ、また以前に比べて大きく変わったことが感じられます。これは私がここで大げさに宣伝しなくてもわかることです。なせなら、彼らは言わずにはいられないからです。まる

でコップの中の水がいっぱいになって、自然にあふれてくると同じです。観音法門の修行は、この宇宙の中で唯一の法門なのです。

みなさんが台湾の標準語を理解できるのは、当たり前のことですが、フォルモサ（台湾）のこの小さなサツマイモ型の国土には二、三種類の言語があります。言語が違うために、世界で絶えず戦争が起きるのです。みんなが「観音」の言語を使うのが一番いいことだと思います。すべての衆生がわかる音です。ですから、仏陀は一つの音、一つの言語だけを使いましたが、すべての衆生が自分のレベルに応じて理解した、というのはまさにこの意味です。この音、この美しい音楽、内在の音楽は電話のシステムと同じで、私たちは長距離の電話交換台と繋がりがさえすれば、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカ、高雄、台南などに電話をかけられます。まったく問題ありません。

いったん電話線が繋がれば、私たちはもう孤独ではありません。話したい人にすぐに連絡がとれるので、相手もすぐに私たちがどこにいるかわかります。万が一、私たちに何か問題があったときは、電話をすれば二分以内にすべてわかります。警察や隣人、友達がみな助けられます。そうでしょう。以前電話がないときは、助けてくれる人を一人探すのも容易ではありませんでした。ある人が家の中で死んでも、何日も誰も知りませんでした。ある人が病気にいかっても誰も知りません。今はみんなが電話を持っているので便利になりました。たとえ重い病気で行けなくても、電話一本で医者が見に来てくれます。または救急車が来て私たちを病院ま

で運んでくれます。またタクシーも家の玄関まで来ます。とても便利です。

観音システムも同じです。この音またはこの内在の音楽は、一つのシステムまたは一本の電線のようにすべての衆生を繋いでいます。ですから、一度このシステムに入ると孤独でなくなるのです。というのは、私たちはすべての衆生と繋がっているからです。修行すればするほど、このシステムを使えば使うほど、より多くの衆生についてわかるのです。私たちが使っている電話で例えると、より多く使えばより多くの友達がいることを示し、より多くの人と交流すればより多くの人が私たちのことを知り、私たちがどこにいるか知ることができると示しています。すべての衆生はみな、この内在の音を持っているので、一度この音流に入ると、すべての衆生、小鳥、アリ、さらに微細な衆生に至るまで、すべてがわかるのです。

もし、ある人がアメリカで私たちの名前を呼べば、私たちにはわかります。もう一人がフランスで私たちを恋しく思うと、すぐにわかります。私たちは化身で彼らに会いに行けます。修行レベルが高ければ、化身で私たちに会いに来られます。これはテレビの原理と同じです。または最新型のテレビ電話のように、ここで電話しているときに、向こうで話している相手が見えるのです。

しかしその種の音のシステム、または観音というシステムは電話より微細であり、もつと効率がよく、電線を使わないのでお金がかかりません。私たちが誰と連絡しているか、誰もわかりませんし、誰に会いに行くのかもわかりません。どこに行くにも航空チケットを買う必要は

なく、何もいりませんし、一歩も歩かなくてもいいし、何も言わなくてもいいし、何かも考えなくてもかまいません。このシステムは最も自動的で簡単で速いのです。ですから、観音法門を修行したあと、上は仏陀や菩薩と通じ合い、下は三途苦（さんずく：地獄、餓鬼、畜生の苦しみ）と通じ合います。ですから「上報四重恩、下濟三途苦（上に対しては四つの恩に報い、下は三途の苦を救う。四つの恩：仏・法・僧、国家、父母、衆生の恩）」と言われています。その時こそ、このように言うことができます。観音法門を修行する前は、このようにすることはできません。なぜならこの創造のパワーと繋がっていない人は、衆生を救うなどとは言ってはいけません。まだ自分自身さえ救うことができないからです。自分は明日どこに行くのか、いつ死ぬのかもわからない人が、衆生を救うなどと言ってははいけません。

みなさんのほとんどは台湾の標準語がわかりますね。少なくとも九九%の人は、私の話を聞いていて理解できると思いますが、わからなくても大丈夫です。みなさんの智慧がわかっています。みなさんの本性、仏性はわかっているのです。実際、目を見れば十分なのです。男女が恋しているとき、目を見つめ合うだけで十分通じます。だとしたら、私も同じようにみなさんと通じ合うことができます。明日ここに来て二時間ほど私の目を見てから帰ってください。

本当です。修行レベルの高い人は私に会いに来て、話したいことは何もありません。彼らはとても私に会いたがっていて、会わないと恋しくて、何か失われたような気がするのです、私に会いに来るのです。私たちは目を見つめ合い、そして帰って行きます。そして私は再びメデ

イテーションします。これが私たち師と弟子との関係です。

ですから、私たちの法門は「静寂」の法門とも言えます。話すことはありません。私が法を伝授するときも話しません。七日間トリートリー中も話すことはなく、私に会いに来たときも、話したいことは何もないのです。これこそが「静寂」の法門ではないですか。当然、私たちが「観音」をするということはみなさんも知っていると思いますが、私たちはとても静かに、他の人には絶対に聞こえない、この音を観るのです。隣の人も聞こえません。たとえ一緒に住んでいる夫、妻、子どもでも聞こえないのです。この音と修行レベルは誰も持ち去ることはできません。誰も知らなければ誰にもわかりません。無理に私たちをその境界から引き離すことは誰もできません。

例えば、私たちが仏教徒で、廣欽老和尚に帰依して法名をもらったとして、毎日廣欽老和尚の写真を押んだり、仏陀を押んだり、念仏したりしていることを、あるキリスト教徒はそれが気に入らないので、私たちの信仰を批判したとします。この種の信仰の形態は、表面的で誰が見ても修行していることがすぐにわかりますが、けれども、私たち観音法門の修行は誰にもわかりません。バスの中でもできるし、公園でもできるし、お手洗いでもできます。いつでも、どこでもできるのです。

しばらく修行したあとは、たとえ何もしなくても常にその内在の音楽と一緒にいます。それは永遠に私たちから離れることはありません。私たちにとって最も忠誠心のある、最も助けに

なる、最高の友達です。私たちに必要なものがあれば、いつでも何でも与えてくれます。困難なときには、すぐに助けに来てくれます。私たちの代わりにすべての仕事をしてくれるのです。私たちは特に何かしなくても、何も期待しなくても、自然に仏陀になるのです。ですから、路（みち）を歩くのも禅であり、ご飯を食べるのも禅であり、寝るのも禅であり、日常生活の中あらゆる行いすべてが禅であるとは、つまりこの意味です。

ただし、このレベルに達する前には、「禅」について、禅はこうあるべきか、などと議論しないことです。日常生活すべてが禅のレベルに達している修行者は、禅はこうだああだと議論している人たちを見ると笑いたくなります。しかし、彼らに何かを話したいとは思いません。なぜなら、話してもわからないからです。話を聞いてわかる智慧を持っている人はごく少数です。オープンな心が欠けていても、その最高のものは受け入れることができます。しかし、これは最も簡単で、最も自然な法門です。

観音法門をもう少し紹介しましょう。当然これはまだ伝法ではありません。伝法的时候は、話はしません。観音法門は私が話さないときに得られます。私の話をたくさん聞いたから、すでに観音法門を学んだと思っ**て**はいけません。観音法門には三つの部分が含まれています。これが一つになって観音法門になります。

第一は私たちの智慧を使うことです。世界中のどんな人の頭脳も、必ず何かを「念じて（想**つて**）」います。例えば、あなたは夫を「念じ（想い）」、彼は妻を「念じ（想い）」、この人は学

問を「念じ（想い）」、その人は仕事を「念じ（想い）」、ある人は善し悪しを「念じ（想い）」、ある人は悩みを「念じ（想い）」、ある人は悪いことを「念じ（想い）」、または名利を「念じ（想い）」ます。けれども、ただ、阿弥陀仏を「念じる（想う）」ことで悩みを少なくすることができますのです。みなさんご存じのように、阿弥陀仏は無限の光を代表し、阿弥陀仏自身は無量光で、人ではありません。もしまだ阿弥陀仏の姿が見えたとしても、それはまだ音色のレベルにすぎず、まだ究極の境界（きょうがい）ではありません。

無量光とは何を意味するのでしょうか。それは私たちにもともと備わっている内在のすべてがわかる品性を表しています。私たちはたくさんの品性を持っています。例えば貪り、怒り、愚かさ、悩み、悟り、無明、慈悲、悪い心などです。私たちが阿弥陀仏を「念じる」ことは、私たちの潜在意識の光明な品性と、光明なパワーを呼び覚ますことであり、観音菩薩を「念じる」ことは、私たちの潜在意識の中にある慈悲の品性を呼び覚ますことです。大勢至菩薩を「念じる」ことは、私たちの潜在意識の中にあるこのパワーを呼び覚ますことです。私たちが阿弥陀仏を「念じる」ことは、自分のこれらの尊い品性を発展させたいという願いからです。三宝仏を「念じる」というのはこういう意味です。

三宝仏とは阿弥陀仏、観世音菩薩、大勢至菩薩です。私たちは阿弥陀仏のように悟り、光を持ち、大勢至菩薩のように智慧とパワーを持ち、観音菩薩のように慈悲の心を持たなければなりません。ですから、三宝仏は私たちの内面の最高の品性を代表しています。私たちがこの三

宝仏を念じることは、自分の内面の最高の品性を求めていることです。しかし、みなさんがこれらを念じてもあまり大して役に立ちません。なぜなら、阿弥陀仏とは誰なのかを知らないの、それを「念じる（想う）」ことは不可能でなし、通じないからです。

例えば、私たちは西施（せいし：古代の中国の美人）はとても美しいと聞いています。けれども、彼女に会ったこともなく、ただ聞いた話なので彼女を念じる（想う）ことはできませんが、妻なら想うことができます。なぜなら、西施にあつたこともないし、彼女の顔も知らないからです。西施は当然あなたの妻よりきれいですが、彼女はもうこの世を去りました。あなたは彼女を知らないし、彼女の髪さえ想像できないのに、どうやって彼女を恋しく想うことができるでしょうか。そうではないですか。

同様に、みなさんが阿弥陀仏、観音菩薩を唱えても何の役にも立ちません。なぜなら本当の阿弥陀仏と繋がっていないので、無量光が見えないからです。この無量光と通じてなく、創造のパワー、私が前に言った「名不可名（言葉で言い表せない名）」と繋がっていないからです。観音菩薩を唱えても、観音菩薩の慈悲心と通じ合っていないければ、唱えてもあまり役に立ちません。少し集中するので悩みが少し減るだけです。問題はみなさんがただ口で「唱えて」いるだけで本当に「念じて（想って）」いないので、なおさら役に立たないのです。

なぜなら、みなさんがいつも妻を想うとき、思い出すのは、昨日彼女とけんかしたことなどです。「とても恐ろしい人だ。私は彼女と離婚したい」などと。（笑い）彼女のことを想うと自

然に悩みが生じます。もし、集中して阿弥陀仏を唱えれば、一心に阿弥陀仏だけを唱えれば、だめな妻や嫌な夫のことを忘れるので、悩みも自然に少なくなりえます。集中して唱えればこのような助けがあるだけで、他には何もありません。究極の解脱はできませんし、西方浄土に生まれることもできません。たとえアメリカへ行きたくても、飛行機のチケットを買わなければならないのに、どうやって口で唱えるだけで西方浄土へ行くことができるのでしょうか。あり得ないことです。西方浄土へ行くのはそんなに簡単なことではありません。

なぜなら、唱えることで悩みが減少するので、自然に少し聡明になり、心が穏やかになります。これは唱えることによる福報です。何も無いというわけではありません。けれども、なぜ福報があるのかについて、私たちは智慧で観察しなければなりません。盲目的に信じてはいけません。例えば、人が阿弥陀仏を唱えているのを見て、自分も真似して阿弥陀仏を唱えているときに、人に声をかけられると、腹を立てて「何ですか。あなたは」と言うかもしれません。(笑い) またこの時、子どもが騒いだりすると、また腹を立てて数珠を振り上げて子どもたちを追い払うかもしれません。おおよそ彼らの「念仏」はこんな様子です。

阿弥陀仏は無量光で、私たちの光明な品性を代表し、観音菩薩は私たちの慈悲の心を代表し、大勢至菩薩は私たちのパワーを代表しています。この三つ以外に、私たちはまだ多くの品性を持っています。私たちはこういった品性を発展させることができないので、ある人は八十八の仏陀を唱え、ある人は一万の仏陀を唱え、ある人は三万の仏陀を唱えたりして、より自分の

内面の多くの品性を呼び覚ますことを願ってたくさんの仏陀を唱えるのです。十方三世仏（じつぼうさんぜんぶつ：現在、未来の全ての仏陀）はたくさんあります。なぜそんな多いのでしょうか。それは一人の修行者が仏陀になると、この自由の世界に入り、自由自在の人になります。宇宙は創生してから、多くの修行者が仏陀になりました。ですから、仏陀はますます多くなり、私も仏陀になると、みなさんはナムチンハイブツダと唱えるかもしれません。（笑い） そうしてみなさんが唱える仏陀が更に一人増えます。

けれども、多くの仏陀を唱えても、なぜまだそんなに多くの悩みがあるのでしょうか。なぜ智慧が開かないのでしょうか。なぜ仏陀になれないのでしょうか。みなさんは知っていますか。あなたが牛乳を唱えれば、牛乳を飲むことができますか。牛乳を飲みたければ、牛乳の売店に行かなければなりません。指で指すだけで、何も言わなくてもお金だけあれば、彼らはすぐに牛乳を手にとってあなたにくれるでしょう。あなたが家で一万回牛乳、牛乳と唱えても、役に立ちません。（笑い） 牛乳はあなたの所にはやって来ないからです。お金が必要なとき、家でお金、お金、お金と唱えても、お金は出てきません。あなたは銀行へ行つて、小切手を見せれば、特に何も言わなくても、彼らはあなたの意図がわかるのです。なぜなら、彼らはあなたが銀行に貯金していることを知っているのです、すぐにお金を渡してくれるからです。

ですから、修行レベルの高い人は、「念仏して何をするのですか」と言います。なぜなら、彼らはすでに仏陀だからです。仏陀の友達なので、何も言わなくてもただ目を見ればわかるので

す。例えば、まだ知り合っていないときには、電話をかけたなり、手紙を出したり、家を訪ねたりしますが、二、三回会ったら、次に会ったときは見ればわかります。何にも話す必要はありません。同様に、本当の「念仏」とは仏陀を知ることです。これでこそ想念できるのです。今、私たちはたくさん仏陀を唱えましたが、仏陀を知らないと役に立ちません。銀行へお金を引き出しに行かないで、ただ家でお金を唱えると同じです。多くの仏陀を唱えていても、実際は出したことではなく、ただ、ごく一部分の仏陀を唱えているにすぎず、大仏陀を唱えているではありません。私が言っている意味は、この仏陀がああ仏陀より大きいということではなく、彼らの役割が違うということです。わかりますか。

ですから、釈迦牟尼仏は阿弥陀仏を賛美し、みんなに阿弥陀仏の名を唱えさせました。しかし、阿弥陀仏の名は言葉で表せるものではない、ということのみなさんはわかっている。よくわからないで、「唱えて」います。みなさんは、阿弥陀仏は口で唱えるものだど勘違いしています。これは私がここでビスケットを宣伝していて、実際、私が指しているのは別物で、今話しているビスケットのことではない、というようなものです。阿弥陀仏は私たちの内面の光明な部分を代表しています。観音菩薩は私たちの慈悲の心などを代表しています。しかし、私たちはまだその他の品性を代表する多くの仏陀を唱えていないので、まだ不足しています。

例えば、昔の軍人はよく矛と盾を使って、自分を保護していました。矛や盾の他に、彼らは鎧を着ました。全身が鎧に包まれ、目だけを出していました。ですから、相手を殺したいなら、

まず鎧で保護されていない所を探し、そこを刺します。さもなければ、どうにかして帽子を脱がせて頭を出させます。そうすれば殺すことができるのです。同様に、私たちは口で阿弥陀仏、観音菩薩だけを口で唱えても、まだまだ足りません。この鎧が完璧でないのと同じで、一部しか保護できません。多くの部分がまだ露出しているのです。

なぜなら、阿弥陀仏はただ西方浄土の教主で、東方には薬師仏がいて、南方、北方、上方、下方などに多くの仏陀がいます。東西南北だけではなく、さらに十の方向に過去、現在、未来の仏陀がいるので、私たちはいつ唱え終わるのでしょうか。それぞれの世界には最高の教主がいて、その最高の教主を全部知らない、いくら唱えても一部分にしかすぎません。仏陀を唱えれば利益があり、福報も得られますが、しかし、仏陀にはそれぞれ違った役割があります。

例えば、私たちが王宮に行きたければ、王宮のある場所を知らないで行けません。もし王様の所に直接に行かないで、他の部門の役人の所に行くこと迷ってしまうのです。というのも、それは私たちの本当の最高の目的とは違っているからです。阿弥陀仏を唱えても役に立ちますが、彼は西方浄土の教主にすぎず、その世界全体の教主ではありません。それぞれの世界は東西南北、たくさんの場所があり、あらゆる場所に過去、現在、未来に仏陀がいます。けれども、この世界にも一人の最高の教主がいます。もし私たちがこの教主を知っていて唱えるなら、よりパワーがあります。けれども、たとえこの教主を知っていても、紹介してくれる人がいなければ役に立ちません。

ですから、真のマスターを見つけることは非常に重要なことです。真のマスターは最高の教主の友達であり、あなたを連れて行って、「こちらは私の弟子です。こちらは私の友達です」と紹介することができます。これでこそ役に立つのです。例えば、私たちはアメリカ大統領のレーガンを知っていますが、彼の名前を知っていても、彼はアメリカの最高の代表であることを知っていても、私にとつては役に立ちません。なぜなら、私をホワイトハウスに連れて行って、「こちらがスプリムマスター チンハイです。とてもいい方です。どうか彼女の弘法を手伝ってください」と彼に紹介して、そして、紹介した友だちが私に「この方は私たちの大統領です。私の最も良い友達で、何か困ったことがあったら、この方に頼めば、問題を解決できるでしょう」と言う人がいないからです。

ですから、阿弥陀仏の名前を知っていても役に立たないのです。阿弥陀仏を知っていてこそ役に立ちます。この名前そのものが阿弥陀仏を代表するものではなく、本当の意味での阿弥陀仏とは関係ありません。名前は誰でも呼べますし、その名前を付けることもできます。アメリカではレーガンと同じ名前の人もいますが、その人は大統領ではないので、私たちには役に立ちません。ですから、どんな仏陀を唱えるにしても、すでにその仏陀を知っている友達からの紹介が必要です。知り合ったあと、その仏陀はあなたを保護することができます。さもなければ、何の役にも立ちません。意味がわかりますか。

私もレーガンの名前を知っていますが、私のビザの期限が切れたら、アメリカを離れなければ

ばなりません。彼の名前は私を助けることはできません。たとえ、私がかみでずっと大統領の名前を唱えても、彼は私を助けてくれません。私は彼を知らないし、彼も私を知りませんし、私が誰なのか知りません。私にも彼に助けを求める権利がありません。けれどももし、ある人があらかじめ手紙を書いて、私のことを大統領に紹介してくれたとします。手紙に「私の友達があなたに会いに行くかもしれません。彼女の名前は何々です。彼女を助けてあげてください」と書いて、紹介者は私に「あなたのことはすでに大統領に紹介しました。彼はきつとあなたを助けてくれます。彼の所に着いたら、彼は必ずドアを開けてくれるでしょう」と言うのです。私の言っている意味がわかりますか。

みなさんが仏陀を唱えていても、仏陀をまだ見たことがないかもしれません。念仏を教えてください。真のマスターがいるのと、いないのとでは違います。ただし、そのマスター本人が必ず、その仏陀のことを知っていなければなりません。それでこそ、みなさんにその仏陀を念じることを教えられます。釈迦牟尼仏は阿弥陀仏を「念じる」ことを教えていました。彼はすでに阿弥陀仏を知っていたので、弟子を連れて行き、阿弥陀仏に、「弟子たちは良い人で、菜食をし、修行し、メデイテーションをして、道徳があります」などと保証しました。こうすると、阿弥陀仏も彼らを助けなければならないのです。ですから、釈迦牟尼仏の当時の弟子たちの念仏は役に立ちました。現在、普通の人たちが口で唱えている念仏はあまり役に立ちません。とても集中して唱えれば悩みは多少減るかもしれませんが。このような唱え方は多少役に立つかも

しません。

私は先ほど言いましたが、阿弥陀仏は西方浄土の教主で、全体の教主ではありません。ですから、もし西方浄土を念じても、心が南方に縛られていけば、やはり西方浄土へ行くことができません。ですから、最高の仏陀を念じることが一番安全です。なぜなら、私たちがどこにいても仏陀に会えるからです。仏土は仏土です。どこにしようと仏陀に会えればいいのです。決して西方浄土だけが仏土であるということではありません。わかりますか。私たちが集中できなければ、西方浄土にも行けないし、真の阿弥陀仏もわからないのです。

ですから、最高の仏陀の名前を念じることが一番いいことです。けれども、この最高の名前は經典には載っていません。なぜなら「名可名、非常名（名は名でも、言葉で表せる名ではない）」だからです。言葉で言い表したくてもできません。知りたいなら、先生に紹介してもらわなければなりません。このような先生は仏陀の友達か、または仏陀のスタッフか、仏陀の使用人かもしれません。それでも構いません。仏陀の使用人でも仏陀を知っているので、私たちが仏陀に会わせることができます。例えば、私たちが国王のコックさんと知り合いだとしたら、それも一つのコネであり、それにより国王に会えるかもしれないかもしれません。他の役人をたくさん知っていてあまり役には立たず、国王に会えないかもしれないです。というのは、彼ら自身も国王に会えないからです。ですから、仏陀の使用人を知っているのが一番いいのです。それが仏陀に会う近道です。

ですから、みなさんは私がどのレベルかを推測する必要はありません。仏陀の使用人と認めるだけで十分です。仏陀の食事を作る人であり、仏陀の知り合いだから、私の紹介があれば一番役に立ちます。もし、国王のコックさんと知り合いだと、私たちに何か問題があったとき、きつと彼は国王にお願ひしてくれませんが、政府の高官の場合は一言も言えないかもしれません。なぜなら、国王に会うと恐れ多くて震えてしまい、何も話せなくなるからです。

盛大な祝典の儀式のとき以外は、彼らは国王に会う機会がないかもしれませんが、国王が危険にさらされないように、国王の安全を確保しなければなりません。彼らは国王を護衛する仕事以外に、国王と話をするようなことは何もないので、彼はあなたを国王に会わせると約束することができません。ですから、私たちが仏陀を知りたいなら、すでに仏陀を知っている人を探さなければなりません。例えば、仏陀の使用人は事務員のようなもので、社長とも知り合いで、あなたが社長に会いたいと言えば、彼はきつと会わせてくれるでしょう。私たちが社長を知らないなら、まず、そのような人を探さなければなりません。彼は社長をよく知っています。社長に近いので、すぐに社長に会わせることができます。

観音法門は「根気よく」修行しなければなりません。そうすると少し体験もあり、観音法門に対する認識も深まり、最高教主の名前の意味するものを理解することができます。この「不可名(言葉で言い表せない名)」が何であるかがわかるのです。なぜなら、写真で見た国王も、聞いた国王の名前も、本当の国王ではないからです。国王は写真でも名前でもありません。本

当の国王を知るとは別のことです。同様に、凡人の言語で言う名前も仏陀ではありません。仏陀を知るといふことは、この真の名前、「名不可名（言葉で言い表せない名）」を知らなければなりません。両者は異なり、簡単ではありません。

私たちは頭脳で多くのものを「念じる（想う）」ことが習慣になっています。夫を「念じ（想い）」、妻を「念じ（想い）」、世間を「念じ（想い）」、悩みを「念じる（想う）」のです。世間のことを念じるより阿弥陀仏を念じる方が役立ちます。けれども、阿弥陀仏は私たちの光明な品性を目覚めさせるだけの役割です。もし念仏したければ、もっと良い仏陀の名前があります。これを唱えると、私たちのすべての最高の品性を思い起こさせ、それを発展させることができます。阿弥陀仏を唱えることは私たちの光明な品性を発展させる役目で、観音菩薩は慈悲の心を発展させる役目をします。けれども、ある仏陀の名前は私たちのすべての良い品性を発展させるのです。この種の仏陀の名前を唱えることが最も良いですが、この最高の仏陀の名前は言葉では表現できません。しかし、私たちは唱えるのが好きで、何でも唱えたくて、いろんなものを唱えるので、私もみなさんに唱えるものを与えますが、私が与えるものは最高で、最もパワーのある名前です。それを唱えれば、私たち自身のすべての高貴な、不可思議な品性を発展させることができます。

観音法門も「念仏」を教えています。阿弥陀仏を念じるのではなく、他のより高く、よりパワーのある仏陀を念じます。念じるとき、マスターのパワー（仏陀のパワーはマスターの内

にある)がこの名前を加護するので、良い感応が得られるのです。たとえ阿弥陀仏を念じたとしても、もしマスターの加護のパワーがあれば、同じように感応があります。阿弥陀仏を念じるのをやめたくなければ、印心後、阿弥陀仏も一緒に念じても(笑い)感応があるでしょう。印心前、口で阿弥陀仏を唱えてもあまり役に立たないのは、事情が違うからです。後ろ盾となるマスターのパワーがないため、まるで電線に電気が流れていないのと同じで、電線は実質的には何の役にも立たないのです。

口でお金、お金と言っても、ポケットの中にお金がなければ、人にいくら言っても信じてもらえません。口で何を言ってもみんなは信じません。自分自身で持っていてこそ他の人が信じるのです。お金があれば十分だと言っているではありません。私たちの振舞いが豪華なお金持ちのようであれば、他人は信じないでしょう。お金持ちとそうでない人の話ぶりはまったく違うので、私たちは感じられるし、見てもわかります。そうではないですか。

例えば、あなたを殺したいと思っている人がいたとします。けれども、あなたは非常に落ちていて断固として「あなたなんか怖くない。私には銃があるし、あなたに負けない力がある」と言ったとします。このような迫力のある言い方をすれば、相手もきつとその言葉を信用して、あなたを殺す勇気がなくなりません。けれども、もし、あなたが震えながら「わ、わ、わ、わたしは、こ、こ、こわくないです。私の家に銃があります。あ、あ、あなたは、わ、わ、わたしを…ころしては…いけません」と言ったとしたら、相手はそれを聞くと、すぐにあなたに

度胸がないことがわかります。ですから念仏は、マスターの保護のパワーがなければ、魔も怖くないのです。マスターの保護のパワーが後ろ盾になっていれば、念じなくても、ただマスターのことを想えば、魔はもう恐れて、あえてあなたに近づくことができません。

私の観音法門も念仏を含んでいます。本当に最高の、最もパワーのある仏陀を念じてこそ、本当にみなさんを助けることができます。仏陀の名前を念じ終わらないうちに、魔は逃げてしまいます。仏陀や菩薩を装っている魔は一秒たりといられません。悪い人もあえて近づけません。ですから、彼らは私たちを嫌がり、あの手この手で私たちを攻撃してきます。なぜなら、私たちが念じている仏陀の名前のパワーに耐えられないからです。これこそ真の「念仏」です。

この仏陀の名前を念じると無量光、阿弥陀仏の光と通じ合うのです。毎日、光とともにいて、光の中で生活し、この光を念じ、この光とともに寝て、この光と食事をし、座つても寝ても、光と離れず、私たちがいるところにはどこにでも光があります。これこそが「無量光」なのです。この無量光は計り知れなく、どこにでも遍在します。ですから無量光と言うのです。この無量光と通じると、毎日光が見え、光と一緒にいられるのです。この光が私たちを保護し、私たちの良い品性を発展させ、私たちの智慧を開き、私たちを西方浄土、仏陀の国土、高いレベルの境界（きょうがい）へと導いてくれるのです。

念仏や、光を見る他に、内在の妙なる振動を「観」ます。この宇宙の音流は外の音ではありません。「光を見ること」、「音を観ること」、または「念仏」は、どれもマスターの伝法を通し

てこそ得られるのです。法を伝授するとき、まったく話をしません。ですから「伝心印（以心伝心での伝授）」と言い、「心」で伝えるのです。心とは何でしょう。それは私たちの本心（本性）です。真の心で、意念の心ではありません。ですから、「伝心印（以心伝心での伝授）」のときは言葉はいりません。

私たちはよく禅は言葉を用いないと言いますが、それはつまりこの意味です。言葉を使う必要があるとしたら、それは伝法ではありません。なぜなら、本来伝授できる「法」は存在しないからです。けれども、伝授しないと「法」を得られません。伝授してこそ「法」があるので、「法」と言っても、実際に「法」というものがあるわけではありません。ですから「無相法」と言います。六祖慧能は自分が伝授したのは「無相法」であると言いました。般若心経の中でも同じことを言っています。釈迦牟尼仏はこの法を「諸法空相」と言いました。これは六祖慧能が言った「無相法」とまったく同じものです。また仏陀はこの法を「不生不滅、不垢不淨、不増不減、是故空中無色、無受想行識、無眼耳鼻舌身意、無色声香味触法、無眼界乃至無意識界……（生じること滅することもない。汚いことも清浄なこともなく、増えることも減ることもない。故に色もなく、精神、感覚、意識もなく、眼、耳、鼻、舌、体、心もない、また形、音、香り、味、触感、法、視界、無意識界もない……）」と述べています。

何にもないので「無相法」と言いますが、しかし、と言って何にもないわけではありません。ですから「名可名、非常名（その名は凡人の言葉で表すような名ではない）」と言います。言葉

で表現できませんが、しかし、すべて含まれていて、すべてのものが「無相法」の中に、「音流」の中に、この「音でない音」「名不可名（言葉で言い表せない名）」の中にあります。ですから「無相法」と言うのです。けれども、伝授しないと法はありません。伝授のときこそ「法」が得られるのです。必ず得られるのです。この点については私が法を伝授するとき、みなさんは誰でも体験できるでしょう。伝授する前と後はまったく違います。伝法のとき、話をしないにもかかわらず、伝授できる「法」はないと言っても、私たちは「法」を得られるのです。これはみなさん自身でわかります。まるで一が二になったようにはつきりわかります。

禅は言語を用いないから、禅がないということではありません。法が無相だから、私がみなさんに法を伝授できないのではありません。もちろん法を伝授できます。けれども、言葉では表現できません。ですから「伝心印（以心伝心での伝授）」と言えば十分です。以心伝心です。その時は心が「開く」ので、何も話す必要がありません。

たとえ、私がここで百年、一万年、一億年の時間をかけて、観音法門の功德を賛美しても、言い尽くすことはできません。本当に真面目に修行する人だけがわかり、すぐにわかります。一日メデイテーションしなかったり、一日観音法門を修行しないだけで、全身が落ち着かなく、ごちこちなくなります。ですから、このパワーがどんなに不可思議かがすぐに感じられるのです。

すべての経典で、釈迦牟尼仏は観音を賛美しています。普門品（ふもんぼん…観音経のこと）の中で釈迦牟尼仏は「私たちに観音の名前がわかれば、この功德は他の菩薩の名前を何億回唱

えることよりも勝り、他の菩薩を何億回供養するより勝る」と、述べています。なぜならその名前は観音ではなく、「名不可名（言葉で言い表せない名）」で、この宇宙の音流であり、全宇宙に永遠に存在する振動力だからです。

ですから、観音法門を修行する人は最も功德のある、最も高貴な人です。印心した人なら、この点をみなはつきりわかっています。



カルマはどこから来るのか

スプリームマスター チンハイ フォルモサ・台北

一九八六年三月六日

今日は「観音法門」について、みなさんに話したいと思います。このテーマは最後の日に話そうと思っていました。みなさんが早く知りたいということなので、繰り上げて今日お話しします。みなさんが観音法門を知りたければ、まず「音」とは何か、「観音」とは何かを理解しなければなりません。「観」は「観想」のことで、「音」は音のことです。普段、私たちは人を観想するときは、凡人の頭脳でその人を観想します。例えば目が大きいか小さいか、背が高いか低い、太っているかやせているか、また相手の個性などを観想します。このような「観想」は往々にして実際の形状とは大きな差があります。したがって、私たちが凡人の頭脳で仏性を観察した場合、このような間違いをすることは言うまでもありません。

ですから、私たちは「智慧」で観察しなければなりません。この智慧はすべての人に備わっているものですが、みんなが智慧の使い方を知っているわけではありません。人類は多くの物を発明し、創造してきました。また世俗のことをたくさん学んでいますが、これらは聡明だと

いうことであって、智慧ではありません。しかし智慧がなければ何も学べないし、何も認識できません。聡明さは智慧からきていて、智慧のごく小さな一部分にすぎないからです。

まず、この世界の普通の音について話しましょう。それから超世界の音―仏陀の音について話します。昔から今日まで、音は私たちの生活で重要な部分を占めています。この世界に音楽がなかったら、生活がどんなに苦しいか想像もできません。古典音楽は比較的穏やかで、心を幸せに、安らかに、そして和らげてくれます。ですから、古代には多くの気高い君子たちがいました。現代のジャズやロックン・ロールはかなり激しい音楽で、小さいときからこのような音楽に影響されると、教え導くのが非常に難しくなってしまう。というのも、このような音楽は現代人の性質と態度を表しているからです。精神病院では、医者はいつも患者に穏やかな音楽を聞かせて、患者の情緒を安定させます。私たちも仕事で疲れたときや、心が晴れないときに、音楽を聴くとだんだん気分が落ち着いてきます。

宇宙ではすべてのものが振動していて、この振動が音になります。放送局から発信した電波がラジオで受信されて音になるのと同じです。宇宙万物はすべてが振動していて、それぞれ異なる振動周波数を持ち、石、草木、人など各自が特別の振動周波数を持っているのです。それぞれの振動周波数が違うので、動物と人、人と人、夫と妻の間では容易に通じ合えないのです。

ある人たちの振動周波数は穏やかではないので、その人たちと接すると私たちはとても不安に感じます。反対に、ある人たちの振動や話するときの雰囲気は穏やかで、その人たちを一目見

ると、私たちはとても心地よく、良い感じになります。ある場所の振動周波数が自分と近い周波数であれば、そこに入ると大変心地よく感じます。雰囲気の良い人が入って来ると、すぐに人を緊張させ、不安や焦燥を感じさせます。それはその人の振動周波数が低く重かったり、またはカルマが重く、邪悪な心を持っていて、魔の障害が多く、陰気な人であったりするためです。私たちは陽の気が強く、このような人とは波長が合わないのです、不安や焦燥感が生じるのです。

この地球上は、どこでも同じ振動周波数ではありません。それは地球上にはさまざまな種類の金属鉱石があり、それらの分布によって異なるからです。修行していない人でも住んでいる場所が落ち着かないと感じることが多いのです。しかし真の修行者にとっては、すべての場所が浄土であり、聖地なのです。こういうことは口で言うのは簡単ですが、実際には簡単なことではありません。実際このような境界（きょうがい）に達した人は何人いるでしょうか。振動周波数が低く、陰気な雰囲気は、ごく少数の無名人や丸太のように鈍感な人を除いて、修行していない一般の人でも感じられます。修行をすればするほど敏感になりはしますが、修行して最高の境界に達したときには、どこも同じでその違いを感じなくなります。

私たちはどんな人と一緒にいても、その人の振動に影響されます。その人の雰囲気は和やかであれば、こちらも和やかになります。その人が興奮していれば、こちらも興奮します。私たちはよく、菩薩は人に代わってカルマを背負うということを聞きますが、それは他の人の体に

生じた悪い振動、つまりカルマを菩薩が自分の体で受け取り、自分の良い振動と交換することができるからです。そして修行のパワーで、そういったカルマをすぐに洗うことができるからです。それにどのぐらい時間がかかるかは、菩薩が収集したカルマの量によって決まります。こういったカルマをきれいに洗い流すまでの間は、その影響で病気になるったり、誹謗されたり、殺されたりすることもあるのです。

例えば、イエス・キリストは衆生のカルマを担うために、十字架にはりつけにされました。釈迦牟尼仏については、人のカルマを背負ったという話は聞いたことがありませんが、経典には「ある人が九十九人殺して、釈迦牟尼仏まで殺そうとしたが、結局は殺すことができず、かえって仏陀に救われ、最後には修行して阿羅漢になった」と書かれています。もし、釈迦牟尼仏がその人のカルマを背負わなかったら、その人のカルマはどこに行ってしまったのでしょうか。そんなに多くの人を殺したのに、阿羅漢になれるとしたら、因果律に反しているのではないのでしょうか。いいえ、それは釈迦牟尼仏に非常に大きな功德があり、計り知れない福報があったので、その人のカルマを清算することができたのです。問題ありません。決してその人が因果応報の報いを受けなかったのではなく、釈迦牟尼仏が代わりに背負ったのです。

ですから、昔から今日まで解脱したい人は、まずそのような真のマスターを見つけなければなりません。修行し始めたばかりのときは、自分のパワーで多くのカルマを清算するのは難しいからです。けれども、その真のマスターは古代から計り知れない時間を修行して、大きな福

報があり、私たちを導きながら、荷物（カルマ）まで背負ってくれるのです。というのは、そういう真のマスターは十分なパワーを持っているからです。人には人のパワーがあり、修行者には修行のパワーがあります。そのパワーは見えませんが、計り知れないほど大きく、肉体のパワーとは比べられません。みなさんも聞いたと思いますが、マスターから印心を受けると、先祖五代が超生（二つ上の境界に引き上げられる）できます。それは修行のパワーで彼らを上を引き上げるのです。ですから、修行のパワーは最も貴重で、お金がどんなにたくさんあっても買えないし、権威がどんなに大きくても、それを持ち去ることはできません。

私が講演をするとき、場所によっては非常に流暢にできることもあれば、何かに圧迫されているかのように、話すのが困難で疲れを感じることもあります。印心（伝法のとき）も同じで、順調で何も問題がないときもあれば、苦しくて死にそうになるときもあります。これは講演を聞きに来た人や、印心を受けに来た人のバイブレーションがそれぞれ違うからです。それぞれのバイブレーションの違いがいわゆるカルマです。こういった異なるバイブレーションはどのように作られたのでしょうか。これは因果の法律によるもので、私たちが世々代々作ったカルマと関係しているのです。

本来私たちはみな仏陀です。イエス・キリストも「私たちはみな神の子である」と言いました。それなのに、なぜ裕福な人もいれば貧しい人もいて、また聡明な人もいて愚かな人もいるのでしょうか。善良な人もいれば悪人もいます。それは私たちがもともと仏陀として、この娑

婆世界に来たとき、一直線に下に落ちて行つて、大部分の智慧を忘れてしまったからです。それから、外部の環境の影響を受けたため、こうなってしまったのです。

この世界は高い境界（きょうがい）の世界とは異なります。高い境界の世界は私たちの修行の進歩を助け、私たちをますます楽にさせ、高貴にします。しかし、この世界の環境とえば、逆に私たちを後退させ、さらに愚かに、さらに悪くしてしまうのです。というのは、極楽世界では欲しい物はすぐに手に入り、苦しみは少しもありません。けれども、この世界では生存するために大自然と闘わなければ生存できません。たとえ釈迦牟尼仏でも、ご飯を食べなければならぬし、この世界の物を使わなければ生存できません。ここは有形、有色で区別がある世界です。寒い、暑い、美しい、醜い、男性、女性の区別があります。極楽世界とは違います。

極楽世界は無形、無色で区別のない世界です。ですから、私たちがこの世界に降りて来たとき、極楽世界とはまったく異なるため、外部に求める衆生になつてしまい、食べ物を見たら食べたくなり、物を見たら好き嫌いの気持ちが生じるのです。私たちの心はいつも好きな物に引きつけられるので、自分の大智慧を忘れてしまい、だんだんと宇宙の大きなパワーから離れて、孤独な人になってしまったのです。

本来あらゆる物すべてが私たちのものです。けれども、私たちの心は一つか二つの好きな物に気を取られ、いつの間にか自分を小さい範囲に閉じ込めてしまい、もともと区別をしなかったのに、区別する人間になつてしまったのです（極楽世界では、みな黄金の体で男女の区別も

ないのです)。私たちは全身全霊で一人か二人の人間や物を愛するので、自分をますます孤独にし、宇宙の大きなパワーとの繋がりが切れて、パワーが小さくなり、すぐに使い切ってしまうのです。これは、ガンジス川に住んでいる人が、四方八方に使い切れない水がありながら、岸の風景に気を取られ、川から離れて行くのと同じです。その風景にすっかり心を奪われたため、どうやって元の場所に戻るのか、わからなくなってしまうのです。水が欲しくなっても、付近にある水を飲むしかなく、当然これでは足りません。

そういうことで、私たちはますます軟弱になり、智慧が足りなくなります。智慧が足りなくなると食欲になり、安心感がないのでより多くの物を手に入れようとします。「貪り、怒り、愚かさ」の考えはこのようにして生じたのです。こういった考えが特殊な磁場を形成し、私たちの周りを取り囲みます。一人ひとりの状況が違うので磁場もそれぞれ違います。同類は互いに引きつけ合い、異なるものは互いに排斥します。食欲な人や激しい人は、当然、激しい状況を自分の磁場に引き付け、穏やかな人は穏やかなものを引き寄せます。このようにして、いわゆるカルマが形成されるのです。

何をしていても間違いをしてしまう人をよく見かけますが、それはその人の磁場がいつも良くないパワー、障害をもたらずパワー、愚かな考え、魔のパワーを引きつけてしまい、大智慧を身の周りに引きつけることができないからです。動物的な性質が非常に強い人がいますが、これもその人が持っている磁場が原因であり、世々代々の習慣がまだ改まっていないからです。私

たちの磁場が徐々に良い方向に変わりつつあるときが、上に上り始めたときです。改まるまでにどのくらいかかるかは、私たちの心の純粋さによります。経典や道徳経には「赤ん坊のような純真な心になってこそ、天国に帰ることができる」と書いてあります。

私たちの習慣や磁場を変えることは簡単ではありません。決して呼吸法やヨーガをすることに変えられません。なぜなら、習慣は頭脳にコントロールされるので、習慣を変えるためには頭脳を変えなければなりません。丹田に集中したり、骨や水を見つめたり、呼吸に集中したりすることだけでは不十分です。観音法門だけが究極の方法なのです。

なぜなら、この音は「仏陀の音」であり、本性の音です。宇宙万物が誕生する前に「この音」はすでに存在していました。この音は「勝彼世間音（この世の音に勝る音）」であり、凡人の耳では聞こえません。しかし、これはすべての衆生が聞くことができる音です。ただレベルによって、聞こえてくる音が違うのです。宇宙の中ではすべての物が振動しています。それで音があるのです。たとえ石でも音があります。けれども、あまりに微細で耳では聞こえませんが、智慧を使って聞くことができます。ですから「観音」と言い、聴音とは言いません。すべての衆生に音があり、智慧があるのに、なぜこの音を観ることができないのでしょうか。それはカギがないからです。音がどこにあるのかがわからないからです。ですから、まずドアを開けてくれるマスターを見つけないけません。

なぜ、この音がそんなに重要なのでしょうか。それは、宇宙万物がこの音によって一つに繋

がっているからです。高い境界（きょうがい）から低い境界まで、すべてこの音で一つに繋がっています。先ほども言いましたが、ある人たちのバイブレーションは他の人と調和できないので、うまくつき合うことができません。同様に、私たちのバイブレーションが動物や、またはある場所と調和しない場合、私たちはその動物と一緒にいることもできなければ、その場所にもいられません。そういう場所に住める人がいたとしても、決してその人が私たちより素晴らしいということではありません。その人のバイブレーションが低いか、または動物と同じバイブレーションなので何も感じないからです。

例えば、豚やカエルは汚い場所に住んでいても幸せです。これはまさに、とても汚い場所でも平気で楽しそうに住んでいる人と同じです。なぜなら、その人の雰囲気はその場所に合うからです。私たちのバイブレーションはもつと高くて穏やかなので、そのような低いバイブレーションには合わないため、住めないのです。住めないのは、決して彼らが私たちよりレベルが高いということではありません。ですから、善良な人は凶悪な人とつき合うのが難しいのです。もし、宿命を変えたいと思う人がいたら、この最高の音に頼らなければなりません。今、私たちはほんの小さな一部、しかもバイブレーションがそれほど高くない音しかありません。バイブレーションが高くないので、レベルが高くない場所に住んでいます。動物と共存する世界です。いわゆる類は友を呼ぶということです。

しかし、すべての衆生が持っている、ある種の音が存在します。これが「仏陀の音」、「本性

の音」です。私たちがこの音を修行すれば、バイブレーションを高め、レベルを上昇させることができず。それにより、外見は以前と同じですが、体は光を放ち、経の講義をみるとみな喜んで聴き、人を救うことも簡単になります。それは私たちのバイブレーションが変わり、より穏やかになると、人を安心させ、解脱させることができるからです。というのは、私たちのバイブレーションで人々のバイブレーションを包み込み、人々に良いバイブレーションを与え、良くないバイブレーションを消化してしまうからです。それはちょうど、医者が患者の良くない血液を、良い血液と入れ替えるようなものです。バケツの水が汚いと、私たちはまずその水を捨てて、そしてきれいな水を入れます。けれども、もし私たちのバイブレーションがまだ良くなっていなければ、他の人の悪いバイブレーションを変えることはできません。そうでなければ大変なことになります。ですから、衆生を救うにはまず修行しなければなりません。

先ほども言いましたが、娑婆世界で生活するには、この世界の道具を使わなければなりません。この道具（マスターは自分を指す）は中国語をうまく話せません。その道具（英語の通訳者を指す）は英語がうまくありません。あの道具（フォルモサ通訳者を指す）は完璧に記憶することができません。完璧なものは何一つないので、たいへん面倒なのです。もしみなさんが西方浄土に行ったら、このような問題はないでしょう。みなさんは西方浄土に行きたいですか。（聴衆「行きたいです」と答える）もし行きたければ、観音法門を修行しなければなりません。これが西方浄土へ行く一番良い路（みち）です。

阿弥陀仏を唱えるには、まず阿弥陀仏を知らなければなりません。そうしてこそ、本当の「念仏」ができるのです。もし口だけで阿弥陀仏を唱えるなら、それはA、B、C、のレベルにすぎません。なぜなら、念仏の「念」は想念のことだからです。口で唱えるものではありません。もし阿弥陀仏を知らなければ、どうやって「想念」するのでしょう。みなさんは、観音法門は念仏法門とは違う、と思わないでください。これは最高の念仏です。本当の念仏は毎日大声で阿弥陀仏の名前を唱えることではありません。それでは阿弥陀仏に頭痛を起させてしまいます。先ほど私は、宇宙万物には音があると言いましたが、宇宙万物はこの音から創られたのです。

これは道徳経では「名」あるいは「道（タオ）」と言っています。老子は「道可道，非常道。名可名，非常名。無，名天地之始。有，名萬物之母（道と言う道は、普通の道ではない。名は名でも、言葉で表せる名ではない。無の状態から、名によって天地が始まり、創造され、名は万物の母なり）」と言っています。「名」あるいは「道」は、この音あるいはこの振動を指しています。古文と現代の中国語は用法が少し違うかもしれませんが、実際は同じことを指しています。この点はみなさんの方がよく知っていると思います。

宇宙万物はすべて、この「名」あるいは「音」から創られ、私たちもその一部分です。私たち人間は、その最高レベルの一部分なので、それを完全に手に入れることができます。動物はこの音を完全に手に入れられるレベルではありません。もし私たちがこの音を修行すれば、それによって絶えず自分を上昇させ、さらに高い音に近づき、最終的には完全にそれを得ること

ができます。そのとき、私たちは宇宙のすべての衆生と調和することができます。なぜなら、すべての衆生がこの音の一部分だからです。完全にこの音を得たなら、私たちにとって、すべての場所が浄土になります。そして誰もが仏陀であり、すべての衆生に仏性があることがわかります。これでこそ本当にわかったと言えます。さもないければ、みなただの聴いた話に過ぎず、みないずれも耳で聴いた情報に過ぎません。それが本物かも偽物かもわからないのです。

ですから、自分の体験したごとと、経を読むことや人の体験を読むこととは違います。経を読むことは他人の体験を読むことです。私たちは観音法門を修行すると自分自身で体験できます。そして経典に書いてある体験と比較することもでき、昔の人の体験と同じかどうかを確認することもできます。時には、昔の人の体験より高いこともあります。それは昔の人よりレベルが高いということではありません。昔の人がその体験を書いたときはまだ、レベルはそれほど高くなかったのかもしれませんが。彼らの当時の体験と比べたら、やや、それを超えているかもしれません。

今みなさんは、その音がどれほど素晴らしいか、これでわかったでしょう。すべての衆生がこの音、バイブレーションを持っていて、互いに影響し合っています。この世界は極楽世界とは違い、動物がいて、悪い人、良い人、激しい人、清らかな人、幸せな人、苦しむ人がいて、さまざまな雰囲気が入り混じっています。私たちはこのような乱れた環境の中では、なかなか安心して修行できません。いろいろな妨害や良くない雰囲気感惑われます。でも修行に専念

すれば、それだけ進歩も早いのです。

したがって、多くの天人は人間に生まれ変わりましたが、肉体があつて初めて修行するところができるからです。よくこの肉体を軽んじる人もいますが、これがなければ修行ができないのです。この肉体は非常に貴重なので、よく世話して栄養のあるものを食べて、大事にしなければなりません。けれども、貪るように食べるのではなく、体を保護して、あまり冷やしすぎないように、暑くしすぎないように、酷使しないように、疲れすぎないようにしなければなりません。苦行は決して良くありません。それは自分を罰することになります。自分を罰することとは最大の罪を犯すことです。自分自身は過去の仏陀であり、現代の仏陀であり、未来の仏陀なのです。自分を尊敬しなければなりません。どうして勝手に苦行して、自分を罰するのでしょうか。しかし、もし避けられない状況に置かれた場合はしかたがありません。

例えば、みなさんも知っているように、私がヒマラヤで修行しているとき、毎日生野菜だけを食べていました。そこは標高が高くて、空気が薄く、温度が低く、気圧も低いいため、米を炊くことも野菜を煮ることも難しいので、生野菜を食べるのが比較的簡単だったからです。ガンジス川の水でちよつと洗って塩だけをつけて食べました。私はわざと苦行したではありません。フォルモサ（台湾）の山のある寺で三ヶ月間トリートしたときにも、毎日玄米ごはんにごまと塩をかけて食べ、少しの水だけを飲んで過ごしました。そのとき、世話してくれる人がいないからといって、毎日市場へ買い物に行ったら、閉じこもって修行していたことにはなり

ません。それでは買い物の修行になってしまおうでしょう。(笑い) これは状況に迫られて、簡単に食べただけで、決してわざと苦行したものではありません。苦行しても仏陀にはなれないのです。苦行すると苦しい人になります。私たちは生きるだけで苦しいのに、どうしてさらに苦行をするのでしょうか。

仏陀になるには観音法門を修行しなければなりません。智慧を使ってこの根源の音を観るのです。この音が宇宙の万物を創造したので、この音は宇宙の中で、最も高くても最も大きなパワーで、宇宙の最高の智慧です。もし私たちがその大きなパワーと智慧を頼りにしなければ、何を頼りにするのでしょうか。なぜその小さな暗いお腹(丹田を指す)を頼り、無常の呼吸で修行するのでしょうか。メディテーションをするとき体が揺れ動いたり、死んで呼吸が止まったりしたら、その時どうやって修行するのですか。

この大きなパワーに頼って修行すれば、たとえ体が少し動いたとしても、または殺されたり、傷つけられたりしても修行できます。なぜなら、私たちの主人はすでにこの音と繋がり、解脱していて、この肉体と関係がないので、当然修行を続けられるのです。主人は依然として引き続き、私たちの生活の面倒を見続け、私たちを引き続き進歩させくれます。ですから、この最大で最高の根源の音に頼る以外、何に頼っても間違いです。この最初の音は私たちが存在する前に、また宇宙万物が創造される前に、すでに存在しているもので、たとえ三界が破滅したとしても、音は依然として存在するのです。この永遠に存在するパワーに頼って修行してこそ、

永遠に存在するレベルになれます。無常の呼吸に頼って修行すると、無常のレベルまでしか到達できません。

ですから、楞嚴経（りょうおんきょう）で、釈迦牟尼仏は「どんな法門も一時的な修行法にすぎず、永遠の法門ではない。観音法門だけが永遠の究極で最も正しい修行法門である」と言いました。観音法門を修行すれば、みなさんもきつと仏陀の言葉がわかるでしょう。七日間リトリートのとき、私はある人に別の方法を教えました。体のあちこちの具合が悪いと言う修行仲間を寝かせ、十回あるいは百回深呼吸をさせました。その人に少し問題や障害があったので、快適にさせるために、この方法を教えたのです。私は決して別の法門を教えたではありません。けれども知らない人は、私が他の法門を教えたと思うでしょう。

また、おしゃべりな人が私に、どうしたら、しゃべらないでいられますかと聞きました。こういう人には、舌を上あごにくっつけておくことよいと教えたとしても、それはそのおしゃべりな人に対しては一時的な方法にすぎず、それほど役に立つものではありません。このような便宜的な方法で一応、問題を解決したあと、やはり観音法門を修行しなければなりません。ですから厳密に言えば、呼吸や舌を上あごにくっつけるのは法門ではなく、ただ一種の便宜的なやり方としか言えません。

それは食事のとき、食卓に青菜、豆腐、グルテンなどがあると、菜食を始めたばかりの人は、まだそのような味に慣れていないため、たくさん調味料を加えるようなものです。例えば、

唐辛子、コショウ、しょうゆなどを使うと、よりおいしくなる可能性があります。けれども、調味料はご飯の代わりに食べることはできません。同様に観音法門以外の法門はただの調味料で、正式な食事ではありません。

聖書にも「宇宙は初めに音 (Word) があつた。この音は神と共にあつた。この音は神であつた。万物はこの音によつてできた。できたものうち、一つとしてこれによらないものはなかつた (In the beginning was the Word (Sound), and the Word was with God, and Word was God, everything was made by this, and nothing was not made by this.) と書かれています。道德経にも同じことが述べられています。老子は「道可道，非常道。名可名，非常名。無，名天地之始。有，名萬物之母 (道と言う道は、普通の道ではない。名は名でも、言葉で表せる名ではない。無の状態から、名によつて天地が始まり創造された。名は万物の母なり)」と言いました。この「名不可名 (名は言葉で言い表せない)」があつたとき、宇宙の万物の創造が始まつたのです。

ヒンズー教の最も有名な経典「Upanishad (ウパニシヤド)」でも同じことを言っています。 (In the beginning was the Word.) 「創造が始まつたときに「」の音があつた」。この音が現れたときに、宇宙万物が出現したのです。この音が神であり、この音が創造主なのです。みな同じことを言っています。釈迦牟尼仏、老子、聖書、ヒンズー教、イスラム教はみな同じ道理を述べています。観音法門を修行してから、これらの経典を調べれば理解できるでしょう。

大きく悟りを開けば、経典はすべて同じことを言っているのがわかります。ただ宗教が違うだけです。これは後世の人が教主の教理を曲解したので、宗派がたくさんできたのです。仏教であれ、キリスト教であれ、イスラム教であれ、たくさんの宗派に分かれています。これらの枝分かれはすべて誤解によるものです。たとえて言うと、今、私は観音法門を教えています、フォルモサ（台湾）では誰もこれを教えている僧侶はいません。それで彼らは私が外道の法門を教えていると誤解しています。

彼らはたぶん、阿弥陀経にある「甚深微妙（奥深くすぐれている）」の意味がわかってないと思います。だから理解できないと思います。なぜ私は人に阿弥陀仏を唱えることを教えないのでしょうか。実は私が教えているのは、まさにこの阿弥陀仏を唱える法なのです。この点については、みなさんが観音法門を修行したら、わかります。私は他の法門を教えているわけではありません。念仏法門、観音法門、金剛法門はみな同じです。わかっていないときはこれらの法門は違うものだと思うのですが、わかつたらみな同じものだと理解できます。

釈迦牟尼仏はただ一つの法門しか教えませんでした。その他の法門は、いずれも私たちが作りだした法門なのです。ですから、仏陀がこの世を去ったあと、多くの宗派ができました。仏陀がこの世を去ったあと、彼の高弟が別のところで観音法門を伝授したかもしれませんが、その人たちは一般の人々が知っている、いわゆる仏教のことしか知らなかったのです。高弟がそこで観音法門を教えたとき、別の宗派になったのです。例えば、臨濟宗、曹洞宗、浄土宗、天

台宗などです。実は同じことを教えたのです。私はこれらすべてを修行したことがあるので、よく知っています。私が言っていることはすべて自分自身の体験によるものです。法門が違うのになぜ同じところがあるかについては澎湖（ほうこう…台湾の地名）ですでに話しました。ここでは繰り返しません、聞きたかったら、澎湖での録音テープを持ち帰って聴いてください。

Q 念仏は役に立ちますか。

（Mはマスターの答え、Qは聴衆の質問）

M 役に立ちますが、大して役には立ちません。けれども、念仏は俗世間の物質的な物を念じるよりはましです。人の頭は何も考えないことが難しく、普段いつも夫、妻、名利など、さまざまな問題を考えています。もし念仏に集中すれば、少なくともしばらくの間この世界の物事を忘れることができ、頭を少し静かにさせることができます。ですから、念仏は俗世間の物質的な物を念じるよりいいです。ただし、念仏のときは「心」で想念しなければなりません。ただ「口」で唱えると、頭の中ではやはりいろいろなことを思いめぐらすのです。このようにいくら唱えても何も役に立ちません。唱えれば唱えるほど、嫌な気分になります。

Q マスターの観音法門を学ぶ前に、念仏をしていた人はやはりそのまま念仏を続けた方がい

いですか。

M 当然です。その人にはその他に選択の余地がありませんから。

Q 経を黙読するのと唱えるのでは、どちらがいいですか。

M あなたの好きにしています。もし経の意味がわからなければ、黙読も良くないし、唱えるのも良くありません。

Q 私の言っている意味は、唱えることができても、意味がわからないということですが、読めば内容が理解しやすくなると思います。

M もし読むほうが内容を理解しやすければ、読んでもいいでしょう。唱えるときは速いので、ゆっくり経の内容を考える時間がありません。経の意味を理解してこそ役に立つのであり、黙読しても唱えても功德はありません。また、読んでも意味が理解できなければ、何の功德もありません。ただ読んで意味を理解したところで、実際の体験は得られません。

Q 経を唱えることには功德がありますか。

M それについてこんな話があります。ある日、菩提達磨がある一人の僧侶に会いました。その僧侶は涅槃経をよく唱えていました。菩提達磨は僧侶に「この経を唱えて、どうしようというのですか」と聞きました。僧侶は「この経を唱えると仏陀になれ、生死から解脱できます」と言いました。菩提達磨は「その経を渡しなさい。私が燃やしてしまいます。絵に描いた餅で

お腹がいっぱいになりますか」と言いました。これが私の答えです。満足しましたか。これは菩提達磨が言ったのです。私が言ったではありません。私は今、自分の体験を話すことを非常に恐れています。

Q マスターは経を唱えても功德がないと言っていますが、世の中にはたくさんの人たちが経を唱えています。どうすればいいですか。

M 私は経を唱えてはいけないとは言っています。引き続き経を唱えていいです。私は彼らに経を唱えるのをやめなさい、とは言いません。というのは、言っても無駄だからです。ここには五、六十人しかいませんが、世の中には五、六百万の人々が毎日経を唱えています。私が一人ひとりに声をかけるわけにはいきませんし、そういったことには関心がありません。経を唱えるかどうかは、彼ら自身の問題だからです。「天下はもともと何事もなく」、私は自分の修行をし、それだけに関心があります。ですので、誰かに聞かれたら話しますが、聞かれなければ話しません。

経を唱えることは、「君を愛してる」「私を愛して」などと歌うよりはいいことです。ですから経を唱えることは悪くありません。(笑い) 小説を読むよりはいいと思います。私は経を唱える人を褒め称えています。なぜなら、少なくとも彼らは仏陀を想い、法を想い、僧を想い、このようなことを忘れていないからです。まだ彼らは良い法門は見つけていませんが、少なくとも仏陀、法、僧を忘れてはいないからです。まだ、少しは覚えているのです。もし読経をし

ないと、時間があっても何も良いことをせず、うわさ話やお喋りをして明け暮れるのです。口は何かをしゃべらずにはいられないので、経を唱えることは無駄ではありません。経を唱えて疲れてしまつて、家に帰つたときは、人のうわさ話などしたくなくなるかもしれません。(笑い)

Q 念仏しているとき、しばらく唱えていると、口で唱えなくても、耳元で念仏の音が聞こえてきます。この現象はいいことですか。それとも良くないことですか。

M 良いことでも、悪いことでもありません。そのとき、あなたは録音テープになったのです。(笑い) 私たちの六根(ろっこん：眼・耳・鼻・舌・身・意)六塵(ろくじん：色・声・香・味・触・法)が溢れるほど聴いたので、繰り返し再生するのです。コップと同じで、水を入れすぎると溢れてしまうのです。あまり念仏しすぎると録音テープになるのです。お金が節約できますね。録音テープを買う必要がなくなります。(笑い)

Q 三毒(貪り、怒り、愚かさ)の中で、どれが一番、断つのが難しいですか。

M それは人によります。貪りが強い人もいれば、怒りが強い人もいるし、愚かさが強い人もいます。

Q マスターの経験ではどうですか。

M 私は三つとも断つことが難しいです。最も貪り、最も怒り、最も愚かです。最高のものを貪り、全宇宙をも貪つて、仏陀になりたいのです。(拍手) 私はよく怒ります。衆生が無明で、

みなこの宝珠、このパワーを持つているのに、使うことができないので、それを見てとても苛立ちます。ですから、私はまだこの怒りを断つことはできません。私は大変愚かです。この「道」に夢中で、もう戻ることはできず、前進し続け、振り返りません。もし、あなたがある女性に夢中になったとしても、ある日目が覚めます。ある女性を好きになっても、その女性が年老いて醜くなったら、彼女にはもう夢中になれないでしょう。けれども、私はこの「仏道」に夢中になって、永遠にそれをやめることはありません。誰も私を変えることはできません。ですから、私は「貪り、怒り、愚かさ」をやめることは難しいのです。(拍手)

Q 経を唱えることは、仏陀に成ることに役には立たなくても、福報は得られますか。

M 先ほど経を唱えるのは小説を読むよりは良いと言いました。これも福報のうちでしょう。でも、これ以上福報を望むなら、経を唱えることで得られるかどうかは私にはわかりません。それは菩提達磨や釈迦牟尼仏に聞いてみなければなりませんね。経を唱えるのもいいですよ。

Q 私が読んだ本の中に、ある人が災難に遭ったときに、阿弥陀経を唱えていると、追いかけてきた兵士から逃げることでできたという話がありました。なぜ経を唱えたら災難から逃られたのでしょうか。

M 彼が経を唱えたから災難から逃げられたか、それとも彼の福報のためか、あるいはそのとき、追いかけて来た兵士たちが、彼を見つけれなかったか、私にはよくわかりません。もし、

あなたがそのことを信じるなら、あなたも経を唱えればいいのです。経を唱えるのはいいことです。けれども、福報があるかないかに関しては何とも言えません。こういったことは気にしなくてもいいです。もし福報があるとしても、せいぜい世俗の福報に過ぎません。あまりにも少なく、小さな福報で、私にとつては足りません。なぜなら、さつき言ったように、私は最も貪りますので、このような小さな福報では、ないのと同じです。福報がないと言つても、やはり少しはあります。どうぞ続けて経を唱えてください。(笑い) 経を唱えることはいいことです。少なくとも仏陀が何を言つたかを覚えるからです。仏陀が言っていることは、俗世界で言われていることより、いいからです。私たちの頭脳に良い影響を与え、良い観念と考えを学ぶことができるからです。

Q 普門品(ふもんぼん)を用いて、老子、孔子の思想を説明できますか。

M できます。道教徒に会つたら、老子の思想で普門品を説明し、仏教徒に会つたら、普門品で老子の思想を説明します。つまり、融通をきかせて応用し、何事にもとらわれず、分け隔てもしません。ただし、完全にわかつたあと、何事にもとらわれなくなります。さもなければ、勝手に解釈すると、人に突っ込んで質問されたとき、問題が生じます。ですから、まず完全に理解してから、人に話して聞かせることです。例えば、今日、すべての経典は同じであるという私の話を聞いて、帰ってから、すぐ家族に同じことを話しても、いろいろ質問されると、あ

なたは実際の体験がないので、答えられないでしょう。

Q 別の角度から言えば、道教徒でもキリスト教徒でも、もし修行が高いレベルに達しているのなら、仏教の内容が理解できますか。

M 修行レベルが高い人は当然理解できます。実際は、もともと仏教ありません。釈迦牟尼仏の以前には、仏教はどこにありましたか。仏教はどこにでも存在しています。仏陀とは何でしょう。完全に悟った人が仏陀です。ですから、完全に悟った道教徒も仏陀と言えます。すべての人が仏教徒です。良いことをする人、道徳的な人、修行している人はみな仏教徒です。決して法名があり、僧侶に帰依することだけが仏教徒と言うものではありません。仏教に含まれる範囲はそんなに小さくありません。仏教にしても、道教にしても、キリスト教にしても範囲はとて大きいのです。私たちが宗教の範囲を狭くしてしまっているのです。これはすべて私たちの誤りで、教主の本意がそうなのではありません。

Q マスターがおっしゃった「音」は、私たちが普段聞いている音と同じように具体的なものですか。

M 違います。この音は法を伝授して初めて聞こえます。普通の人には聞こえません。

Q 在家者はこの法門を修行することができますか。

M できます。釈迦牟尼仏には多くの在家の弟子がいて、楞嚴経には二十五人の菩薩が自分の

修行の体験を述べています。その大部分は在家修行者の体験です。在家者ほど、この法門を修行すべきです。

Q カルマは修行することによって消し去ることができますか。または病気になると、カルマを消し去ることができますか。

M 努力して修行すれば、カルマを消し去ることができます。もし修行しなければ、たとえ病気がかかっても、カルマを消し去ることはできません。なぜなら一度病気になるだけでは、あれだけの多くのカルマを清算することができないからです。カルマの半分はサマデー（禪定の状態）の火で焼くとかなり速く清算できます。観音法門を修行すれば、カルマをとっても速く清算できるのです。なぜなら、マスターがあなたの代わりにカルマの半分を背負ってくれるからです。

Q 観音法門を修行するには必ずマスターの伝法が必要ですか。もしマスターに巡り会うチャンスがなければ、永遠に修行することができないのでしょうか。

M そうです。もし真のマスターに巡り会わなければ、修行はできません。偶然に少し音が聞こえるかもしれませんが、それが何なのかはわかりません。また次の日に聞きたくても、聞こえないかもしれません。けれども、法を伝授されたあとは、この音は永遠に存在するのです。

Q マスターが法を伝授するには、何か条件や規則はありますか。

M これから菜食すればいいだけです。この人に（マスターが自分を指す）帰依するのではな

く、この音、この大きなパワー、あるいは本来の面目に帰依するのです。私はただどのように修行するか教えるだけです。ですから規則などはありません。私はみなさんを弟子にしたいのでも、供養してもらいたいのもありません。この法門を知っているのが、あなたに教えるのです。本当の修行はやはり自分自身に頼らなければなりません。一部の人たちは先生に帰依してから、永遠にその人の弟子になり、離れられなくなります。別の法門を習いたくてもできません。これではまるで縛られているようです。私はこのような帰依は望んでいません。あなたが望むなら、私はあなたに法を伝授して、自分の財宝を見つけさせ、それを使うようにさせます。その財宝はもともとみなさんが持っているものなので、私ができることはできません。私はただ智慧を開くことを手伝うだけで、みなさんが自分のパワー、宇宙のパワー、本来の振動のパワーと通じ合い、無尽蔵の宝物を自分で受け取るのです。ですから、私に帰依する必要はありません。この凡人に帰依しても、少しも役には立ちません。

Q 先ほどマスターは「観音法門を修行するなら、必ず菜食しなければならぬ」とおっしゃいましたが、私たちは娑婆世界で生活しているので、現実の生活状態に合わせるために、菜食ができないなら、どうすればいいですか。

M 言い訳をはいけません。衆生の苦しみにかまわず、衆生の肉を食べる人がどうやって菩薩になれるのですか。菜食ができなければ、私にはどうしようもありません。このような質

問には答えたくありません。衆生を救うことを決意するなら、自分の好みを多少は犠牲にすべきで、小さな障害物を突破しなければなりません。今日、どこにでも菜食レストランがありますし、自分で豆腐やグルテンの料理を作って食べられます。こういったことは小さなことです。インド人の半数以上は菜食していますが、彼らには豆腐やグルテンがないので、豆類を煮て食べています。まったく問題はありませぬ。

Q マスターがおっしゃる観音法門は楞嚴經の円通法門と同じですか。

M 同じです。けれども、楞嚴經にはどのように観音法門を修行するのかが書いてありません。ただ観音法門を賛嘆しているだけです。もし観音法門を修行したいならば、それを教えてくれるマスターを見つけないければなりません。

Q マスターに伝授するマスターはいますか。

M います。釈迦牟尼仏から始まって、ずっと伝授して来たのです。

Q マスターのマスターはどこの人ですか。

M インド人です。けれども、ベトナムにもいます。ベトナムには観音法門を修行する人がたくさんいます。

Q 私の生徒で、母親が中絶した人がいます。どうすればいいですか。
M すでに中絶したなら、今話をしてどうするのですか。

Q このような場合、水子供養をすると役に立ちますか。

M もし、あなたが人を殺したあと、警察に行つて懺悔したら、役に立ちますか。警察はあなたを救えますか。たとえ大統領か裁判官に懺悔しても役に立ちません。警察や大統領や裁判官はあなたを刑務所に入れます。そうするのがあなたを救うことなのです。自分自身で罪を償うのです。水子供養とは何をするのですか。凡人の心で懺悔して、どうしてカルマを除去できませんか。凡人の心はすでに汚れています。汚れた水で汚れたものをどんなに洗つてもきれいになりません。

Q 釈迦牟尼仏も苦行をしていたのに、なぜマスターは苦行が役に立たないと言うのですか。

M 釈迦牟尼仏は苦行をして、やつと苦行は何の役にも立たず、理にかなっていないことがわかったのです。釈迦牟尼仏は死にそうになったとき、はつと目が覚め後悔しました。そして物を食べ始め、牛乳を飲み、ビスケットを食べて、体はだんだん回復しました。私はわざと苦行してやせたではありません。私は食べられないので普段少ししか食べません。時々昼食も食べたくなって、ご飯を食べるのも水を飲むのと同じで味がありません。ただこの体のために心配して、無理に少し食べるのです。

Q 修行するときに、普通の人と同じように暴饮暴食や、楽しむことはいけなひのですか。

M 楽しむものがあるのですか。一日に三食でも多過ぎます。私たちの胃袋には限界があり、

たとえあなたがもつと食べたくても入りません。洋服でも一回二、三枚しか着られませんか。すべて物事は中庸にすればいいのです。観音法門を修行したあと、高いレベルに達したとき、他の人が何かをくれても、たとえお金をくれても、欲しいと思わないでしょう。あるものを使い、心は貪りません。もし間違つて肉を口に入れたら、気分が悪くなったり、おなかが痛くなったり、嘔吐したりします。ですから、死んでも食べたくありません。

Q マスターのレベルで経典を読むと、どんな感じがしますか。

M 私は小さいときから経典を読み始め、今ではほとんど暗誦できます。私も経典を読みかえすことがあります。なぜなら、参考にしなければならないからです。例えば、どのような修行が正しい修行なのかを教えるとき、イエス・キリストや、釈迦牟尼仏の言葉を用いて証明しなければ、みなさんは信じてくれないからです。私は法を広め始めてまだ間もなく、こんなに若いので、私が何を言っても人に容易には信じてもらえないのです。ですから、私は楞嚴経、聖書や老子の話で証明するのです。みなさんはそうしてこそ信じるのです。これは私たちの習慣です。古代の大修行者を信じているので、今、生きている菩薩がみなさんの前に立っていても、尊敬しないし、まったく信じないのです。

Q マスターが読んでいる経典は何語ですか。

M 私は何でも読みます。これはあなたと何の関係がありますか。(笑い)

Q というのも、中国語の楞嚴経は大変奥深いので、マスターが読んでもわからないと思うからです。

M 私はオウラック（ベトナム）語を読んではいけないのですか。（笑い）

Q 私は法華経と楞嚴経に大変興味があります。これについて説明していただけますか。

M 今どうやって法華経の講義をするのですか。今はその時間がないので日を改めて話します。

Q 法華経の法師功德品に音のことが述べられていますが、マスター、それについて話してください。

M 法師功德品以外、普門品にも「梵音海潮音，勝彼世間音（この世を超えた音）」のことが述べられています。法師功德品に「法華経を解釈できるレベルに達した修行者であれば、八百の鼻の功德、千二百の耳の功德、八百の眼の功德を備えているはずだ。この功德によって、凡人の耳で梵天から地獄までの音が聞こえる。鐘の音、太鼓の音、海潮音、外の音、内在の音など、すべての音が聞こえる」と述べられています。内在の音とはどんな意味でしょう。これがすなわち普門品でいう「勝彼世間音（この世を超えた音）」です。法華経はあまりに長いので、もしそれを話すなら、別の日にしましょう。



すべての修行法門は観音法門である

スプリームマスター チンハイ フォルモサ・澎湖

一九八七年二月十二日

今日は金剛經（こんごうきょう）について話します。どんな經（法）もみな金剛經（金剛法）です。金剛經は金剛經典のことではありません。ただし言葉で言い表さなければならぬため金剛經と言うのです。

ある日、私はある人に法を伝授しました。彼女はまるで魔に取り付かれた様子でした。みなさんは魔に取り付かれた人はどんな様子か知っていますか。魔に取り付かれるとはこのような人のことです。修行がよく出来ていなくて、自分で勝手に修行したり、良くないマスターに出会って良くない法門を修行したり、あるいはその人自身があまり純粹でないのです。そのような状態で修行すると魔に取り付かれます。魔に取り付かれるとは、魔に侵入されて体を占拠されることです。体は本人のものですが、意識は魔によって追い出されてしまい、魔が体を使ってさまざまなたらめなことをするのです。何らかの手印、脚印、頭印を組んだり、または変なことを言ったり、耳元で人の話し声が聞こえたり、彼にいろいろなことをさせるのです。行為

や振舞いが正常な人とは違い、時にはこう言い、また時にはああ言い、自分でも何を言っているのかよくわかっていません。時には、魔に強制的に何かさせられ、自分自身をコントロールできません。これを魔に取り付かれたと言います。

ある日、私は魔に取り付かれた人に伝法しました。私がそうしなかったのではなく、事前によく知らなかったのですが、ある女性の同修（修行仲間）が女友達を連れて来ました。私は弟子をよく同修と呼びます。私と一緒に同じ法門を修行しているので同修と呼ぶのです。

彼女の友達は何年も前から魔に取り付かれていました。彼女は私にその友達を紹介しました。彼女は私の弟子なので、私は弟子のために、この魔に取り付かれた人に伝法したのです。長年魔に取り付かれてはいましたが、良い人で、菜食し、仏陀に礼拝し、念仏し、しかも座禅して、解脱したいと願っていたのです。けれども、以前良くない法門を修行したためか、良いマスターに出会わなかったためか、そのようになっていたのです。

私が彼女に伝法したとき、いくつかの魔が同時に出来ました。彼女は外見からすると普通の人で、初めて会った人は、彼女が魔に取り付かれていることがわかりません。普段話すときも特に違うところは何もありません。けれども印心するとき、いくつもの魔が出て来て互いにやり合い、とてもひどいものでした。当時、そこにいた他の修行仲間はみんな非常に恐がりました。魔が出て来るときは普通の人とは変わってしまい、彼女の顔は変形してしまい、とても恐ろしく見えました。そのなかの一つの魔の声は犬が吠えるような声で、他にもライオンのよう

な声の魔もいました。とても耳障りな声でした。客家（ハツカ）語を話す魔がいれば、大陸の方言を話す魔もいました。彼女自身は客家語など話せない人でした。

私が彼女に仏名を唱えさせても、彼女は怖がって唱えようとしません。阿弥陀仏を唱えることはできませんが、私が教えた仏名や法門を唱えさせても、それを怖がって、どうしても唱えることができないのです。しかも彼女自身も唱えたりしません。私が彼女に、無理に唱えさせると、声がまったく変わってしまい、その場で聞いていた修行仲間が鳥肌が立ちました。唱えることが吠えるような声になってしまふのです。なかには比較的に善良な魔もいて、他の魔に向かって叱るものもいました。やめなさいとか、しっかり唱えなさいとか、この先生は良いマスターだから礼拝しなさいとか、と言っていたのです。その日の伝法はまるで賑やかな宴会を開いているようでした。また、なかには「私はこのマスターには敬服できない。ただし彼女には金剛法門があるので、このマスターの前ではうやうやしい態度で従うべきだ」という魔もいました。魔はすごいもので、なんと私の前で法会を開いていたのです。

どうして私はみなさんにこの話をしたのでしょうか。私はあまりこのようなことは話したくありません。みなさんが魔に取り付かれた人をたくさん私のところに連れてくると困るからです。私はこんなことをしたくはありません。正直言って、魔に取り付かれた人を救うのは大変で、簡単ではなく、多くのパワーを使わなければなりません。正常な人さえ救うことができないときもあるのに、魔に取り付かれた人はもつと難しいのです。わかりますか。正常な人でも

私の話が耳に入らない人がいます。魔に取り付かれた人は正常人より障害が多いので、私を信じるのは容易ではありません。

なぜ、私はこの話を話したのでしょうか。先ほど言いましたが、すべての経典は金剛経であり、釈迦牟尼仏も「すべての法門は金剛法門である」と言っています。この魔も金剛法門を知っていました。金剛法門はすなわち観音法門です。釈迦牟尼仏は金剛経の中で「金剛法門を修行すべきである」と弟子の須菩提（しゅぼだい）に言いました。けれども、釈迦牟尼仏は他の人には観音法門を説きました。昨日私は「普門品（ふもんぼん：観音経のこと）では衆生を救う法門、浄土宗の阿弥陀経では阿弥陀あるいは浄土法門、六祖壇経では般若波羅蜜多法門と称している」と言いました。なぜ私がこのように言ったのか説明しましょう。

昨日、私は言いました。阿弥陀経にもこの音、内在の美しい音楽について述べられています。みなさん覚えていますか。楞嚴経でもこの観音、つまり音を観ることについて述べています。二十五の菩薩もそれぞれ自分が開悟したときにどんな音が聞こえたかを述べています。普門品にも「梵音海潮音、勝彼世間音（この世の音に勝る音）」とあります。もし釈迦牟尼仏が外界の海潮音のことを指したのなら、澎湖（ほうこ：台湾の地名）に住んでいる人たちは全員悟りを開いているはずですよ。（笑い）澎湖の人は毎日、海潮音を聞いているからです。そうではないですか。釈迦牟尼仏は当然このような意味を指したわけではありません。

もし、海潮音が外の世界の海潮音を指すのなら、梵音は何を指すのでしょうか。どうすればこ

の梵音が聞こえるのでしょうか。山に探しに行きますか。それとも海に探しに行きますか。どこに行っても見つけることはできません。梵音は梵語の梵で、梵語（サンスクリット語）は昔のインドの言葉です。そうするとインドに行つて、梵語を聞けば、悟ることができるのでしょうか。当然違います。だったら、一体何が「この世の音に勝る音」なのでしょう。どこで見つけることができるのでしょうか。どこで聞くことができるのでしょうか。

釈迦牟尼仏が言っていることは内在の音であり、悟りの音であり、仏陀の音です。これは観音菩薩が修行していた法門であり、普通の外界の音を言っているわけではありません。ですから「この世の音に勝る音」と言います。これが第一の証明です。今、私はみなさんにはつきりわかつてもらいたいために、普門品、阿弥陀経、般若波羅蜜多経、楞嚴経はみな同じことを言っていることを話しているのです。

楞嚴経は楞嚴経（法）ではなく、ただ紹介しているだけです。本当の楞嚴経（法）ではありません。金剛経も金剛経（法）ではなく、本当の金剛経（法）ではありません。それは伝法のときにだけあるものです。なぜ私はこのように言うのでしょうか。六祖慧能（ろくそえのう）は初めて金剛経を聴いたとたん悟りを開いたのですが、それでも彼は五祖弘忍（ごそぐにん）の所に行つて、ふたたび五祖弘忍に金剛法門を伝授してもらいました。

金剛経と金剛法は違います。例えば私がビスケットの宣伝をして、「このビスケットは最高で、誰が食べても体にもいいし、このビスケットは甘くて、品質が良いのでとても高くして普通

の人には買えません」と言ったとします。もし、みなさんがテープレコーダーで私の話を録音していても、私がビスケットについて話しているのを聞けるだけで、食べることはできません。たとえ何回同じことを言っても、このビスケットがどういうものかわかりません。わからなければ、私が言っているビスケットはただのビスケットで、みんなが知っているビスケットだと思おうでしょう。

經典に「甚深微妙法（奥深くすぐれている法）」とありますが、私たちはそれが理解できません。釈迦牟尼仏は二千五百年前にこの世を去ったので、彼に聞くことはできません。私たちは金剛經を唱えるだけで十分で、それにはすべてが含まれていると思っと思っていますが、それは違います。金剛經は金剛經（法）ではありません。もし言葉で唱えることができるのなら、それは真の經（法）ではありません。目で見えるのは本当の經典ではなく、耳で聞こえるのは真の經ではありません。

真の金剛經（法）はマスターの伝法がなければ得られません。本当の般若波羅蜜多經（法）はマスターの伝法があつてこそ理解できるのです。本当の普門品はマスターの伝法により聞こえるのです。本当の阿弥陀經（法）はマスターの伝法があつてこそ体験できるのです。

私は今日、經の講義などはしないほうがいいと思います。なぜなら、私の知っていることは言葉でみなさんに話すことはできないからです。本当です。先ほど話しているときに自分でも首を横に振り、どのように話したら、何を説いたら、私が知っていることを、みなさんに

わかってもらえるのか、と考えていました。これは簡単なことではありません。例をあげて説明しましょう。例えば水ですが、水はいろいろな言い方があります。フォルモサ（台湾）語、中国語、フランス語、ドイツ語、英語、スペイン語……などです。もし、私がドイツ人に出会ったら、*Wasser* と言ひ、フランス人に出会ったら、*L'eau* と言ひ、イギリス人に出会ったら *Water* と言ひ、中国人に出会ったら水 (*shui*) と言ひます。

釈迦牟尼仏も同じように、ある人たちは金剛法門の名前が好きなので、「金剛法門」と言ひました。またある人たちは阿弥陀仏が好きで、西方浄土に往生することを好むので、釈迦牟尼仏は「浄土法門」と言ひ、この法門を修行すれば、必ず西方浄土へ行くことができると言ひました。実際に西方浄土へ行くことができます。というのは、この観音法門により、私たちは妙なる音を聞くことができ、これは阿弥陀経で述べられていることと同じだからです。ある人たちは観音菩薩が好きなので、釈迦牟尼仏は「観音法門」と言ひ、この法門を修行すれば、観音様に近づくことができ、観音菩薩のように「梵音海潮音、勝彼世間音（この世の音に勝る音）」を聞くことができる、と言ひました。

これを聞いた人はとても喜び、ぜひ観音法門を伝授してくださいと言ひます。阿弥陀仏が好きな人たちは、無量光の法門を伝授してください。私は無量光が大好きで、西方浄土の妙なる音楽が大好きなので、早く私に伝授してくださいと言ひます。ある人たちは禅の修行をしてきたので、釈迦牟尼仏は「これは般若波羅蜜多法門で、最高のパワー、最高の智慧の法門です。」

この法門を修行すれば、すぐに悟ることができます」と言いました。

禅の修行者は、往々にして阿弥陀仏は普通の人が修行するものであり、自分は禅の修行者であると思っているのが、釈迦牟尼仏は彼らに、「この修行法門は禅の修行法門でこれを修行すれば、必ず悟りを開き、大智慧を得ることができると言ったのです。摩訶般若波羅蜜多のサンスクリット語は *Maha prajna paramita* (マハーブラジジュニヤーパラミター) で、大智慧という意味です。大智慧が好き人には、釈迦牟尼仏は、「これは大智慧の法門で、この法門を修行すれば必ず大智慧が得られるのです」と言いました。

釈迦牟尼仏はこのような言い方をすることで、衆生を救っていったのです。水というものをどんな言葉で言っても構いません。何の違いもなく、その水が飲めれば、それでいいのです。名前の違いは関係ありません。ですから、釈迦牟尼仏は多くの人に対してさまざまな名称を使って話しましたが、彼が伝授した法門はすべて「同じ」ものです。

法門が經典の中では見つけられないのは、書くことができないからです。というのも、伝法するとき、言葉を使わないからです。私が伝法の前と後に、少し話すのは法門の紹介のためです。けれども本当の伝法るときは、私は何も話しません。ただ座っているだけで動きませんし、一言も話しません。伝法するとき、目、耳、意、頭脳、体など、何も使いません。身、口、意(体、言葉、考え)を全部忘れて、そういうものは一切使いません。この体は寝るのに使うし、耳はいろんなことを聞き、人がビスケットの宣伝をしているのを聞くことなどに使いますが、実際

にビスケットを食べるときは、六根（ろっこん：眼、耳、鼻、舌、身、意）を使いません。何も使いません。

すぐに信じていることができる人は大きな善根（過去世で良い行いをして、徳を積むこと）があり、心が純粹であることを表しています。そこで私を見るとすぐに信じます。何も言わなくても信じているのです。善根があり、縁があるからです。ただし、私たちはすぐに誰かを信じるべきではありません。信じるには根拠がなければなりません。

みなさんは六祖慧能が有名な禅師であることを聞いたことがあるでしょう。彼は法を求めるために五祖弘忍の所に行きました。八ヶ月後のある日に、五祖弘忍は慧能を自分の部屋に呼び、夜中に伝法し、金剛法を伝授しました。伝法のあと、六祖はそこを離れて身を隠し、黙々と十六年間修行しました。十六年後、彼は出て来て他の人に伝法したのです。

六祖壇経の第一章に、彼は一千人にこの法門を紹介した、と書いてあります。彼は「私の法門は『摩訶般若波羅蜜多』の法門です」と言いました。これはいわゆる金剛法門と般若波羅蜜多法門は同じであることを表しています。観音法門は般若波羅蜜多法門とも同じです。般若心経の冒頭には「観自在菩薩行深般若波羅蜜多時、照見五蘊皆空、度一切苦厄……（観自在菩薩が般若波羅蜜多に深く入ったとき、五蘊（色、受、想、行、識）はみな空なりと悟った。すべての苦しみから救われた）」とありますが、これは何かというと、深い禅定に入ったとき、智慧の光で悟ったのは、五蘊（色、受、想、行、識）はすべて空だとわかり、すべての苦しみから

救われたということです。これは観自在菩薩が摩訶般若波羅蜜多法門で禅定に入ったとき、悟りを開いたことを示しています。

今、私はみなさんに聞きたいのですが、観自在菩薩とは誰でしょう。(聴衆「観音菩薩です」と答える) 観音菩薩はどんな法門を修行していましたか。(聴衆「観音法門です」と答える) そのうです。そうなら、摩訶般若波羅蜜多法門はすなわち観音法門であることを表していませんか。観自在菩薩が深い般若波羅蜜多に入ったということは、「観音菩薩が観音法門を修行したときに、智慧の光で悟ったのは五蘊(色、受、想、行、識)は、すべて空であるとわかり、すべての苦しみから救われた」という意味です。

これは何を意味しているのでしょうか。摩訶般若波羅蜜多法門は観音法門と同じ法門であるという事です。六祖慧能も同じ法門を修行し、五祖弘忍が修行していた金剛法門は、六祖慧能の般若波羅蜜多法門と同じ法門なのです。ここから、五祖弘忍、六祖慧能と観音菩薩はみな同じ法門を修行していたことがわかります。

観音法門は耳で修行するのではなく、目で修行するのでもなく、意で修行するのでもありません。ですから「観音」と言います。「聴音」とは言いません。「観」は目で物を見るということではありません。智慧で観るという意味です。私は先ほども言いましたが、観音には眼、耳、鼻、舌、身、意をえません。中国に曹洞宗の師がいて、彼は曹洞宗の修行に関する本を書きました。本の名前は中国語で何と云うのかわかりませんが、その中には「曹洞の修行には耳根、

眼根、鼻根、を使わない。身、口、意も使わない」と書いてあります。これこそ真の曹洞です。観音法門を修行している人はこの意味がすぐわかります。私たちは六根で修行するものではありません。これは、曹洞法門は観音法門と同じであることの証です。

その他に道徳経でも、老子は「名不可名（言葉で表せない名）」（Wordless word）は万物の母である、と述べています。（第一章・名可名、非常名。無、名天地之始、有、名万物之母）老子が言う意味は、本来は何もない無の状態で、「名不可名」（言葉で表せない名）つまり言葉では表現できない「道（タオ）」の始まりによって、宇宙万物が創生されたということです。

キリスト教の聖書でも同じことを言っています。聖書には「宇宙の最初は一種の音であり（Word）、この音は神と共にあり、この音がつまり神であった。万物はこの音より創造されたので、この音から創られないものはない」（In the beginning was the Word(Sound), and the Word was with God, and Word was God, everything was made by this and nothing was not made by this.）と書かれています。論語を読んだことがある人は知っているでしょう。孔子はある日、音楽を聴いて、渾然と無我の境地に入りました。三カ月経つてもまだその美しい音楽に陶醉していました。これは内在の音であって、この世の音楽には、こんなに人を引き付ける大きなパワーはありません。

インドの経典ヴェーダや他の経典にも述べられています。宇宙最初の音はオームの音に似ていて、それを *Shabd*（音）と言います。玄奘（げんじょう…三蔵法師のこと）の物語を読めば

わかりませんが、彼は他の僧侶たちとは別の時期にインドに行きましたが、そこで Shabd (音) 法門を学びました。イスラム教のコーランの中で、ムハンマドも宇宙の音のことを話していますが、ただ違う名前を使っています。宗教經典によつて、他のいろいろな違う名前が使われています。例えば Naam, Anhad'naad, Udgit, Kalam'i-qadim, Bang'i-Ilahi, Nida'i-asmani, Saut'i-sarmad, Katha, Kirtan rag……などです。

実際、すべての大師たちはみな同じことを言っています。私は観音法門の修行後、わかつたのです。観音法門を修行する前は、どこが同じなのかどこが違うのかよくわかりませんでした。

ある日、私はある僧侶に伝法しました。彼は本来天台宗を修行していましたが、あるレベルに達したあと、なかなかそのレベルを超えることができず、そこに停滞していました。彼はとても真摯に、謙虚に私に三回礼拝して法を求めました。しかし私は彼に伝法したくありませんでした。なぜなら、私は非常に恐れていたからです。それは僧侶はこれまでずっと、自分は尼僧よりも修行レベルが高いと思ひ込んでいたからです。私はなぜこの僧侶は私のところに来て礼拝し、伝法を求めるのか、私が彼に伝法しても、理解できるだろうかと心配でした。結局、彼は理解できました。

彼に伝法したあと、彼はこの法門は天台宗に似ていると言いました。私はそうですと答えました。本来同じ法門なのです。真のマスターがいれば、それは天台宗であつたり、曹洞宗であつたり、観音法門であつたり、禅、阿弥陀、普門なのです。もし真のマスターからの伝法がな

ければ、ただ口で唱えるだけで、外面的なものだけを念じるだけです。この伝法のパワーがなければ何も得られません。どんな法門でも、もし自分が半分しか知らなければ、人にも半分しか伝えられません。それでは完璧な法門とは言えません。人を上へ連れて行くパワーが足りなく、途中までしか連れて行けません。さらに高い境界があることを知らなければ、どうやって上へ上がるかもわからないのです。

天台宗、曹洞宗、臨済宗についてですが、先ほど私は慧能は臨済宗であると言いました。浄土宗、観音法門、般若波羅蜜多法門などもみな同じですが、伝法のパワーがなければ、みな同じではありません。真のマスターによる伝法のパワーがあれば、どんな法門もみな同じです。伝法のときは何も話しません。どんな法も口で話して、言葉で伝えられるようなものではないからです。けれども、伝授しなければ、法を得られません。ですから、六祖慧能はこの法門を「無相法門」と言いました。

昨日、私は言いました。どの宗派でも本来同じですが、大師たちがこの世から去ったあと、高いレベルの弟子がいなかったり、伝法できる良い弟子がいなかったりしたため、法門が途切れて失われてしまったのです。その後、他の場所に良い弟子が出現して、その人がインド、フオルモサ（台湾）、大陸などで修行し、また別の場所で修行して悟りを開き、引き続き伝法をすることもあります。彼のマスターと同じ所で伝法するとはかぎりません。また彼のマスターと同じ言葉を使うともかぎりません。他の言葉、他の名前を使ったかもしれません。

例えば六祖慧能ですが、五祖は彼に金剛法門、金剛經、真經を伝授しました。けれども、彼は伝法するとき、この法門は般若波羅蜜多法門であると言いました。観音菩薩は本来観音法門を修行しましたが、観音菩薩は舍利仏（しゃりほつ）に話したときには摩訶般若波羅蜜多法門になっていました。けれども、みな同じ意味です。この法門が大陸に伝わったあと、臨済宗、曹洞宗になりました。臨済は臨済宗の開祖の名前です。釈迦牟尼仏がこの世から去ったあと、私たちは仏教と言いつ、イエス・キリストがこの世から去ったあと、私たちはキリスト教と言いつ、老子が去ったあと、私たちは老教（道教）と言いつました。実際は全部同じです。

真のマスターはみな同じ教理を教え、人を救い解脱させ、同じ法門を伝授するのです。人を解脱させることができる法門はただ一つです。それは即ち観音法門です。それを浄土法門と言いつても、普門法門、般若波羅蜜多法門あるいは金剛法門と言いつても何法門と言いつても構いません。全部同じです。人を解脱させることができるものは、いずれも観音法門です。

内在の仏陀の音が私たちを解脱させることができます。ですから、楞嚴經の中で釈迦牟尼仏は、観音法門は不思議なパワーを持っていますと讃えています。そして彼は、十方三世仏（じつぽうさんぜぶつ…過去、現在、未来のすべての仏陀）はみな観音法門を修行してこそ、阿耨多羅三藐三菩提 *anuttara samyak sambodhi*（あのかたらさんみやくさんぼだい）を得られると言っています。それはいわゆる最高の無上正等正覚（むじょうしようとうしようがく…究極の悟り）を得るという意味です。キリスト教ではこのレベルを神と言います。彼らにとつて神は

最高ですし、仏教徒にとって無上正等正覚は最高です。無上というのはそれを超えるものはない、それより高いものはないという意味です。キリスト教徒にとっては、神は最高であり、私たちがいう無上正等正覚と同じ意味です。いずれも究極の解脱の最高境界 (Highest Ideal)、最高の智慧を指しています。

けれども、後世の人は悟りを開いていないので、經典の内容を理解しないまま、誤って翻訳し、凡人の考えが經典に加わってしまったので、宗教はますます真のマスターの本意からかけ離れてしまったのです。みなさんご存知のように、仏教の中にもたくさん宗派があります。他の宗教も同じです。もしそれぞれの宗教の真義がわかれば、互いに言い争ったり、戦争したりすることはないでしょう。

オウラツク (ベトナム) では、観音法門に似たものを教えている僧侶がいて、彼は阿耨多羅藐三菩提のことを「虚空大定」と解釈しています。彼の言う虚空の意味は、その時、その場所に何も無い、という意味です。人がいない、私がない、彼がない、あなたがいない、衆生がない、仏陀がない、深く禅定に入ったという意味です。ですから虚空大定と言うのです。けれども、多くの人は仏教を信仰しているので、彼の教えが理解できないので、彼のことを外道と言っています。私は彼が外道であると思いません。彼も人に布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧を教えています。

彼は金剛經を使って説いたではありません。一冊の金剛經を手にとって、經文通りに、第

一は布施をしない、第二は戒律を守りなさい、第三……のように、解釈したものではありません。自分の言葉で法を説き、「人に良いことをしなさい、殺生をしてはいけない、盗みをしてはいけない、酒を飲んではいけない、邪淫をしてはいけない、嘘をついてはいけない等」と説きました。ただし彼は五戒を守らなければならないという、はっきりとした用語を使っています。ただ人に道徳的な人になりなさい、殺生をしてはいけない、他人の奥さんと浮気をしてはいけない、などと言っています。これは五戒の内容と同じなのです。

彼も観音法門を教えていました。良いマスターに教わったかもしれませんが。道（タオ）を得たあと、他の人に伝法しています。彼は観音法門という名前は使わないで、「仏教無為玄秘法門」と言いました。彼が言っている無為は道教の無為と同じで、どちらもエゴで物事をするのではなく、何をするにしても執着しないということです。

私は彼に教わったことも、彼に会ったこともありません。けれども、彼が書いた法門についての本を読んで、すぐに観音法門であることがわかりました。もともとこの法門は書き記してはいけません、しかし彼は所々で漏らしているので、私は彼が教えているのが観音法門であることがわかったのです。もし私が観音法門を修行していなければ、彼の言ったことが理解できず、私は彼を外道であると言ったかもしれないかもしれません。けれども観音法門を修行すると、真の智慧が開き、すべてのことがはっきり見えます。まるで鏡のようにすべてのものがはっきりと映し出されるのです。鏡には少しのほこりもないので、はっきり見えるのです。

さもなければ、私たちはいつも人を攻撃し、仏教がよい、カトリックはよくないとか、あるいはカトリックがよい、仏教はよくないなどと言うでしょう。もし自分が理解できていなければ、何を信仰してもわからず、無駄なのです。物質的な福報が得られると言っても、せいぜい自分に少しの慰めになるだけです。けれども、自分が誰なのかもわからず、自分は本来仏陀であることがわかりませんし、仏陀になることもできません。ですから、何の役に立ちません。

ある禪師は、経典などは役に立たないから、燃やしてしまっただほうがいいと言いました。時々、私もこのようなことを言います。なぜなら、私は経典を読むとがっかりするからです。経典を読むだけでは人を解脱させられません。経典に縛られている人もいます。彼らは私に会いに来て法を求めたのではなく、論争をしたいのです。彼らは「金剛経には、金剛経を唱えれば悟りを開き、仏陀になれると書いてあります」と言います。でも違います。金剛経には、金剛経を「持すれば（法を得ていれば）」と述べているのであって、金剛経を「唱えれば」とは言っていません。持戒（戒律を守ること）と戒律を唱えることは同じではありません。したがって「経を持つる（法を得ている）」のと経典を唱えることは同じではありません。

菩薩の戒律を受けて、毎日家でそれを唱えるだけでいいと思っただけではありません。そんなはずはありません。菩薩の戒律を守り、菩薩の行いをしなければなりません。経典の場合も同じですが、金剛経を唱えても役に立ちません。仏陀に向かって唱えても、仏陀はすでにわかっているのです、何の意味もありません。もし唱えて人に聞かせても、人はわからないので何の意味も

ありません。ですから、修行して初めて經典の意味が理解できるのです。

私は小さいときから金剛經を唱えていました。みんな金剛經を唱えたと役に立つと言いましたが、私は何十年唱えても何も悟りませんでした。六祖慧能が經を唱えたときは、何を得たかわかりませんが、私は經を唱えても役に立ちませんでした。法華經を唱えても、涅槃經を唱えても何も悟れず、經典の中で釈迦牟尼仏が説いていることがわかりませんでした。

けれども、觀音法門を修行してからもなく、經典を読むとよくわかりました。經典を読んだあと、燃やしてしまいました。あまりにもよく理解できたからです。すでに理解してしまっただけで、燃やしてしまってもいいと思っただけです。理解していないときは、經典を頭に乗せて、一歩一拝、二歩三拝しても何の役にも立たず、悟りを開くことも、自分が誰かもわかりません。ただ仏陀を拝み、仏陀の弟子になり、仏陀の靴を磨くだけのことです。これでは何の意味もありません。仏陀は「仏陀になるべきであって、拝むのではない」と言いました。拜んでも構いませんが、まず仏陀が誰なのかを知らなければなりません。将来の自分の奥さんになる人の顔がわからないのに、どうやって毎日彼女を想うのでしょうか。

ですから、釈迦牟尼仏は「仏陀を信じていても、仏陀を理解していなければ、仏陀を誹謗することである」と言いました。菩提達磨は涅槃經を唱える人を見て、彼に「どうしてこれを唱えるのですか」と言いました。彼は「涅槃經を唱えれば、悟りを開くことができますし、仏陀にもなれます」と答えました。菩提達磨は「その經典を渡しなさい。人をもてあそぶものは、

私が燃やしてしまう」と言いました。いわゆる「絵に描いた餅で飢えは満たせない」とはこの意味です。というのは、經典の中には伝法のパワーはありませんし、法門もありません。經典は法門を紹介しているだけです。伝法のととき、言語は使いません。「禅は言葉はいらない」というのはこの意味です。

例えば、今日私は観音法門を賞賛し、一時間以上ずっと観音法門の話をしています。もし観音のことを知っている人がいれば、計り知れない功德があります。私の言っている意味は、観音法門を修行すれば、計り知れない功德が得られると言うことです。帰って私の講義の録音テープを聞くことは福報がありますが、それだけでは究極の解脱をすることはできません。ですから、観音法門、観音、普門品を「持する（法を得る）」べきです。「持」というのは、つまり法を得て、実際にそれを修行することです。

「戒律を唱える」ことは役に立たちませんが、「戒律を守る」ことこそ役に立つのです。五戒とは「殺生をしない。盗みをしない。邪淫をしない。嘘をつかない。酒を飲まない」ことです。家でこの五戒を唱えるだけで役に立つのでしょうか。いえ、そうではありません。ほとんどの人が、自分は仏教徒であり、十人、十五人、五十人の和尚に帰依し、五十個の法名を持っていて、さまざまな法名をもらったと自慢します。しかしながら、自分はいまだに肉食をして酒を飲んでいきます。殺生しないと言う意味がわかっていないからです。たとえ十五人の僧侶から戒律を受けても、家に帰ってからその戒律を守らなければ役に立ちません。そんな帰依の証明書

などは燃やしてしまったほうが、比較的眞実の人と言えるのです。さもなければ、それは人を騙すことであり、これは仏教徒とは言えません。

仏陀はとても慈悲深いので、人々がそのように遊んでいるのを見て笑っているかもしれない。(笑い) 仏陀は「みんなは何をしているのでしょうか。五戒の意味もわかっていないのに、もてあそんだり、僧侶の所に行っているいろいろな法名をもらったりして、何に使うのでしょうか」と言うかもしれません。わかりますか。ほとんどの人は戒律を受けたあとでも肉食をしています。昨日私は肉食の問題について話しました。肉食をすることは間接的に殺生することです。殺生を見て喜ぶのも殺生です。肉食を食べる人がいなければ、殺生して肉を売る人もいなくなるでしょう。釈迦牟尼仏は楞嚴経の中ではつきりと「大慧、およそ殺生する人がいるというのは、人が肉食を食べたいからです。もし人が肉食を食べなければ、殺生することもないだろう。だから、肉食を食べることと殺生することは同じ罪を犯しているのだ。(大慧、凡殺生者、多為人食、人若不食、亦無殺事、故肉與殺同罪云云。)」と言いました。

Q この法門を修行するには条件がありますか。

(Mはマスターの答え、Qは聴衆の質問)

M 昨日言いましたが、特に必要な条件はありません。どんな人でも修行できます。けれども、戒律を守らなければなりません。戒律と言っても戒律ではありません。本来戒などありません。法律にも盗みをしてはいけないとあるように、修行をするから盗みをしてはいけないと言わなければならない。殺生をしないことは本来守るべきことです。孔子は「己れの欲せざる所、人に施すことなかれ（自分がして欲しくないことは、他人にすべきではない）」と言って、彼も同じことを教えていました。中国では昔から言われていることであって、修行を始めてから知ったことではありません。

私たちは自分が殺されたくないのに、なぜ食べるために人に殺生させるのでしょうか。殺されるときは大変苦しくて、動物も生きたいと思い、死を恐れます。このことを私たちはみなわかっていて、どうして、動物の苦しみを楽しんでられるのでしょうか。私たちは動物の苦しみでもって、食欲を満たし、楽しんでいっているのです。もともと殺生すべきではありません。ですから殺生をしないことは戒律とは言えません。私たちの家族が死んだとき、その死体を食べるわけにはいきません。それなのに動物の死体を食べるなんて。

動物は本来非常に汚いのです。普段私たちはブタ、トリ、ウシ、ヒツジなどを抱いてキスしたり、一緒に寝たりすることは想像もできません。それなのに、どうしてそれらの死体を私たちの高貴な口に入れて食べるのでしょうか。口は本来道徳のことを話すことに使いに、高尚な詩や文学を学ぶために使うのです。なぜお墓の入り口になってしまったのでしょうか。私たち

は自分の高貴な肉体を動物たちの死体の墓場にしてしまったのです。人は墓場では怖くて寝られません、毎日自分のお腹の墓場を抱えて寝るのは怖くないのです。動物も生きたいと思いを貪り、死を恐れます。もし彼らが生きたいと思わず死を恐れなければ、まだ殺してもいいかもしれませんが、彼らは死にたくないのに、私たちは無理やり殺しています。これはあまりにも不公平なことです。

草木や野菜は話ができません。しかし智慧眼を開いたらわかりますが、それらはあなたが食べてくれるのを喜びます。彼らは「私はもう準備できましたので、摘み取って料理してください」と言います。けれども動物は死にたくなく、殺されたくないのに、私たちは無理やり殺します。これはよくないことで、暴力を使ったことになります。人間は聡明で強いので、弱い小さな動物をつかまえて体を切り刻んでいます。これは君子の振る舞いと言えるのでしょうか。

みなさんは兵法のことを知っていますか。戦争のとき、両方の勢力が大体同じでなければ、戦争になりません。もし弱い方が負けたら、それ以上殺さないので。しかし、私たちは弱い小さい動物を殺しています。動物は私たち人間より弱く、自分を守ることができません。人間を見たときに怖くて逃げるのに、私たちはまだ彼らを追いかけて行って殺すのです。魚は海で生活していて、私たち人間には何の危害も加えないのに、私たちは網で魚を捕ります。動物も山の中で生きていて、私たち人間には何の危害も加えないのに、私たちは狩りをして、殺して家に持ち帰って食べてしまいます。これは本当に間違っていて、「道(タオ…真理)」に反す

ることです。

野菜は生きたいと思ったり、死を恐れたりすることはありません。野菜にはそういう感覚がありません。九〇パーセント以上水なので水分が多く、感覚の成分が少なく意識も少ないのです。動物の意識はとも強く、人間と変わりません。ですから、馬や犬はとも忠実で主人をよく知っていて忠誠心があり、愛も持っていて人と同じ感覚を持っています。主人が死んだら、悲しくて物も食はず、数日後に主人の後を追って死ぬのです。犬や馬には本当にこのように忠誠心があります。

ですから、彼らを食べてはいけません。動物の意識と聡明さは人に近いので、私たちは無理やり殺してはいけません。また他人が殺した動物たちを喜んで食べたり、動物たちの苦しみを楽しんで殺してはいけません。何のために菩薩になるのでしょうか。苦しみから解脱すると同時に衆生を苦しみから救うためです。もし今、目の前で苦しんでいる衆生を救わなければ、一体いつになったら救うのですか。あなたが菩薩になるまで待つていたら、衆生はとづくにあなに食べられてしまつて、救いを待つている衆生などいなくなります。(笑い)

ですから、菩薩になりたいのなら、慈悲の心を持たなければなりません。すべての衆生を家族のように扱つてこそ菩薩になれるのです。今、慈悲深い菩薩に学ばなければ、その後どうして西方浄土へ行けるのでしょうか。西方浄土は大功德、大慈悲の菩薩が住むところです。阿弥陀経には「小さな福報で西方浄土へ往生することはできません。修行には慈悲が最も重要です」

と書いてあります。すべての宗教がこの点を強調しています。それなのに慈悲の心なくして、どうやって西方浄土に往生できるのでしょうか。

私が小さいとき、曼珠沙華の花を植えたことがあります。曼珠沙華に花をたくさん咲かせた場合は、ある程度大きくなったら、花の芯を摘んでやると花は大きく成長し、たくさん花をつけます。そうしないと二、三輪の花しかつけないばかりか、枝も二、三本しか生えませんが、しかし芯を摘むと大きくなり、太くなり、枝もたくさん生えて、花もたくさん咲かせます。そうですね。

その他の香菜も同じで、すべての野菜は一枚を摘むと二枚、三枚、四枚と増えます。そうではないですか。ほとんどの野菜がこうです。ですから、みなさんが肉眼で見てもわかるように、私たちが食べれば食べるほど、野菜は喜んで大きく育ち、たくさん繁殖します。私たちが食べなければ野菜は伸び悩み、一つの株に一つしかできないので、それを食べてしまうと無くなります。みなさん、明日にでも家で曼珠沙華を一株植えて芯を摘んでみてください。その後とても大きくなるでしょう。二株植えて一つは芯を摘んで、一つは芯を摘まないと、どんな違いがあるのか発見できるでしょう。

ですから、野菜や草木は喜んで人に摘まれ食べられます。枝を一本切ると間もなく新しい枝葉が出てきます。けれどもニワトリやウシを切り落とすと、引き続き成長することはありません。切り落とせば死んでしまいます。これは智慧眼が開いてなくても、肉眼でも見てわかるこ

とです。野菜や草木は人に食べられるのを喜ぶかどうか、動物は人に殺されることを喜ぶかどうかかわかります。

観音法門を修行するには、毎日に二時間半「観音座禅（メデイテーション）」をしなければなりません。そうすると十分なパワーが得られ、カルマを洗浄でき、西方浄土へ行くことができます。私たちのカルマはあまりにも多く、簡単に行けるわけではありません。一心不乱に仏陀を「念」しなければなりません。しかし、方法がわからなければ、いくら念じても心が乱れます。ですから、一心不乱になるには、二時間半のメデイテーションをしなければなりません。これこそ真の「念仏」です。

念は想念の「念」です。私たちは二時間半の間、真に仏陀を想念します。これが念仏であり、一心不乱に「念」じることです。なぜなら、メデイーションのとき、この世のすべてのものを忘れ、この二時間半は本当に身、口、意（体、言葉、考え）を仏陀に捧げるのです。一日は二十四時間がありますから、二時間半、仏陀に捧げる時間は一日の十分の一にすぎません。しかし、多くの人はさまざまなお実を言うのです。私は忙しいから、私は在家者だから、夫、妻、子どもがいるから、私は仕事がありますからなどと言うのです。

観音法門を修行するには、二時間半、身、口、意を仏陀に捧げなければなりません。真の「私」で仏陀を想念するのです。ですから一心不乱に「念」仏できるのです。禅定に入ったときに一心不乱になるのではなく、今すぐ誠心誠意に毎日メデイーションし、私たちの「心」を仏陀

に捧げなければなりません。少なくとも一日に二時間半は必要です。これこそが本当の意味での一心不乱なのです。

禪定に入ることとは決して簡単なことではありません。まず練習が必要です。そうしてある段階の禪定の境界(きょうがい)に達することができません。毎日、口で南無阿弥陀仏と唱えると、ある日突然一心不乱になるということはありません。これはありえないことです。仏陀に捧げる練習をしなければなりません。「心」で念仏し、仏陀を想念して、毎日十分の一の時間を仏陀に捧げることに、このようにすることこそが、「念」仏することであり、こうして初めて一心不乱になれるのです。

これが観音法門の修行法です。つまり菜食して毎日二時間半メデイテーションをすることで。他は何もありません。メデイテーションするときは仏陀を「想念」しますが、「想念」するにも方法があります。どのように「想念」するのか、その方法を知らなければなりません。私が見なさんに話していることは、やはり外面的なもので、ビスケットの形とか、コップの形について話したにすぎません。水はコップの中にあり、みなさんはまだ水を飲んでいなければ、まだビスケットも食べていません。



智慧眼の奥義

スプリームマスター チンハイ フォルモサ・澎湖

一九八七年二月十六日

釈迦牟尼仏はなぜ、「私たちすべての人には仏性がある」と言ったのか、今日、私はこれについてお話しします。私たちはなぜ仏性を見つけれないのでしょうか。また、私たちは「仏陀は心の中にある」と聞いているのに、なぜ探し出せないのでしょうか。釈迦牟尼仏は「あらゆる衆生はみな仏陀である」と言いました。それなのに、なぜ悪人もいれば、善人もいるのでしょうか。今日はこのようなことについてお話ししましょう。

二、三日前、私は浄土と穢土（えど：汚れている現実世界）の問題について話しましたが、みなさん覚えていますか。浄土と穢土との間にもう一つの世界があつて、それが両者を分けているのです。その世界はとても暗くて路（みち）もなく、光もありません。私たちは浄土、阿彌陀仏の国土では悪い行いがなく、男、女も性別もなく、地獄もなく、悪いことがない、と聞いています。カトリックではこれを天国と言います。この天国を釈迦牟尼仏は仏性、または本来の面目と言っています。イエス・キリストもこれを天国と言ひ、彼は「天国は私たちの内面

にある」と言いました。それなのに、なぜ私たちは探し出せないのでしょうか。ある人の内面に天国があるとしたら、その人は善良であるはずで、そうでしょう。しかし、私たちが見ている人間は決してみんな善良というわけではありません。そこで私たちは、なぜそうなのかと思うのです。それは浄土と穢土が互いに繋がっていないからです。

宇宙の状況はこうです。三界以下は、人、天、阿修羅、地獄、餓鬼、畜生の世界です。三界より上は、浄土で仏陀の場所です。私たちはいつも「仏光常照（仏陀の光が常に照らす）」と言いますが、これは「無量光（無限の光）」という意味で、どこにでも光があるということです。しかし、どうして私たちのいる三界以下にはこの仏陀の光がなく、乱れた世界になっているのでしょうか。それは二つの世界の間は、真つ暗な世界によって隔てられているためです。（章末 凶参照） それでは宇宙について話しましょう。みなさん、宇宙は私たちの外にしかないと思っ
てはいけません。宇宙は私たちの内面にもあるのです。つまり、私たちは小宇宙なのです。外の宇宙の状況がすなわち私たちの内面の状況です。ですから、私たちの内面にも暗黒の場所があるのです。

頭のとっぺんから手足の間に、一カ所真つ暗な場所があります。その場所が私たちの智慧を妨げて通過させません。たとえ通過させても、正しくないものになってしまうのです。ですから、私たちの頭が良いことを考え、智慧も良いことを考えたとしても、行動すると悪い結果になってしまうのです。この真つ暗な場所はまるで閉じているドアのようです。ドアを開けれ

ば智慧が湧き出てきます。そして、このドアをもう少し大きく開けると、「仏陀の光」が見えます。仏陀の光とはすなわち私たちの智慧なのです。

ですから、ある人はこの場所（マスターは額の中央を指す）を、私たちの「智慧眼」または「第三の眼」または「仏眼」と言います。ただし気をつけなければならないことは、ここにはドアが二つあることです。一つは三界以下の最高の場所に通じることができるドアで、仏教ではこれを「梵天」と言います。このドアを開けると、いくらかの智慧と福報が得られます。もう一つのドアは三界より上の、無量無辺の境界（きょうがい）に通じることができます。今、私が話している「智慧眼」は三界を超えることのできるドアを指しています。

ほとんどの人はこの二つのドアが閉ざされたままです。ある人は三界以下のドアが少し開いていて、もう少し大きく開けると、光や境界を見ることができます。でも、それらはすべて三界以下の光と境界です。（二流に属します）観音法門を修行している人だけは智慧眼が開き、仏陀の光が常に照らすようになります。もしそのドアが完全に閉じていると、仏陀の光が浄土から照らしても届きません。たとえ届いても真つ暗な世界によつて黒く染まり、汚れてしまいます。ですから、額より下は穢土で、額より上は浄土または天国ということができません。（章末図参照）何と呼んでも構いません。用語が違っただけです。けれども、観音法門を修行した人は智慧眼が開き、仏陀の光が常に照らすようになります。修行を続けられ続けるほど、私たちはますます自分の主人となります。智慧は二度と真つ暗な場所に染められることはなく、間違

った情報に変わることもありません。

ですから、浄土は浄土、穢土は穢土であり、それらは通じ合うことができませぬ。なぜなら、この真つ暗な壁で隔てられて、三界以下の人を外に出られないようにし、浄土とは何か、本当の天国とは何かということをおぼからせないのです。三界以下はまるで牢獄のようです。その真つ暗な世界は、外の自由な世界と牢獄を隔離し、それは越えることのできない高い壁なのです。

浄土と智慧は、私たちの体と関係があります。例えば、浄土は私たちの体の上の方、つまり脳にあり、ここ（マスターは智慧眼を指す）より下は穢土です。ですから、私たちは智慧のある人を「頭が良い」と言います。そうでしょう。頭脳は私たちの総司令部で、もし頭脳が出す命令を伝達できなければ、間違ったことをしてしまいます。それで私たちはよく「この人は頭が空っぽだ」、または「頭脳が明晰でない」などと言います。智慧眼より上は浄土であり、仏性であり、天国であり、三界を超えた世界です。智慧眼より下は穢土で、三界以下であり、生死輪廻がある世界です。とても頭の良い人はここ（額を指して）が比較的広いです。額より下はすべて排泄の系統なのです。

もし、マスターの指導があれば、修行者はますます智慧を持ち、マスターの指導がなければ、間違った修行をする可能性があります。間違った「ドア」を開けてしまうからです。一人で修行する場合、神通力がつくこともあります。というのは、私たちの体にはたくさんの「チャクラ」があるからです。ここ（智慧眼を指して）は総司令部で、次はのど、心臓、丹田などの場

所にあります。ある修行者は舌を巻き上げて上あごを支えるようにつけると、甘露水が得られると言っています。これは本当の甘露水ではありません。観音法門を修行した人なら、舌を動かさなくても本当の甘露水が得られるのです。もし、智慧眼より下の「チャクラ」で修行したなら、神通力は得られますが、これらはみな三界以下のものです。まだ、「成住壊空（発生、成長、破壊、消滅）」の段階から出ることはできません。ですから、智慧眼より下のチャクラをいくら修行しても、決して三界を超えることも、永遠の解脱をすることもできません。

三界を超える修行をしたのなら、まず智慧眼から修行を始めなくてははいけません。しかし、一番下のチャクラから徐々に一つずつ上のチャクラへと修行する人もいますが、これでは実に遅すぎます。彼らは一生涯かけて苦勞して、やっと上にはい上がるのです。私たちのシステムは智慧眼から修行を始めます。昔のインドのヨギは時間がたつぷりあったので、修行したいものは何でも修行しました。現在、私たちにはそんな多くの時間はありません。修行しながら、お金を稼いで家族を養わなくてはなりません。年老いた牛に車を引かせるような修行方法では、まだ上に達しないうちに死んでしまうでしょう。ですから修行したいなら、良いシステムを見つけないはいけません。

マスターの指導がなく、自分で修行したら、どこかのチャクラが開くことがあります。例えば丹田が開いたとすると、その結果、体が熱くなったり、短気な性格に変わったり、性欲がとて強くなったりします。どこかチャクラが開いたら、自分で閉じることはできません。いわ

ゆる魔がそのチャクラに進入して、体を占領してしまいます。私たちが自分でそのチャクラを保護することができないからです。ですから、修行は必ず保護してくれる法門でなければいけません。本当のマスターの加護があつて初めて安全なのです。

たくさんの人が私に「修行をする前は、別に何の魔障もなかったのに、修行後は、すればするほど魔の障害があり、たくさんの霊魂が入り込んだような感じで、それで困っている」と言います。これは、むやみにチャクラを開いたからか、または彼らの先生のパワーが足りないからです。修行するとチャクラは自然に開きます。例えば、あなたがこのようにメデイテーションをすれば、どこかのチャクラが開きます。呼吸をコントロールする修行をするとき、ちよつとした不注意で体の熱い場所（丹田）にふれて、気が荒くなつたり、怒りっぽくなつたり、男女関係を非常に好むようになったりと、自分でコントロールできなくなりません。

西方浄土と私たちは互いに関係があります。私たち自身が一つの小宇宙であり、その外は大宇宙です。智慧眼より上は浄土で、それより下は三界以下の穢土です。智慧がここ（マスターは額を指して）にあるので、私たちが何を思つても何をしても、頭脳を使わなくてはなりません。何か物事がわからないとき、眉をひそめますね。例えば、この人どこかで会ったことがあるけれど一体どこだったのか。懸念に思い出そうとするときなどは、眉をひそめてしまおう。こんなとき、私たちは考えを第三の眼（すなわち智慧眼）に集中させているのです。こうすれば早く問題が解決できるからです。ここが智慧のある場所なのです。ですから、ここ

を智慧眼と言ったり、第三の眼、法眼、仏眼、菩薩眼などと言ったりします。

釈迦牟尼仏の額の中央にもこの眼がありますね。それは彼の智慧眼が開いているからです。私たち凡人は修行をしなかつたり、マスターの手助けがなかつたりすると、この智慧眼は閉じたままです。この閉じている場所は、先ほど私が話した宇宙の真つ暗な世界と関係あるのです。この壁の役割は浄土と穢土を分け隔て、浄土の無限の光が下の世界を照らさないようにすることです。けれども、いったんその智慧眼が開けば、この無限の光（つまり仏陀の光）は何の障害もなく下を照らせるのです。それはまるでふさがれていた路（みち）が再び通れるようになったのと同じです。もともと路があつたのに、障害があつてしばらく通ることができなかつたようなものです。

智慧眼が開けば、智慧は上から下の手足まで体の全体に直接行き届くようになります。そうなれば、私たちは何をしてもまさに正しく、はつきりと物事がわかるようになります。それは智慧と体全体がつながっていて何の障害もないからです。

ですから、この智慧のチャクラを修行することは最高なのです。他のチャクラはすべて排泄のシステムで、目は涙と目やにを、鼻は鼻くそや鼻水を、耳は耳垢を、口は唾液や痰を、肛門は排泄物を出します。下に行けば行くほどに惨めですね。私たちの体にある九つの穴はすべて汚物を出すのです。それは成住壊空（発生、成長、破壊、消滅）と同じで、排泄システムだからです。ですから、こういった排泄システムのチャクラを修行することは安全ではなく、し

かも永遠のものではありません。

今、私はおおまかにお話したのですが、法を伝えるときはもつと詳しく説明をします。どんな世界にどんな状況があるのかをすべて説明します。今はこの法門を公開することができません。公開しても何の役にも立たないからです。みなさんが帰ってから自分で勝手に試したりすると、魔に取りつかれてしまうからです。法を伝えるときははっきりと伝えるべきです。まず、身、口、意（体、言葉、考え）をきれいにして準備をしたら、私は法を伝えることができます。これはみなさんよく知っていると思います。今はこれ以上話せません。先ほどは少しだけ話して聞かせただけです。

頭の良い人は前世でたくさん修行をしたので、現在でもその一部分が少し残っていて、智慧のチャクラが完全に閉じてなく、まだ少し開いているのです。それで頭が良く、道徳的なのです。前世で修行のレベルがもっと高かったら、この智慧眼はさらに開いています。智慧眼で、人のどこが開いていて、どこが閉じているかを見ることができません。たとえ智慧眼が完全に閉じていたとしても問題ありません。ただ、真のマスターを探し出せば、マスターが私たちの智慧眼を開いてくれます。とても早いです。まさに鍵を鍵穴に入れて、一回まわせば開くのと同じです。鍵さえあれば問題はありません。

ですから、昔から今日まで西洋でも東洋でも、修行者は在世のマスターの重要性を強調しています。今、私たちが過去のマスターを礼拝するのは、彼らを尊敬し崇拝しているからです。

そして、いつか自分たちも釈迦牟尼仏のようになりたいと願っているのです。けれども、釈迦牟尼仏はすでにこの世を去っていて、私たちの智慧眼を開くことができません。釈迦牟尼仏はすでにその鍵を在世のマスターに渡しています。ですから、智慧眼を開きたいのなら、往生したマスターではなく、在世のマスターを探さなければなりません。そうして初めて、私たちの智慧眼を開けてもらうことができるのです。

浄土と穢土の間は何の連結もありません。繋がりを求めるなら、誰かにこの鍵を浄土から穢土に持って来てもらわなくてはなりません。なぜなら、この鍵は浄土から直接落ちて来るものではないからです。たとえ落ちて来たとしても、前にも話したように宇宙のあの真つ暗な世界で無くなってしまうのです。仏陀の光がそこで消えてしまうのと同じようにです。もし智慧眼が開いていなかったら、私たちの智慧は両手両足に達することができず、自分の心をコントロールすることもできません。ですから、時には怒りたくもないのに怒ったり、何かをうまくやろうとしても、できなかつたりするのです。この原因は真の智慧が真つ暗な世界に邪魔されているからです。

同じように、純粋な仏陀の光をこの娑婆世界に持って来たいと思うなら、保護する道具を使わなければなりません。例えば電線がそうですが、もし電線がなかったら、電気はここまで流れてきません。電気は存在しているも私たちはつかむことができません。道具を使って初めて電気を保持できます。また、山から流れ出た水は、水道管で保護しなかったら、汚れて飲めな

くなります。ですから在世のマスターは、水道管と同じように水源から安全に私たちの家まできれいで純粋な水を運んでくれるのです。

私たちはこの智慧眼（仏眼、法眼）が開くと仏陀になり、「花が開いて仏陀を見る」、または「本性を見て、仏陀になる」と言うのです。実際これはとても簡単なことで、何も複雑なことではありません。けれども、ほとんどの人は信じてくれず、「そんなに簡単に仏陀になれるのだろうか」と思うのです。それは簡単なことです。釈迦牟尼仏は「仏陀は心の中にある」と言っているのではないですか。仏陀が心の中にあるなら、すぐに見つけられるはずです。「仏陀は心の中にある」とは、ポケットの中にお金が入っているのと同じようなもので、そのポケットがどこにあるのかわかれば、すぐお金が手に入ります。仏陀が心の中にあることも同じように、心がどこにあるのかわかれば、すぐに仏陀を見つけることができます。

イエス・キリストも「天国は私たちの中にある」と言いました。もし、この話が間違っているのなら、彼らは嘘をついたことになりません。それはありえませんが、彼らは今日に至るまで最も偉大なマスターです。もし彼らが嘘をついたとしたら、私たちは今なお彼らを崇拜することはないでしょう。釈迦牟尼仏、キリスト、それに老子は最も有名な大師ですね。二、三千年経っているにもかかわらず、今なお有名で、ますます多くの人々が彼らを信じて崇拜しています。これは彼らの教理が正しいということを確かに表しています。すべての人がみな愚かであるわけではありません。修行者もいれば悟りを開いた人もいます。その人たちは釈迦牟尼仏やイエ

ス・キリストの話した道理が正しいかどうかを理解しています。もし間違っているとすれば、何らかの反応があるでしょう。けれども二千年以上経った今でも、どんな人でもどんな修行者も、大人も子どもも、みな彼らを崇拜しています。これは、彼らの言ったことがすべて正しいということを表しています。

講義の最初に、私はなぜある人は聡明で、ある人は愚かで、ある人は善良で、ある人はあれほど凶悪なのかについて話しました。それは智慧のドアが開いているかないかと関係があります。浄土と穢土との間が繋がっているかどうかと関係があります。ある人は「どうして修行しなければいけないのですか」と聞きます。それは私たち人間が小宇宙であり、大宇宙と関係しているからです。もし私たちの小宇宙が安全ではなく、混乱していたら、その外も同様です。小宇宙が大宇宙と通じ合って一体となれば、私たちは調和がとれるでしょう。これは仏教でいう「一切唯心造(すべては心が造りだす)」です。イエス・キリストは *I and my Father are One* (私と父は一体である) と言っています。老子も「一」のレベルについて話しています。(道徳経第三十九章：昔之得一者，天得一以清，地得一以寧，神得一以靈，谷得一以盈，萬物得一以生，侯王得一以為天下貞。)《昔、一を得た者は、天は一を得て清らかに、地は一を得て穏やかに、神は一を得て靈的になり、谷は一を得て満ち、万物は一を得て生をなし、諸侯、王は一を得て世界の主となる》

ですから修行とは、私たちが自分の小宇宙を整え、それを自分自身の主人にすることです。

よく次のようなことがあります。怒りたくなくてもどうしようもなく、自分の口をコントロールできず、穏やかに言いたくても、かえって相手を傷つけたり、耳障りになったりします。また殴りたくなくても、智慧の反応よりも殴る動作の方が早いのです。智慧は人を殴ってはいけないと叫んでいても、智慧がその真つ暗な壁を通るときに殴ってしまい、暴れてしまいます。それで私たちは自分をコントロールできなくなり、自分の主導権を失ってしまうのです。

私たちが自分をコントロールできれば、外の世界も乱れます。自分をコントロールできれば、世界も平和になるでしょう。「一切唯心造（すべては心が造りだす）」というのは、まさにこの意味なのです。ですから、私たちはよく「心浄則國土浄（心がきれいなら、国土もきれいである）」と言います。夫をコントロールすれば、家庭が平和になるというわけではなく、また、奥さんにやたらと暴力をふるって、やたらと抑圧すれば、家庭が平和になるわけでもありません。平和を手に入れたいなら、まず自分が変わらなければなりません。そうすれば奥さんも変わるでしょう。たとえ奥さんが変わらなくても、私たちの心は安定した状態でいられます。イエス・キリストはかつて言いました。「右の頬を打たれたら、左の頬も向けよ」と。その時、心は恨みもなく、相手を打ち返す気もないからです。心はいつも喜びに満ちているので、少したたかれたり叱られたりしても、何も悲しくありません。

同様に修行をする前は一発殴られたら、すぐに何発も殴り返していても、修行後は殴られたら、「こっちも殴ってください両方殴られた方がバランスがとれます」と言うでしょう。同じ殴

られる場合でも心境が違うのです。それは決して私たちがこの世界を変えたということではなく、私たちの心が安らかになったからです。世俗的なことに捕らわれなくなるので、影響されなくなりません。私たちは絶対的に自分自身の主人であり、怒りたければ怒り、怒りたくなければ怒らないのです。六根六塵（ろつこん：眼・耳・鼻・舌・身・意識、ろくじん：色・声・香味・触・法）に左右されることもなく、また真つ暗な世界にコントロールされることもありません。私たちは自分で自分をコントロールして、したいことをするのです。

ですから六祖慧能は、浄土はそれほど遠いものではなく、西方浄土は遠くないと言いました。西方浄土はここ（マスターは智慧眼を指して）にあるのです。私たちが良い法門を修行すれば、体験が得られます。あらゆる境界（きょうがい）がすべてここ（マスターは智慧眼を指して）にあります。決して高い所に上ったり、空を飛んだりすることで、極楽世界に到達できるのであります。実際、行かなければならない場所など存在しません。ですから「心浄則國土浄（心がきれいなら、国土もきれいである）」というのです。それはこの小宇宙と大宇宙は関係があるからです。老子は「修行者は門を出なくても、世界に何が起きているのかわかる」（道徳経第四十七章：不出戸、知天下）と言いました。修行をすると小宇宙と大宇宙が繋がるからです。ですからどんな所もみなわかり、彼がいけない場所はないのです。

ですから仏陀になった人を、私たちは「如来（にょらい）」と呼びます。如来とは来もしないし、行きもしないが、ここにいながらどこにでもいるという意味です。その時、私たちはその

人を「仏陀」になった、または「如来」になったと言います。釈迦牟尼仏だけが如来になったわけではありません。現在の人々も、私たちも如来になることができるのです。私は聞いた話をするわけではありません。私個人の体験から話しているのです。ですから保証できるのです。

真の如来の状況というのは、こういうことです。例えばここに「道（タオ）」を得た人が座っていたとします。しかし他の人も別の場所で、彼が法を伝えているのを見たり、天国で人に教えているのを見たりするのです。ですから、私たちは仏陀を「天人導師（天と人の師）」であり、「四生慈父（四生の父である。四生：胎生・卵生・湿生・化生、すなわち生物すべて）」というのはこの意味です。例えば浄土でもその人に会えるし、突然思い付きで地獄を見に行ったりしても、そこでまたその人に会うこともあります。なぜなら、「如来」なので、どこでも見ることができません。彼は来ることもなく、行くこともないのです。その場合はこの肉体ではありません。法界と一体になり、法界の真体になり、法界と同じで空間や時間は彼と衆生を隔てることはできません。彼は衆生と一体になったので、衆生はどこでも彼を見ることができません。けれども、彼は衆生ではありません。

西方浄土の境界（きょうがい）が、もし三界以下と繋がらなければ、三界以下は大混乱になるでしょう。同様に、私たちの上の智慧が額から下の部分と通じ合わなければ混乱が生じます。例えば、家に主人もいなく、電話も通じないのと同じです。この時、たとえと使用人が家について、彼らは聡明でなく、いつも主人の指示や命令で仕事をしていたとしたら、突然主人が留

守で、電話も通じない、手紙も書けない事態になると、彼らはパニックになって、何一つきちんとできないのと同じです。

私はある人たちから聞いたのですが、メデイテーションをしてサマデイーに入ったときに、世界を回遊して、アメリカがどんなか、世界の混乱状態がどんなものかと見に行つたと聞きました。これは普通の体外離脱です。如来ではありません。英語で *Astral Projection* (アストラルプロジェクトジョン) と言い「如来」ではありません。まったく違います。

今、簡単に図解しましょう。(章末、図三を参照) 例えばこれが人間だとすれば、外側は何層もの体で覆われています。一番内側が私たちの本来の面目であり、私たちの主人、または真体、仏性、天国、靈魂など何と呼んでも構いません。私たちの仏性は一番内側に縛られていて出てこれません。体外離脱で出ることができませんが、これは仏性を得たことではなく、アストラル体(この内側には、また何層かの体と真体がある)を使って出て行き、肉体を残しているだけにすぎません。この一層一層の体は全部で七層あり、キリスト教では「七重天」と言われ、イスラム教でも似たようなことを言っていますが、これはいずれも私たちの体と関係がありません。

ですから、これはまだ如来ではなく、まだ仏性でもないのです。仏性を使ったのなら、どこにも行く必要はなく、ここにいてだけで起きることがすべてわかるのです。食事をしていても、寝ていても、路(みち)を歩いていても、話をしていてもすべてがわかるのです。どこ

の場所にも存在しているのです。例えば、私は今ここで話をしていますが、台北でメディテーションをしている人もそうでない人も、私がどこに居るのがわかります。（これは個人の修行のレベルによって決まります）また、助けを求めると私の化身がその人を助けに行きます。これは体外離脱の状況と同じではありません。なぜなら、体外離脱するには肉体だけを残し、必ず体の各層を全部持っているいろいろな所に行き、帰って来てから再び元の肉体に入ります。これは壁にかけた服を着たり、門を開けて帰って来たりするのと同じで、この家や建物はまだそこにあつて、出発の時に荷物を持って出て行き、遊び終えて帰って来るときに、荷物やお金をすべて持って帰って来るのと同じです。

けれども、これは如来とは違います。如来はメディテーションをしたときだけ、出て来るのではありません。如来なのでどこにでも存在しているのです。ですから路（みち）を歩いたり、食事をしたり、寝たり、話をしたり、講義をしたり、普通の行動をしています。同時にどこにも存在し、あらゆる物事を解決することができ、衆生を助け、修行仲間の手助けなどもするのです。

これは普門品（ふもんぼん：観音経のこと）にも述べられています。さて、「普」とは何でしょう。「普遍」は広く行き渡ること、「普渡」は広く救うことであり、どの場所にもあるという意味です。「門」とは法門です。釈迦牟尼仏が言っている意味は、観音法門を修行すると、どの場所もわかり、あらゆる場所に存在するということです。ですから、「如来」となり、自分自

身もこの普門となり、観音菩薩になるのです。衆生がどこで何を求めようと、すべてわかっただけで、すぐにその人を助けに行くことができます。何が起きても、みな聞こえて、みな見えるのです。これは自分の智慧眼を使つて見るのです。天耳通や天眼通と混同してはいけません。天耳通や天眼通は普門ではなく、如来のレベルではありません。「如来」は如来心、仏心の知覚によつてすべてのことを知ります。だから「普」というのです。観音法門を修行すれば私たちも観音菩薩になれるのです。それでこの門を普門というのです。

「普門」とは衆生を広く救う法門であり、観音菩薩になる方法を教えるものです。ただし、それは紹介だけであつて、法門については触れていません。もし、観音菩薩の名前に含まれる本当の意味がわかれば、私たちも観音菩薩になれるのです。私たちはいつも観音菩薩を唱えています。それは観音様の名前ではありません。観音菩薩の名前は、特殊な聴力を使つて、初めて聞こえるのです。「名可名、非常名（その名は凡人の言葉で表すような名ではない）」ということなので、普通の言葉で言えるような名ではありません。本当の名前は観音菩薩ではありません。観音法門の修行を積んでこそわかるもので、言葉で話したり、書いたりできるものはすべて本当の名前ではないのです。

昔から今日に至るまで、マスターはみな同じことを言っています。ですから、私たちは言葉上の論争する必要はありません。私たちは自分の身を正し、良い人となり、マスターたちの教理を学べば良いのです。どちらの「道（タオ）」がより優れているかを言い争う必要はありません。

ん。「道」が何であるかもわかっていないのですから、どの宗派が良いかを論争する必要はありません。どの宗派が良いかわからないのですから。「道可道、非常道（道は道でも普通の道ではない）」この「道」を見つけて、初めて言うことができます。まだ見つからないときは、みな無明の人にすぎず、当てずっぽうに言い、口が災いしてカルマを造るだけです。「道」を見つけたら、どの道が良くないかはつきりとわかるので、わかっていないうちは何も言わないのが一番良いでしょう。老子は「知道的人不講、講的人不知道（わかっている人は言わない。言う人はわかっていない）」（道德経第五十六章）と言いました。

ですから、ある論争好きで、弁論好きで、「道（タオ）」はこうであるべきだと言ったりする人がいたら、その人はまだ「道」のことをわかっていないことを示しています。「道」は話せるものではありません。法を伝えるとき、私も何も言いません。今、みなさんにお話ししているのは、法を伝えているわけではありません。法門の紹介だけです。内面の状況を少し紹介しただけで、これは体験ではありません。体験は私個人のことで私自身だけが知っていて、みなさんにはわかりません。

「道可道、非常道。名可名、非常名（道は道でも普通の道ではない。名は名でも普通の名ではない）」なので、このことから観音菩薩は本当の名前ではないとわかります。観音菩薩の本当の名前は非常に美しく「勝彼世間音（世間の音に勝る音）」です。とても美しい音です。その「勝彼世間音（世間の音に勝る音）」は、とても私たち凡人の耳では聞こえません。ですから、普門

品は普門「法」ではないのです。普門「法」は伝える人がいて初めてわかりますが、普門品は普門法の体験を紹介しているだけなのです。

今日ある人が私に、阿弥陀経を読んだと言いました。そこには西方浄土の境界（きょうがい）が描かれていて、土は黄金で、木の葉は寶石で、また小鳥が歌を歌い、八功德水、蓮の花などがあつたと話しました。彼はそんな境界（きょうがい）は自分にとっては何の意味もなく、そこには行きたくないと言いました。私も同感です。阿弥陀仏の国を見て、これ位のものかとかれば、私だってそこに行きたいとは思わないでしょう。地面が黄金だろうが泥土だろうが、私には関係ありません。私は金や宝石は欲しくありません。この世界でも欲しくないのに、浄土にまで行って欲しがることはありません。ですから、私たちが浄土に行くのは決して寶石が欲しくて、または美しい境界を求めるからではありません。これは釈迦牟尼仏が、衆生が後にそこに行ったらわかるようにと、浄土を紹介したにすぎません。私たちは決してこの境界（きょうがい）に執着して修行していません。

修行をして西方浄土に行くと、私たちは幸せになり、自分にとつても、世界にとつても役に立つ人になります。そして、衆生を苦しみから救う大きなパワーを持つでしょう。観音菩薩や大勢至菩薩や無量光の阿弥陀仏になります。ですから、私たちはそのようなレベルになるように修行しなければなりません。決して西方浄土の美しいものを求めて修行するではありません。もちろん仏陀の国土はどこも莊嚴で、西方極楽世界では泥土や藁葺きの宮殿などありません。

ん。(笑い) 私たちがいる所は、まるで汚い野菜市場のようなものですが、そこは非常に荘厳で、美しく、清潔で、靈妙で、光り輝き、素晴らしいものがたくさんあります。

釈迦牟尼仏も話しましたが、それでもまだ描写が足りません。凡人の言葉でどうやって浄土を語れるでしょうか。でも、ほんの少し話すことで、人々に多少理解してもらいうことはできません。実はこれは釈迦牟尼仏が話したのではなく、その弟子が座禪(メディテーション)をしたときに体験したものです。釈迦牟尼仏が弟子を連れて浄土に行き見たものを、その弟子が帰って来てから書いたのです。阿弥陀経は釈迦牟尼仏がこの娑婆世界で話したものではありません。

「観無量寿仏経」を読めばわかります。韋提希(いだいけ)皇后が西方浄土を見たのは、釈迦牟尼仏が化身で現れ、彼女を連れて上に行ったからです。私たち修行者はメディテーションをしているときに、意識が高い境界(きょうがい)に達しないと、体験できないことを知っています。これは凡人のレベルではありません。韋提希皇后は修行してすでに高いレベルだったので、仏陀の化身と一緒に高い境界まで行くことができたのです。戻ったあとで、この体験を書いたのです。ある人はこれを仏陀が肉体で牢屋に現れて教えたと説明していますが、この説は論理にかなっていません。なぜなら、第一に仏陀には何千億の化身があり、肉体を使って行く必要がないからです。第二に仏陀の弟子はとても多いので、一人のために自らそこへ行く暇がないからです。

先ほど、私は「如来」のレベルはどこにでも存在すると言いましたが、それはこういう意味

です。私たちが誠心誠意であれば、化身のマスター（如来）を見ることができ、この時化身のマスターは、私たちの修行レベルに応じて、それにふさわしい境界に連れて行くのです。阿弥陀経も同じことで、仏陀の弟子が浄土に行つて戻つて来たあと、その体験を書いたもので、一種の修行日記です。

例えば、私が法を伝えるとき、みなさんはどんな体験があつたか、どんな境界を見たかを書かせます。法を伝えるときは、個人的な体験ですから、みなさんはこのように書くでしょう。何月何日、スプリームマスター チンハイが観音法門、浄土法門を伝授してください。阿弥陀仏や、浄土の境界（きょうがい）や、七宝池や、八功德水などを見たとき、後には観音法門を修行していない人がこれを読んだとしても、その人にとっては、こうした体験は全く意味がありません。なぜなら、「八功德水」と書いた言葉だけでは理解できないからです。八功德水とは非常に麗しく美しいものです。浄土を見るのは私たちには最も幸せなときで、普通の人には浄土のものを見ることはできません。浄土を見ることができたのは、私たちのレベルがすでに非常に高くなったことを表し、すでに不退菩薩となり、自分にとつても衆生にとつても、大変利益があることを表しています。この時は大きなパワーを備えているので、人を救うのはとても簡単です。

ですから、浄土は追い求めて行ける所ではありません。浄土に行けるのは、私たちが菩薩になった証です。この菩薩の境界こそ私たちが求めるべきものです。菩薩のレベルを獲得すると、

当然荘厳な場所に住みます。例えば大学を卒業して医者になったら、以前のように小さくて暗い家に住むわけにはいきません。医者になったからには、比較的良い清潔な場所に住むのは当たり前前のことで身分相応です。ただ、医者は衆生や患者のために医学の勉強をしたのであり、見栄えの良い家のために勉強したわけではありません。医者になってから良い家に住むのもごく自然なことです。

例えば、私が法を伝えたとき、西方浄土の妙なる境界（きょうがい）を見て、それを書き記した人がいたとします。しかし、他の人はそれを読んでも何も感じません。その人が見たときとは、状況はまったく違うのです。心の状態はまるで違い、レベルも違うのです。彼はとても心地よく、幸せと安らぎを覚え、智慧が大きく開いたのです。これこそが最も重要なことで、見たことが重要なのでありません。そのような状態は体験しようがなく、理解もできません。どうして見た境界がそんなに重要だというのでしょうか。それは彼自身が変わったので、西方浄土を見たときにとっても幸せで、彼は今までの状態とは異なり、大きなパワーや神通力や大きな智慧を得たからです。私たちはただ人の体験日記を読んだだけです。何の意味もないと感じ、西方極楽世界の記録を見ても何とも感じません。それは私たち自身がそのレベルを体験したことがないからです。

例えば印心を受けたときに、観音菩薩を見た人がいたとします。しかし、他の人は「観音菩薩なんかを見たくない」と言うかもしれません。そういう人にとっては観音菩薩を見ることは

何の意味もないことです。しかし観音菩薩を見た人は、観音菩薩だけが見えたのではなく、その他にも観音菩薩が住んでいるきれいな所、美しい宮殿なども見えたのです。そして、体も意識も変わったのです。この状態は言葉では表現できません。観音菩薩を見たから素晴らしいというのではなく、観音菩薩を見たとき、体全体と意識が全部変わって智慧も開き、自分の内面にある変化が起きたのです。これこそが最も喜ばしいことなのです。

智慧が開いたのでとてもうれしいのです。花が開いて仏陀を見て、無生を悟ったのでとてもうれしいのです。仏陀を見たときは、まさに「無生」です。「無生」とは生も死もなく、つまり生死輪廻をしないという意味です。仏性を見て、仏陀になることも同じです。私たちは仏性を見たいためではなく、仏陀になりたいのです。どうして仏陀になりたいのでしょうか。それは智慧とパワーがあれば、苦しむ衆生を助けることができるからです。もともと私たちもその中の一人だったので、そういう苦しみがどんなものかが理解できます。もし、私たちが苦しむ衆生を助けるパワーがあつたら、なんてうれしいことでしょう。それが私たちの責任であると感じるのです。こういう正しい考え方があってこそ、初めて仏陀になることができます。ですから仏陀や菩薩を見て、仏陀に従って学ばなければならぬのです。

私たちは決して浄土の美しさ、仏陀のレベル、神通力、パワー、智慧を追い求めて仏陀になりたいではありません。私たちは宇宙の良き市民の一人、良き道具となって、この大宇宙と小宇宙が一体となって平和になることを助けるのです。なぜなら、私たちが見るこの世界は現

在非常に乱れていて、互いに殺し合いをしています。人類は本来、この世界では最も高貴な存在でなければいけないのですが、ほとんどの人々は飲食や遊樂に時間を費やし、毎日働き、ご飯を食べて眠り、また眠ってご飯を食べて働き、そして死にます。これでは何の意味があるのでしょうか。

実際、生活もそう簡単ではありません。ほとんどの人の生活は、苦しみ、言い争い、競争に満ちています。夫や妻が不仲の人もいれば、破産した人、殺された人、告訴された人もいます。誰も生、老、病、死から逃れることはできません。これは決して容易なことではありません。一生ただ飲み食いして遊んで、最後になつて氣樂に死んで行くことはありません。もしそうであれば、それ以上に良いことはなく、そして解脱を求められないでしょう。実際は生、老、病、死が私たちを支配していて、人間の生活を見ると、動物の生活とほとんど大差なく、動物も食べて、寝て、子育てをしています。私たちは動物より聡明ですが、私たち自身の智慧を完全には使っていません。ですから、動物と大差ないのです。実に残念なことです。百年の時間をまったく無駄にしているのです。

もし、この百年の時間をうまく使つて修行するのであれば大菩薩になれます。宇宙全体が私たちのものになり、したいことは何でもでき、助けたい人を助けられます。飛行機のチケットなしで行きたい所へ行けます。もちろん、この肉体で移動するならチケットは必要です。例えば、仮に私に空を飛ぶ神通力があつて、こちらに飛んで来てみなさんに会ったり、他の場所へ

飛んで行って修行仲間（マスターの弟子）に会いに行ったりすることができるとしたら、私はそんなに長くは生きていられないと思います。なぜなら、ある人が私を鳥に間違えて、銃で撃って食べてしまうかもしれません。（笑い）

ですから、神通力は大して役に立ちません。神通力を使わなくても行けるのです。この肉体はここに在るけれども、化身はどんな場所にもいるのです。ですから、釈迦牟尼仏は何千億の化身があるというのです。如来と同じです。孫悟空のように毛を一本抜いて息を吹きかけ、大勢の孫悟空が現れるようなものとは違います。それは何千億の化身ではなく、人を騙す神通力です。なぜなら、頭の毛一本、あるいは猿の毛を一本使って化けた孫悟空は、二、三分もすれば消えてしまつて元の毛髪になつてしまいます。ですから、これは何千億の化身ではありません。ぜひとも混同しないようにしてください。

何千億の化身とは、行きもしないし、来もしないで、人はここに在るけれども、どこにでもいるのです。あらゆることを知っていて、特に何かする必要はなく、毎日食事したり、眠り、話をしたり、普通の人とまったく同じです。みなさんは孫悟空になりたいですか。それとも、釈迦牟尼仏になりたいですか。当然、釈迦牟尼仏になることが究極です。それこそが永遠なのです。孫悟空はやはりこの三界以下にいて、まだ如来仏の手のひらから出られないのです。

けれども、仏陀になつたからといって、食事や睡眠を取る必要がないのではありません。仏陀の外見は凡人と同じで、食事もし、睡眠もとり、仕事もします。けれども、食事をするとき

も、睡眠をとるときも、すべて衆生の利益になっているのです。メデイテーションするときも、講義をするときも衆生の利益になっています。私たちが食べたり、寝たりするとき、何の利益にもなっていないません。自分自身にも利益になっていないかもしれませぬ。ましてや他人の利益になることはありません。

ですから、仏陀になっても見かけは衆生と同じですが、実際は違うのです。仏陀は食事や、睡眠や、仕事をしていても、同時に無形の仕事をたくさんしていますが、私たちには見えないのです。私たちが食事をしたり、睡眠をとったり、講義をしたりするのは、ただ食事をして、眠って、講義をしているだけで、それ以外には何もありません。私たちがここにおいて、何千億の化身になることも、如来のように自在に行き来することも、観音菩薩になることも、衆生を救うこともできません。ですから衆生と菩薩とは大きな違いがあるのです。そうでなければ、何の違いもないはずで、どんな衆生でもみな如来になることができます。ただ鍵がある場所を知って、ドアを開けて修行に精進すれば、同じように成就することができます。釈迦牟尼仏は六年修行し、慧能は十六年修行して仏陀になりました。私たちがなれます。

釈迦牟尼仏は「どんな衆生にも仏性がある」と言いました。その意味は、動物にも仏性があるということですが、どうして動物は仏陀になれず、人間だけが仏陀になれるのでしょうか。それは人間には「意識」と「潜在意識」があつて、判断する能力があるからです。高いレベルの判断力と智慧を持っているからです。動物も判断ができますが、ただ、あそこが危険だとか、

どこに行けば食べ物や水があるのか、くらしいのもです。動物の嗅覚は人間より敏感ですが、道徳、悪い行い、善悪を判断できません。けれども人間には判断できます。私たちは天国に行くか、地獄に行くか、あるいはこの娑婆世界に留まるのかを選択できます。けれども、人によって智慧が違うので、天国に行くことを選択したくても結局地獄に行ってしまったり、解脱を選択しようとしても、結局間違ってしまったりして、生死輪廻することになります。

ですから、もし自分でよくわからなければ、善知識（真理がわかっている人）を探して指導を受けなければなりません。ただし指導を受けるのも初めのうちだけで、その後は自分で歩き、自分が善知識、マスターにならないければなりません。なぜなら、私たちはみな自分自身のマスターだからです。どんな人でも医者になれるのと同じで、医師に従って学ぶと医者になれます。仏陀も同じです。ですから、釈迦牟尼仏は「あらゆる衆生には、すべて仏性がある」と言いました。私たち人間はこの一世で仏陀になれます。釈迦牟尼仏はうそをつきません。これは本当のことなのです。私は十分な個人的経験から、仏陀が言っていることは真実だと保証します。もし、この一世で仏陀になれなくても、少なくとも菩薩になれます。必ず大菩薩摩訶薩になれることを保証します。

(Mはマスターの答え、Qは聴衆の質問)

Q もし、ある人が修行して仏陀になったとしたら、その仏陀は釈迦牟尼仏と同一の仏陀ですか、それとも違う仏陀ですか。

M 彼らのレベルは同じですが、しかし、同じ人ではなく、違う人でもありません。

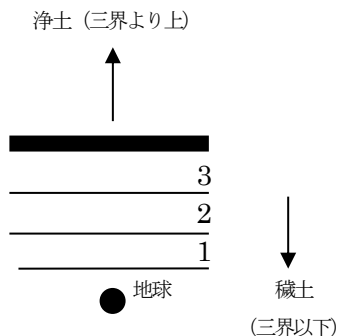
Q 印心を受けていない人、修行もしていない人は、そのような奇妙な音を聞くことがありますか。もし、似たような境界（きょうがい）を見たとすると、それが本物か偽物かをどうやって見分けるのですか。

M 修行していない人でも音が聞こえることがあります。それは本物の音ではありませんし、いつでも聞こえるのでもありません。またその人には、それがどんな境界を表しているのかもわかりません。けれども私たちの法門は完璧な法門で、本物と偽物を見分けることができ、保護のパワーがあり、魔に取りつかれて困惑するようなことはありません。修行すればするほど境界が高くなります。

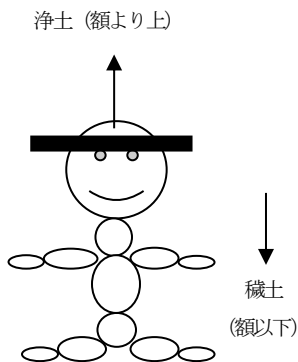
観音法門の修行者はいつでも内在の音があり、境界も見えます。今日は見えて、明日は見えなくなるのではありません。それが続かないということは、それは本物の境界ではありません。本物の境界というのは、今日は見えて、明日もまた見えるのです。例えば、このお寺は本当に

存在していて幻ではありません。いつでもここに来て同じものを見ることができません。もし夢か幻想なら、今日は見えても明日は見えません。

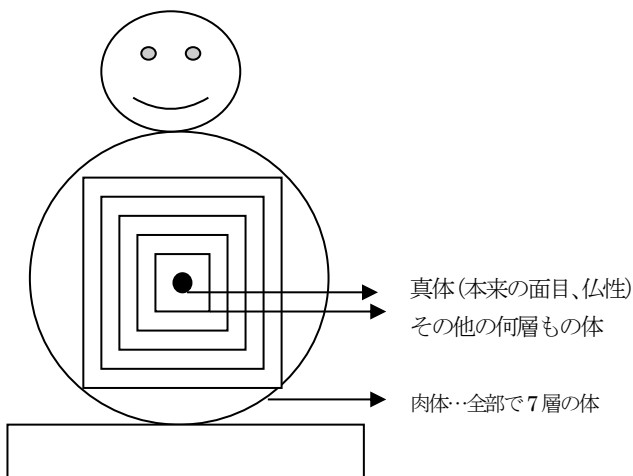
真のマスターについて学べば、どんな境界にはどんな音があるのかがわかります。マスターがあなたに法を伝えたあと、あなたは毎日聞こえるようになるので、聞きたいと思えばいつでも聞こえるのです。伝法は内在の音が聞こえることを保証するものです。私たちが修行に精進すれば、境界はますます高くなります。聞こえてくる音から自分がどんな境界にいるか、レベルはどうか判断できます。というのは、伝法するとき、マスターがはっきり教えてくれるからです。まるで地図のように各所に標識があり、どこを見てもすぐにわかります。ですから、人の体は大変貴重です。マスターは犬に伝法しません。犬にも仏性はありますが、ないようなものです。たとえ犬に伝法しても犬には使えないのです。私たち人間は違います。言葉の意味がわかりますし、たとえ言葉がわからなくても潜在意識でわかるのです。マスターは話をしなくても伝法できます。伝法するとき、まったく話しません。話は伝法の前の紹介くらいで、実はこの紹介はなくてもかまいません。私がしていることを真似すればいいのです。こうするだけでもみなさんはこの法門を得ることができます。一言も言わなくても動かなくてもいいのです。なぜなら、「諸法空相(すべての存在は実体がない)」だからです。六祖慧能が伝授していたのはこの「無相法(実体のない法)」であり、私が伝授している法とまったく同じです。



<図1 >



<図2 >



<図3 > 注釈：マスターは「真体は本来説明できるものではありません。みなさんにわかりやすいように、この図と言葉で説明します」と言いました。



阿修羅の衆生

スプリームマスター チンハイ フォルモサ・台北

一九八七年三月十三日

みなさんお久しぶりです。今日は阿修羅についてお話しします。みなさん聞きたいですか。フォルモサ（台湾）には座禪を教える人や、さまざまなことを教える人がたくさんいるそうです。聞くところによると、初めは少し感応もあるようですが、時間が立つとみな問題が起きて、多くの人が魔に取り付かれたり、頭がおかしくなったりするそうです。たくさんの方が私の所へ来て、そういう問題について質問します。一部の人は神通力があって、人々にあちこち飛び回る方法を教えたり、滅茶苦茶なことをやらせたりしています。しかし、こういうことに興味を持ち、好む人がいるのです。というのは、今までは手印が結べなくても、そこで習うとすぐできるようなからです。手印が結べなくても、少なくとも飛び回ることや、体を振動させることができるようになりますが、その後しばらく経つと、多くの問題が生じるのです。そこで多くの人が私の所へ来て質問し、このような目に遭ったことについて私に訴えます。けれども、一部分の人がいまだにそういうことを信じているので、私は今日、特別にこのテーマに

ついて話します。とても面白いテーマです。

フォルモサだけで、このようなことが発生しているわけではありません。私がドイツにいたときにも、こういった人にたくさん出会いました。彼らは真の師について学んでいないので、家に帰ってから一日中、音が聞こえてくるのです。この音は美しい音ではなく、人が話をしてる声で、とてもうるさくて、その音を聞くと食べられなくなり、寝られなくなるのです。その音は私たちを眠らせず、聞き過ぎると大変疲れて、体は弱り神経もおかしくなります。実際これは何も神秘的なことではなく、彼らの大半は低いレベルの阿修羅の衆生なのです。

私たちが往生したあと、大きな福報がなければ、天に上ることはできません。福報が少し多ければ天人になり、福報が最大の人が菩薩になり、さらに仏陀になれる人は極めて少ないです。今ここでは仏陀になれる話はしません。生前にあまり多くの福報もなく、大きな罪も犯さなかった人は死後、地獄に行くことはなく、ふらふらさまよう魂になることもなく、彼らは低いレベルの阿修羅になり、阿修羅の場所に住みます。そこは私たちの地球に一番近い所です。それよりも少し高いところに天があります。

阿修羅の場所は二つのレベルに分けられます。天国と地獄です。しかしこの地獄は天国とあまり差がなく、両方とも阿修羅の領域にあります。地獄にいる人はそこから出られず、まるで犯人が刑務所に入っているようで自由ではありません。けれども天国に住んでいる阿修羅は自由で、行ったり来たりできるのです。彼らには神通力（超能力）もあり、戦うのが好きで、人

をからかったり、トラブルを起こしたり、人を操って何かさせたりします。実際、人をもてあそび、人と遊びたいだけで、時には悪意がないこともあります。

ある人たちの靈魂は比較的敏感です。ここで言う靈魂、または主人はみな同じもので、靈魂は私たちの体から外へ出て行くことがあり、この時、他の衆生が私たちの体をしばらく借りて住む可能性があります。この体を借りて何かしたいと思うかもしれないし、悪いことをしたり、あるいはいろいろなことを楽しもうとしたりしているのかもしれないし、体によくの衆生が住みついたりするとき、私たちはその人を「魔に取り付かれた」と言います。そういう人はさまざまに変な声を発したりします。一人の人間が話しているのではなく、本人は話したくなくても口はコントロールできず、いろいろな変な声を発するのです。たくさん阿修羅の衆生がその体を借りて住みついているので、でたらめを言ったり、でたらめなことをしたりしますが、自分自身でそれをコントロールすることはできません。

けれども、阿修羅には比較的善良なものもあります。やって来てしばらく遊んでから出て行くこともあります。こんなときはいいのですが、ある阿修羅はとても貪欲で、人の体を操って、永遠にそこに住みついて自分のものにしたがり、いったん住みついたら、なかなか離れようとしません。まるで人が住んでいない空き家を見つけたかのように、そこに住みつき、追い出さうとしても追い出せないのです。阿修羅は強引にこの家を独占しようとするのです。

もし正しい修行をしていなくて、しかも靈魂が比較的敏感な人は、良いマスターの指導がな

ければ、また良いパワーの保護力がなければ、こういう低いレベルの阿修羅の衆生に出会いま
す。彼らが入ってくる時はわかりません。耳で誰かが話しているように聞こえることがあ
りますが、しかしそういう人は見えません。時には見えることもありますが、それはその人の
敏感さによります。というのも、幽霊が見える人は阿修羅が来ても見えるのです。

けれども、阿修羅が来るとき、阿修羅は私たちに自分が阿修羅ではないように見せるのです。
彼らには神通力（超能力）があるので、とても莊嚴な姿に変身したりします。例えば釈迦牟尼
仏とか、阿弥陀仏の姿で現れることもあります。ひどい場合は私の姿で現れることもあります。
けれども、修行者は良いマスターの指導があれば、すぐに本物か偽物かを見分ける方法を持っ
ています。

例えば阿修羅は私の姿に変身してみなさんに話しかけたとすると、私の弟子であれば、すぐ
に阿修羅が変身したのか、本当のマスターの化身であるかを見分けることができます。しかし、
私について学んでいない人や、良いマスターの指導がない人は、阿修羅が阿弥陀仏や、イエス・
キリスト、観音菩薩、その他の仏陀や菩薩に変身した姿を見分けられなくて騙されてしまいま
す。その阿修羅は彼らを操り何かをさせると、彼らは本物の仏陀や菩薩が見えたと思い、とて
も尊敬して礼拝し、阿修羅の言う通りにします。しかし、そのほとんどは人に滅茶苦茶なこと
をさせるのです。人を操って説法をさせたり、法を弘めさせたり、さまざまな手印を結ばせた
り、興奮させて、あっちこつちと飛び回らせたり、耳で人間の話し声で、何かをするように

指示するのです。しかし、これらはいずれも無意味なことです。その偽物の仏陀が言ったことは大抵間違っています。時には小さな予言をしたりしますが、それらはほとんど偽りで間違っています。例えば、明日何か発生すると予言しても、実際は何も発生しません。でもなかには、百のうち一つくらいは、当たっているかもしれません。

そのような魔が来たとき、本当の修行者にはわかりませんが、そうでない人にはわかりません。そのような阿修羅の衆生が、私たちの体に住みついたり、あるいはしばらく体に入っていると、魔は私たちに多くのことをやらせたり、他人とけんかをさせたりするので。

八ヶ月前に私がドイツに行ったとき、お寺に住んでいました。あるオウラック（ベトナム）の奥さんがいて、彼女は一日中声が聞こえてくるのだそうです。息子の悪口やお嫁さんの悪口や、二人が彼女に対してどんなに悪さをしているかを言うそうです。実際にはそんなことはありません。これはトラブルを起こして、故意にけんかさせようとしているのです。そのあと、彼女を仕事へ行かせて、そこで凶器を使って人と喧嘩させます。本当に暴力的な喧嘩で、ナイフを持って人を追いかけて殺そうとしたり、人を殺さなくても、たびたびこのようなことを起こすので、もちろん仕事を失いました。彼女は家にも落ち着きません。なぜなら、息子やお嫁さんのことが好きではなく、毎日喧嘩をして誰でも疑うのです。それは阿修羅が、毎日彼女の耳元で「みんながあなたを疑っている。あなたのことを良く思っていない。あの人は今こんなことを考えている。彼はあなたを悪い人だと思っている。五分後にはあなたを殴りに来る。」

二時間後に彼はあなたに良くないことをすると言っているからです。いつもこう言うのです。魔に取り付かれた人はそれをみな信じます。信じてその人とけんかするのです。実際にはそんなことはまったくありません。

それらの魔は人とけんかするのが好きです。というのは彼らは阿修羅で、本性は戦いが好きだからです。戦いが好きな人は生前に、良くけんかをして死ぬと阿修羅になります。ですから、彼らの戦いが好きな性質はなかなか断ち切れません。そこで彼らは敏感な人や、あまり智慧のない人、または簡単に他人を信じてしまう人を利用して、けんかをさせては、阿修羅の衆生はそばで面白がって笑っているのです。

時には、阿修羅は釈迦牟尼仏、観音菩薩、済公（さいこう…宋代の僧、あるいはその他のいろいろな無名の神に変身しては、自分は何々神、何々仏と言って、人々に教えにここに来たと言い、人々に礼拝させるのです。時には経の講義もします。言っていることが間違っていないのは、彼らもいろいろと学んでいるからです。私たち人間も学んでいるのですから、魔だつて学んでいるのです。彼らはまず経の講義を聞きに行つて、聞いたことを人に話して聞かせます。そして人々に礼拝させたり、供養させたりします。時には人々に何人もの奥さんをもらわせます。それは彼ら自身が女好きで、大変好色ですが自分には体がなく、この世のことが享受できないので、人に何度も結婚させたり、人に肉食をさせたり、何か珍品を食べさせたりします。これはいずれも阿修羅自身が好きなのですが、自分に体がなくて楽しめないのです、目的を達す

るために人の体を借りて、それを利用して楽しむのです。

タバコを吸って、酒を飲んだりするのも、阿修羅に影響されているからです。本人が求めているわけではありません。修行者で智慧眼が開いている人には、タバコを吸っている人、麻薬を使っている人、賭博をする人、酒を飲む人たちが、多くの無形の阿修羅の衆生に囲まれているのが見えます。阿修羅はタバコの匂いがとても好きで、その匂いを嗅ぐだけでもとても楽しくなるのです。体がないので自分ではタバコを吸うことも、賭博をすることも、麻薬を使うことも、酒を飲むこともできないので、意志が弱くて敏感な人を利用してタバコ吸って、酒を飲むように促すのです。

ですから、お酒を飲んでいる人は、もつともつと大量に飲むようになります。それは阿修羅が一人だけではなく、友だちを三、四人連れて来て、それぞれ少しずつ分けてもらって飲んでいくからです。阿修羅がたくさん集まると、もつとたくさん飲むようになります。それで、お酒を飲んでいる人は簡単にやめられないのです。やめようと思ってもやめられません。タバコを吸う人も簡単にやめられません。麻薬を使う人や、賭博をやる人などみな同じです。ですから、中国語では彼らを「賭鬼、酒鬼」と言います。私は冗談を言っているのではなく、一般人の先入観ではなく、これは真実の比喩です。

観音法門の修行者はすぐにやめられますが、修行をしていない人はとても難しいです。私たちの所には多くの修行仲間がいますが、そういう人は実際、それほど多くはありません。何人

かいるだけです。なぜなら、タバコをたくさん吸う人で、修行をしたいと思う人はそんなにいません。その何人かの修行仲間はもともと一日三、四箱のタバコを吸っていました。今、そのうちの一人がここにいます。私は誰とは言いません。彼は人に知られたくないかもしれないからです。もともと毎日タバコを三、四箱吸っていました。印心後はすぐにやめました。今は一本も吸いません。彼だけではなく、友だちも影響されて吸わなくなりました。

酒を飲む人も同じで、五十歳までずっと酒を飲んでいた人も、印心後はすぐにやめました。私たちの法門を学ぶとすぐにやめられます。今はタバコも吸わなければ酒も飲みません。肉も食べません。とても速く、とても自然に全部やめました。私が伝法したあとは、タバコはまったく吸わず、酒も一滴も飲まなくなりました。友だちは彼の見違えるほどの変化に驚いて、なぜ突然こんなに変わったのかと言います。これは現代の実例です。昔の物語ではありません。

酒を飲むのは阿修羅の影響を受けたからです。みなさんは信じますか。このようなことを見たことのある人はいますか。阿修羅の衆生はとても荒々しく、悪さが好きで、タバコを吸ったり、酒を飲んだりすることが好きなので、私たちは影響されることがあります。どんな阿修羅に影響されたかは、自分でわかるはずですよ。

修行がしつかりできていない人や、正しくない法門を修行している人、または修行の目的が正しくなかったり、修行していても自分が清浄でなかったりする人、例えば、より多くの名声や利益、神通力を得るために修行する人や、修行すると言いながら、欲を断ち切ることができ

ず、相変わらず好んで衆生の肉を食べ、酒を飲んで、邪淫をする人たちは、度が過ぎると阿修羅に体を利用され、悪いことをしてしまいます。これは比較的ひどい阿修羅です。小さい阿修羅は、人とけんかをさせたりするくらいです。もつと小さい阿修羅は私たちに酒を飲ませたり、タバコを吸わせたりします。

阿修羅は修行者を利用するだけではなく、どんな人でも利用します。ひどい阿修羅衆生が最も利用したがる人は、修行が清浄でなく目的が不純な人です。小さい阿修羅は、敏感で意志が比較的弱い人を利用してタバコを吸わせたり、酒を飲ませたり、麻薬を使うようにさせ、その人の体と精神を壊すのです。そういう人たちは本当にかわいそうです。本来そんなことをするのが好きではなく、する必要もないのです。自分が軟弱なため利用されるのです。

このようなケースはとても多く、しっかりしないと多くのトラブルを引き寄せます。そういった阿修羅たちはその人たちに、自分が仏陀や菩薩であると信じさせます。本来ならば、私たち普通の人はそれを判断できる聡明さを持っているので、仏陀や菩薩なのになぜこんなことをしたがるのかと疑います。仏陀や菩薩は最も崇高で、高貴で、大智慧があり、大慈悲であるのに、どうして何人もの奥さんを欲しがるのか、どうして動物の肉を食べたがったり、酒を飲みたがったりするのかと疑います。しかしその時、阿修羅は彼らの道理で釈明するので、体を阿修羅たちに占領された人たちは、それを信じてしまいます。いったん阿修羅にコントロールされるともう逃げられません。阿修羅の言うなりになり、自分の主権を失い、だんだん軟弱にな

り、だんだん自分の能力を失い、何でも必ず阿修羅に頼らなければなりません。自分の存在がなくなり、そして自分も阿修羅になってしまいます。

もし、私たちの中に主人が住んでいなければ、この体は役に立ちません。この主人を私たちは霊魂、あるいは本来の面目と言います。あるいは智慧と呼んでも構いません。もし、この主人あるいは霊魂が住んでいなければ、私たちの体は何の役にも立ちません。いったん阿修羅にこの体を利用されたら、阿修羅になってしまいます。

この世界にはたくさん阿修羅やその他の衆生が充満しています。私たちの智慧眼が開いたら、ここに座って経の講義を聴いているのは、みなさんだけではないことがわかります。私が講義をするときは、仏陀や菩薩、私の本来の面目が講義しているのであって、私の体が講義しているわけではありません。みなさん以外にその他の衆生、天人、阿修羅もみな講義を聴きに来ています。けれども、みなさんは智慧眼が開いていないので見えません。ここにはみなさんしかいないと思っているのです。

この世にはたくさん阿修羅がいます。幽霊も魔もいます。ですから、人間として見えていても、必ずしも人間ではないのです。けれども、智慧眼が開いていないと、それを見分けることはできません。誰が人間で、誰が幽霊で、誰が魔で、誰が阿修羅なのかわかりません。もし見えたら怖いでしょう。その人が人間でないと、わかるのは怖いことです。

阿修羅の衆生は自ら私たちに悪さをするだけでなく、時には家族を利用して私たちを困らせ

ます。例えば、私たちが修行しようとする、阿修羅は私たちを困らせませんが、もしその目的を達成できないときは、私たちの家族、お父さん、お母さん、子ども、奥さん、夫などを使つて私たちを煩わせ、私たちの修行を妨げます。これはみな阿修羅の影響を受けた結果です。比較的高いレベルの阿修羅だとしても三界以下のものにすぎません。私は「非想非非想天」等、仏教の用語は使いません。大変面倒だからです。私は比較的簡単に第一界、第二界、第三界、第四、五、六などとわかりやすく説明しています。

第一界は阿修羅の衆生でいっぱいです。第二界は比較的に善良で、知識のある人が行ける所です。第二界はたくさんレベルに分かれています。仏教の経典で説明してあるので、私はみなさんの時間を浪費したくありません。そのような境界（きょうがい）の名称を研究したければ、自分で仏教辞典や経典を読めばわかるでしょう。

第二界はたくさんレベルに分かれています。ですから、第二界の衆生にもそれほど善良でない衆生がいます。少し高いレベルまで修行したとき、例えば第二界のレベルに達したとき、彼らの影響を受けるでしょう。阿修羅よりパワーがあるので、もっとひどく困惑します。第二界まで修行するのは大変難しいことです。仏陀や菩薩に出会うのはもっと簡単ではありません。それは路（みち）の途中にはさまざまな関門があり、そこには多くの衆生たちが通過させまいといういろいろな邪魔をします。

阿修羅の衆生にはいくらか神通力があるので、私たちに天眼通の能力を貸してくれることも

あります。体がないので、体のない人は私たちより自由で、あっちこっち飛び回ることができ、素早くどこにでも行けます。阿修羅の衆生には無形の衆生が見えます。もともと彼らも無形だからです。ですから、目は私たちより良く見えて、時には人の心を見通すこともできます。そして一つか二つの事柄を言い当てることもできます。けれども、これも大したことはありません。もしある日その阿修羅が出て行ったら、私たちは相変わらず、何も知らず、何もわからない人間に戻るのです。しかも前よりもっと愚かで、もっと軟弱になります。それは今、この体に慣れていないので、どうやって使って良いかわからないからです。阿修羅が私たちの体を使うときは、私たちの靈魂を追い出して、私たちはまるで死んだようになり、靈魂はそばに立つたまま、何が起きているかはわかっていても、阿修羅に完全に押え付けられているので、自身をコントロールすることができません。

先ほど私は言いましたが、多くの敏感な人は魔に利用されます。これは彼らが比較的天真爛漫で、容易に人を信じるからです。それで阿修羅に利用されるのです。これが一つのケースです。もう一つのケースは、修行するときに良いマスターの指導がなく、良い法門の保護がなく、あるいは目的が不純な場合です。修行すると神通力を持ち、名利も獲得できて、多くの人に崇拜されるなどということを目的としているのです。もしそういう考え方で早く神通力を獲得しようとする、阿修羅はとても喜びます。こういう人の貪欲な心を利用して、神通力を見せ、彼らを信じさせます。本当に仏陀や菩薩が教えに来たと思いきませ、阿修羅はそのふりをして

「あなたはとても修行が好きだから、教えに来ました」と言うのです。阿修羅も經の講義ができません。いろいろな話をして、そして偽物の境界（きょうがい）に遊びに連れて行くこともできません。

ですから、私たちは修行をするときは良い目的を持たなければなりません。これが最も重要な点です。いわゆる高い理想とは自分が解脱を求めることであり、同時に、衆生の生死からの解脱を助けることでなければなりません。この高貴で純粋な目的の他に、最高の法門と、最高のマスターがなければなりません。そうすれば修行は安全です。毎日一、二、三、四と呼吸を数えて、これも修行だと思っではいけません。これは初歩的な方法にすぎません。

先ほど言いましたが、もし修行者が神通力を貪欲に求めたら、阿修羅が偽装する仏陀や菩薩の格好に騙されて、そして偽物の境界に連れて行かれます。例えば西方浄土、この西方浄土は当然偽物で、本当の西方浄土ではありません。阿修羅の所にも、そのような創造の能力があつて、少し福報がある阿修羅は、偽物の境界（きょうがい）を作り出すことができ、ほんの少しの西方世界の景色を造り出すこともできます。そしてその人を連れてそこへ遊びに行くこともできます。一般の人はまだ本当の西方浄土に行ったことがないので、本当に自分が見た景色が本物か偽物かまったく見分けることができません。

その状態はまるで人が催眠術をかけられたか、酔っぱらっているかのようです。他人が何を言おうと、「はい」「はい」「はい」と答えるのです。自分には本当の智慧がなくて、明晰な頭腦

もなく、他人が何を言っても混沌としていて、見えているのが仏陀だと思い、本物か偽物かもわからずにすぐに礼拝し、近づくこともできません。これではどうやって本物か偽物かを見分けることができるのでしょうか。

その偽物の仏陀があなたに「あなたは今、仏陀になりました。阿羅漢になりました。何々菩薩になりました。あなたの今の任務は人に教えることです」と言うのです。偽物の仏陀が私たちに一つの方法を教えては、こうしなさいと指示します。それで私たちは今、多くのいわゆる人に教える「先生」を見かけるのです。彼らも人に体験を与えることができ、飛び跳ねたり、ゆらゆらしたり、さまざまな手印を結んだり、耳元で人の話し声が聞こえたり、明日、明後日に何かが起きると予言したりさせることができます。また阿修羅の人は病気を治すこともできますが、パワーに限界があるので軽い病気だけ治せます。けれども私たちはますます信じ、信じてしまえば、彼らが何を言っても私たちはその通りにするのです。

時には、阿修羅はUFOを作り出すことができ、一人か二人を中に乗せて、遊びに連れて行きます。私たちは天人が来たかと思いますが、実際はUFOなのです。阿修羅が私たちを遊びに連れて行く所は阿修羅の世界だけです。でもみなさんに言っておきますが、阿修羅の場所もとてもきれいで、そこへ行くと本当の天国に来たかと、本当の究極の涅槃に来たのかと勘違いしてしまいます。本物と偽物の区別ができません。阿修羅の世界は私たちの世界より百倍もきれいで、その女性もとてもとても美しいです。ですから、本当の良いマスターがいなければ、

良いガイドがなければ、自分の修行の力で行ったとしても、阿修羅が連れて行ったとしても、どちらにしても迷子になります。あの美しい景色を見ると、私たちはそこが本当に素晴らしい、良い所だと思ってしまう。もし今、阿修羅を信じたら、死んだあと阿修羅は私たちを連れて行きます。

生前に福報がなければ、死んだあとは当然すぐに地獄へ行きます。少し福報のある人はあの「一流の地獄」、つまり阿修羅の天国に行けます。その他に「二流の地獄」があり、これが本当の地獄ですが、二つとも地獄と言えます。それはみな阿修羅の場所にあるからです。たとえ阿修羅の世界にいても長生きでき、ある人は千年生き、あるいは二、三千年生きることができます。時には何百万年も生きられることさえあります。もしそういう状況に出会うと、もう究極に達したと思いい、不老長寿で、永遠に存在する場所だと思いい、西方浄土の極楽世界だと思いいです。まだもつともつと高い境界（きょうがい）があることがわからないのです。

ほとんどの人はしばらく修行すると、自分は仏陀になったと言います。彼らは「あらゆる仏陀が自分の所へ教えに来た」と言うのです。仏陀に会えることはそんなに簡単なことではありません。修行に精進し、誠心誠意で純粹でなくてはなりません。その純粹さの純度はまるで透明な琉璃（青色の美しい宝石）のようで、まったく不純物も含んでなく、ただ誠心誠意に解脱を求め、智慧を探すため、衆生を救うために修行するのです。しかし、必ず本当の「マスター」を探し出さなければなりません。そのマスターに従って何年か修行してこそ、一人か二人の仏

陀に会えることができるのです。ほとんどの人が修行はとても速いという思い込みをしていて、仏陀に会いたければ、すぐに会えると思っっています。自分は特別だと思っっているからです。それは不可能なことです。

この娑婆世界ではたとえ医者になろうとしても、長い間勉強しなければなりません。教師になろうとしても、先生について何年も勉強して、豊富な経験を積んでから教師になれるのです。何を勉強するにしても長い時間と努力が必要です。この世のものを学ぶのでもこんなに簡単ではないのに、仏陀になることを学ぶのはなおさらです。そんなに速く成功するのは不可能なことです。そういう人は、この宇宙の法律は自分とは関係ないと思っっていますが、どうして関係ないのでしょうか。どんな衆生もこの娑婆世界に住むなら、誰であろうとみな娑婆世界の法律を守らなければなりません。たとえ釈迦牟尼仏でも例外ではありません。

ですから、釈迦牟尼仏は在世のとき、「私たち仏陀から衆生に至るまで、みな衆生の四重の恩、つまり国家の恩、父母の恩、師の恩、友の恩を受けている」と言いました。娑婆世界にいれば、仏陀でも、菩薩でも、衆生でも、すべてこの四重の恩を受けるのです。この恩恵を受けるのは、修行者も同じです。その恩を忘れない態度が必要で、この世界の決まりに従わなければなりません。そうでないとトラブルが起こります。

釈迦牟尼仏やイエス・キリストも同じことを教えています。まず人に、道徳を重んじること

ない仏陀になってしまいます。この世界において、道徳心がなければそれだけで人に嫌われるのに、どうやって西方浄土に行かせて、浄土で道徳心のない菩薩にさせるのでしょうか。楞嚴経（りようごんきょう）の中で、肉を食べる人、酒を飲む人は修行すると魔になり、菩薩にはなれないとはつきりと述べています。

私が言っているのは小さな例にすぎません。ほとんどの人がでたらめに修行していて、自分たちはもう宇宙の法律より高くなったと思いい、衆生の肉を食べても、夫や、妻を何人も持つても、嘘をついても、人を騙しても、人から金をたくさん取っても大丈夫だと思っっています。自分はまだもう仏陀になった、自分の成就是宇宙の法律より高いと自認しているからです。

たとえ解脱しても戒律は守らなければなりません。しかもしっかりと守るべきです。この法律（戒律）を尊重してこそ解脱ができるのです。さもなければ仏陀や菩薩も落ちてしまいます。

もし求道心が失せたり、道徳心が足りなかつたりすれば、すぐに降ろされてしまいます。例えば一国の大統領にしても、その国の最高の代表ですが、もし法律を犯せば同じように警察に捕まえられ、法の裁きを受け、裁判所の判決により刑務所に入れられるのではないですか。大統領だからやりたいことは何でもやるということではありません。仏陀や菩薩の場合も同じです。

時には、個人の事情で菜食ができないとか、自分は凡人なので、まだできないとか、本気で修行ができないといった場合は、私はまだ理解できません。これは故意にしたことではないのです。かといってカルマを避けることはできません。故意にしても故意でなくてもカルマはあるので

す。原因があれば結果があります。例えば夫か妻が、あなたが修行するのを好まず、菜食の食事を作ってくれなかったり、菜食を食べる場所がなかったりといったことは、実際によくあることです。これは人を騙すようなことではないのでまだ理解できます。

けれども、ある人たちは肉を食べ酒を飲み、邪淫をしていながら、自分は仏陀だと自認してありますが、それはありえないことです。先ほど言ったように、菜食できない、本気で修行できない人たちは、自分の事情がよくわかっているのです。例えば、仕事の関係や、それとも夫が妻が反対しているなどです。けれども、ある人たちは何を食べても何をしても構わないと思っていて、邪淫をしたり、殺生をしたり、肉食をしたり、飲酒をしたり、金を盗んだり、人を騙したりなど、でたらめな行いをするのです。その人たちはもう仏陀になっていると自認していますが、どうしてそんな仏陀がいるのでしょうか。私たち凡人でも、そんな人を受け入れられないのに、どうしてそんな仏陀に礼拝できるのでしょうか。私たちの先生として、ふさわしいでしょうか。これは道理に合っていません。

たくさんの方が修行していますが、仏陀になった人はとても少ないのです。この宇宙の法律を理解していませんので、阿修羅の衆生に騙されるからです。「私は何々仏です。あなたを教えに来ました。あなたは今すでに仏陀になりました。こんな些細なことにこだわる必要はありません。修行にあまり執着しないことです」などと言います。このような話をして、私たちに自分は大したものだと思うせ、自分のレベルはもう相当高いので、宇宙の法律など気にしなくても

よいと思わせます。もし、本当にこんなふうになってしまうと大変なことになります。ですから、修行者は智慧がなければ、容易に騙されるのです。そしてそこから脱出することができません。そういう魔の力がとても強いからです。私たちが脱出しようとしても離れられるものはありません。阿修羅は私たちを引き戻します。私たちを行かせないばかりか、大きな石を置いて、私たちの前を遮るのです。

ですから、修行者には必ず良いマスターの指導が必要です。在世のマスターであることが大変重要です。その理由は二つあります。第一にマスターは私たちに、修行の最も基本的な規則は何なのか、修行の道徳はどうあるべきか、心は必ず純粹であること、理想と目的はとも高くなければならない、などと指導してくれます。そうすれば魔に取り付かれることもなく、魔に騙されることもありません。

第二に、例えば私たちがメデイトーション中に、現在のマスターが見えたら、私たちはマスターを識別することができません。私たちはマスターの外見を知っているので、私たちのメデイトーション中に現れても同じ容貌で現れます。けれども、もし現在のマスターがいなくて、メデイトーション中に過去のマスターが現れて私たちを連れて行こうとしたり、講義をしたりしても、私たちはその人が本当に過去のマスターかどうか知る方法がありません。私たちは過去のマスターに一度も会ったことがないからです。釈迦牟尼は死後すでに二千五百年経ちました。イエス・キリストもほぼ二千年前に往生しました。ふだん私たちが見るイエスや釈迦牟尼

仏の外見はすべて人々が想像して描いた絵か写真です。ですから、もしメデイテーション中に、イエスや釈迦牟尼仏が私たちの前に現れても、私たちは本物か偽物かわかりません。ただ現在のマスターを見たときだけ、本物か偽物かわかります。

私たちがメデイテーションをして高い境界（きょうがい）に行くと、本当のマスターに会うことができます。私たちに煩わしいことがあると解決してくれて、私たちに障害があると助けてくれます。マスターは私たちを高い境界に連れて行き、その時に本当に過去のマスターに会うことができます。さもなければ、自分の正しくない修行によって見えた過去のマスターは本物かどうか定かではありません。私たちはイエス・キリストや釈迦牟尼仏の容貌がどんな感じか知らないからです。しかも阿修羅の場所は、そういう人を騙す偽物に満ちています。

ですから、私たちが修行するときには、必ずマスターの指導がなければなりません。それは阿修羅の場所を通るときにこれを見てはいけない、目を閉じて急いで通りすぎなさいとマスターが教えてくれるからです。あるいはマスターは何かを使って、その良くない境界（きょうがい）を遮って、私たちに見えないようにします。ですから、メデイテーションするときには目の前が暗かったり、あるいはカーテンがかかっているような明るさを感じたりします。このようにして、マスターは私たちの手をとって阿修羅の場所を通過するのです。阿修羅の場所を通り抜けてからカーテンを開けて、私たちに見せるのです。もし私たちの修行のパワーが足りなければ、人間の世界より美しいあの阿修羅の境界を見たら、それが究極の場所だと思い、そこに

留まってみたくありません。そうなると阿修羅に引っ張られてしまいます。引っ張って行かれるときに、たとえマスターが真相を話してもあなたはもう聞きこうとしません。阿修羅は「あなたのマスターは大したことはない。いらつしやい。私が阿弥陀仏に会いに連れて行きましょう」などと言います。阿修羅はこういう言葉で誘惑して騙します。騙されたと気がついたときにはもう手遅れです。

ですから、本当の法門を修行すると、すぐに境界（きょうがい）が見えないかもしれません。というのは、もともと低い境界だったら、マスターは私たちに見せないからです。でも、まったく見えないわけではありません。例えば光が見えるとか、路（みち）が見えるなどです。そして私たちがどこまで歩いて来たかわかりますが、ただ境界は見えません。境界が見えることが良いとは限りません。とても低い光景が見えても阿修羅に誘惑されて迷子になり、そこに陥ると離れられなくなります。というのは、そこが大好きなので、当然彼らは私たちを連れてそこに行きます。すると阿修羅はさまざま手段で私たちを信じさせ、彼らの部下にしてしまうのです。

たとえ仏陀を見たとしても、私たちはそんなに喜んではいけません。これはまだ究極の場所ではなく、この音と色の境界を越えなければなりません。そうしてこそ、私たちは真の主権（真我）を見つけることができるのです。というのは音があって、色があって、仏陀がいて、私がいるということは、まだ二元論の次元で、まだ「私」が「仏陀」を見たことであって、まだ「私

は仏陀だ」と言うのではないからです。ですからメデイテーション中に仏陀が見えたり、マスターが内面に現れたりするのは、みなさんを少し高い境界に連れて行こうとするにすぎないのです。しばらく修行して、ある境界に到達すると、私たちは天井にぶつかったかのように、どんなに努力しても、それを乗り越えることができません。そのときは、どんなものも私たちを上に連れて行くことはできません。私たちを上に引っ張って行ってくれるのは、マスターしかいません。私たちを連れて一時的な障害を突破し、そして私たちは引き続き進むことができます。

ですから、私たちを導くマスターがなくてはならないのです。メデイテーション中に内面にマスターが現れて、私たちをもっと高い境界に連れて行ってくれるのを見て、もう大したものだと思っただけではありません。このようでは、まだ私にマスターがいる、私はマスターを崇拜するということ、まだ「私はマスターである」ではないのです。私たちはマスターにならなければなりません。私たちはマスターであり、このレベルに到達したら、最高の境界（きょうがい）と言えます。自分自身がすなわちマスターであることを、まだ認識できてない段階では、他のマスターにガイドしてもらわなければなりません。ですから、禅宗では「佛来佛砍、魔来魔砍（仏陀が来ても、仏陀に執着しない、魔が来ても魔に執着しない）」と言います。しかし多くの人は言葉で言うだけで、自分は体験していません。彼らは仏陀になろうと思わないで、何も祈願しないことが最も素晴らしいことだと思っただけです。そうではありません。自分の

体験がなくてははいけません。そうしてこそ、仏陀が来ても仏陀に執着しないと云えるのです。もし本当に仏陀を見てもないのに、それに執着しないと云えますか。仏陀に執着しないと言うのは、もつと高い境界に行くためです。

インドにとっても有名な修行者がいました。何十年も修行してやつと大マスターになりました。まだ仏陀になる前に、まだ金剛三昧、つまり最も究極の阿耨多羅三藐三菩提（あのくたらさんみやくさんぼだい）になる前に、女神を崇拜していました。これは私たちが観音菩薩を崇拜するのと同じです。その女神を大変崇拜していて、女神に会うのがとても好きでした。しばらく崇拜していると、その女神像が生き返って、彼は毎日女神像と話をすることができました。そのお寺に行くと、その女神像は降りて来て彼と話をしたり、何かを教えたりしました。彼はとてもうれしくて、女神像と親しくしました。けれども、その後マスターに出会って、マスターの講義を聞いてから、これは大したことではないとわかりました。

例えば、私たちは観世音菩薩や、イエス・キリストや聖母マリアがとても好きなので、彼らと通じ合って話をしたり、彼らが見えたりすることがあります。その時、私たちはきつととてもとても素晴らしいことだと思うでしょう。けれども、私たちがどんなに彼らに近づいても、崇拜しても、やはり外面のことで、彼らを見たとしても、それでもって自分が誰なのかを知ることはできません。私たちに本来どんな能力を持っているか、どんな権力があるか、この宇宙の本当の状況はどうであるかを理解することもできません。

そのインドの修行者はマスターに会ってから、すぐに自分が見たのは究極の世界ではないことがわかりました。マスターは彼に修行の法門を教え、彼は一生懸命修行しました。進歩も速かったのですが、ある段階に到達すると、それを突破できませんでした。なぜなら、その境界を通り抜けようとするときに、いつも以前崇拜していたあの女神が前に立って、通らせてくれないからです。長い間、この有音有色の障害を乗り越えることができなかつたのです。

ある日マスターに文句を言うと、マスターは非常に激しく、どうして突破できないのだと叱りました。マスターは尖った石を持って、尖った先端を弟子の額の中央に、血が出るまで強く押しつけました。もし普通の人が見たら、このマスターはなんて残酷なのか、殺してしまうのではないかと思うでしょう。けれども、マスターは、「おまえはわかっているはずだ。乗り越えるなければならない」と言いました。そのとき、弟子は本当に心を込めてメデイーションしました。そしてあの女神が来たのを見たとき、智慧を使って女神を真つ二つに切りました。それで乗り越えることができたのです。話すことは容易ですが、みなさんはまだこのような境界に到達していないので想像できません。実際はそんなに簡単なことではありません。

本当に良いマスターは、低いレベルのチャクラ（体の経絡）の位置を教えません。私たちに体には多くのチャクラがあり、それで修行することができます。たとえ私たちが丹田で修行しても、心臓のチャクラで修行しても多くのパワーが得られます。どこで修行してもパワーが得られます。たとえ鼻のチャクラで修行しても得られます。けれども、すべて究極のチャクラで

はありません。智慧眼以下のチャクラの修行では、高い境界に達することは難しいです。なぜなら、私たちの「心」(意識)を低いチャクラに集中させることに慣れた場合、なかなか上に行くことができません。ですから大マスターたちは「心」を低い境界に置くことを教えません。智慧眼から下はみな排泄器官で、見てもわかるようにそれはとてもとても汚い場所です。排泄器官を使って修行した境界はやはり成住壊空(発生、成長、破壊、消滅)の世界の中にあります。成住壊空は永久ではありません。

私たちはたくさんの修行の法門があると聞いています。けれども、どの法門が一番良いのかわかりません。多くの人が自分は最高の師だと言います。ある人は呼吸を修行していて、ある人は丹田を修行していますが、それでも何かを得られるでしょう。しかし、それらは決して究極のものではありません。この点については經典を参考にすればわかります。自分で修行しても、その方法が究極でないことがわかります。

高いレベルの修行者はテレビも映画も見ませんし、音楽も聞きません。どうしてでしょう。私たちの心は本来すでに外面に置かれ、いろいろな場所に置かれているのです。目を開くと、外面の世界が見えて、耳も外界のいろいろな音が聞こえてきます。ですから容易に「反聞聞自性(自分の内面なる本性の声を聞く)」ことができないのです。内面に集中することは簡単ではありません。もし音楽を聞いたなら、私たちの心を全部外面に分散させてしまうでしょう。ですから私たちが修行しようとするれば、必ず私たちの心を持ち上げて、内面に置き、「内面の修行」

をしなければなりません。ですから大修行者は音楽を聞きません。世俗の娯楽のことも考えません。せっかく心を内面に置いたのに、なぜまだ音楽を聞いて外に分散させるのでしょうか。

先ほど私が言ったように修行法はたくさんあります。ほとんどは意識を「智慧眼」以下のチャクラに置いて行いますが、そういったチャクラはみな成住壊空（発生、成長、破壊、消滅）であり、永遠に存在する境界ではありません。私たちの体の中で智慧はどこにあるか、みなさんはわかりますか。智慧あるいは神通力の問題はさておいて、私たちにとつて最も重要な場所は頭脳ですね。私たちが何を考えるにしても頭脳で考えます。頭脳を集中して、さまざまな問題や障害を解決するのです。したがって最も重要な頭脳の意識を下の方のチャクラに置くということは、道理に合わないのでしょうか。

例えば、私たちに何かの問題があつて解決できない場合、私たちは眉をしかめますね。そして意識をここ（マスターは額の中央を指す）に集中するでしょう。時には、頭を使いすぎたら、少し横になって、血液が脳へ流れるようにすると、続けて考えることができます。というのは、私たちの頭脳はとても重要で頭脳の中には智慧があり、脳の中にはある種の構造があり、それが私たちに考えさせる役割をしているからです。この能力は生まれつき持っているのです。それなのに意識を鼻、のど、心臓、丹田に置いたり、生殖器官に置いたりする人さえいますが、これでは本末転倒なことをやっているのではないのでしょうか。

仏教の經典に書いてあるように、死んだ人が最後にお腹の部分が温かかったら餓鬼に生まれ

ます。心臓の部分が温かかったら人に生まれます。ひざの所だったら畜生に生まれ、額が柔らかかったら天に上り、額が硬かったら仏陀になると言われています。もしそうなら、私たちはどうして額から修行しないのでしょうか。意識を下の方へ行かないようにしなければなりません。本来ここ（マスターは智慧眼を指す）にあるからこそ、ここで物事を考えることができるのです。どうして修行するとき、これに反して下の方に意識を持つていくのですか。このお腹は食べ物消化する所です。心臓は血液を全身に送る役割をしています。ある人は生殖器官に意識を置く修行していますが、これを修行してどうするのですか。そこはものを考えることはできません。ただ子どもを作るとか、大小便を排泄するだけです。けれども、インドや、フォルモサ（台湾）や、アメリカでは生殖器官の場所を修行している人がいます。それは「道（タオ）」とは何かかわからず、どのように修行していいのかわからないので、いろいろと考えた末、一番快樂を感じる場所を修行しているのです。

ある人は「仏陀は心にあり」と聞いて、心臓の位置を修行します。ここは本来血液を送る器官にすぎません。思考の能力は少しもありません。もし丹田の場所を修行すれば、そここそ消化されてしまいます。（笑い）そのあと意識はいつもお腹の方に行ってしまうでしょう。鼻を修行する人も同じです。鼻は何をするものなのか、みなさんはご存知だと思います。舌は本来菜食をするものですが、ある人はあの汚い肉を口の中に入れます。ある人はそれで酒を飲みます。そして、でたらめなことを話し、多くの災いを作り出しています。舌は自分で考えること

はできません。この頭脳がなければ舌も動きません。頭脳がなければお腹も消化できません。頭脳がなければ心臓の動きは停止します。ですから、人は死んだあと、体はそのままです。目も、耳も、心臓も、お腹など各種の器官もそのままありますが、それらは働きを停止しています。もう動きません。どうしてでしょう。それは主人が離れたからです。

ですから、修行するならば、必ず頭脳から始めなければなりません。頭脳はもともと高尚な場所にあります。もし無理に引き下ろして低い位置におくと、その結果、それは野菜、酒、肉と一緒に外面へ排泄されてしまい、ますます頭脳がなくなってしまうのです。これでは智慧があるというのでしょうか。

ある人は呼吸法門を修行していますが、頭脳がなければ呼吸もできません。人は死んだら呼吸をしませんし、生まれてくる前も呼吸をしません。呼吸は本来無常なものです。ある人は呼吸をコントロールしています。もし頭脳がなければ、呼吸をコントロールできません。すべては頭脳に頼らなければなりません。だとしたら、なぜ最初から頭脳を修行しないのでしょうか。なぜ意識をお腹や、鼻や、心臓や、生殖器官などに下ろして呼吸をコントロールさせ、頭脳を疲れさせるのでしょうか。なぜ直接、頭脳を使わないのでしょうか。なぜ、そんなに働かせるのでしょうか。これではどんなに働いても役に立ちません。ただ頭脳に働かせるだけで使わないから、さまざまな問題が発生するのです。

本気で修行しようと思うならば、必ずこの頭脳に頼らなければなりません。普通の人は頭脳の

ごく一部しか使っていません。私たちはいつも、大修行者には大きな智慧があると書いていますが、それは、彼らはより多く頭脳を使っているからです。なかには頭脳の能力すべてを完全に發揮する人もいます。その人はあらゆることを知っていて、全宇宙のことを知っています。私たちはこういう人をすでに「仏陀になった」と言います。仏陀になることは、本当は何も神秘的なことではありません。たださらに多くの頭脳を使うことなのです。けれども、私たちはあまりにも使っていないために愚かで、仏陀は賢明なのです。

この頭脳がある人は「智慧」と言い、ある人はそれを「靈魂」と言っています。それは額の中心の内側にあります。ですから、修行したければ、額から下の部分を忘れるべきです。呼吸も無常なので忘れるべきです。自分で智慧を使って修行し、智慧の所から修行し始めるのが正しいのです。けれども、何を修行するのでしょうか。それは法を伝授されてから、初めて修行が始まるのです。今日私は講義をするだけで法を伝授しません。ですから、みなさんにはわかりません。今日私は講義をするのはみなさんに参考にしてもらうためです。しかし法を伝授するときは、みなさんはすぐにわかります。伝法するときは今のようによく話したりはしません。伝法は無言のうちに行われます。何も話をしませんが、そのときが最も重要で最もパワーがあり、最も多くのものを得られるのです。今、私はたくさん話していますが、みなさんはまだ何も得ていません。ただ少しだけ理解したにすぎません。私が何も言わないときに、みなさんは本当に「法」を得られるのです。今、話していることは紹介にすぎません。冗談を言ったり、

話をしたり、議論をしたり、友だちのようにしているだけです。

私たちの体の中で一カ所だけとても役に立つ所があります。そこが私たちの智慧です。私たちはよく、額の中央にいわゆる第三の眼、智慧眼、仏眼、法眼、菩薩眼などがあると聞いています。それを眼と言っていますが、実際そこには眼はありません。けれども、そこから何でも見えます。ですから、私たちはそれを「眼」と呼んでいます。この眼は何でも見えて、何でもわかり、何でも聞こえて、何でも触ることができます。知らないことはないのです、それを「智慧眼」と言っているのです。この智慧眼を使うにはカギで開けなければなりません。開けたら使えるのです。開けなければあっても役に立ちません。

けれども、私たちの「意念」で考えるものではありません。高い境界では私たちの「智慧」が、自ずからわかります。頭脳で考えるものではありません。意図的に仏陀を考え、法を考え、僧を考えるものではなく、自ずから仏、法、僧の本当の意味を体験するのです。このようにしてこそ智慧が開いたというのです。けれども、みなさんは今はまだわかりません。ですから、必ず仏陀にならなければならぬ、仏陀を見たい、仏陀のいるところに行きたいと思うのです。仏陀の国の景観はどんなでしょう。仏陀はどんな格好をしているのでしょうか。もし、こういったものを見たいと望むなら、それはまだABCのレベルにいます。本当に智慧が開いたとき、自分で見ることができます。考えなくても見えるのです。望まなくてもわかるのです。何も参考にしなくても理解できるのです。こうなることを智慧が開いたと言います。そういう智慧は

私たち一人ひとりに備わっています。けれども開かないと使うことができません。たとえばあつてもどこにあるかわからないのです。

けれども、真のマスターは知っています。私たちに智慧がどこにあるのか、どのようにこの智慧を使うかを教えてくれます。毎日使って完璧に使いこなしてから、頭脳または智慧が全部私たちのものになります。その時に「仏陀になった」と言います。今、私がここに智慧があると教えても、みなさんはどう使うかわかりません。これは伝法のときにわかります。ここでいくら話しても役に立ちません。本当に伝法するときは何も話をしません。

ここで私はみなさんに言っておきますが、額以下のどのチャクラにも智慧はありません。智慧は額の中央に「第三の眼」（智慧眼、または法眼という）ここに智慧があります。けれども、みなさんはそれを開けることはできません。それでわからないのです。ただ真のマスターを探し出せば、マスターが開けてくれます。それですぐ使うことができます。このようなマスターは専門家のようなもので、専門に智慧眼を開けてくれる人です。智慧が開くとき、私たちは「悟りを開いた」と言います。

先週の日曜日に小学校の先生が四、五十人の小学生をメデイーションセンターに連れて来ました。みんな子どもですが、悟りを開くことができました。私は彼らに少しばかり、悟りを開く体験を与えたら、全員体験がありました。体験がない子は一人もいませんでした。私ほともうれしかったです。子どもでも修行できるからです。もし、どのドアを開けるのかがわ

かったら、子どもでも体験があるのです。衆生はすべてこの智慧を持っています。けれども、開けてないので使えないのです。本当に惜しいことです。

(Mはマスターの答え、Qは聴衆の質問)

Q マスターにお伺いします。この生命の Key point はどんなキーポイントですか。

M キーポイントは伝法のとくにあなたにあげます。今私が話しても役に立ちません。伝法の時には私は話をしません、しかしあなたはキーポイントを受け取ります。

Q マスターはいつ私に伝えてくれるのですか。(笑い)

M 今は時間がありませんが、あなたが伝法を求めるのであれば、難しいことではありません。Q 違います。私が先ほど言ったのは、マスターはいつ私のこのドアを開けてくださいますかという意味です。

M これは状況を見て、もし希望者が多ければ、私は時間を見つけてみなさんに伝法しましょう。ただし、みなさんはまず法を受ける準備として、自分を浄化しなければなりません。普通の衆生として生きるのであれば準備の必要はありませんが、もし菩薩や仏陀になりたければ慈

悲心を持たなければいけないので、衆生の肉を食べる悪い習慣を断ち切らなければなりません。そうしてこそ菩薩になれるのです。

普通の法門を修行する場合は、何を食べても問題ありません。例えば、呼吸法、丹田を修行する場合は、菜食しなくても良いとされています。けれども菩薩になりたければ、すぐに菜食を始めなければなりません。絶対に衆生の肉を食べてはいけません。これは最も基本的なことで、最も重要な道徳的観点です。菩薩になりたいと言いながら、衆生を救うこともしないうちに、彼らをことごとくお腹の中に入れて「救う」としたら（笑い）、もう救う衆生がいなくなってしまうでしょう。私たちは本来仏陀や菩薩になってから、衆生を救うつもりで修行するのですが、その前に彼らを自分のお腹の中に入れてしまうのは、いかにもおかしいことですね。

Q 修行者は仲人をして良いですか。

M してはいけません。他にすることはいいですか。（笑い）それは仕事でやるのですか。

Q 違います。

M もし違うなら、やらなくていいでしょう。自分たちで結婚相手を探せばいいでしょう。多くの人は仲人がいなくても、結婚しているじゃないですか。（笑い）

Q 隣の人が、息子はとても良い人だけど女性と交際するのが苦手なので、もう三十一才になってもまだ結婚できないと言っているのです。

M 結婚相手が見つからないことは良いことです。出家すればいいでしょう。(笑い) フォルモサにはこんな人が多いのに、まだ結婚したいのですか。子どもたちは、もう食べ物がなくなってしまうそうです。出家者は一日に一食しか食べないので、国にとつては比較的節約になります。(笑い) 子どもを少なくすれば国は破産しません。出家を勧めたらいいでしょう。仲人はしないでください。

奥さんが見つからないのは彼自身の因果です。奥さんがいない方がいいかもしれませんが、奥さんがいて何になるのですか。奥さんがいると、菜食をしたくても料理を作ってくれないし、修行をさせまいとし、智慧を發展させる修行を妨害します。夫と一緒に修行する奥さんほども探しにくいものです。大多数の場合、奥さんが修行しようとすれば夫が阻止し、夫が修行しようとする奥さんが妨害するのです。ですから、仲人はしないほうがいいです。自然に任せようがいいです。夫や奥さんがいなくても何の問題もありません。結婚は大事なことではありません。自然であればよいのです。私たちは人の因果に介入しないことです。これは自分にカルマを作ることになるからです。

Q マスターが先ほどおっしゃったように、私たちの修行の基本条件は修行者本人に道徳があり、心は純真で、しかも崇高な理想がなくてはいけないということです。マスターにお伺いします。いわゆる崇高な理想とは何でしょうか。

M 最高の理想は自分でわかるはずですが、私に聞くことではないでしょう。

Q あまりよくわかりません。どうぞマスター、具体的な例をあげて説明してください。

M いいでしょう。それならあなたの修行の目的は何ですか。あなたは仏陀になりたいですか。それとも何になりたいですか。

Q 基本的には仏陀になりたいです。けれども、仏陀になるとどんな状況かわかりません。仏陀とは一体何でしょう。

M いいでしょう。今、教えましょう。私たちが修行するのはこの世界が苦しいからです。パワーを備えて人々を助けるためです。例えば、西方極楽世界に行きたいと思っている人がいたら、仏陀になると、すぐにその人を連れて行けます。誰でも行きたい人はすぐに連れて行けます。仏陀になったら、あるいは大きな智慧を得たら、誰かが智慧を開いてくださいと頼んでも、すぐに智慧を開いてあげることができます。これこそ崇高な理想です。仏陀になる、何かになるということにこだわる必要はありません。この名詞は重要ではありません。例えば、医者になりたい人が、多くの病気に苦しんでいる人を見て、彼らを病苦から救いたいと決心したら、私たちはその人を医者と呼びます。その他の名称でも、何と呼んでも構いません。最も重要なのは、病気の苦しみから救ってあげたいという理想があることです。

今、あなたはなぜ修行したいのかと、自分に聞いてみてください。自分が苦しいためか、三界から解脱したいからか、衆生が苦しんでいるのを見て衆生を救って、上に連れて行きたいの

か、三界を超えてもう輪廻をしないためなのかを自分に聞いてみてください。このような理想があるなら、これは崇高な理想と言えます。自分で自分を救って三界を超えるのです。それはこの不公平な世界がいやになって、もっと高い境界に行きたいからです。生、老、病、死のない所、永遠に幸せな場所です。それから、私たちは自分の親戚や、友人や人々をも連れて行くことができます。これが崇高な理想です。何になると、ただこんな理想があれば十分です。

Q いわゆる三界とは一番高いのですか。それとも三界より上にもっと高い所があるのですか。
M もちろん三界より上にもっと高い境界があります。そうでないと、私たちは三界を超えたいらどうするのですか。三界以下はすべて成住壊空（発生、成長、破壊、消滅）の世界で、早かれ遅かれ、壊れる日が来ます。ですから私たちは三界を超えなければなりません。三界より上こそ永遠に存在する、永遠に幸せな場所があるので。

Q 私は友だちからよく人間世界のすべての現象はいずれも人間個人の心境によって発生したものと聞いていますが、そうなのでしょうか。

M ですから、私たちは身、口、意の修行をしなければなりません。それは身、口、意がカルマをもたらしからです。私たちがカルマを作ります。心の中の考え、口で話した言葉、私たちの行動が、みなカルマを作ります。修行して阿羅漢になり、菩薩になったらもうカルマはありません。カルマはもうきれいになったからです。阿羅漢や、菩薩はカルマを超えて、何にも影

響されません。自分が戻って来て衆生を救う願いがあれば、自分の願いによって、この世界に降りて来ます。これはカルマと関係ありません。

Q マスターに伺います。心のパワーはどのぐらいの大きさですか。三界が含まれているのですか。それとも私たち人間界にだけあるのですか。

M 三界以下にはまだこの心の影響があります。けれども第三界に着くと、カルマはなくなりません。しかし、まだ成住壊空（発生、成長、破壊、消滅）の世界にいます。三界はいつか破壊されます。私たちの世界だけでなく、三界全体が破壊されます。ですから、三界以下にいても永遠の解脱はできません。

Q それなら、どうすれば解脱できるのですか。

M 解脱とは三界より上、例えば第四、第五……三界を超えた所に行くことです。けれども第四界でもまだ永遠の解脱ではありません。ここは無色界で、本来三界以下ではありませんが、かといって三界を超えたとも言えません。それは境界域（きょうかいき）なのです。例えば、第三界はここにあるとします。その境にもう一つの世界があります。それを第四界と言い、無色界に属します。この無色界にも多くのレベルがあります。先ほど言った第三界と第四界の境は無色界の中の最低レベルに属しています。本来それも三界を超えたところにあります。あまり意味がないので、それを三界以下としています。

もし、あなたが将来そこへ行ったとしても大した意味はなく、まだ解脱できていません。何

もできません。下に降りることができませんが、上に上ることはできません。その状況はちょっと特別です。ですから三界以下だと言っているのです。けれども三界の中ではありません。

釈迦牟尼仏は比較的簡単な方法で区分けしています。釈迦牟尼仏は三界以下あるいは三界より上と言っています。けれどもこれは重要ではないので、私は論争したくありません。私はただみなさんに言いたいのは、みなさんが修行するとわかりますが、第四界はあまり役に立つ所ではありません。ですから、ある人は三界以下だと言い、ある人は三界より上だと言っています。これは何の区別もありません。伝法のために私は詳しく説明します。天の機密は公の場でもらすべきではないからです。

Q 普段修行のとき、座禅をするときや念仏をするときに影像が見えたり、音が聞こえたりしたら、どうすればいいですか。

M あなたは何仏を唱えているのですか。

Q 観音菩薩です。

M それなら、あなたは続けて唱えなさい。

Q 眠れないときはどうしたらいいですか。

M 眠れなかったら、寝なくてもいいです。それを唱えるだけでは修行とは言えません。これは念仏をしているだけです。釈迦牟尼仏は人にこんなことを教えていません。私たちは釈迦牟

尼仏の法門を誤解しています。私たちは観音法門を修行することは、南無観音菩薩の名前を唱えれば良いと思つていますが、そうではありません。「観音」を修行することはとても高いレベルです。とても高い法門です。観音菩薩を唱えるときも口で唱えるものではありません。今こゝで私はあなたをどうすることもできないので、引き続き、続けて観音菩薩を唱えるように言えるだけです。本当に解脱を望み、印心を受けたければ、私のところに来て伝法を求めることです。ただ私たちの法門は公の場で教えることはできません。

私たちの法門は話をしません。話をしませんが、「法」を得ることができます。でもあなたが観音菩薩を唱えるのが好きであれば続けてください。何かが見えたら、見ればいいでしょう。私はこれしか言えません。なぜなら、見えた境界（きょうがい）が本物か、偽物かを見分けることはあなたにはわからないからです。かといって、今すぐあなたに説明することもできません。というのはあなたが歩いている路（みち）は私たちの路ではないからです。必要でしたら、こちらの方に来て歩いてください。そうすれば助けることができます。または、今の修行を止めたらいでしょうか。



悟りを開くとは何か

スプリームマスター チンハイ フォルモサ・台北

一九八七年三月五日

私たちは、多くの人が「仏陀が見えた。菩薩が見えた」と言うのを聞きますが、そんなに簡単なのでしょうか。私はそんなことはないと思います。広欽和尚が在世のときに、一人の僧侶が彼に「観音菩薩を見たことがある。彼女の容貌はとても荘厳だった」と言いました。広欽和尚は笑いながら「本当ですか。そんなに容易く見えたのですか」と言いました。広欣和尚の修行レベルはとても高いので、彼は「仏陀が見える。菩薩が見える」ことはそう簡単ではないことを知っているからです。花が開いてこそ仏陀を見ることができず、花が開くとは智慧が開くという意味です。今日はどうやって智慧が開くのかを話しましょう。

私たちはいつも「花が開いて仏陀が見え、無生を悟る」と言っていますが、花はどのように開くのでしょうか。花とは何でしょうか。みなさんには花がありますか。花はどこにあるのかわかりますか。花とはどんな花ですか。（ある人が「花とは私たちの心です」と答える）心はどうやって開花するのですか。実際はそれも正しいです。私は冗談を言ったのです。自分の心はど

ここにありますが。(ある人が「宇宙に満ちています」と答える) あなたの心はそんなに大きいのですか。私は信じませんよ。全宇宙を満たせる、そんな大きな花はありません。(ある人が「仏祖の心と私たちの心は同じです」と答える) 同じはずがありません。(「仏陀の心は平等です」と答える) 仏陀の心は平等ですが、みなさんの心は平等ではありません。もし平等なら、あなたが女性を見ると、男性を見ると同じでなければなりません。あなたは今、同じ感覚ですか。(「その本質、本来の面目は同じです」と答える) そうです。けれども、あなたはただそれを見つけていないでしょう。そうでしょう。(「はい」と答える) それでは今、私たちは一緒にその花を探しましょう。

私たちの体の中にたくさんの花がありますが、私は下の方の花については話しません。下の方の花については昨日話しました。それぞれのチャクラはみな蓮の花と同じです。ですから、釈迦牟尼仏が楞嚴呪(りようごんじゆ)を講義したときに、彼は千の花弁の蓮の花の上に座っていました。この千の花弁の蓮の花は第一界にあるものです。私たちがもし第一界の最高レベルに達したとき、つまり第一界の頂上に達したときに、こういう千の花弁の蓮の花が見えます。けれども、私はそのような内在の体験は話したくありません。みなさん自身が修行して、自身で理解してもらいたいのです。私が主にみなさんに言いたいのは、私たちの内面にたくさん蓮の花があるということです。ここにも(マスターは智慧眼の所を指して)蓮の花がありますが、智慧眼でなければ見えません。この肉眼では見えません。下の方にも蓮の花があり

すが、今日は話しません。後で時間があれば話しましょう。

この（智慧眼を指す）蓮の花の中には摩尼珠（まにじゆ：さまざまに願いをかなえる宝珠）があります。この花が開くと、摩尼珠または仏眼、智慧眼は花が開いたように見えます。花が開くとはすなわち智慧眼が開く、または悟りを開くという意味です。古代のマスターたちはいろいろな実在のものにたとえて形容しました。今もし私がここで（智慧眼を指して）花が開くと言っても、みなさんには花がわからないし、花がどこにあるか見えません。けれども私が弟子に言うとは彼らはわかります。彼らはすでに花が見えていて、ここで花がどのように開くか見えたからです。

今、仮に私がここで、「ここに蓮の花があり、花が開くと仏陀が見える」と言つて、みなさんがそれを信じたとします。そこで見える仏陀は決して阿弥陀仏の姿ではありません。当然、阿弥陀仏の姿が見える可能性もありますが、観音菩薩の姿が見えることもあります。けれどもこれらは本物ではありません。花が開いて仏陀が見えるとは、どんな仏陀が見えるのでしょうか。私たちの仏性、私たちの本性、私たちの本来の面目が見えるのです。それで花が開いて仏陀が見えると言います。この仏性とはどんなものか、みなさん誰か知っていますか。

みなさんは、仏教に「オンマニパドメイウン」という一種の呪文があるのを知っていますね。この意味は何でしょう。摩尼珠が蓮の花の中にあるというのがこの呪文の本来の意味です。「マニ」は摩尼珠です。「パド」は蓮の花です。チベットには蓮花生大師がいます。彼の名前は Padma

Sambagwa です。Padma は蓮の花の意味です。「オンマニパドメイウン」の意味は「この摩尼珠は蓮の花の中にある」ということです。

ですから、私たちが「オンマニパドメイウン」という呪文を唱えると、靈感があるということではありません。私たちは呪文に含んでいる奥深い意味を知らなければなりません。古代の禅師、大師たちがこの呪文について講義したのは、弟子たちに宝珠は蓮の花の中にあることを忘れてはいけない、毎日この法門を修行しなければならぬ、この宝珠のある場所、つまりこの蓮の花の中で毎日修行しなくてはならないということを喚起するためです。例えば、私がある話をする時、私の弟子たちはわかりませんが、それをここで話してもみなさんはわかりません。時には私が何も言わず、手振りをしただけでも、弟子たちはすぐに私が何を言おうとしているかがわかります。それはマスターと弟子の間では多くのことが暗黙のうちに通じるからです。

法を伝えたあと、マスターは特別何も教える必要はありません。もし彼らが何か問題に出会ったときは、私が少し手振りするだけで彼らはわかります。問題はすぐに解決し、何も話す必要はありません。また、ある弟子に問題があるとき、私は彼に「念仏」と言います。まだ印心していないみなさんは、きっと私が彼に南無阿弥陀仏を唱えるように言ったと思うでしょう。みなさんもずっと南無阿弥陀仏を唱えているでしょう。実は、私が「念仏しなさい」と言ったのは、私の弟子に言ったことです。というのは、どの仏陀をどのように唱えるかを知っているからです。それは決して口だけで唱えるものではありません。それは本当の念仏ではありません。

ということ、学んでいない人には当然理解できないのです。

同じ道理で、今の人々は経を黙読し、「オンマニパドメイウン」と心の中で唱えています。そして、これはとても神秘的な呪文で、唱えるべきだと思つて長い間唱えています。何の感応もありません。ある日集中して唱えると少しの体験があるかもしれない。これは集中したからです。この呪文に何かの靈感があるわけではありません。古代、大師たちがこの呪文を伝えたのは、彼の弟子に修行するよう喚起するためでした。どうして秘密の呪文なのでしょう。それは彼らの弟子だけがわかることで、外部の人には理解できないからです。ですから秘密の呪文になつたのです。

例えば、私が「念仏」と言うと、私の弟子にとっては、それは秘密の呪文です。例えば、私の弟子に問題があつたとします。しかし私に会いに来られなくて、他の修行仲間に頼んで、自分の問題を私に伝えたとします。そのとき、私は「帰つてから彼に念仏するように、これが秘訣だと伝えなさい」と言います。彼が帰つてから、友だちに念仏するよう、私たちのこの法門の修行をするように伝えます。または、私は彼に「心を中心に置いて集中しなさい」と言います。このように言うと彼らはわかるのです。

けれども他の人に言つても、心を中心に置くとはどんな意味かわかりません。どこが中心なのか、心はどこにあるのか、なぜ心を中心に置くのか、まったく意味がわからないでしょう。ですから、私たちにとつてはその言葉が秘密の呪文になります。とても役に立つからです。も

し毎日この秘密の呪文を覚えていたら、彼の修行の進歩はとても速いです。彼はずっと「心を中心に置く、心を中心に置く、心を中心に置く」と唱えるのではなく、このように唱えることが秘密の呪文になるのではなくありません。彼はこの秘密の呪文を覚えていて、しかも意味がわかっているのです。これこそが呪文を唱えるということなのです。

同じ道理で、古代の禪師たちが彼らの弟子たちに「オンマニパドメイウン」を教えたのは、マスターと弟子たちの間にだけわかる、簡潔なサインのようなもので、一種の秘密の言葉だったかもしれません。弟子たちに問題が起きたり、修行がうまくいかなかったり、どう修行しなければいけないかを忘れてたり、修行のときに心が乱れたりしたときに、弟子たちに、「オンマニパドメイウン」つまり宝珠は蓮の花の中にあり、心を蓮の花に置いて集中してこそ、宝珠が見つかると教えたからです。この意味は禪師の法門、つまりこの宝珠が蓮の花の中にある法門を修行するということなのです。

けれども、今私たちはその深い意味がわからないのに、一日中「オンマニパドメイウン」と唱えても何の役にも立ちません。本当に役に立たないと明言します。この奥深い修行法門を知らないため、古代の大師たちの奥深い意味がわからないので修行に役立たないのです。しかし、私たちが七日間リトリートをするとき、大勢の人が一緒にメデイテーションをします。私はこの人にはこんな問題が、あの人には別の問題があるのがわかります。私はそばに行つて、その人に「念仏しなさい」と言うと、彼らはすぐ念仏をします。というの

は、私はそのとき、彼の心が乱れているのを見たので、「念仏しなさい、心を中心に置きなさい」と言いました。また他の所では、私は何も言わないで、こんなふうにも（マスターは五本の指を出す）して見せます。これは、私が決して違う法門を教えているのではなく、この人には念仏しなさいと言ひ、別の人には心を中心に置きなさいと言つて、この人にはこの様に教え、あの人にはあの様に教えているのではなく、これらはいずれも同じ法門を指しているのです。

そのとき、彼らにはそれぞれ違った問題がありました。私がこのように言うとき彼らにはすぐに助けとなります。彼らに修行を喚起させ、集中することを喚起させるのです。そのときに彼らには違う指摘が必要だったので。私が別の法門を教えたものではありません。もしそのときにちょうど、まだ私に従つて修行していない人がいて、一緒にメデイテーションしたとしても。彼らは鼻を覗いたり、丹田を覗いたり、呼吸を覗いたりする自分の法門を修行していたとしたら、この人たちには、私が何をしているかわからないでしょう。どうしてこの人には頭を叩き、あの人には心を中心に置きなさいと言ひ、この人にはこうしなさいと言ひ、あの人には心を中心に置きなさいと言つているのかわかりません。マスターはなぜ、でたらめを教えているのだらうと思うでしょう。そうではありません。彼ら自身が理解できないので、当然私が何をしているかわからないのです。

同様に、悟りを開こうとするなら、法門がなくてはなりません。自分でわかっていないまま修行したり、自分の好みで修行したりして、悟りを開くことができると思つてはいけません。

悟りとは何であるかを知らなければ、たとえ修行したとしても無意味です。それが本当に悟りを開くことなのかもわからないのです。ですから今、私は悟りを開くことは何かを話します。

悟りとはどんな意味でしょう。悟りとは「明白（はつきりとわかること）」です。明は日と月からできています。中国の文字はともわかりやすいですね。私は古代の中国人は修行レベルがとて高いと思います。ですから、彼らが書いた字はみなとてもわかりやすいです。例えば、明には日と月があります。これは何を表わしているのでしょうか。光があるということです。悟りを開いたときも内面に「明白」があります。悟りが「明白（はつきりとわかること）」であるなら、日があり月があるはずですよ。ですから、悟りを開いた人にも月と太陽が見えます。この点について、みなさん禅の修行者はわかるでしょう。時には、僧侶は禅の会場を走り回り、一対の警策（けいさく：座禅中に修行者の肩などを打つ棒）を持って、「太陽はどこにありますか」とあなたに聞きます。彼はあなたにどうやって太陽を探すかを教えないで、自分で探すように言うのです。これは本当に困ったことです。

もし、あなたが「今は冬なので、今日は太陽が出てない」と言ったら、あなたは打たれます。「太陽は西にある」と言うと、彼は「違う」と言います。「今は朝なので、太陽は昇って来たばかりで、太陽は東にあります」と言っても打たれます。何と答えても間違いです。太陽はどこにありますか。誰かわかる人はいますか。ここには禅の修行をしている人はいませんか。こういう太陽を探すことは小さな禅にすぎません。本当に修行して悟りを開くと太陽が見えます。

月が見えます。ほんの少し話しましょう。あまり多くを教えることはできません。

みなさんは外の太陽を見て、自分は悟りを開いたと思っただけではありません。違います。それは悟りではありません。これはこの世界における一種の認識です。開悟には「明白（はっきりとわかること）」という意味があります。「明白」には太陽の光があり、月の光があります。私は古代の中国人の修行はとも高かったと思います。少なくとも太陽と月を見ました。それで、彼らはすでに悟りを開いたと思い、「開悟（悟りを開く）」と言い表したのです。この人たちは月の光と太陽の光を見ましたが、太陽と月を見てもやはりまだ三界以下です。まだ三界以下のレベルに過ぎません。三界より上の状況については、私はここでみなさんに話すことはできません。伝法のときを除いては話せないのです。

ということ、私たちは「開悟（悟りを開く）」と言うのです。ある人が光が見えた、光に接し、光と繋がったということを示しています。それでは古代の人たちは開悟すると光が見えたのでしょうか。そうです。ですから、私は先ほど開悟とは「明白（はっきりとわかること）」という意味だと言ったのです。彼らが悟りを開くとき、光が見えて、仏陀の光、すなわち自分身の光が見えたということを表しています。これは私たちの仏性です。仏性は凡人の品性とは違い、形もなく特質もなく、掴むことも触ることもできなく、においありません。この光はとても純粹でとてもはっきりしています。この光の中にはあらゆるものがあり、あらゆる智慧があり、宇宙の万物、あらゆるもの、すべてのことがわかります。それらはいずれもこの光か

ら作り出されたものです。

比較的きめの粗い光は音に変わります。この音とは話をするときの声ではなく、まるで音楽と同じような音で、とてもやさしいもので、私たちはその音を聞くと心がとても静かになり、心地よくなり、智慧が開き、個性が変わります。そして、この世界における苦痛は徐々に少なくなり、私たちはますます幸せになり、ますます宇宙万物を理解し、経典を理解し、自分がわかり、その他のあらゆる衆生のことがわかるのです。

ですから、私たちが光と通じ合い、この光を見たときが、仏陀を見た、仏性を見たときなのです。というのは、仏陀は無形無相（むけいむそう：姿、形がない）だからです。仏陀がこの肉体で娑婆世界に現れるのは、みな衆生を救うためです。決して仏陀はみなさんが思っているようなものではありません。もし、私たちが一つの境界（きょうがい）に行つて、ある状況、あるいはある様子を見たとしても、たとえそれが本当の仏陀の国土であっても、やはり本物ではありません。これは第二の示現（じげん：仏陀や菩薩が衆生を救うために姿を変えてこの世に現れること）です。最高の示現は、最高の真理で無形無相であります。心が動くとき有形有相に変わり、有音有色に変わるので。

けれども凡人から最高の境界に至る前は、まだこの音、色（しき：色、形のあるもの。物質的存在や現象）を超えることはできません。ですからまだ音、色があるレベルです。けれども決して物質的な音、色を指しているのではなく、内在の音、色、高い境界の音、色です。とて

も微細な音、色で、凡人の目では見ることができず、凡人の耳で聞くことができない、そういう音、色です。外界の音、色ではありません。たとえそういう微細な音、色でも究極ではないのです。しかし、この階段に頼って一段一段とゆつくりと這い上がらなければ、私たちはすぐに凡人から阿耨多羅三藐三菩提（あのくたらさんみやくさんぼだい：最高の悟り）に跳び上ることはできないのです。ですから、その光とその内在の音、やさしい音は、私たちが上に這い上がっていく階段なのです。

楞嚴経（りようごんきよう）の中にも「音流」のことが書いてあります。釈迦牟尼仏は「仏陀はこの音流に頼って降りて来て、衆生を救い、菩薩、衆生はこの音流に頼って上に上って仏陀になる」と言っています。みなさん読みましたか。とても短い語句ですので、読んでも注意しないと見過ごすかもしれません。「音流」とはこの音の路（みち）です。釈迦牟尼仏はとてもはっきりと言っています。でも凡人は体験がないので、当然ながらわからないのです。例えば、飛行機を見たことがない人に、飛行機と言う名前を言っても想像することができません。

楞嚴経の中にも二十五人の菩薩の修行の体験が書いてあります。彼らはみな悟りを開いたときに光が見え、同じ光ではないけれど、みな光があったと言っています。これでこそ悟りが開いたと言えるのです。ある人は音も聞こえませんでした。例えば雷の音、太鼓の音、鐘の音、海潮音、梵音などです。これらはみな彼らが悟りを開いたときの体験です。光と音を除いて、その他の状態は悟りを開いたことではありません。ある人が動き回ったり、手でさまざまな印を結んだ

りすることはいずれも悟りを開いたことではありません。私はどの經典の中にも手で印を結ぶことが開悟である、と書いてあるのを見たことはありません。まったくありません。

キリスト教の聖書にも光を見たことが書いてあります。その記載には、彼らが神を見たとき、神は光と同じように明るくて、あたかも大きな火のようで、神の声は雷のような音、海潮音のようなものであると書いてあります。これは仏教の經典とほぼ同じです。悟りを開いたときの体験はみな同じで何の違いもありません。ヒンズー教の經典の中にも、悟りを開いたときにはやはり光が見えて音が聞こえた、と体験が書いてあります。体が激しくあちこち動いたり、自動的に手でいろんな印を結んだりすることが、決して悟りを開いたことではありません。

私が読んだ經典の中にはみなこう書いてあります。それで私は真実を話してみなさんに聴いてもらっています。決して私個人の体験を話していません。けれども、私個人の体験も經典の中で書かれていることと同じです。ですから、私は個人の体験と經典の中の体験を総合して、「光が見えたことは、ほんの少しの仏性を見たことである」という結論を出すことができます。光の中にはまだ多くの境界（きょうがい）、多くの智慧、多くのものがあります。ただ光だけがあるわけではありません。けれども悟りを開いたとき、この光と通じ始めます。ですから、必ず光が見えて、初めて悟りを開くことができます。

悟りは「明白（はつきり）とわかること」です。明白とは光があつてこそはつきりわかるので、暗い所でどうはつきりわかるのでしょうか。暗い所でどうやって宇宙万物が見えるのでしょうか。

か。私たちは元々すでに暗い所にいます。凡人の視覚はせいぜい、ここからあそこまで見わたせるくらいです。聴覚もここからあそこまでしか聞こえません。宇宙万物が見える、高い所の音が聞こえる、とても美しい超世界の音が聞こえるような無量無辺の能力はありません。

まだ悟りを開く前に、もし振動率がとても高い音を聴いたとしたら、私たち凡人の耳は傷むでしょう。科学者は、「音の振動率があまりにも高いと、私たちの耳は堪えられない」と言っています。同様にあまりにも強い光は、凡人の目を傷めてしまいます。けれども悟りを開いたとき、その大きな光を私たちは受け取ることができ、その高い振動率の音も私たちは聞くことができるのです。耳を傷めることはありません。「法華経」の中にはつきりと書いてあります。これこそ本当に悟りを開いたことです。

けれども、光にも多くの種類、多くのレベルの光があります。ですから、光が見えたからといって、それでいいということではありません。ある光は阿修羅の光です。阿修羅の場所にも光があります。ですから阿修羅の光を見ても、悟りを開いたとは言えません。ある人は開悟のときに阿修羅の光が見えることもあります。阿修羅の境界（きょうがい）は見えませんが、そのような光が見えたのは、彼のレベルがすでに阿修羅のレベルに達していたことを表しています。もし彼がしばらく続けて修行すれば、このレベルを超えることができます。阿修羅は第一界にすぎません。第一界を超えると第二界に到達できます。それから第三界、第四、第五などです。本来仏陀の光には影がありません。例えば、私たちが電灯の下に立っていると影ができ

ます。私たちが月や太陽の下に立っても影ができます。けれども私たちが仏陀の光を見たとき、仏陀の光の境界にはそういう影はありません。ですから「佛光無暗（仏陀の光に暗闇はなし）」と言うのです。多くの修行者はこのことを論争するのが好きで、この短い言葉についてあれやこれやと研究しています。それは自分に体験がないので、「佛光無暗」とはどういう意味かわからないからです。悟りを開けばわかります。それほど論争する必要はありません。経典などは焼いてもかまいません。役に立たないからです。

彼らは自分が悟りを開いていないのに、毎日そこで「佛光無暗」とは何か、「いわゆるコップとはコップではない」とはどんな意味なのかと論争しています。口々に「色即是空、空即是色（存在は無であり、無の中に存在がある）」と言って論争するのです。「色即是空、空即是色」と言いながら、一方ではある人が彼を叩くと、彼はすぐに怒ります。色即是空なら、どうして痛いのですか。経典を理解していないのに論争が好きで、多くの人と弁論をしています。私たちはちよつと聞くと、すぐにその人はまだ開悟していないことがわかります。悟りを開いた人は弁論好きではありません。弁論を最も嫌っています。最もつまらないことです。

今日ここでみなさんに講義をするのは、私が出家者だからで、これは私の責任です。しかも弟子が山に登ってやって来て、泣きながら私にここへ講義に来てくださいと頼んだのです。私はやむなく、ここへ来て講義をしているのです。本当は講義をしたくないのです。何を話したらいいのでしょうか。何を話せば彼らに私の内在のレベルがわかるのでしょうか。象を見たことな

い人に象の話をして、象とは何だかわかりません。飛行機を見たことのない人に、私はどう話したら、彼らに飛行機とはどんなものかわかってもらえるのでしょうか。

この限界のある凡人の言葉で、みなさんに何を話したらいいのでしょうか。講義をすることすら嫌なのに、時間を浪費してまで人と弁論などする気はまったくありません。弁論好きの人はそのレベルはすぐわかります。レベルの低い人ほど最も弁論が好きです。いわゆる「色即是空、空即是色」とは一体どういう意味なのかと論争しているうちに、顔も耳も真つ赤になって、二人とも自分こそ正しいと思いい、その結果互いに敵になってしまいます。これはみな悟りを開いていないため、そうなるのです。

悟りを開くと、すぐに「佛光無暗」とはどういう意味か、「色即是空」とはどういう意味かが、わかります。論争する必要はありません。何も話したいと思いません。話したいことも少なく、たとえ話しても、他人はわからないからです。悟りを開けば開くほど、話したくなくなり、指すに、「どうして私に、講義に行ってもらいたいのですか。何を話したらいいのですか」と文句を言いました。けれども、君子は戯言は言えません。あの日彼らの誠心誠意な要請に感心して、彼らが言い出すと、私はすぐに一週間の講義をすると答えたのです。口に出した言葉は撤回することはできません。

時々私は、何も考えないで承諾してしまうのです。後からとても後悔します。澎湖（ほうこ

：台湾の地名）に行ったことを後悔しています。あそこに行つてとても疲れました。何も話したくありません。何を話したらいいのでしょうか。でも承諾した以上は行かなければなりません。毎回承諾したあとに後悔し始めます。けれども、私は毎回忘れてしまつて、またすぐに承諾してしまいます。毎回講義が終わると、もう次回はやらないと決心するのですが、彼らが来て、「マスター、マスター」と頼まれると、私はまた忘れてしまつて、すぐに要請に応じ、「いいですよ。私は講義に行きます」と答え、しばらくすると、また山の上で寝ていたほうがいいと思うのです。

先ほど、私は光には多くの種類があることを話しました。それぞれの世界には独自の特別な光、特別な色、特別な品性があります。もしマスターの伝法、指導がなければ、私たちは光が見えたときに、自分のレベルがどこなのか、そこはどの境界（きょうがい）なのかがわかりません。例えば、私たちが第一界の光、あるいは第二界の光を見たとしても、大したことはありません。思いがけず何かの音、例えば、雷の音、太鼓の音、鐘の音、海潮音、ライオンの吠える声など、仏教の經典に述べられている、このような音を聞いたとしても大したことはありません。

聖書にも「彼が神に出会ったとき、神の声は雷の音のようで、神の目は大きな火のようだった」と書いてあります。この意味は大きな光があったということです。言語が違うために、時にはその表現方法が違うのです。ですから、光が見えた、あるいは音が聞こえたことが悟りを

開いたということなのです。キリスト教の言い方で神が見えたと言うことです。私たち仏教では「花が開いて仏陀が見える」と言います。仏陀とは仏性のことです。もしあなたがマスターの伝法を受けてなく、私が先ほど言った雷の音、太鼓の音、海潮音、ライオンの吠える声などを聞いたとしたら、たぶん本人は自分は悟りを開いたと思ひ、素晴らしいと思うかもしれませぬ。しかし翌日になると、これらの音は消えてしまうのです。その悟りは偶然のものです。

私たちがオウラック（ベトナム）に「犬があくびをしたら、ちようどハエが飛び込んできた」ということわざがあり、これは偶然に起きたことを表します。突然そんな音が聞こえたり、少しの光が見えたりしたら、私たちは悟りを開いたと思ひますが、そうではありません。悟りと言えなくないですが、このような一秒間の悟りでは何の役にも立ちません。不十分なのです。例えば、乳はとても良いものです。たとえスプーン一杯だけ飲んだとしても、それでも乳とは何なのかわかります。どうにか乳の味を味わえます。今まで乳を飲んだことのない人よりずっとましです。少なくともその人は、乳とは何なのかわかりました。けれども、これでは栄養になりますか。あなたは子どもにもスプーン一杯の乳をあげて、一日あげて、二、三日あげないとすれば、これで子どもは生きていきますか。当然ダメです。

同じ道理で、本当に悟りを開いたとしたら、それは毎日続くはずです。いったん開くと永遠に閉じることはありません。それでこそ悟りを開いたと言えるのです。音が聞こえると、永遠に聞くことができます。それでこそ悟りを開いたと言えるのです。ここの私たちの修行仲間以

外で、みなさんの中でこういうことを体験した人がいますか。いませんか。それはまだ悟りを開いていません。偶然に思いがけず光が見えたり、菩薩が見えたり、音が聞こえたりしても何にもなりません。みな幻想です。これは目の見えない猫が死んだネズミにぶつかつたようなもので、努力して得たものではありません。前もつてネズミがどこにいるか知りませんでした、偶然に捕まえたのです。

本当に悟りを開いた人は毎日ネズミを捕まえることができます。いつでも一匹、二匹、三匹と捕まえられます。これこそ悟りを開いたと言えます。たとえこのように悟りを開いたとしても、やはり大したことはありません。例えば毎日、雷の音、海潮音など聞こえても大したことではありません。これはまだとても低い、とても低いレベルの音です。やはり三界以下のものです。三界すらまだ行っていないのに、三界より上のことは言うまでもありません。三界より上にはまだ他の音、その他の光、その他の境界（きょうがい）があります。けれども方法がなく、先生がいなければ、私たちは知ることができません。経典を読んだだけでは足りません。どうして足りないのでしょうか。それは経典の中に書いてあるのは、古代の修行し始めたばかりの人が書いた体験だからです。

例えば釈迦牟尼仏が五人、六人あるいは百人に伝法して、彼らはその当時、自分の体験を書きました。伝法のときに彼らは何が見えたのか、何が聞こえたのかを書いて、それが経典になったのです。経典は他人の体験、古代人の体験ですから、それを読んでも何の役にも立ちませ

ん。しかも私たちが読んだ経典は依然、低い境界の体験に過ぎません。それは彼らが釈迦牟尼仏について学び始めたばかりで、その体験は伝法のときに書いたものだからです。というのは伝法のときに悟りを開いたので、それを「頓悟（とんご）」と言い、すぐに悟りを開くということです。悟りを開いたとき、彼らは自分が見たものを全部書きました。ですから、まだ高い境界ではありません。

高い境界に行きたければガイドが必要です。先生は私たちを連れて行くか、私たちに高い境界には何かがあるかを教えてくれます。後に私たちが修行するときに比較できるのです。実際、比較しなくてもわかります。第三界まであるいは三界より上に着くと、私たちはすぐにわかります。開悟は開悟です。ビスケットを食べることはビスケットを食べることであり、疑いの余地はありません。三界より上に行くとき精神状態が異なり、智慧も異なり、とてもはつきりとわかります。本当に大きな悟りを開くのです。疑うことはありません。そのときは不退菩薩（ふたいぼさつ）、あるいは八地菩薩になっているのです。永遠に後退することはなく、懐疑心もなく、とてもはつきりとわかります。

近代中国に一人の大師がいたそうです。聞いただけですが、彼は悟りを開いたときに、ある人が壁の外でお小水をしているのが見えたそうです。これはどういう意味でしょう。みなさんわかりますか。実際これも悟りを開いたことです。みなさんは彼にはどうしてそんな状況が見えたのかわかりますか。壁があるのに、どうして彼には僧が外でいることが見えたのでし

よう。これはどんな意味でしょう。(ある人が「開眼です」と答える) 何の眼が開いたのですか。(ある人が「天眼通です」と答える) 天眼通(てんげんつう)：すべての物や事象を見通す(力)は悟りを開いたことではありません。天眼通は神通力です。

みなさんに言っておきますが、私たちがここに座っているときに、この肉体の他にまだもう一つ別の体があります。その体は眼を使わず、耳を使わず、鼻を使わず、口を使わず、体も使いませんが何でもわかります。これこそ私たちの霊体です。その霊体がこの肉体を離れるとき、私たちはいろんな所に行くことができます。体を離れて外へ出て行くことができ、人々がどこで何をしているかを見ることができません。そして自分の体も見ることができません。私たちが死んだときの状態に似ています。

けれども、これは少し悟りを開いただけです。私たちの第二の体が出て行ったことを表しているのです。決して大きな悟りを開いたわけではありません。本当に悟りを開いたら、この世界のことを見るだけでなく、またもつと高い境界(きょうがい)のことも見えます。高い境界の光、高い境界の音、高い境界の風景も見えます。それこそ悟りを開いたと言うのです。この霊体を使って、体から外へ出て行くこと、靈魂が出て行くこととは *Astral Projection* (体外離脱)で、悟りを開くこととは違います。

悟りを開くとは光が見えることで、この状態はただ単に靈魂が外に出て行っているにすぎません。とはいえ、実際に外に出て行ったわけではなく、靈魂は別のものです。私たちにはたく

さんの体があり、これ（肉体を指す）が一つで、この中にもう一つの比較的微細な体があります。もつと中にまた一つのもつと微細な体があります。またその中にもう一つのもつと微細な体があるのです。その中にまたもう一つのもつともつと微細な体があります。そして最後に、その中心には最も微細な体があります。それはもう体ではなく、私たちの本来の面目です。私たちの霊魂です。霊魂は私たちの何重もの体の中に閉じ込められているのです。

もし、私たちがこの最も外側の体（肉体を指す）をここに置いて、その他の体を全部連れ出て行って外へ行って遊ぶとすると、このとき私たちの霊魂、最後の体はまだその他の体に閉じ込められているのです。ですから、これはまだ悟りを開いたものではありません。ただ少し自由になって、この体を離れて行ったり来たりすることができるようになったということです。けれども大修行者は、完全にすべての体を離れて自由に出て行きます。その他の体を残しておいて、私たちの本当の主人が自由に離れることができるとき、それこそ本当に悟りを開いたと言えるのです。

この最後の体、私たちの主人あるいは本来の面目とも言いますが、もしそれが私たちの体から少しだけ離れたとします。まだ完全に離れたのではなく、少しだけ上のほうに向かって出て行っただけで、例えばここからここまでです。本来私たちの霊体は完全に閉じ込められています、もしそれが上の方へ少し動いて、半分はまだ中にあり、半分が外にあるとき、他の境界が見えるのです。例えば、私たちが第一のレベルに達したときに、第一の境界の光が見えます。

もう少し高く行くと私たちは第二レベルの光が見えます。

けれども、永遠に解脱してこの世界を離れても、また戻って来ることができません。また、前と同じように再び出て行くこともできません。行きたければ行き、来たければ来ます。そのときこそ「如来（によらい）」なのです。来ることもなく、行くこともないのです。とても高い境界（きょうがい）でこの体を操り、この六根（ろつこん：眼、耳、鼻、舌、身、意）、六塵（ろくじん：色、声、香、味、触、法）を操って仕事をします。そういう人はすでに如来になり、とても高く、全宇宙が見えるのです。全世界すべての場所を知っています。

ですから、私たちがそういう人に祈れば、その人はすぐにわかります。その人はこの小さな部屋の中ではなく、彼は屋根の上にいるからです。山頂から見下ろしたら、台北中が見えます。飛行機から下を見るとあらゆる家が見えます。ある人は望遠鏡を使うでしょう。海で事故にあったときに、私たちが旗を振ると、飛行機の中の人はすぐに発見できて、直ちに縄梯子を下ろして私たちを引き上げてくれます。

如来（によらい）の境界も同じです。ここに来なくても何でも知っています。そこに行くこともなく、何かを下ろして私たちを上に取り上げます。それは彼が如来だからです。とても高い最高の境界にいるので、至る所すべてが見えて、至る所の声もすべてが聞こえます。それが観音菩薩の境界（きょうがい）です。あなたがどこで救いを求めても観音菩薩はすべてわかります。もし観音菩薩が一人の人間だとしたら、世界中の人々が彼に助けを求めたら、忙殺され

てしまうでしょう。そんなに速く走ることはできません。不可能です。しかし彼は如来なので、どこにも行かないで聞こえてきて、どこにも行かないで見えるのです。それが如来の境界です。

如来の境界（きょうがい）とは靈魂がすでに解脱していて、主人がすでに最高の境界に行っていることです。これはまるで社長が工場にいないようなものです。社長がいなくても事務室はそこにあり、労働者や秘書は依然としてそこにいます。ただ社長がいなくても指示できます。社長は他の所において、電話をかけることができ工場の労働者にどうやるかを指示できます。これはまるでオートメーションの機械のようで、自動的に仕事ができます。主人はいなくても機械の機能はいるときと同様に發揮できます。これが如来です。

決して体から外に出て行き、見物さえすれば、如来であるというわけではありません。そのような状態は遊びに過ぎず、この肉体をここに置いて外に出て遊ぶ場合、素早く移動できます。それは亡霊と同じようなものです。外国の本を読むとわかるでしょう。アメリカのある医者が死んだばかりの人を専門に研究しています。ある人は死んですぐ戻って来ることが出来ます。一時間か二、三時間後にまた戻って来ます。ある人は三、四日後にまた戻ってきます。みなさんそういうことを聞いたことがありますか。（ある人が「あります」と答える） フォルモサ、オウラック（台湾、ベトナム）でもこんなことがあります。彼らは生きて帰ってから多くの話をしました。ある人は話そうとしますが、ある人は話しました。

アメリカではこういう報道がありました。ある人が交通事故に遭って死にました。死んだと

きに彼はまるで別の体が上に上がって行くような感じがして、自分がそこに横たわっているのが見えました。多くの人があちこち走り回り、警察もやって来て何か書いていました。医者も来ました。彼はすべてを見る事ができたのです。彼が生き返ってから、お医者さんに話し、警察に話しました。これは本当のことです。そのとき他の人はみな、彼は死んでしまっていたのに、どうして何でも知っているのか不思議に思いました。

それはこの肉体がそこに残り、その他の体が上に上がって遊びに行ったからです。他人を通り抜けても、他の人が彼を通り抜けても何も感じません。この世界では、時には亡霊が通り抜けますが、自分では少しもわかりません。死んだばかりの多くの人も同じです。その人たちが死んだとき、自分が上に上って行く感じがします。上に行ったあと、自分がそこに横たわっているのが見えます。あるいはそこに座っていたり、恐ろしい交通事故に出会ったりしているのが見えます。

ある人は手術のときに靈魂が出て行くことがあります。実際それは靈魂ではありません。もしそれを靈魂と言わなければならぬなら、いわゆるこの種の靈魂は私たちの智慧とは同じではありません。智慧あるいは私たちの主人は、これとは別のものです。智慧は最も内側、最も内面にあります。内面と言っても、実際内面はありません。まるで手術するように一層、一層、内側を探せば、私たちの本来面目を探し当てられる、という意味ではありません。内面と言っても内面ではなく、適当な言葉がないので内面と言っているのです。外面にあると言ったら、

みなさんは外側にあるのと思うので、内面にあると言わざるをえません。けれども内面でもないので。みなさんは後から開けて見たりして、最後に本当に本来面目があるかどうか調べたりしたら、それは大変困ります。(笑い) 見つかるはずがありません。

手術を受けている人も、時には自分が上に乗って行くのを見ることがあります。他のたくさんの部屋へ行って遊び、他の病人がどんな状況かを見て、それからまたこの体に戻って来ます。そして他の人にそれを話すのです。彼らは何でも知っていて、すべてをはっきりと、まるで他の人を観察したかのようにです。それは私たちが死んだときの状況ですが、そういう状態は、やはりとても低いレベルで、普通の人が死ぬときの状況です。大修行者が死ぬときの状態はそうではありません。彼らが死ぬときはすぐに西方浄土へ行きます。あるいは如来になります。それこそ私たちがなりたいと思うものです。

私たちは亡霊のようにはなりたくありません。亡霊の状態はたとえ普通の人でさえ知っています。ひどく凶悪な人以外は、死んだらすぐに地獄に落ちるので、彼らはわかりません。彼らは娑婆世界に留まることができないので、あちこち行ったり来たりできず、自分の体を見ることも、親族を見ることもできません。ある人は死んだあと、相変わらず家の中を走り回り、親族に話しかけたり、彼らに触れたりしますが、親族にはそれがわからないのです。ですから、彼らはとても苦しむのです。

彼らには自分が死んだという感覚はありません。彼は自分の体が以前と同じように見えるの

で、死んだことがわかりません。しかし、彼が話をしても他の人には聞こえません。彼が何か食べたと言っても誰もわかりません。彼が何をしても人にはわかりません。それで時に彼は大きな力を使うので、私たちはそれが聞こえて、誰かが何かをしていると思うのです。それで亡霊がいると言ったりもします。これらの亡霊はドアをいじってバンバン音をたてたり、コップをいじってガチャガチャ響かせたり、私たちのベッドの上で飛び跳ねたりします。これは実際にあることです。そのとき彼はとても怒っています。一日中話しかけても聞いてくれる人がいないからです。(笑い)

彼は自分の奥さんを抱こうとしますが、彼の奥さんにも何の感覚もなく、もしかしたら他の男性を連れて帰っているかもしれません。(笑い) 彼の目の前で何かするかもしれません。それで彼はとても怒って、自分の全力を尽くして何か音を出すのです。こうして私たちは彼の存在を知りますが、彼を見ることはできません。福報が比較的に大きい人はパワーも比較的に大きいので、一瞬肉体に変わって人に見せることができます。そこで私たちは「わっ、亡霊がいる」と言うのです。(笑い) これは実際にあることです。

私たちはそんな孤独な亡霊になりたくありません。毎日、人に話をして誰も聞いてくれず、誰かに報告したくても人々もわかりません。今死んだばかりなのに、彼の奥さんはもう他の男性を連れて帰って来ています。それで彼は当然とても苦しむのです。または夫が他の女性を連れて帰って来ていても同じことです。ですから、亡霊になるのはとても辛いことです。口があ

つても話せません。体があつても使えません。何かしたくてもできません。とても苦しいです。私たちはそんな状況になりたくありません。私たちが望むのは、死ぬときに自分で自分をコントロールできることです。私たちには選択の権利があり、行きたい所に行けます。亡霊にコントロールされることはありません。とても孤独でどうしていいかもわからず、誰にもわかってもらえないので、墓場に行つて他の亡霊たちと話をし、一緒に住むしかありません。本当にとても不幸なことです。

けれども、良い修行者は自在に往生できます。離れる前にもうわかつています。どこへ行くかもう知つているのです。これはまるで自在な君子のようです。行きたければ行き、来たければ来ます。魔や亡霊に連れて行かれるようなことはありません。それは君子の気高い風格ではありません。私たちは人間になつて、何も悪いことをしていないのに、なぜまるで犯人のように、魔に捕まえられるのでしょうか。私たちは決してそういうことは好みません。私たちは修行して、この主権を握らなければなりません。行きたければ行き、いつ往生するかを前もつて知り、自分の奥さん、夫、息子、弟子に、「私は三日から五日後に往生します。準備してください」と告げます。これこそ立派な人間の風格です。来るなら来る、行くなら行く、自由自在です。魔に捕まることもなく、話をして聞かない人もなく、もし自分に生死の主権がなければ、本当に人間としての価値がありません。

本来亡霊のレベルは私たちより低く、彼らは私たちの使用人です。けれども、もし私たちが

悪い人になれば、彼らも私たちを逮捕して処罰することもできます。これはまるで、警察は本来大統領の部下ですが、もし大統領が国の法律に違反した場合は、やはり逮捕されて刑務所に入れられて処刑されるのと同じです。そのとき大統領は何の権力もありません。私たちが言う三途（さんず）とはどういう意味でしょう。それは餓鬼、地獄、畜生です。ですから亡霊は本来私たちより低いのです。けれども、私たちが死ぬとき、彼らに引つ張られ、捕まえられてひどく罵られて殴られるのです。こんなことでは、面目を失ってしまいませんか。気高い風格がなくなりませんか。私たちはこういう事態にならないようにしなければなりません。

本当の大修行者は最も高貴です。彼は往生するときには仏陀について行きます。音楽に迎えられ、天使が歓迎し、仏陀や菩薩が歓迎します。不退菩薩について行けば魔に連れて行かれることはありません。もし修行しなかつたり、よく修行しなかつたりすると、彼らに捕まえられて、殴られ、罵られ、縛られます。これは君子の生活ではありません。人間の生活ではありません。

私たちはこの世界で生活して、自分の体に気をつけて仕事に励み、少しお金を貯めれば、年をとってから、老後の生活費になるのです。それなら、私たちは同じように功德を積んでおいて、死んでから使えるようにするべきではありませんか。これは老後のためのお金より重要です。老後のためのお金は使えないかもしれませんが、もしかしたら私たちは明日死ぬかもしれないからです。まだ年老いていないのに死んでしまうかもしれないのです。死は避けて通れないことです。いつかは必ず死にます。死ぬ前に功德を積み、修行に励めば、私たちが死ぬときに

は使うことができるのです。これこそ人生で最も重要なことです。老後のためにお金をためることより重要です。

(Mはマスターの答え、Qは聴衆の質問)

- Q マスターにお伺いします。あなたが修行するとき、どんな大きい魔の障害がありましたか。
- M 私が修行するときにも魔の障害がありました。ないはずがありません。
- Q 話してくださいませんか。
- M 私の魔の障害をあなたに聞かせてなんの役に立つのでしょうか。(笑い)
- Q それなら伺います。あなたの修行の助けとなる縁は何ですか。
- M 私の弟子は私の外力、私の助けとなる縁です。彼らは私を行かせてくれないからです。魔の障害といっても大したことではありません。おもしろいです。少なくとも私にとっては、おもしろいです。ですから特に話すことはありません。何でもありません。魔の障害は私たちのパワーを深めてくれます。克服できれば私たちにとって助けとなり、もし克服できない場合は煩わしいことになります。実際、魔の障害といっても何の魔障でもありません。私にとっては

何でもありません。ただ一種の世界の現象にすぎません。何でもありません。私はあらゆる所で修行することができます。

Q メディテーションのときに、とても微細な音が聞こえてきます。本には音に執着してはいけないと書かれていましたが、これは正しいですか。

M ある音は良くないですが、ある音は良いです。もしあなたの好きな音がとても低い境界の音だったら、あなたにとつては当然良くないのです。ですから、執着してはいけないと言うのです。例えば私の弟子が私に「マスター、私はいくつかの音が聞こえてきました。とてもきれいな音です」と言ったとしたら、私は「ある音はレベルが低いので、聞いてはいけません。他の音を聞きなさい」と答えます。けれども、彼はそうしたくないので、「この音は他のよりきれいです」と言いました。このとき私は「執着してはいけません。他の音はきれいでなくても、境界は高いのです」と彼に言います。

ですから、本を読んでもあなたの役には立ちません。本は修行した人が書いたものなので、彼ら自身にとつては役に立つのです。それは彼らがマスターの教えを書き留めたもので、後から読み返すことができます。あるいは彼らのマスターが彼ら宛に書いた手紙で、中に教理があるのです。しかし、あなたには聞こえてきた音が何なのかはわかりません。マスターの指導がないからです。あなたは観音法門を修行していますか。

Q 修行していません。

M 自然に聞こえたのですか。

Q 私は大悲咒を唱えるときに聞こえたのです。

M 時には、私たちは思いがけず何かの音が聞こえるときもあります。けれども先生の指導がないと、この音の良し悪しがわかりません。ですから、やはり執着しないのが最も良いことです。音はたくさんありますが、あなたはその境界（きようがい）がわからないのです。

Q 光の色彩とは何ですか。どういうふうに光のレベルをわけるのですか。

M この質問については、ここでは話すことはできません。それはたいへん多くの状況があるからです。私はこんな短い時間内にこれの一つ一つ説明することはできません。法を伝えてから、個人の状況に合わせて指示をします。これは内在のことです。私はここであなたに話すことはできません。

Q 私の姉は黒い色あるいは白い色の服を着た修行者が見えると言っています。けれども私たちは肉眼でそれを見ることはできません。

M こういうことはたくさんあります。空中にはたくさん無形の衆生がいて、ある人には見えます。たとえ犬でも魔が見えます。犬がワンワンと吠え続けるのを見ると、周りには人はいないのに、犬は誰かに飛びつかんばかりに大声で吠えているのは、犬の目には無形の衆生、または魔が見えたに違いありません。あなたが言っている「黒い」もの、「白い」ものが見えたの

です。けれども、もし黒いものだったら、それはきつと修行者ではありません。修行者はとても明るいのです。

Q 在家の人はどんな法門を修行すればいいかわかりませんか。どのよう修行すればいいですか。観音法門はどのよう修行するのですか。

M 修行の第一は道徳です。五つの戒律を守ることです。殺生しない、盗みをしない、邪淫をしない、嘘をつかない、酒を飲まないことです。酒を飲まない、この中には麻薬を使用しない、タバコを吸わないこと、あらゆる過激なるポルノ、暴力の映画、ポルノ雑誌などを見ないことが含まれます。殺生しないの中には、間接的な殺生もしてはいけないことが含まれます。この意味はビーガン（完全菜食）でなければならぬということです。そして阿弥陀仏を唱えることもあります。在家の人は他の法門を修行しても構いません。それはあなたの自由です。私の在家の弟子たちはみな観音法門を修行しています。もしあなたは本当に解脱を望むなら、学びに来ていいです。私が教えましょう。



仏陀とは何か

スプリームマスター チンハイ フォルモサ・台北

一九八七年三月十日

昨日、私に「真理とは何ですか」と質問した人がいました。私はそのことは話したくありません。みなさん、どうしてだかわかりますか。真理とは本来話すことができないものだからです。説明しようとしても言いつくせません。実際うまく話せません。真理とは自分で体験してこそ、わかるものです。弁論が好きな人や真理について語るのが好きな人は、まだ真理がわかっていないことを示しています。ですから老子は「知者不言，言者不知（知るものは言わず。言うものは知らず）」（道徳経第五十六章）と言っています。もし、真理とは何かをどうしても知りたいということなら、それは一種の生活方式であるとかろうじて言うことができます。ですから、釈迦牟尼仏は真理を代表し、老子も真理を代表しています。イエス・キリストも真理を代表しています。なぜでしょう。それは彼らの生き方こそ真理だからです。

本来私たちも真理を代表していましたが、多くのカルマに取り巻かれてしまったため、自分が真理であることがわからず、自分の本来の面目、主人、純粋な心や天国が見えないので

す。仏陀や菩薩は真理を代表しているので、真理とは何かを知りたければ、仏陀や菩薩に聞かなければなりません。釈迦牟尼仏は「佛在心（仏陀は心にある）」と言っています。どんな衆生にも仏性があるなら、なぜ誰にでも聞くことができないのでしょうか。なぜ必ず一人のマスターか、仏陀や菩薩に聞かなければならないのでしょうか。仏陀や菩薩はすでに真理を認識していて、もう彼らは真理になっているからです。ですから、私たちが真理は何かと質問したければ、一人のマスター、または在世の仏陀や菩薩に会いさえすれば、自然に答えを受け取ることができるとは、きるのです。

真理とは説明しようがありません。いつまで話しても話しきれないのです。釈迦牟尼仏は四十九年間これを説きましたが、しかし、彼は弟子たちに対して「私が知っていることは森林の木の葉のように多いが、私があなたたちに話して聞かせたことは、私の手のひらにある木の葉ぐらいである」と言いました。釈迦牟尼仏でさえ完全に全部の真理を説明することができないのに、どうして私にできるのでしょうか。

質問する人の中には、真理を渴望し、智慧を求めているわけではなく、ただ弁論して人々に自分がどんなに偉いか、自分のレベルが私よりも高いと見せたいだけの人もいます。彼は、自分は執着心がないから、肉を食べるのも肉食するものと同じだと言います。これでは肉を食べるのも人間を食べるのと同じだと言うことになります。というのは、彼にとつては肉食するのも、肉食するのも同じだからです。将来食べる動物がいなくなったら、同じように人を食べるかも

しれません。そういう人ほど、このようなことをするので。ただ弁論するのが好きなだけで、本心から勉強したいのではありません。誰かがある場所で講義をしていると聞くと、すぐに論争に行きます。決して心から謙虚に道（タオ）を求めようとしているのではありません。エゴがあまりにも大きく、すぐに断ち切ることが難しいのです。

ですから、私たちは質問内容を聞くと、すぐにその人のレベルがわかります。それで古代では一人の大師が弟子に法を伝える前に、弟子はいつも数多くの試練を受け、多くの質問に答え、大師がその弟子にエゴがなくなつたと確定できるまで質問しました。傲慢でなくなつたとき、法を伝えることができます。

およそ四、五百年前、インドに大変有名な大師がいました。彼にはとても多くの弟子がいました。彼の名前はカビールといい、とても貧しい人でした。インドには四つの階級があり、彼が一番下の労働者階級に属していました。その階級の人は、インドでは取るに足りない存在ですが、彼はとても有名でもとても智慧があり、大きな悟りを開いた人でした。彼は仏陀でしたから、多くの人が彼のところへ来て学びました。彼の弟子の中に一人の王子がいました。高貴な地位を放棄し、彼について学び、彼と一緒に何年も住みました。けれども、カビールは彼に法を伝えませんでした。他の人が法を求めて来たなら、彼はすぐに法を伝えたかもしれません。あるいは少ししたら、法を伝えたいでしょう。

けれども、彼はその王子に法を伝えませんでした。何年経ってもまだ法を伝えませんでした。

毎日彼に洗濯させたり、掃除をさせたり、便所掃除をさせたり、ごみの処理をさせたり、ご飯を作らせたりしました。ある日カビールの奥さん（以前は彼の奥さんでした。後にカビールは彼女を修行仲間に導きました。夫妻関係はありませんでした）は、彼に「この王子はこんな長い間あなたに奉仕しているのに、あなたは どうして法を伝えないのですか」と聞きました。

カビールは「彼はまだ純粹ではない。まだ清浄ではない」と答えました。彼の奥さんはそれが信じられなくて「そんなことはないでしょう。彼は私たちと一緒に何年も生活しました。彼はとても謙虚です」と言いました。カビールは「ちよつと試して見ればわかります。明日の朝、彼がここを通るときに、あなたは彼の頭の上にごみを捨ててごらん下さい。そして隠れなさい。彼に、あなたが誰だかを見られないようにしなさい。そして彼がどんな反応をするかを見れば、あなたはわかるでしょう」と言いました。彼の奥さんは指示通りにしました。その結果、王子はとても怒り、「私が誰だか知っていながら、あえてこんなことをしたなら、どんなことになるかわかっていますか」と言いました。カビールと奥さんは後ろに隠れて笑っていました。カビールは「ごらん下さい。私が言ったことに間違いはないだろう」と言いました。このとき、彼の奥さんはもう何も言えませんでした。

何年か過ぎて、カビールの奥さんはまたあの王子がかわいそうだと思いました。彼は何をしても忍耐力があり、すでに長い間先生に奉仕していますが、まだ正式な伝法はなく、ただ彼に初歩の方法、たとえば呼吸、念仏、礼拝などしか教えていません。本当の観音法門を彼に伝え

ていません。彼の奥さんは「今なら、彼に法を伝えてもいいのではないですか」と言うと、カビールは「明日、あなたはもう一回試してみなさい。明日の朝、彼があなたの部屋の前を通るときに、あなたは尿瓶の汚物を彼の体にかけてみなさい。そして、どんな反応をするか見ればいい」と言いました。翌日、彼の奥さんはその通りにしました。彼女は尿瓶の汚物を彼にかけてから、自分は隠れて見ていました。その結果、王子は頭を左右に振りながら、「私の内面はまだこれよりも汚い。私は最高の神に感謝します。今日、自分がこの尿瓶の汚物よりも汚いことを気づかせてくれました」と言いました。そのとき彼は跪き、空に向かって三回礼拝してから、風呂に入りに行きました。

そのとき、カビールは「今日、伝法できる」と言いました。伝法するとき、もし彼のエゴがあまりにも大きければ、何の役にも立たないからです。たとえ無理に伝法しても彼は消化できません。消化できたとしても高いレベルに達することはできません。ただ魔王の部下か、魔王になれるだけです。

古代から今日まで、伝法の前に大師たちはまず道徳を教えます。まず弟子の傲慢な心をきれいに洗うのです。というのは、私たちはこの世界においてさまざまな地位にあるからです。ある人は医者で、ある人は部長、ある人は校長先生をしています。もし、私たちの社会的地位がとても高ければ、多くの人に尊敬されています。そういう人が一人の法師に礼拝し、彼の弟子になり、頭が鈍重な、世間のことは何も知らないような人間になることは、とても困難であり、

容易なことではありません。時には、大師たちは必ず厳しい方法で訓練しなければなりません。毎日キャンデー、ビスケットをあげればよいものではありません。ここでは講義が終わると、私はビスケットとキャンデーをみんなに分けていますが、本当にマスターの弟子になるとしたら、そんなに簡単なことではありません。当然キャンデー、ビスケットもありますが、まだ他のこともあります。苦い菓もたくさんあるし、他にも辛い贈物もあります。

私たちが病気にかかったら、いろいろな菓を飲んでこそ病気はよくなります。重病であれば、手術をしなければなりません。手術をしなければ死んでしまうからです。ですから、早く手術したほうがいいのです。生きられれば生き、生きられなければ死にます。治療の時間を引き延ばしてはいけません。同様に試練に耐えられない人は、早く離れたほうがいいのです。それがその人にとって良いことです。

釈迦牟尼仏が「法華経」を説いたときに、五千人の人がその場を去りました。というのは、彼が説いた法門は最高の法門で、それまで彼らは聞いたことも学んだこともなかったからです。ですから、多くの傲慢な人は「私は経典をすべて暗誦している。あんなに多くの僧侶を訪ねて、どんな法門もすべて学んだ。それなのになんと、これまで聞いたことのない法門がもう一つあるなんて、私は信じられない」と思ったのです。ですから、五千人の人が帰ってしまいました。そのとき釈迦牟尼仏は少しも失望せず、「よろしい。私たちの法会には、今は本当に良い種だけが残りました。悪い種は逃げてしまい、風に吹き飛ばされました」と言いました。

私は以前、人を信じすぎていました。いつもすぐに人に法を伝えました。今になってみると、多くの人はそれほど求道心もなく、渴望もなく、レベルもそれほど高くないために、この奥深い法門をいとも簡単に誤解してしまいます。ですから、私は今はもう気軽に法を伝えません。講義をしてもう一週間になります。まだ何も伝えていません。以前は一日か二日講義をすれば法を伝え、または友達の紹介だけで来た人にも法を伝えたのです。今はそうはいきません。無理に伝法しません。悪い種が離れて行ってから伝えます。

「法」は安売りできません。私たちの法門は決して多くの人に知ってもらいたいのではなく、多くの弟子を集めて知名度を上げるためのものでもありません。観音法門はそんな安っぽいものではありません。安いものは多くの人が買うことができます。貴重なものはそう簡単に買えるものではなく、それほど多くの人に売れるものでもありません。ですから急がないでやりましょう。みなさんに忍耐力があれば手に入れることができますが、忍耐力がなければそれまでです。頭が良すぎる人もやめた方がいいでしょう。私は純粹で一見愚かそうに見える人や、本当に謙虚で道（タオ）を求め、真理を学びたい人に教えるのです。多くの事を知りすぎている人は、すぐここから離れて行っても構いません。多くの事を知っていると、頭脳にはあまりにも多くの石が埋まっています、私たちの寶石を置く場所がないからです。昨日、私は石の話をしました。ある人の頭には石があまりにも多く詰まっていたので、家に帰って、自分でその石を消化して取り除くよう勧めました。そうして初めて、自分の内面の高

貴なものを見ることができません。どうして彼らはあるなに傲慢な態度をとるのでしょう。それは彼らが經典に取り囲まれ、多くの先入観に取り囲まれ、複雑な生活によって汚染されているからです。ですから、彼らは真理を聞いても消化することができません。ある人は講義を何回か聞きましたが、いまだにあんな愚かな問題を抱えています。それは耳を貸そうとしなからずです。そこに座つても、智慧が開かないと役に立ちません。例えば雨が降っているとき、レインコートを着たら、大雨が降っても私たちはちっとも影響されません。レインコートに覆われているからです。

同様に、私たちは多くの經典を読んで、自分でもう良くわかっているつもりですが、実際は何もわかっていないのです。經典の中で釈迦牟尼仏は「私たちは必ず仏陀に出会ってこそ、仏陀になれる。仏陀について学んでこそ仏陀になれる」と言っています。けれども、仏陀に出会うことはそんなに容易なことではありません。最も福報のある人だけが、仏陀に出会うことができるのです。仏陀の名前を聞いたり、仏陀を一目見たりすることさえ、簡単なことではありません。ましてや彼の弟子になることはなおさら難しいことです。

仏陀とは何でしょう。みなさん知っているように、仏陀とはブツダです。これは梵語（サンクリット語）から訳したもので、梵語では Buddha です。Buddha は偉大な開悟した人を指しています。どんな人でも、いつであろうと、どこであろうと、大きな悟りを開いたら、私たちはその人を仏陀と呼びます。しかし、本人は自分で仏陀であるとは言いませんが、仏陀に間

違いありません。

イエス・キリストは仏陀であると誰も言っていないませんが、彼は仏陀です。老子は仏陀である
と誰も言っていないませんが、彼はやはり仏陀なのです。仏教徒はこんなことを言えないかもしれ
ませんが、私はみなさんに話して真理をわかってもらわなければなりません。私は確実にわか
っています。しかし、私がこれを他の仏教の僧に話したら、彼らは私のことを外道だと言うか
もしれません。けれども、私はそんなことに構っていません。老子は称賛に値するので、
私は彼を称賛するのです。イエス・キリストも称賛に値するので、私はイエス・キリストも称
賛するのです。もしみなさんの中に偉大な開悟者がいて、イエス・キリスト、釈迦牟尼仏、あ
るいは老子のような大きな悟りを開いているとしたら、私はその人を称賛し、礼拝し、その人
を仏陀と呼ぶでしょう。

仏陀とは一種の名称にすぎないからです。医者、介護士、警察官などと同じように、医者の
仕事に携わっていて病人の治療をしていれば、誰であろうと彼を医者と呼びます。警察の制服
を着て警察の仕事をして、警察の責務を担っていれば、誰であろうと彼は警察官です。世界中
に警察官が一人しかいないことはありません。同じように、華陀（かだ：古代中国の有名な医
者）だけが医者であると言うこともできません。華陀があんなに有名であっても、あんなにす
ばらしい医者であったにしても、いずれにせよ彼は過去の人です。現在、依然としてたくさん
の病人がいます。いつの時代にも病人がいます。私たちは華陀が救いに来るのを待つことはで

きません。病気にかかれば、現在の医者を探さなければなりません。もし私たちが華陀だけを尊敬して華陀だけを信じて、その他の医者信じなければ、私たちが病気にかかったとき、華陀は救いに来てくれるのでしょうか。来てくれませんか。彼はもう往生したからです。彼の仕事はもう終わったのです。

同じ道理で、「仏陀」とは一人の修行者が修行して道（タオ）を得た人のことです。彼は「道（タオ）」とは何であるかを知っていて、この道を私たちに伝えることができます。また、私たちがこの道を見つかるよう導いてくれます。そういう人が「仏陀」です。釈迦牟尼仏は何千億にも化身することができます。そういう人も何千億にも化身することができます。釈迦牟尼仏は天国、仏国土へ連れて行くことができます。釈迦牟尼仏の弟子たちは「普門品（ふもんぼん：観音経のこと）」を書きました。「普門品」「華嚴経」には、多くの弟子たちの修行体験が記載されています。そういう人の弟子たちも同じ体験ができます。釈迦牟尼仏の弟子には神通力があります。そういう人の弟子にも神通力があります。釈迦牟尼仏は天国へ行くこともでき、地獄を見て回ることができます。そういう人たちも同じことができます。釈迦牟尼仏の弟子たちが行く先々には福報がありました。誰でも釈迦牟尼仏の弟子と関係のある人は、多くの福報があるのです。そういう人たちもどこへ行っても、そこには福報があります。もし釈迦牟尼仏に光があり、智慧やパワーがあるなら、そういう在世の仏陀にも同じものがあります。

当然、すべての弟子が同じパワーを持っているわけではありません。釈迦牟尼仏の弟子たちも同じです。みな同じパワーを持っているわけではありません。もし現在そのような人がいれば、私たちは当然、彼を「仏陀」と呼ぶことができます。私たちは、仏陀は天国や極楽世界に住んでいて、彼らを見ることができないと思っています。もしそうなら、私たちはどうやって彼らを知ることができなのでしょう。どうやって彼らと会うことができるのでしょうか。仏陀は天国にいたことは間違いないですが、彼らは下へ降りて来て人間に化身することができます。彼らは何千億にも化身することができますが、人間に化身して、私たちに見せることは容易いことです。もし彼が人間に化身できなかつたら、私たちは誰から学ぶのですか。人だけが人を教えられるのです。そういう人は、外見は人間ですが内面は仏陀なのです。

私たちはよく、「どんな人にも仏性があり、仏陀は心の中にある」と言いますが、この言葉は間違っています。けれども、私たち普通の人はまだこの仏陀を見たことがなく、まだ自分の中の仏陀を目覚めさせてなく、まだ見つけていません。けれども在世仏はすでにそれを発見していて、自身の仏性がどこにあるかわかっていて、すでに仏陀になっています。彼は仏陀と一体です。ですから、もし私たちが仏陀を探したければ、そういう人を探さなければなりません。そういう人の内面は仏陀です。その人を拝むことは、その人の完全に発展した内面の仏性を拝むことで、その人を拝んでいるではありません。

例えば、どんな人でも医学を学ぶことができ、みんな医者になれます。けれども卒業した

医者とは、能力を十分発展させた人で学び終わった人です。ですから患者の病気を治すことができるのです。私たちが病気にかかったときに、まだ卒業していない、未来の医者に診てもらったり、普通の人に病気を治してもらったりするわけにはいきません。そういう人は将来医者になる可能性はありますが、必ず一人の卒業した、豊富な経験のある医者を探さなければなりません。同じ道理で、仏陀は心の中にあります。ある人はまだ心の中の仏陀を発見していませんが、ある人はもう発見しています。ですから、私たちが仏陀を探したければ、すでに仏陀を発見した人を探すべきです。そのような人の内面には仏陀が存在するからです。

ですから古代から今日まで、修行したい人はまず、そのようなマスターに弟子入りをします。經典にも書かれているように、必ずそういう仏陀を探してこそ、仏陀になることができるのです。けれども、大部分の人は經典の意味を誤解して、木像の仏陀や石像の仏陀を拝みに行き、自分の内面の仏陀を探すのを忘れていきます。内面の仏陀は置き去りにされ、カビが生えそうです。見つけてくれないし、世話もしないで、洗ったり、見つめたり、拝んだりもせず、通じ合うこともないからです。外の木像の仏陀をばかり拝んでいるので、内面の仏陀は泣いて、孤独でカビが生えるほどです。しかし依然として仏陀とは何かわかりません。こういう人は道（タオ）を求めることはとても困難です。なぜなら、木像の仏陀に引っぱられ、木像の仏陀に縛られ、經典に縛られ、本の虫、木の虫になってしまったからです。彼らの心の中には木像の仏陀や經典しかないのです。そういうものと同じように彼らの心は開かず、態度も明るくなく、こ

れではいつ解脱できるのでしよう。

雨が降っているとき、レインコートを着ていないと私たちは全身が雨に濡れます。同様に、一人の在世仏や大修行者の前で、自己の無形のレインコートで覆わなければ、私たちは多くの福報が得られます。ある人は講義を聞きにただけでも、とても良い体験がありました。ある人は大師を一目見ただけでも、家に帰るとすぐにとても良い体験がありました。それは彼らの心が明るく開かれていて、すでにレベルがとても高いので、そのような福報を受け取ることができるのです。そうでなければ、たとえ仏陀の前に座っていても、地獄に落ちることがあります。釈迦牟尼仏が在世のときに、何人かは彼の目前で地獄に落ちてしまいました。それは「エゴ」がまだ断ち切れず、傲慢な心や悪い心をまだ断ち切れず、仏陀の前で尊敬の心も起きず、自分がとても偉大であり、多くのことを知っていて、仏陀より素晴らしいと思っただけからです。

昨日ある人が菜食について聞きました。その人は肉を食べるのが大好きだそうです。私は肉を食べるのは良くありませんと言ったら、彼は気分を悪くしました。時には状況が許さないために菜食できないこともあります。これは傲慢とは関係なく、傲慢ではありません。時には状況により本当に菜食ができないこともあります。これは理解できません。けれども、ある人は肉が大好きなのでやめられず、それでわざと口実を探したり、とても傲慢になったりするので。そういう人は、自分は何にも執着しない、修行にも執着しないと思っただけです。自分のレベルは釈迦牟尼仏より高く、イエス・キリストより高く、老子より高いかのように振る舞いま

すが、これらの歴代の大師はみな肉を食べていません。彼は自分は六祖慧能よりも高いと思っていますが、六祖慧能は獵人の一団に隠れて修行をしたときでも、野菜しか食べませんでした。彼はどうして肉を食べないのかと聞かれたときに、お腹が痛いので肉を消化することができないと答えました。彼は自分が修行をしているとは言えませんでした。その時は逃げて隠れていたのです、あまり人に言いふらすことはできなかつたからです。その頃、六祖慧能はすでに衣鉢（いはつ）を授かっていて、中国の禪宗の第六代目の祖師になっていました。それなのに、彼はそんなにも謙虚で、そんなにも菜食に「執着」して、肉を食べませんでした。

昨日質問した人は、きつと六祖慧能よりレベルが高いのでしょうか。ですから私は彼に教えられません。私が伝えている法は、六祖慧能から代々伝わって来たもので、私は六祖慧能を尊敬しなければなりません。彼が肉を食べないなら、私も肉を食べません。釈迦牟尼仏が梵網經（ぼんもうきょう）の中で言っているように、菩薩の戒律を受けた人はみな肉を食べてはいけません。けれども多くのいわゆる仏教徒は、この点は重要なことではないと思っています。彼らは私に「どうして菜食のですか、釈迦牟尼仏自身、菜食していなかったですよ」と質問します。釈迦牟尼仏が菜食でないと誰が言っているのでしょうか。こういう質問をする人は、きつとインドに行ったことのない人です。見たことがないのに、どうしてわかるのですか。むやみな憶測です。もし、釈迦牟尼仏が菜食をしていなかったとしたら、どうして彼の弟子に菜食することを教えたのですか。梵網經（ぼんもうきょう）の中で、彼は絶対に肉を食べてはいけ

ませんと言っています。楞嚴經（りようごんきょう）の中では、肉を食べると魔になると言っています。楞伽經（りょうがきょう）の中でも、肉を食べると亡霊になると、魔になると言っています。彼ははっきりと言っています。もし彼自身が肉を食べていたら、どうして自分の弟子に菜食をするよう教えることができるのでしょうか。

あなた自身がしていることは、あなたの弟子に教えることができます。他人にこうしなさいと教えておいて、自分が反対のことをしてはいけません。昨日の質問者は多くの経典を読んでいるなら、どうしてそんな小さいことさえわからないのでしょうか。それなのに自分は何でも知っていると誇張し、修行者は執着してはいけないなどと言うのです。彼から見れば、自分は歴代の大師よりもレベルが高いのです。過去の大師たちは「執着しすぎて」、自分だけは「執着しない」ことになります。彼ははたして経典についてどれくらい知っているのでしょうか。大胆にも大衆の前でこんな話をするのは、あまりにもレベルが低く、智慧が開いてないからです。あまりにも低いので、上へ引き上げることができません。頭の中は石がいっぱい詰まっています。石が多くて重すぎます。そういう人は私たちの法門は受けられません。彼らには、まだその時期が来ていないからです。

私たちはどんな衆生にも仏性があることを知っています。けれども、どんな衆生も仏性を探し出せるわけではありません。それはまだ智慧が足りないからです。まるで雨が降っているとき、レインコートを着て自分を覆っていれば、どんなに大雨が降ったとしても濡れないようなもの

です。みなさんは白檀の木は品質がとても良いことを知っています。例えば山林の中に、一、二本の白檀の木があると、白檀の香りが少しずつ広がって山全体に香ります。こういう植物は他の草木に影響して、他の草木もとても香りが良くなります。最終的にはどれが白檀の木か、どれが白檀の木でないかを見分けることさえできなくなります。みな同じになるのです。

これは香水も同じで、香水店に入ると何も買いたいと思わなくても、とても良い香りを嗅ぐことができます。時には店長が少し香水をつけてくれると、家に帰ってから一日中良い香りがします。たとえ香りを嗅ぎたくなくても、ずっと香りは続きます。けれども雨のとき、自分の体をレインコートで覆ってしまえば体は濡れません。または鼻が詰まっている場合も、香りを嗅ぐことはできません。

同様に、どんな衆生にも仏性はあります。けれども、ある人は探し出せませんが、ある人は探し出せません。私たちは完全に仏性を探し出した人を「仏陀」と呼びます。もし私たちが仏陀を探したければ、そういう人を探すべきです。その人は仏陀だからです。その人から学べば、私たちの仏性を探し出すことができ、私たちも同様に仏陀になれます。仏陀になれなかったら、その人に従って学ぶ必要はないのでしょうか。もし毎日仏陀を拝み、仏陀の靴を洗い、仏陀の靴を磨くだけなら、当然仏陀になることはできません。いくら良い白檀でも、石にその香りを移せません。ですから、そういう石はすぐに取り除くべきです。家に持ち帰っても使いものになりません。木こりは決してこのような石は家に持ち帰って使うことはありません。た

とえ、その石が白檀の木とどんなに似ていても使いものにはならないのです。

どんな時代にも、そのような石のような人がいます。白檀の木と同じ場所にあっても、少しも影響されません。といっても、これは何も失望するようなことではありません。人々は元々そういうもので、レベルが同じではないからです。ですから、伝法をするときに人を見なければなりません。時にはマスターはとても慈悲深いので、多くの人が一緒に来て法を求めると、その中の一人を追い返すわけにはいかなくなるのです。分け隔てができないので、やむなくそのような人にも伝法するのです。しかし、マスターはそういう人に法を伝えても、無意味なことでとどわかっています。釈迦牟尼仏は提婆達多（デーバダッタ）に伝法しましたが、後になつて提婆達多は裏切りました。釈迦牟尼仏は決してわからなかったわけではありません。わかっています。ただ彼に言わなかっただけです。

私の弟子の中にもそういう人がいます。提婆達多と同じことですが、私は別に構いません。そういう人にはあまりにも多くの石が埋まっているので、徐々に取り除かなければなりません。けれども、彼らにも彼らの役目があるのです。一人の大師は人々のカルマをたくさん背負っているのです、もし大師を誹謗する人がいなくなったら、カルマを早く消し去ることができないのです。人からの誹謗をたくさん受けて、それに対して感謝の心でいれば、比較的早くカルマが軽くなります。たとえばみなさんが私を誹謗しても、私はとても感謝します。目の前で誹謗した方がより好ましく、裏で言っても私には聞こえないので役に立ちません。そのような誹謗をする

人は愚か者です。もし君子であれば、人の目の前で言います。後ろでブーブー言って何の意味があるのでしょうか。子どもや、裏で人の善し悪しを噂する人と同じです。私に会うときはみな甘い言葉で「マスター、あなたはとても慈悲深いです」と言いますが、裏では極まりない誹謗をするのです。

インドや他の地域では、在世仏や在世菩薩が現れると、弟子たちは彼をたいへん尊敬します。その弟子たちが大師に従い真面目に修行すれば、みな高いレベルの体験が得られ、弟子たちもその大師が誰なのかがわかっています。ですから、そういう大師をとっても崇拜しています。彼らは見ることでできない仏陀や神は崇拜しません。そのような偉大な修行者は、仏陀や神と一緒にいるからです。彼らは肉体がありますが、彼の本当の主人はこの肉体ではなく、本当の主人はとても高い境界（きょうがい）において、この肉体の言動を指揮しています。時には本当の主人が大師の肉体に戻ることがありますが、戻って来ないときもあります。この肉体は機械と同じように、指示に従って動いているのです。

私たちはUFOや飛行物体が地球に来たとよく聞きます。そして、それを見た人がいます。そのような宇宙人はとても背が低くて、頭から足まで衣服に覆われています。彼らはあちこち見て回り、資料を作成して、私たち地球の状況を参考にするのです。私たちは、彼らは天人か、阿修羅か、高い境界（きょうがい）の人だと思っていますが、違います。もし高い境界の人だったら、とてもきれいであんなに小さくはありません。歩き方もあんなふうではありません。

全身を覆い隠して目だけ出していることはありません。ですから、彼らは天人ではありません。

天人はとても美しく、とてもきれいです。私が講義をするとき、あるいは七日間リトリートのとときに、天人が私に会いに来ることもあり、私の弟子の中にも見た人がいます。彼らはとてもきれいで美しい服を着ています。それこそ本当の天人なのです。あの飛行物体から降りて来る人は、実際は人間ではなくロボットなのです。そういったUFOは人間の操縦士は必要ありません。ロボットでも操縦できるのです。ある場所に飛んで行ったら、ロボットは自動的に降りて来て各所を見て回り、資料を集めるのです。天人自身がUFOに乗ってここに来るのではなくありません。当然、彼らも来るときがあります。最近ある高い境界の人が来ましたが、そういう人は普通の人の目には見えません。

仏陀になった人も同じです。彼自身、毎日体の中にいるわけではなく、彼はとても自由自在に、宇宙を回ることができ、どこにでも、どの境界にも存在できます。ですから、彼を「如来」と言います。来るが如く行くが如く。その意味は来ることもなく行くこともなく、どんな場所にもいるということです。来る必要もなく、行く必要もないのです。けれども、どんな場所でもどんな境界でも、彼を見ることができなのです。そのような人を探し出すことは簡単ではありません。もし彼が在世のときに会えたら、私たちは彼を仏陀、菩薩と称賛しますが、彼自身は、決して自分は仏陀だとか菩薩だと名乗ることはありません。真の仏陀や菩薩は、自分は仏陀だ、菩薩だなどとは考えません。けれども、この世界の言葉を使って言うと、または經典を

使つて照合すると、私たちは彼が仏陀や菩薩であることがわかるのです。ですから、彼らの弟子は彼を仏陀、菩薩であると称賛するのです。決して彼が自分で言っているわけではありません。その後一人から十人に伝わり十人から百人に伝わり、その結果多くの人々に知れ渡るのです。

そのような在世の仏陀や菩薩に出会ったとき、私たちが本心に尊敬し崇拜すると、眞の福報があります。例えば、観音法門の修行者でありながら、そのようなマスターに対して尊敬の心が無いというのは、その人のレベルが高くないことを示しています。最高でも三界以下の第三の世界までしか行けません。その世界にはカルマはありませんが、いつかは三界も破壊されてしまいます。というのは、三界以下は成、住、壊、空（發生、成長、破壊、消滅）のレベルの中だからです。三界を超えてこそ永遠に解脱することができるのです。

ですから、私たちが過去の仏陀、未来の仏陀、西方浄土の仏陀を尊敬して、毎日名前を唱えていても、在世仏を尊敬しなければ、何の役にもたちません。本当に何の役にも立たないので、なぜなら、一人の在世仏は最も良いガイドで、私たちを連れて三界を出ることができからです。もし私たちは彼について行かないで、ただそこで過去のガイドの名前を唱えているだけなら、何の役に立つと言うのでしょうか。もし私たちが地面に跪き、百年、千年、一万年、一億年、飲まず食わず、遊ばず眠らずで、毎日ずっと阿弥陀仏の名前を唱えていても、阿弥陀仏は私たちを上へ連れて行ってくれません。けれども一人の在世仏を礼拝すれば、本当に彼を信じていけば、それがたとえ一瞬であったとしても、彼は縛りつけられた縄を断ち切つて私たち

を助けてくれ、直ちに解脱させてくれます。レベルはすぐに解脱のレベルになります。これは私たちのレベルにより、わかる人もいれば、わからない人もいます。

例えば私は今、最上階で講義をしているとします。みなさんは私に会いに来て、入口の外で立っていたとします。そのとき、誰かがみなさんの中に案内すれば、すぐに私に会うことができます。しかし、みなさんがまだ一階や二階に留まっていれば、誰かが中に入るよう引つ張つても、せいぜい三階に上られるだけです。やはり私には会えません。みなさんが四階にいるとしたら、そこからさらに一階上るだけで、私のいるところに着きます。

ですから、時には一人の真のマスターを一目見ると、私たちはすぐに悟りを開くことができます。本来そうでなければなりません。印心を伝えなくても悟りを開きます。けれども、ある人は比較的レベルが低く、特に末法の時代では、衆生のカルマはとも多いので、仏陀や菩薩はたくさん加護して、相当引き上げないと開悟できません。ですから印心が必要です。人によつてはマスターを一目見るとすぐに開悟します。直ちに開悟の体験があります。けれども、やはり伝法しなければなりません。法を伝えてこそ、修行を継続することができます。この路（みち）はとても長いので、開悟してすぐに仏陀になることはありません。開悟とはただ小さい仏陀になったことです。まるで赤ちゃんが乳を飲み続け、お粥を食べ続けてだんだん大きくなるようなものです。

釈迦牟尼仏が在世のときに、彼の目の前で何人が地獄へ落ちてしまいました。それは彼ら

のレベルがあまりにも低かったからです。彼らは仏陀を尊敬せず、一人の在世仏の重要性を理解せず、梵天、彼ら自身見えない神、經典の中で述べられた神だけを尊敬していました。それで十分だと、大したものだと思っていました。ですから、たとえ釈迦牟尼仏でも彼らを救う方法がありませんでした。

インドでは弟子たちは、神より彼らのマスターを称賛します。神は彼らをこの娑婆世界に送って来て苦しみを受けさせていますが、在世のマスターは彼らを上につれて行き、解脱させてくれて、この生老病死の輪廻から離脱させるので、彼らは自分のマスターを最も尊敬しています。彼らが神を尊敬しないのは、決して故意に神を誹謗しているわけではなく、弟子たちがあまりにも彼らのマスターを敬愛しているからです。

しかし、それも間違いではありません。もし神がいるとしたら、どうして神は私たちを救いに来ないのでしょう。私たちにこんなに多くの苦しみを受けさせるのでしょうか。マスターだけが私たちの苦しみや生死輪廻を見て、すぐに私たちを上につれて行き、西方極楽世界、または至福の解脱の世界につれて行くことを約束してくれます。在世のマスターだけがこれを約束してくれるのです。神は何も約束してくれず、何も言ってくれません。私たちは神がいるか、いないかもわかりません。しかし、わかることはある種のマスターがいて、それは在世の仏陀であり、私たちはそのようなマスターと同じ合えば解脱することができます。この点は大変重要です。もし、これを忘れたら、修行は比較的困難になるでしょう。

というのには、私たちは誰が仏陀なのか、誰が菩薩なのか識別するのはとても難しいことだからです。私たちは、自分はとても聡明で多くのことを知っていると思いき、自分のパワーに頼れば十分だと思っています。私たちには確かにパワーがあり、何でも備えています。しかし、このパワーのまだ発展していないうちは、すでにパワーの発展した人に頼って助けてもらわなければなりません。

子どもがまだ歩けないうちは、お父さん、お母さんに手をつないでもらわなければなりません。一人が片方の手をつなぎ、あるいは一人が子どもの小さな両手をつかみ、一步、一步ゆくり歩くのです。それでも子どもは左右にふらつきません。そのうち徐々に、自分で歩けるようになるのです。けれども、このときもやはりお父さん、お母さんは子どもの手をつないで歩かなければなりません。というのは、短い距離は自分で歩けるので問題ありませんが、遠い所へ行くときは、お父さん、お母さんが子どもを抱いて行かなければなりません。あなたが子どもを連れて芝居を見に行ったり、遊びに出かけたりしたら、まだ半分も歩かないうちに、子どもはもう疲れて抱いて欲しいと言って騒ぎます。抱かないと歩きません。それで、あなたは子どもを抱くか、または自転車、オートバイ、タクシーなどに乗せます。

修行を始めたばかりの人も同じです。尊敬の心がなく、謙虚な心がなければ、修行はとても遅く、とても苦しく、多くの障害があります。これはすべて私たち自身が自分を妨害しているのです。時にはマスターたちはこのような状況を見ると助けたいと思うのですが、私たちは自

分度でアにカギをかけて話もしないし、人の話に耳も貸しません。また、彼の手を取ろうとしても断ります。これではどうしようもなく、話しても通じないので、自分で自分の課題を学ばせるしかありません。私たちが英語を学ぶときも、始めたばかりのときは話せません。毎日先生の所へ行つて、先生と会話の練習をしなければなりません。またはクラスメートと一緒に会話の練習をして、いつも英語の本を読んで、常に先生と一緒にいて、その後、英語が話せるようになります。英語を話すことを学ぶだけでもこんなに難しいのに、仏陀になりたいなら、仏陀のパワーに頼らず、どうやって仏陀になれるのでしょうか。自分に頼るだけで自分の仏陀に会うことができるのでしょうか。

私は今、仏陀のことについて話し、仏陀を称賛しています。決して私自身が仏陀であるとは言っていません。そうは言っていません。けれども、もしそういう仏陀がいるなら、必ず彼を敬愛してこそ、自分に利益をもたらすことになります。第一目から今まで、私は仏陀を紹介し、観音法門を紹介しています。この造物主の大パワー、根源のパワーを紹介しています。これらは、あるものは私が本から学んだもので、あるものは私自身の体験です。あるものは私のマスターから学んだものです。今、私はこれらをみなさんに話しています。決してみなさんに私を尊敬しなさいと言うのではなく、自分自身の仏陀を見つけるのが最も良いことだと言っているのです。

けれども、もし自分の内面の仏陀を探したければ、まず、どの路（みち）を行くのかを知ら

なければなりません。みなさんが路を知りたいなら、私が教えます。ある人は急いでその路を知りたいと、もう何回も質問しました。みなさんは一週間がんばって講義を聴きました。路を知りたいと思うなら、今日申し込んでください。けれども必ず誠心誠意に本当に道（タオ）を求め、本当に解脱したい人でなければいけません。好奇心ではダメです。仏陀と菩薩は私たちの心を知っています。もし私たちの心が誠心誠意でなければ、それは仏陀と菩薩を誹謗することになり、自分自身を誹謗することになります。みなさんはもう何回も講義を聴いて、この法門を理解したなら、そして私が何を教えているのかもわかったなら、今、申し込んでください。

（Mはマスターの答え、Qは聴衆の質問）

Q マスターにお伺いします。卵は肉食ですか。菜食ですか。

M 卵は菜食ではありません。修行を始めたばかりの人で、もし本当に菜食できなければ、一、二個食べても構いませんが、その後は食べるのをやめるべきです。卵を食べると修行によくないからです。こういったものはみな動物のお腹から出てきたものです。鶏卵がなければ鶏はいません。ですから卵も動物だと言えます。卵の中にはすでに生命があります。受精されていない卵もありますが、それにも半分の生命があります。メスとオスの交配がないのでニワトリに

はなりません。一個の個体だけではヒヨコは生まれません。ですから、未受精卵と言います。ただ因縁が足りないだけで、生命でないとは言えません。

Q マスターにお伺いします。呪文を唱えるときに、自分の声を聞くべきですか。それとも、呪文の内容を考えるべきですか。

M どちらも違います。それは観音法門ではありません。あなたはどんな法門を修行しているかわかりませんが、私たちの法門は呪文を唱えません。音を聞くのも、外面的な音ではありません。外面のものを追求することは役に立ちません。呪文の内容を考えることも役に立ちません。呪文を唱える声を聞いても役に立ちません。けれども、あなたがしたいことをすればいいのです。私たちが教えているのは別の種類の法門です。

Q マスターにお伺いします。もし、私の修行レベルが第三界に留まっていて、しかも私がマスターより早く死んだとしたら、マスターは私を上へ引き上げてくださいますか。

M はい、引き上げます。私はこの肉体ではありません。私はすでに第三界にいます。死んでから行くのではありません。もちろん、あなたを引き上げることができます。というのは、私は現在、すでにそこにおいてあなたを待っています。(笑い) 私が死んでから、弟子たちを上へ連れて行くのではありません。それでは、誰も私より先に死ねないのではありませんか。私がみなさんよりも早く、明日にでも自殺して(笑い)、あの世でみなさんを待っていれば、みなさ

んは安心するというのでしょうか。私の弟子にはもう八十歳の人もいます。これでは、あまりにも心配ではないでしょうか。そうなら老人はあえて私について学ばないでしょう。万が一、私がまだ死なないうちに、みなさんが往生してしまい、誰も連れて行ってくれる人がいなければどうするのでしょうか。

私はこの肉体でみなさんを上へ連れて行くのではありません。この世界ではこの肉体が必要です。第一界では第一の体を使い、第二界では、他の体を使います。マスターはあらゆる境界に存在しています。内面のマスターはこの外面の体よりもっときれいです。

Q もしマスターが先に死んだら、上の方で私たちを待っていてくれますか。(笑い)

M 今、もう待っています。どうして死んでから待つのですか。あなたは今、どの世界に行ってもマスターと会うことができます。そうですね。

Q そうです。

M それならどうしてこんな愚かな質問をするのですか。(笑い)

Q 私はみんなの代わりに質問しているのです。

M わかっています。けれども、そんなことをしないでください。これは内面のことです。あなたがこのような質問をすると、彼らに私が何であるかわかってしまうので、きまりが悪いのです。

Q 私たちが普段、特別気にしていないものが、座禅して十分か二十分経つと、それらのもの

がどんどん中に入ってきます。これはどうしてですか。

M あなたが以前そういうものと関係があったからです。今、彼が挨拶に来たのです。集中すれば問題ありません。心が乱れているときにそうなるのです。例えば、誰も人が住んでいない空き家には、誰かが入ってくるかもしれないし、しかし、もしその部屋に誰か住んでいたら、中に入って物を盗む人はいないでしょう。メデイーションのときに集中しないと、やはり多くの物が入ってきます。もつとたくさん修行したら問題ありません。七日間リトリートにもつと参加しなさい。

Q 多くの本に記載されている内容によりますと、ある人は大僧侶、例えば清朝の印光大師の指導した方法で念仏して、浄土に往生したとありますが、これは本当ですか。

M あなたはそれが確かだと思いますか。

Q よくわかりません。

M そんなに簡単なことではないでしょう。第一界は阿修羅の場所です。そこには至る所に「いわゆる」西方極楽世界の境界があります。もし私たちが真の極楽世界のことを知らなかったら、簡単に魔に騙されてしまいます。実際、第一界へたどり着いただけです。第二あるいは第三界は言うまでもありません。第一界のきれいな境界を見て、それが極楽の世界だと勘違いしているのです。

阿弥陀仏を唱えるのも結構なことです。多くの人がいつもそういう質問をしに来ます。最高の法門を修行できるレベルに達していない人には、やはり彼らに南無阿弥陀仏を唱えるように言います。印光大師だけが人に念仏を教えているではありません。印光大師はその他の法門も修行しています。けれども、彼は広く伝法を行っていません。ですから、あなたは知らないのです。もし、彼が南無阿弥陀仏だけを唱えていたら、なぜ普陀山（ふださん）にこもって十年も修行しなければならなかったのでしょうか。どうして家で念仏しないで、普陀山に行つて念仏しなければならなかったのでしょうか。彼は座禅にとても精進したのです。

広欽老和尚は非常に苦しい修行をしました。あんな長い間修行したのです。それで彼のレベルに達したのですが、私は彼のレベルは知りませんが、少なくとも阿羅漢のレベルはあります。というのは、彼はトラを善良に変えることができたからです。これは阿羅漢特有の能力です。その他のパワーについては話したくありませんが、彼のレベルは阿羅漢よりもっと高い可能性があります。たとえ彼があればほど苦しい修行をしなくても、浄土に行くことができたでしょう。したがって一人の在家者が何日か家で、仏陀の名前を唱えただけで、どうして仏陀になることができるのでしょうか。

私たちは観音法門を修行しています。私の弟子は出家者より在家者が多いです。釈迦牟尼仏が在世のときにも多くの在家の弟子がいました。楞嚴経（りょうごんきょう）の中で、二十五人の菩薩が彼らの修行の体験を述べていて、その中にも多くの在家者の体験があります。出家

者ではありません。私が在家の人々に念仏を教えたのは、彼らが観音法門を修行したからではないからです。念仏をするのはしないよりも良いからです。少なくとも少し心を平静に保つことができます。けれども究極ではなく、仏陀になれません。西方極楽世界へ行くこともできません。

Q 聖書には、人は生まれながらに原罪があると書いてありますが、それは私たちの前世の因果を指しているのですか。

M そうです。私たちの前世の因果以外に、共通のカルマもあります。先祖の罪も共通のカルマです。私たちは父母と一緒に住んでいて、彼らはご飯を炊いて私たちに食べさせてくれます。これも私たちの共通のカルマになります。もし、私たちの先祖が不道德なことをしていたら、私たちが彼の残した財産を使うと、先祖の罪を分担しなければなりません。原罪、共通のカルマ、本来のカルマはみな同じ意味です。

Q 「八閔齋戒」の意味を説明してくださいませんか。

M それはみなさんに世俗の生活を手放し、一日くらい休んで欲しいという意味です。というのは、みなさんは毎日戒律を守らないからです。八閔齋戒は観音法門の修行と一緒に行ってこそ意義があるのです。例えば、私たちが七日間リトリートや三日間リトリートを行う意義は、私の弟子がこの三日間、または七日間に、この世界のものをすべて手放し、夫、子ども、妻、電話、親戚、友人、ビジネスをすべて手放し、山へ行って私と一緒に集中して、何日かメデイ

テーションして修行することです。私の弟子だけ参加できます。この期間は本当に戒律を守ります。口は何も喋らず、耳はいざごさを聞かず、目はでたらめなものを見ないのです。ですから、その数日間には本当にしっかりと戒律を守ります。そのときは自然に戒律を守っているのです。なぜなら一緒に共修しているのです、何のいざごさもなく、何も話したいこともないからです。言い争いも論争もありません。ですから、そのときは自然に戒律を守っています。自然に念仏し経を唱えています。というのは夜になると、私が経の講義をするからです。それこそ、みなさんが経を唱える時間です。「生きた経」を唱えるのです。朝は、私は弟子たちに修行について注意をしたり、必要なことについて指導したりします。あるいは弟子たちに自分の修行について話してもらいます。これこそ本当の八関齋戒の修行です。

ただし、マスターが往生したあととは、法を伝える人がいなくなつたので、經典を読むだけです。または人々は三日間リトリートのときに、口は何も喋らず、経の講義を聴き、念仏しているのを見て、三日間リトリートとはこういうものだど勘違いするのです。マスターの指導がないので、真義がわからないのです。八関齋戒を守って、一日休むことも悪くありませんが、多くの福報にはならず、少しばかりの人天の福報（人間界と天界の福報）があるだけで、何の功德もありません。ただあなたの心が安らぎ、悩みが少し減少します。一日中仏陀のことだけを考え、この世界のことを考えず、人と話をせず、多くのいざごさを避けるからです。けれども、智慧を開くことはできず、悟りを開くこともできません。ですから、八関齋戒は良いことです。

が、特別な功德はあまりありません。

Q マスター、私は一冊の本を読みました。イギリスのある博士がインドに行って一人のマスターに出会った話です。そのマスターは彼を暗い洞窟の中に連れて行って、修行をさせたそうです。彼は洞窟の中で体から光を発する人を見ました。その人は、自分は摩訶迦葉（まかかしよう）であると言ったそうです。これは本当ですか。

M 私はわかりません。自分の目で見なければわかりません。こういうことについて私は興味がありません。ある人は修行すると光を放つことができます。私の弟子でも発光できる人がいます。ヒマラヤの暗い山の洞窟に人が発光するのを見に行かなくてもいいではないですか。ここにも発光している人がいます。みなさんには見えただけです。山の洞窟へ行く必要はありません。台北の最もにぎやかな場所でも、発光してあなたに見せてあげられる人がいます。彼らは私について一年以上学んだだけです。多くの人は私について一、二カ月修行しただけなのに、もう光を放っています。摩訶迦葉だけが光を発つことができるわけではありません。あんなに長い間修行する必要はありません。釈迦牟尼の時代から現在まで修行して、二千五百年も経ってやっと少しの光を発することができたとしたら、みなさんはそんな修行をする必要はありません。

私は彼が山の洞窟の中で何をしているか知りません。どうして出て来て衆生を救わないので

しよう。衆生はあんなに苦しんでいるのに、彼はそこで少しの光を発しているだけで（笑い）、そのような仏陀を拝む必要はありません。ここでみなさん、このような生き仏を拝んだほうがましです。今この会場に、光を発している私の弟子が何人かいます。ですから、そういうことが本当かどうか気にすることはありません。何の役にもたちません。私は彼が誰に会ったか知りませんが、冗談が上手な人もいるので、自分は過去の何々大修行者であると名乗ることもあります。私が思うには、もし摩訶迦葉だとしたら、彼は偉大な人で、決して暗い洞窟の中で少しの光を発するだけの人ではないと思います。

Q もし、最高の神がいるとしたら、私たちは彼に掌握されて、私たちは何も変えることができないうことでしょうか。

M 違います。私たちは変えることができます。私たちには「自由の意志 (Free Will)」があるからです。私たちは良いことと悪いことを知っています。私たちは善し悪しを知っているの、良くなることも、悪くなることもできます。そうでなければ、修行する必要はありません。昨日、私は竹竿について話しました。私たちは登ることもできるし、落ちることもできます。神、または最高の仏陀はもちろんです。けれども私たちは自分を変えることもできます。この最高の根源のパワーがないとしたら、私たちはどこから出て来たのでしょうか。しかし、こういうことはあまり気にする必要はありません。と言うのは、実際私たちとあまり関係がないか

からです。私たちは偉大な人になれば良いのです。神がいるかどうかについてはあとの話です。

今、最も重要なことは、私たちは自分を変えなければなりません。この娑婆世界で私たちは完璧な人にならなければなりません。全宇宙のことがわかり、如来（によらい）になることです。もし誰かが、同じような人間になりたいとしたら、その人をも連れて行けます。これが私たちの目的です。神がいるかいないかは私たちと関係ありません。今、神がいても私たちには役に立ちません。なぜなら、私たちが神を拜んでも彼には聞こえないのです。もし彼に聞こえたら、世界はこんなに苦しみません。苦しみが好きなのはいいからです。彼らは毎日神に助けてくれるように祈っています。神は助けてくれません。マスターだけが助けるのです。どんなことかに係わらず、マスターに祈れば早いです。神はとても遅く、耳が聞こえません。観音法門を修行していないからです。（笑い）

ですから、神がいるかいないか、最高の仏陀がいるかいないかということに気にかける必要はありません。こういったことは重要ではありません。私たちは自分の修行に励み、良い人、偉大な衆生、自由自在で、神通力があり、パワーに満ち、行きたい所に行けて、どんな人でも救える人にならなければなりません。これこそが私たちにとって意義のあることです。私たちは多くの人が苦しみを受けるのを見ても、手助けする方法がないのです。ですから、私たちはパワーのある大衆生になり、そういう苦しんでいる人を助けなければなりません。これが私たちの目的です。最高の神云々については、気にすることはありません。



三界以下の概況

スプリームマスター チンハイ フォルモサ・台北

一九八七年三月十一日

今日はいくつかの境界（きょうがい）について講義をします。観音法門の修行者は伝法のと
き、たくさんの境界があることがわかります。しかし、私は比較的細かいことは話せません。
ここでは一般的なことを少し話せるだけです。私たちは凡人の頭脳や口を使って修行ができ、
それで最高の境界にたどり着くことができと思っています。しかし、ある人が修行して三界
を超え、さらには三界よりもはるか高い境界に到達した場合、修行の途中に多くの様々な落と
し穴があることが見えます。したがって、もし道案内や、マスターの保護のパワーがなければ、
途中でたやすく魔に連れ去られます。第一界に到達したばかりで、まだ第二界にも到達してい
ないうちに、もう連れ去られるのです。第一界は阿修羅の場所で、これについては一日目に講
義しました。今日は阿修羅の場所より上の境界について講義したいと思います。

阿修羅は第一界です。第二界まで修行したとき、どんなものに出会うのでしょうか。当然、
他の衆生にも出会います。第二界の衆生は比較的善良で、阿修羅の衆生とは違って戦いは好き

ではありません。しかし、彼らも人を騙します。なぜ人を騙すのでしょうか。大変よく修行して大開悟した人を除けば、宗教の信者の大半はどんな宗教を信仰しようかと、どんな宗派に属していてもみな「三界以下の神」を崇拜しています。（「三界以下の神」は最高の神とは異なります。最高の神は最高のパワー、仏教で言う無上正等正覚の意味です）

そのような三界以下の神は、決して最高の境界ではありません。たくさんのレベルの神がいますが、八割以上の宗教はみな、そういう低いレベルの神を崇拜しています。ですからマスターによる伝法のない宗教を信仰すると、最高でも第二界にしか、たどり着けません。阿修羅の場所を通過することは容易なことではないので、第二界に到達したとき、私たちは一旦そこで止まります。なぜでしょうか。それからの路（みち）はまだ大変長く、案内人がいなければ私たちは三界に出る路（みち）を見つけれないからです。

なぜなら、私たち普通の人はこの娑婆世界で生活していて、比較的苦しく、この世界は暗いため、第一界にたどり着いたら、すぐに不可思議な喜びを感じるからです。それぞれの世界にはみな、その世界の最高の教主、最高の神がいます。その教主の部下ではなく、その世界の最高の教主、最高の神に会ったときは、私たちはとても喜びを感じます。私たちの個性、思想、生活様式のすべてが徹底的に激変します。このような変化は私たちには想像できません。私たちのパワーはぐんぐん大きくなり、すぐに智慧が開きます。ですから、そこは最高の境界だと思ひ込むのです。その時はまだもっと高い世界があることが想像できないのです。

例えば、この世界では多くの人は宗教を信仰していません。彼らは神も信じませんし、極楽世界も仏教もいかなる宗教も信じません。彼らはこの世界こそが唯一の境界（きょうがい）であり、死後は何も無いと思っています。

同様に第一界に到達した人が、第一界の教主に会ったときも、宇宙で最高の究極の目的に達したと思うのです。時にはその境界の神は私たちに、娑婆世界に戻って伝法し、教主になって新たに宗派を作るよう指示します。すると彼は、自分は絶対に天使か神の使者に違いないと思ひ込むのです。というのも、彼はその他の世界を知らないからです。先ほど話すのを忘れましたが、第一界にいる衆生は寿命が大変長く、甚だしい場合は数千万年生きることができ、彼らは死ぬ前にそこが不老長寿の世界だと思ひ込むのです。

もしある人が良い法門の修行に精進し、しかも第二界のレベルに到達した先生についていたとします。その先生は生徒を最高でも、第二界にまでしか連れて行くことができません。第二界に到達したときには、宿命通（しゆくみようつう：自分の過去世を知る力）という神通力があり、自分だけでなく、他人の過去、現在、未来を見ることがができます。

第二界には図書館に似た場所があるからです。この図書館の中にはあらゆる人の生活資料があります。生活の歴史、寿命の長さ、輪廻を何回繰り返したか、一回目の輪廻のときはどんな人だったか、どんな仕事か、どんな良いことをしたか、どんな悪いことをしたか、どこの国にいたか、何年生きたか、二回目の輪廻のときどんな動物だったか、どこの国にいたか、何年生

きたか、三回目の輪廻は、四回目、五回目……。毎回の輪廻が詳しく記されています。過去の生活、現在の生活、未来の生活、すべて記載され、未来も記載されています。過去と現在の状況は変えることができませんが、未来は変えることができます。ですから、ある人は第二界に到達すると、自分の生活はどことが間違っているのかを知り、自分を変えることができます。

例えば、彼はもともと別の法門を修行していて、菜食していませんでした。というのは多くの師は弟子たちに菜食を勧めていないからです。肉を食べると最高でも第二界に到達するだけです。彼はそのような生活を見て、そういう因果関係を見たとき、すぐに菜食に変えるのです。その時すべての因果を知ったからです。彼はたとえ仮にほんの少しの肉を食べたとしても、恐ろしい報いや刑罰が待っていることがわかったからです。ですから、人に菜食を勧められなくても、彼は自ら菜食をするようになるのです。

第二界は因果の世界です。そこではすべての因果がわかり、過去、現在、未来のすべてがわかります。私の弟子の中には肉食に戻る人が一人か二人いました。その人は私と菜食すると約束したものの、耐えられず、外では肉を食べました。食べたあとメイションすると自分の行く所が見えました。たとえ卵一個食べただけでも、とても恐ろしい境界でした。もし何も知らず、誤って肉を食べても、それほど大きな問題にはなりません。因果は避けられません、それほど恐ろしいことにはなりません。しかし、よくわかっていながら、故意に食べたのであれば、そのような刑罰は大変重いものです。

卵を一個食べた弟子がいました。今日、彼はいませんが、いたとしても彼の名前を言いません。彼自身、心の中ではよくわかっているからです。当時私は宜蘭（イーラン：台湾の地名）にいました。その弟子は体調が良くないので医者に診てもらいに行き、医者は彼に「卵を食べなければいけない」と言いました。彼はもともと私の言うことを良く聞きましたが、私がいなので、医者言うことを聞いてしまいました。（笑い）その医者は「あなたは卵を食べなければいけない」と言いました。彼は卵を手にとつて、しばらく眺めて食べようか食べまいかと悩んでいましたが、ついに食べてしまいました。その夜すぐに魔に連れ去られ、ひどい罰を受けました。その時、彼は私に助けを求めたのです。さもなければ、彼は脱出することができなかったのです。私以外に誰も彼を救い出して、再び自由にさせることができる人はいません。ですから、私は彼を救いに行くしかなかったのです。彼を救い出したため、宜蘭で講義をしていたとき、私はもう少しで死ぬところでした。もともと講義を予定していましたが、一日目の講義も終わらないうちに、死ぬほど苦しくて、講義を続けることができませんでした。とても疲れてあまりに痛くて、ほとんどの時間はベッドに横になつて、死んだ人のようにでした。話も少ししかできず、ご飯も食べられず、何もできませんでした。

このように、彼は問題を起こして私に多大な迷惑をかけました。その後、私が台北に帰つて来ると、彼はまた私のところに来て、私が休んでいるところを、騒ぎ立てて起こしたのです。彼はなぜこのようなことをするのでしょうか。それは懺悔したいからです。私が講義するとき

は迷惑をかけ、私ที่บ้านに戻って休んでいると、また私のところに来て懺悔したいと言い、私を休ませてくれないのです。それなら、なぜ卵など食べるのでしょうか。戒律を破ったことで、私に面倒をかけ、その後懺悔したいと言って、また私を煩わせるのです。ですから、みなさんは戒律を破らないでください。卵一つくらい食べても構わないと思っではいけません。とても深刻な事態になります。

もし私たちが早くこの娑婆世界を離れ、早く仏陀になって自分を救い、親類や衆生を救いたければ、必ず戒律を守らなければなりません。修行者は「執着」しないなどと言っではいけません。「執着」すべきです。それぞれの国家には法律があり、私はイギリス国籍ですが、フォルモサ（台湾）にきている間は、フォルモサの法律を守らなければなりません。フォルモサの法律を知らないで守らないなどと、言っではいけません。

例えばイギリスでは車は左側通行です。私がフォルモサに来て、車で左側通行したとしたら、被害を受ける人は誰なのでしょう。法律を知らなかったからと言っでは許されることではありません。左側通行すると必ず問題が起きます。というのは、車はみな右側通行だからです。私はイギリス国籍ではありますが、ここでは車は右側通行しなければなりません。私たちは本来仏陀だからと言って、何をしても良いという訳ではありません。それは大間違いです。私たちが仏陀の世界に住んでいれば、もちろん問題はありませぬ。しかし、この世界に住んだらこの世界の法律を守らなければなりません。さもないければ車の運転はできません。

例えば、私はもともとイギリスに住んでいて、イギリスで仕事をしていて、イギリスの法律を守っていました。ですから何も問題はありませんでした。しかし、私がフォルモサに住んでいて、フォルモサの法律を守らないで、多くの罪を犯したとしたら、イギリスにも帰れません。フォルモサの警察に捕まるかもしれません。ひどい場合は銃殺されます。その時は、たとえイギリス国籍でも関係ありません。

もし、第三界を出たいなら、しつかりと戒・定・慧（かいじょうえ：戒律、禪定、智慧）を修行しなければなりません。昨日私は六祖慧能について話しました。禪宗が中国に伝来してから、彼は第六代目の祖師で、その当時はまだ剃髪はしていませんでしたが、すでに衣鉢を受け継いでいました。（法統を継ぐ者として、師から正法、奥義を伝授され、衣と托鉢用の鉢を受けられていた）彼は肉食者と一緒に寝泊まりしているときも肉を食べず、野菜だけを食べていました。彼らは慧能に「なぜ肉を食べないのかい」と聞きました。慧能は「お腹が痛くて、お腹の調子が良くない。肉は消化に悪いから」と言いました。そのような困難な状況のなかでも肉を食べませんでした。その時、慧能は逃げて隠れていたので、「私は修行しているので、肉は食べません」とは人に言えませんでした。やむをえず「お腹が痛いので、肉を食べられない」と言いました。六祖慧能でも、「執着しない」とは言いませんでした。ましてや、私たちのような人間が、自分は「執着しない」などと言えるでしょうか。執着しない人はおそらくレベルが高すぎて、この娑婆世界に落ちて来て休憩しているのかもしれませんが。（マスターの冗談）

禅を修行している人は、よく「執着しない」ことを問題にしていますが、それは間違っています。「執着」してこそ自由自在になれます。実際のところ、これは執着ではなく、人間はもとも衆生の肉を食べてはいけません。これは自然界の法律です。わかっているのに、食べても良いと思っています。もし因果がわかっているならば、どれほど恐ろしいことがわかり、少しも戒律を破ることができないでしょう。大口をたたくことはなおさらできないでしょう。ですから、戒定慧（かいじょうえ：戒律、禅定、智慧）はとても重要です。修行したければ、きれいでなくてはなりません。わかりましたか。今、アイスクリームを食べたいですか。ビーガンアイスクリームなら卵が入っていませんので大丈夫ですが、ケーキは食べてはいけません。

第二界の衆生は、第一界の衆生よりさらにパワーがあつて、私たちが彼らを超えて、さらに高い境界（きょうがい）に行こうとすると、彼らは私たちに面倒を起こします。阿修羅の衆生よりも、さらにひどいです。私がヒマラヤで修行しているとき、魔に取りつかれた人と一緒に住んでいました。彼女は毎日四時か、五時に起きます。私も彼女と同じ時間に起こされて念仏しなければなりません。彼女は何種類もの声で念仏していました。ドレミファソのようないろいろな念仏の声は、実に恐ろしかったです。時には甲高い声を出したり、犬が吠えているようだったり、実に「素晴らしい」ものでした。（笑い）そのときは観音法門はいりませんでした。外でいろいろな音楽が鳴っているからです。（笑い）当時、彼女は魔に取りつかれていました。それも小さな魔ではなく、第二界の魔でした。私たちはそれらを天人、または天神

と呼んでいます。第三界以下はすべて魔です。

宇宙を一本の竹竿に例えるなら、上半分は陽に属し、下半分は陰に属しています。三界以下は、下の半分、つまり陰に属しています。道教の説明によると、彼らは、陽は上部、陰は下部といえます。第二界は当然、相変わらず陰の部分にあります。ですから、やはり彼らは魔です。魔と言っていますが、実は魔ではありません。ただ彼らの仕事場は比較的低い所です。例えば私たちの世界では、外務省はもっぱら国際間での対話の仕事をしていて、比較的楽な仕事ですが、警察は悪人を捕まえる仕事で、彼らの仕事の特徴は人を捕まえること、人を叱ること、人を牢屋の中に監禁して、彼らを取り締まることで、それが彼らの仕事です。そういう仕事をやる人たちも必要です。さもないければ、社会の秩序は保たれません。

同様にそういう魔も必要で、それでこそ、あまり高尚でない衆生をコントロールできるので。彼らのレベルではそのような場所に住まなければならず、そこには彼らを管理する人が必要なのです。その魔に取りつかれた友人は、もともと良く修行していましたが、彼女がそのレベルまで達したとき、魔に捕まえられたのです。そして彼女の頭上には屋根が作られて、どうしても上に上がって行けません。本来観音法門を修行していたら、絶対に問題はありませんが、彼女は以前、いろんな宗教を修行していて、私の先生のところにとり着いたときには、魔に取りつかれた状態は大変ひどいものでした。彼女は一人でそこで修行していて、パワーもあまりありませんでした。私のマスターは、彼女を病から救うように私をそこに行かせました。

しかし、彼女は毎日歌を歌っていて、それを聞くと私は鳥肌が立ちました。彼女の歌はあまりにも「素晴らしかった」からです。（笑い）時々彼女は腹を立て、わけもなく腹を立てたり、何もしていないのに、私を罵ったりしました。「あなたは私をやっつけようとしている。私を殺そうとしている。なぜ私の頭を押さえつけるのだ。痛くてたまらない」などと言います。私は「何もしていません。私はここに座っているし、あなたはそこに座っているのに、どうやってあなたの頭を押さえつけられるの」と言うと、彼女は「きつとあなたは神通力を使って、私の頭を押さえたのだ」と言いました。私は「違います。私たちは一緒に念仏しました。私には神通力ありませんし、暇ありません」と言いました。しかし彼女はやはり信じません。魔に取りつかれ、魔が彼女にこのように思わせて、彼女を怒らせ、悪いことを思わせていたのです。

彼女にも少し他心通（たしんつう：他人の心を知る力）があり、時には少し天眼通（てんげんつう：すべての衆生の過去世を知る力）がありました。それらはまだ第二界のものです。彼女は以前正しくない、間違った路（みち）を修行し、修行の目的も純粹ではなく、神通力を得るために修行したからです。ですから、それが原因であり、その結果が現れたのです。ある期間修行して、ある世界に到達すると、その世界の人たちは彼女に代価を支払うよう要求します。「以前、あなたは私のお金やパワーを使った。今それを精算しなさい。さもなければ、上に行くことができない」と言います。もし、彼らに百元の借りがあったら、千元、一万元を支払わなければなりません。この因果の法律はこの世界の事情とよく似ています。他人に百元

借りたとき、決してただ百元だけ返せばいいのではなく、百元借りたら、千元返さなければならぬのです。

この因果の法律は恐ろしいものです。その目的が良いか悪いかに係わらず、どんなものでも雪だるまを作るように、転がれば転がるほど、どんどん大きくなります。例えば銀行から一万円借りて返済しなかった場合、利息はますます増え、あつという間に多額の借金になって返済のしようもありません。

三界以下の因果はこのようで、オレンジの種を播けば、来年にはたくさんのおレンジが実ります。同じように小さな毒薬の種も大量の毒薬になります。ですから、私たちはこの世界で良い種を播くと良い結果を得るのです。悪い種からは悪い結果が生まれ、良いか悪いかに係わらず、倍増してとても大量になります。良いものは当然問題ないですが、悪いものは一定期間が過ぎると悪い結果を引き起こし、それに縛られて脱出できなくなります。これは実に厳しい法律です。

三界以下の因果律は非常に正確です。一点も、一滴も、一分も、一寸も差がなく、時には正確すぎて、私たちが何をして、ことごとく、すぐに記録され累積されて大きくなります。ですから、これはとても厳格すぎる法律なのです。

例えば、私たちがある人に一元、施したとします。とても嬉しくて、他の人に「昨日私は彼に一元あげました」と話します。この時、私たちが施したこの一元は無いことになってしまい

ます。それは他の人に話したからです。この因果律により、この施しは無くなってしまう。明日嬉しくなって、また他の人に「私は一昨日、彼に一元あげました」と話すと、その時、彼に一元借金したことになり、また後日、他の人にその話をする。と今度は二元借金したことになります。もともと彼に一元施したのに、二、三回話したら、結局その人から二元借金したことになってしまいます。話せば話すほど問題が起き、話せば話すほど借金が大きくなるのです。ですから、私たちがこの世界で施しをするとき、慎重になるべきです。さもなければ大変危険です。施したあと、自分は施しをしたと思うだけで厄介なことになります。なぜなら、自分は施したと思っているため、また輪廻して来て、施した福報を受け取らなければなりません。要らないと言ってもダメです。必ず戻って来なくてはなりません。もし良く修行していたら、三界を超えていたはずですが、二、三元の施しをしたため、また「私」が施しをしたという考えのため、それだけでその二、三元を受け取るために戻って来なければなりません。布施した分を受け取ってから、初めて離れることができます。因果の法律というのはこのようにはつきりとしています。

金剛経の中で、釈迦牟尼仏は「施しをするときは何も考えないこと。『私』は施しをしていると考えないこと。これこそが本当の施しである」と戒めています。というのは、仏陀は施すとき、ほんの少しでも、自我の思いがあると、繰り返し輪廻しなければならぬことをよく知っているからです。ということ、三界を超えることは簡単ではありません。もし道案内がなく、

マスターがいなければ、私たちは脱出しようがありません。なぜなら、私たちが何をしても全部間違っていて、何一つ正しくないからです。

地蔵経（じぞうきよう）には、地蔵菩薩が釈迦牟尼仏と天国に行つて、釈迦牟尼仏と法会を開いたときに、地蔵菩薩が釈迦牟尼仏にこのように言つたと書かれています。「あらゆる衆生を見ると、彼らの一つひとつの思いが、ことごとくカルマを作り出している。一瞬たりともカルマを作らないことはない」（地蔵経利益存亡品第七、地蔵菩薩摩訶薩白佛言：「世尊、我觀是閻浮衆生、舉心動念、無非是罪。」）私も地蔵菩薩と同じ考えです。私たちがしているすべてのことはみな間違っていて、正しい行いは何一つありません。ですから、マスターのパワー、仏陀のパワーの加護によって私たちを上に連れて行つてもらわなければ、どんな衆生もみな私たちを引きずり降ろし、私たちの肉を切り取り、私たちの手を切り取つてしまいます。そして、私たちの衣服をも持ち去られてしまいます。なぜなら、私たちは世々代々あまりにも、多く借りを作つたからです。私たちが間違つたことをしたなら、当然借りになります。たとえ、過失でも借りになつて、同じように因果律により記録され、罪を犯したことになります。

ですから、もしマスターがいなかったり、レベルの高くないマスターにしか出会えなかったりした場合、その人は最高でも第二界にしか到達できません。最高で第二界の教主か、第二界の神です。この神に到達したあと、彼の生活は変わり、思想、理想、考え方は根本的に変わり、聡明さや智慧も変わります。現在、知っていること、考えることはすべて以前と違い、自分に

は、とても大きなパワーと智慧があると感じます。その時、第二界の教主は彼に「あなたは娑婆世界に戻って衆生を救うことができる」と言います。そういう人は彼を信じて、自分が偉大な仏陀になった、すでに成就したと思ひ込むのです。

彼はそれよりもさらに高い境界があり、その教主よりもさらに大きなパワーを持っている神がいることが想像もできないので、その教主を少しも疑いません。ですから、もしその人が娑婆世界に戻って来て、人々に「何々教主は神であり、名は何々という。その神は宇宙のなかで最高を代表している」と言ったとしても、それは、その人が嘘を言っているのでも、故意に人を騙しているのでもありません。なぜなら、彼は本当にわからないからです。ただ真の大菩薩、真の仏陀、中国の老子のような聖人だけが、それよりさらに高い境界を知っているのです。

私たちは釈迦牟尼仏をとても偉大であると称賛しています。彼は大聖人、大開悟者、仏陀、最高の仏陀で、全宇宙のことを知っています。三界を超えてこそ仏陀なのです。三界以下にいる人、または第四界に到達したとしても、まだ仏陀ではありません。菩薩なのです。高い境界（きょうがい）に行ったことのある仏陀だけが、第一、第二、第三、第四、第五、第六などの境界を知っています。そして、どの境界にどんな教主がいるかをよく知っています。そのような人こそ、人々を最高の境界に連れて行けます。さもないければ、私たちはこの三界以下で輪廻を繰り返し、毎回、自分のいる境界が最高の境界だと思ひ込んでいるのです。

阿含経（あこんきょう）の中には、釈迦牟尼仏が、それぞれの異なる境界について詳しく述

べたことが書かれています。今日私が話したこと、ほとんど同じことをはっきりと述べています。阿含経で釈迦牟尼仏が述べているのは、良く修行しているヨガ行者のことです。彼は一瞬で梵天の境界に行くことができました。梵天は三界以下の最高の境界で、第三界の神です。

そのヨガ行者は一瞬にして梵天を見に行けたのです。彼はその時、梵天に「この宇宙で誰が最高ですか」と聞きました。梵天は答えませんでした。彼は再び聞きましたが、梵天は答えませんでした。彼はまた聞きました。梵天は「私はこの世界を造った。この世界がまだ存在していないとき、私はすでに存在していた」と言いました。梵天はこう答えたあと、このヨガ行者は一步近づき、「私はそんなことを聞いていません。この宇宙で誰が最高なのか、あなたに聞いているのです」と言いました。梵天は答えに困窮しました。

というのも、そこにはたたくさんの彼の部下、弟子、女官がいたので、気まずくて正面から答えられず、このヨガ行者を外に連れ出して、「それ以上聞くな」と言ったのです。このヨガ行者は「なぜですか。私は知りたいのです。私は釈迦牟尼仏に聞きましたが、彼は謙遜して何も言わず、梵天に聞きなさい」と言いました。梵天は「ああ、あなたはすでに釈迦牟尼仏に会っているのに、なぜ他の人に聞くのですか。釈迦牟尼仏は最高で、すべての神より高いのだ」と言いました。

昨日私は、「大師、マスターこそ最高である」と言いました。最高の神といっても大したことはありません。私たちが苦しんでいても構ってくれず、私たちが裕福でも気にしません。そし

て私たちがどんなに輪廻転生を繰り返しても、構ってくれないのです。最高の神の本業は万物を創造し、成長させることであり、私たちの苦しみなどは構ってくれません。しかし、大師は構ってくれます。私たちは最高の大師を仏陀と呼びます。仏陀は私たちを構ってかれて、私たちを自由なところに連れて行ってくれます。なぜなら、仏陀は因果律の外にいますので、神は仏陀に何も言えません。決して仏陀が最高の神より高いとか、神は仏陀より高いと言うのではありません。その境界においては、誰が誰より高いかと比べるようなことはまったくありません。

仏陀は仏陀です。最高の神とは別の境界（きょうがい）です。神は、例えば最高の神、または創造主は、それはまた別の境界です。最高の神、いわゆる創造主は、中に輪廻があり、生、滅、垢、浄、陰、陽など相対的な状況があります。仏陀は別の境界で、そういう相対的な状況はありません。生老病死もなく、不生不滅、不垢不浄、不増不減（生じること滅することもなく、汚いもきれいもなく、増えることも減ることもない）です。ですから、私たちは仏陀をマスターと尊称します。もしマスターは最高の神より高いと言ったら、それも嘘ではありません。というのは、最高の神は人を導き、解脱させることはできません。神は私たちを成住壊空（発生、成長、破壊、消滅）の境界の中で輪廻させているだけです。しかし仏陀は人々にこの輪廻の輪から離れさせ、究極の解脱をさせてくれます。ですから、梵天はそのヨガ行者に「あなたが見たその人は最高です。彼に聞きに行かないで、私に聞きに来てどうするのですか。彼は私より高いのです」と言いました。

そのインドのヨガ行者は梵天界まで修行していますが、これはとても珍しいです。ほとんど
のヨガ行者は第一界に到達しただけで、彼らはそこが最高の目的地であると思ひ込んでいます。
第二界に到達している修行者はとても少なく、たまたま第三界に到達できても、マスターが指
導してくれないと、三界を超えることはできません。もし、そういうマスターがいるとしたら、
彼らは必ず観音法門を教えています。ですから楞嚴経（りようごんきょう）の中では、仏陀は
「観音法門は最も究極の法門であり、十方三世仏（じつぽうさんぜぶつ）：現在、未来のすべて
の仏陀）はみな観音法門を修行してこそ成就できる」と称賛しています。キリスト教の聖書の中にも、観音法門は最高であると書かれています。これについてはすでに話しました。ですから本題から離れないために今日は話しません。もし知りたければ講義録を読み返してください。

私は昨日、インド人にとってはマスターは神よりも高いということをお話しました。彼らの家では木像や石像の仏像を祭らないで、マスター、またはマスターのマスターの写真を並べて置き、毎日花を供えています。しかし私たちの法門は、花や線香、あるいは他の物を供えることを推奨しません。しかし私がどんなに禁止しても、みんなは言うことを聞きません。やはり何かを供えたいのです。今日ある人に物は何も持って来ないように言うと、次の日に別の人が持って来ます。その人に持つて来ないように言うと、その次の日にはまた別の人が持って来ます。ですから、私は何も言いたくありません。ある人に礼拝（らいはい）するなどと言っても、次の日にはまた別の人が来て礼拝するのです。

私は毎日、同じことを教えるわけにはいきません。それで私は今、ストライキをして何も言わないことにしています。礼拝したい人はしても良いし、物を持って来たい人は持つて来ても構いません。ただし、私のところに物をたくさん持ち込まないでください。私はもう十分足りています。たくさん持ち込まれたら、私の車はいっぱいになって動けません。私の住んでいる山は高いので、お金を積み込み過ぎたら車は動かなくなります。(笑い) 私たちはお寺を建てないのでたくさんのお金は要りません。私が餓死しないかと心配しないでください。十分足りています。餓死しそうになったときは新聞に掲載します。(笑い) 「何々メデイーションセンターである僧が餓死しそうです」と新聞に掲載したら、フォルモサの人々はすぐに供え物を持って駆けつけて来るでしょう。私の弟子たちはよく私の面倒を見てくれているので、餓死することはありません。あまりにもたくさん物を持つて来られると、かえって食べられません。食べきれないと浪費になります。ですから出家したい人は早く来ててください。そして私の代わりに食べてください。今、物が多すぎて食べきれません。私も小食ですが、出家者たちも小食なのです。

しかし、この世界の人は仕事が大変なので、頑張らなければなりません。先ほど私がここに入って来たとき、階下にビスケットの店がありました。ちょうど店員たちは、朝ごはんはんにビスケットを食べていました。そういうものは動物性を含んだ食べ物で、私たちには食べることができません。彼らは大変忙しそうに見えます。ここに来る度に、彼らは忙しく動き回り、大変

な様子です。このような小さな食べ物はいくらも思いません。利益はきつとそれほど多くはないでしょう。しかし、あんなに苦勞しています。時には資金のやりくりで苦勞し、食事もなくにできなく、着るものもままならず、ひどい場合は倒産してたくさんの借金を抱えることとなります。これは実に憐れです。食べて行くために生活していくために、また着るためにあんなに苦勞するのです。私たち修行者はもとお金を持っていませんが、食べきれないほどの物があります。私はみなさんがなぜ出家しないのか理解できないのです。(笑い)

あれほど苦勞してまでお金を稼ぎ、それでもいつもお金の心配をするのは、どうしてでしょうか。私にはわかりません。私たちはそんな苦勞はしていません。毎日、仕事をしてメデイーションをしています、在家者のような苦しみはありません。私たちが仕事をし、メデイーションするのはみな衆生を救うためです。私たちは寄付を求めて新聞に載せたり、外に行つて托鉢することはありません。しかし使いきれないほどの物があり、着るものもたくさんあります。私たちには衣服は三、四枚で十分で、これも多すぎるほどです。食べ物もたくさんあります。私たちは多くの物を必要としません。私たち修行者はすぐ満足します。お金がなくても借家に住んでも、自分たちの寺がなくても満足しています。身の回りにあるもので済ませます。すぐ満足する人は最も裕福な人です。

私が出家する前は、自分には托鉢に出かけたり、人に施しを求めたりする勇氣があるかどうか、出家したら、お金の不自由するのではないかといった心配がありました。心配はあったも

の、修行者はやはり勇敢でなければなりません。お金がなければそれでいい、お腹がすいて餓死したなら、西方浄土に行ける、と思いましたが。今は使いきれないほど物があります。しかし、一般の人は朝から晩まで忙しく、忙しくて食事をする時間も寝る時間もありません。しかし、それでもお金に不自由していて実に憐れです。でも彼らの考え方を変える方法はありません。欲しいものを手に入れようとすればするほど手に入りません。自分の影を捕まえようとするのと同じで、どうやっても捕まえられないのです。

例えば、私たちはある人がとても好きな場合、追いかけると、かえって逃げられてしまいます。彼のことを気にかけないでいると自分からやって来ます。ですから、みなさん明日から試しに、飲食や快樂などを追いかけないようにしてみてください。それらは自らやって来ます。ですから、あまり心配しないことです。創造主はたくさんのものを作り出し、私たち一人ひとりの面倒を見てくれています。草木はお金を稼いだりしません、成長して花を咲かせ実をつけます。動物も誰かに面倒を見てもらわなくても、たくさん繁殖し、魚も海の中で誰にも面倒を見てもらわなくても、毎日、仕事に行かなくても、(笑い) たくさん繁殖します。世界の人口は四十億もいて、毎日たくさん魚を取って食べています。誰も魚の世話をしていません。けれども魚たちは元気に生きています。私たち人間はこの宇宙で最も高貴な地位にいるのです。最高の神がいるなら、私たちの面倒を見てくれないはずはありません。

私たちが身・口・意(体、言葉、考え)をきれいにし、それを完全に神や仏陀や三宝(さん

ぼう：仏、法、僧に捧げるために出家し、最高の神を信じていけば、最高の神はきつと私たちの面倒を見てくれます。仏陀を信じていけば仏陀も私たちの面倒を見てくれます。そうではありませんか。（聴衆「そうです」と答える） そうだとしたら、みなさん出家してください。（笑い） 出家するとすべてを手放すことができ、何も気にしません。そうになると、すぐ多くのものがやって来ます。ただ、みなさんはこれらのものを得るために出家しないでください。

私がまだ出家する前、銀行に預金があり、退職金もありました。私はドイツ政府の仕事をしていたので、退職金、保険金、社会福祉金、医療健康保険など、たっぷりありました。もし、私があと一、二年仕事を続けていければ、最後の生活に困らないほどの積み立てができて、何も困らないほどのお金があったかもしれません。あるいは出家する前に、いろんな手続きをしていたら、もつと多くのお金を持って行けたはずです。

しかし当時、私はこれらのことは一切構わず、決意すると、すぐ出家しました。お金のことなど考えてもいませんでした。出家者は本来お金は必要ありません。そこで、そのときつぱり出家しました。あと一、二年、または一、二カ月延ばしたら、何が起るかわかりません。何が起って、私は出家できなくなつたかもしれません。毎日多くのことが起り、私たちは今日のことすら何が起るかわからないのです。ましてや明日、または来年のことは誰にもわかりません。ですから、私は「もういい、決めたら行くのだ」と自分に言い聞かせました。出家すると言いながら、お金のことを心配するなんて、私は自分に腹が立ちました。

その時、私は少ししかお金を持っていませんでした。たぶん二、三千米ドル持っていたと思います。インド行きの手ケットを買ったら、本当に残り僅かになりましたが、やはり私は行きました。二、三着の衣服と寝袋だけを持って、あとは何もありません。手ケットを買って残ったわずかなお金しか持っていませんでした。それから、後にフォルモサに来る手ケットを買ったら、お金はほとんどなくなりました。お金がないのに、今フォルモサに行ったら、どうすればいいのかと思いました。私はフォルモサに来たとき数百元しか持っていませんでした。一日ホテルに泊ったらお金は完全になくなりました。ちょうどその時、仏教会と連絡がとれて、彼らに私を泊めてくれるお寺を紹介してもらったのです。さもなければ、私は一人、誰も知らないフォルモサで餓死していたかもしれません。(笑い)

実際、フォルモサに着いた日に、仏教会のスタッフと連絡を取りましたが、相手は私の意図を良く理解していなかったようで、私をホテルに連れて行って泊まらせたのです。私はホテルという文字を見て、お金が足りないのではと、とても不安になりましたが口には出せませんでした。ただ彼らに「このホテルは高いのですか」と聞きました。彼らは「大丈夫です。少しも高くありません。外国から来たマスターたちはみな、ここに泊まります」と言いました。しかし彼は、外国から来たこのマスターがどんな事情があるか、わかっています。(笑い) 他外国の僧がフォルモサに来たときは、大勢の人に囲まれ、多くの弟子たちが迎えに来て、そこで待ち受けていました。しかし、フォルモサには私を待っている人は一人もいませんでした。

私がどこに行くにしても案内してくれる人や、送ってくれる人などいませんでした。その時は誰も私のことを知りませんでした。それで、お金を支払うときに足りないのではないかと心配でした。

私は彼に「私はホテルに泊まりたくありません。私は出家者でホテル生活は慣れません。私をお寺に住まわせてもらえませんか」と言うと、彼は「とりあえず、ここに何日か泊っていたでいて、後のことはゆっくり相談しましょう。(笑い) あなたはここに着いたばかりで、今すぐ住めるお寺を探すのは難しいです。今、私たちは受戒(戒律を授ける)のことでとても忙しいです。ですから、まずここに何日か泊っていたで、後のことは一週間後にまた話しましょう」と言うのでした。それを聞いて、私は心臓がドキドキしました。(笑い) どうしても、自分はお金がないと言えません。というのも私も私はその頃、出家したばかりで、衣服はとても新しく、清潔で良く見えたのです。

フォルモサの人々は私のことを大変親切にしてくれました。ホテルの人たちは私を大マスタ―だと思っていたのです。なぜなら、仏教会の紹介で来たので、彼らは私を尊敬し、大マスタ―と呼びました。しかし、彼らは私が少ししかお金を持っていないことを知りません。(笑い) 私は中に入るとすぐ、「泊いくらでしょうか」と聞きました。彼は「とても安いです。心配しないでください。安いですから」と言いました。彼は私にとってどれ位が安いのがわかりません。(笑い) 私は何回も聞いても、彼は答えてくれません。私はホテルの他の従業員に「私

の部屋はいくらなのか知っていますか」と聞きました。彼は「部屋に行つて見てください。書いてあります」と言いました。私は見に行くと、部屋の中に札があり、そこに七百五十元と書いてありました。わあー。ちょうど足りません。明日になったら、こつそり引つ越せばいいか、と思いました。(笑い) 私は次の日に、他のところに移ることにしました。フォルモサには私がお金を持つていないことを知っている人はいませんでした。

次の日、彼が私に住み心地が良いかどうか聞いたので、私は「この部屋には住みたくありません。すぐに他の住む場所に私を連れて行つてくれませんか。どのお寺でもかまいません。私は寝袋を持つているので、どこにでも住めます。外でも寝られます」と言いました。彼は「わかりました。今、思い出しました。この付近にある講堂があります。そこに泊まってもらつてもいいですか」と聞きました。私は「もちろん、いいですよ」と言いました。(笑い)

ということ、私の出家は一種の冒険でした。決めたらすぐに家を出て、何の準備もなく、お金もなく、フォルモサに来たとき、誰一人知らず、どこにその勇気があったのか、私にもわかりません。みなさんは私の話を聞いて怖くなつていませんか。でもその時、私は少しも怖くありません。なぜなら、勇気を持つて本当に衣食住のことを手放したら、仏陀、菩薩は必ず面倒を見てくれることを私は知っていたからです。仏陀や菩薩は最後まで私たちに試練を与えることもあります。甚だしい場合は、最後にまったく空気がない状態に追い込んでから、再び酸素を与えるようなことをするかもしれません。けれども結局は仏陀や菩薩は必ず助けてくれ

ます。私が出家する前に、三日間餓死しそうになった経験があります。ですから、出家しても餓死することをまったく心配していません。もし一、二週間何も食べなくても、死ぬことはありません。

インドでは多くの僧が一、二週間も路（みち）を歩き続けることがあります。途中で誰もご飯をくれなくても、それでも彼らは大丈夫です。これは本当のことです。私はそういう人に「どうやって生きていますか」と聞きました。彼は「お腹がすいたら、野草を採って食べ、喉が乾いたらガンジス川の水を飲みます」と言いました。ある人は野草も食べず、毎日お腹がすいたら、ガンジス川の水を飲みます。メデイーションが終わって退屈したときや、お腹がすいても、食べ物をくれる人がいないときに、またガンジス川の水をお腹いっぱい飲んで、またメデイーションします。（笑い）住んでいる場所は一目見ただけで、お金を持っていないことがわかります。そこは自分で掘った洞穴で、彼はその中に座ってメデイーションしているので、お腹がすいても食べ物を持って来てくれる人は誰もいません。ガンジス川の水を飲むしかないのです。

彼の生活は実に素晴らしいです。フォルモサに来たとき、私は少しの不安もありませんでした。誰にも施してもらえなかったら、川を見つければ良かったからです。もちろんガンジス川ではありませんが、川さえ見つければ、その川の水を飲んで修行し、メデイーションもできます。（笑い）今日まで私は飢え死にすることなく生きています。

私がフランスにいた頃、まだ学生で、あちこち見て回りました。ある時、三日間食べるものがなく、餓死しそうになったことがありました。仕事も見つからず、イギリスからの送金も届いてないので、持っていたお金を全部使ってしまった。パリの生活費がそんなに高いとは知りませんでした。イギリスの方が比較的安いです。パリは世界で生活費が最も高い都市の一つです。その時、私はパリに着いたばかりで、路（みち）もわからず、どこへ行ってもタクシーで行ったのでお金をたくさん使いました。パリのタクシードライバーには人を騙す人もいて、目的地がすぐ近くなのに、私を乗せて遠回りし、ぐるぐる回って、退屈になったとき目的地に向かうのです。本当はすぐ近くでした。そこで私はたくさんのお金を無駄にしまいました。が、何も言えませんでした。外国人なので、やたら怒ったりしても解決できないからです。

六祖慧能はもと木こりでした。ある日偶然、金剛經を唱えているのを聞いて、突然悟りを開き、解脱するために修行しようと、五祖弘忍（ごそくにん）を訪ねることを決意しました。当時彼はとても貧しく、また一人っ子だったので、母親の面倒を見なければなりません。しかし、彼はどうしても出家しなかったのです。ちょうどその時、ある人からお金の援助を受けました。そのお金で母親の生活の問題は解決できたので、彼は安心して出家しました。

ですから、私たちが本当に誠心誠意、仏陀になり、衆生を助けるために出家したいと思ったら、必ず、仏陀や菩薩が助けてくれます。ただし、本当に誠心誠意でなければなりません。なぜなら、仏陀や菩薩は私たち自身よりも私たちのことを良くわかっているからです。私たちは

自分を騙したり、マスターを騙したりすることはできませんが、仏陀や菩薩を騙すことはできません。従って誠心誠意でなければなりません。そうすると何をしても成功するのです。純真な心と純粹な目的があれば、何をすることも誰かが助けてくれるので、何も心配することはありません。

私が出家したあとは、お金は使い切れません。みなさんご存知のように、たくさんの人が私に寄付しようと思いますが、私は受け取りません。私の弟子以外の人からの寄付も受け取りません。大金の寄付も受け取りません。ぎりぎり必要な分が足りれば受け取りません。寄付をたくさんもらって足りるのではなく、私たちはほんの少ししか受け取らなくても十分足りるのです。私は何も欲しくありません。毎日、経の講義に出かけ、帰って来るとメデイーションし、時々みんなが私に会いに来る、といった生活をしています。生活は極めて簡素で、私は歌もダンスもできませんし、お酒も飲みません。(笑い) 一日、三箱のタバコを吸うようなこともありません。私たちが特に必要とするものは何もありません。私たちが住んでいるところにはテレビも新聞もあります。出家者たちはみな静かに修行に精進しています。

ですから、たくさんのお金は必要ありません。毎月の電気代は多くて三、四百円で、外の人たちと話すこともあまりないので電話代もわずかです。みんなが一緒に生活している場合、うまくやりくりすれば、お金はそんなに必要ないです。私たちは山の中に住んでいて、ガソリン代を含めても、毎月二、三千元くらいで十分です。ただ、あの古い中古車が時々、お金を食っ

ています。(笑い) いつも修理に出しているからです。もし、私が経の講義に出かけなければ、もつと節約できます。フォルモサではお米も野菜もとても安く、適当に作って食べればいいのです。出家者たちはあまり食べないことに驚きました。若い人だからたくさん食べると思いましたが、みんなあまり食べません。ですから、私はあまり出費がないのです。さもないと、私は倒産してしまうかもしれません。(笑い)

したがって、出家しても何も心配ありません。出家するのは因果律を超え、三界を超えるためです。ただし良い法門がなければ出家しても解脱できません。廣欽老和尚はかつて「出家しても、良い法門がなく、良いマスターもなく、または修行に精進しなければ、何の役にも立たないので残念なことです」と言いました。私も同感です。というのは、多くの人は高い理想のために出家し、目的もとても純粹ですが、福報が足りないために、良いマスターと良い法門に出会えません。現世の生活はとても簡素でカルマもあまり作っていないかもしれませんが、前世のカルマは消し去ることはできません。レベルも高くならないし、智慧もそれほど開かないので、一生そのような生活を続けても、あまり役に立ちません。第一界か二界まで到達することはできたとしても、死後そこに留まって、ある期間楽しく過ごしたあと、また落ちて来ます。結局、究極の解脱はできません。これは大変残念なことです。

私は出家する前にたくさんのお寺を訪ね、多くの師に従って学びましたが、いずれも満足できませんでした。出家後の生活がそのようなものだとしたら、私は出家したくないと思います

た。毎日、朝晩のお勤め以外に、一日中雑談をしたり、美味しい料理をたくさん作って食べたりますのです。彼らは菜食では栄養が足りないので、たくさん食べなければならぬと思つてゐるのです。色も味も良いものを作つてたくさん食べると体に良いと思つてゐるようです。出家してからも栄養不足のことを心配して、食べることに神経を使つていました。修行者がこんなことにとらわれては、いつになったら自由自在になれるのでしょうか、と私は思つたのです。

何を食べてもいいのです。食べることにそんなに神経を使わなくても、体は自然に自己管理をしてくれるのです。栄養さえ足りればいいのです。修行ができていけば、そんなにたくさん食べたくありません。廣欽老和尚は毎日何も食べませんでした。彼はもともとあまり食べないほうで、果物を少し食べるくらいでした。彼は山で修行していたとき、誰も食べるものを持つて来てくれなかつたので、何も食べませんでした。時々、猿が彼に果物を持って来てくれましたが、それもほんの少しだけでした。というのは、山にはそれほど多くの果物があつたわけではなく、彼自身、何も食べたくなかつたからです。

修行がしつかりできていないと、たくさん食べます。なぜなら、空っぽだからたくさん食べたくなるのです。心を高い境界（きょうがい）に置かなければ、当然低い境界に置いていて、竹竿に登るのと同じように、上に向かつて登らなければ、自然と下に滑り落ちます。二つの路（みち）しかありません。上がるか下がるかです。心をここに（マスターお腹を指す）置くと当然、物が食べたくなります。退屈だからなのでしょう。普通の人は仕事がないと、良くない

ことを考えたり、悪いことをしたりします。

ですから、しっかり修行している人はあまりお腹がすきません。彼ら（出家者）は山の中で毎日七、八時間メデイーションをするのでお腹がすかないのです。本当に修行したい人は食べることをあまり考えません。食べるものが何もなくても問題ありません。もしある日、私たち観音法門の修行者は、食べることを面倒に思っ、今後断食しようと思っ、決めて何も食べなくても問題ありません。私は彼らが決して餓死しないことを保証します。ただし突然断食しないことです。徐々に、毎日少しずつ量を減らしていけば、何の危険もありません。

危険といつても、実際は危険ではありません。体調が少しおかしくなるだけです。さもなければ、食べないと決めたら、食べなくてもかまいません。絶対に問題はあります。もし、ある日世界戦争が勃発して、みんなが食べることに困ったとしても、観音法門の修行者は心配ありません。水さえ飲めばいいのです。水がなくても死んだりしません。これは神通力でもなく、自然のことです。故意にやらなくても、特に何かをしなくても、何も食べなくても心配ありません。これは神通力でもなく、一種の修行法門でもありません。

観音法門の修行者は、しっかり修行していれば、何も求めなくても何でもあります。身体は自然に健康になります。最初は少しお腹がすくかもしれませんが、しばらく経つとそれもなくなります。観音法門を修行すると食べ物が必要なくとも餓死しないし、着るものがなくても凍死しません。したがって観音法門を修行すれば、この物質世界においても、解脱のことについても、

非常に安全です。私たちが故意に状況を作り出さなければ、本当の緊急事態には、マスターのパワーが助けてくれます。往生の時間になっていなければ、転んで死にそうになってもマスターは決して死なせません。その時はマスターが手助けをします。あなたはその時初めてマスターは誰なのか、どのように自分を助けてくれたのかを知るでしょう。

ただし、本当にまじめに修行してこそ、保護のパワーを得られます。ですから、観音法門は本当に安全です。たとえある日、本当に戦争が勃発したら、みなさんは今日私が言ったことを思い出して、慌てないでください。私の指示に従って真面目に修行する人は、必ず保護のパワーに護られます。

今日私が話した内容はいずれも三界以下のことです。三界より上のことは話すことはできません。またここで話してはいけません。後にみなさんはその話を聞く機会があるかもしれません。今日はもともと食べることにについて、話をするつもりはありませんでした。これは私の弟子たちに言い聞かせようと思いました。私の弟子たちに話すつもりでした。ですが、今日はうれしくなって話しましたが、みなさん忘れてください。みなさんは一度もこんな話を聞いたことがないと思います。そうでしょう。先ほどの話はみなさんの脳から、洗い流してください。

昔、ある立派な人がいて、国王は彼を国師（国王の参謀）と呼びました。それを聞いて彼はすぐ川へ行って耳を洗いました。みなさんは彼が誰だかわかりますか。私は彼の名前を忘れてしまいました。中国古代の物語に出てくる人物です。（注：許由）国王が彼を連れて帰って、

官僚にしようとしたとき、彼はすぐ川に行つて耳を洗いました。もう聞いてしまったので、耳を洗うしかなかったのです。

彼には牧童の友だちがいて、ちようど川で牛を放牧していました。彼が耳を洗っているのを見て、牧童は「なぜそんなに耳を洗っているのか」と聞くと、彼は「先ほど国王が私を連れて帰つて官僚にすると言つたので、私の頭脳が汚染されないうちに、すぐに耳を洗つたのだ」と言いました。その牧童はそれを聞いてすぐ、牛を上流に連れて行つて水を飲ませました。彼は「なぜ牛を上流に連れて行くのか」と聞くと、牧童は「あなたがここで耳を洗つたので、私の牛に汚染された水を飲ませたくないからだ」と言いました。そして、「あなたは、自分は智慧がある人だと、人々に見せびらかしている。あなたには名譽欲がある」と彼を叱つたのです。

今日、いろんな話をしました。多くの人は私が観音法門を教えていることを知っています。今日はまた、観音法門を修行すると、食べ物がなくとも問題ないと言う話もしました。今日聞いた話は他の人に言わないようにしてください。さもないと、面倒なことが起きるかもしれません。それはあまり好ましくありません。(笑い)

(Mはマスターの答え、Qは聴衆の質問)

Q 仏教の經典には、神は仏陀や菩薩の化身であり、私たちが修行すると助けてくれる、と書いてありますが、マスターはなぜそれらは魔だというのですか。

M 私が先ほど話したように、彼らは魔ではありません。ただ、彼らの仕事をしているだけです。ですから、魔と言つても魔ではありません。先日私が他のところで、経の講義をしたときは、衆生は仏陀であり、魔も仏陀であると話しました。先日また、それぞれの境界（きょうが）には教主がいて、私たちがその教主を知っていれば、彼らは私たちにドアを開けて入れてくれると話しました。

例えば、阿弥陀仏は最高の境界にいます。あなたは阿弥陀仏の名前だけを唱えて、それより下の境界の教主を知らないとしたら、その教主たちは当然あなたを通して、最高の境界に行かせることはありません。ですから、私が教えている念仏は他の人が教えているものと違います。阿弥陀仏だけを唱えるのではなく、私が教える念仏は他の人が教えているものと違って唱えます。その日私はこのことについて詳しく話しました。あなたは多分いなかったかも知れません。下の境界から上の境界に向かって念じてこそ役に立ちます。しかし經典にはこういう話を書いてありません。ですからみなさんにはわからないのです。これは伝承しなければならぬことで、マスターが伝えて初めてわかるのです。經典にはそういう仏陀の名前は載っていません。

印心—観音法門

スプリームマスターチンハイは真理を知りたいと心から望む誠実な人々に、印心を通して観音法門を伝授しています。中国語の「観音」とは音の振動を観るという意味で、この法門には内在の「光」と「音」の双方を観ることが含まれています。こうした内なる体験は、古代より世界中のさまざまな宗教的文献やスピリチュアルな文献に何度も述べられてきました。

聖書には「初めに言(ことば)があった。言(ことば)は神と共にあった。言(ことば)は神であった」(ヨハネ1:1)と記されています。この言(ことば)が内在の音であり、ロゴス、シャブド、タオ、音流、ナーム、あるいは天上の音楽などとも呼ばれています。スプリームマスターチンハイは「それはすべての命あるものの中で振動し、宇宙全体を支えているものです。この内在の旋律はあらゆる傷を癒し、あらゆる望みを満たし、あらゆる世俗の渇きを癒すことができます。それは非常に全能であり、愛そのものです。なぜなら、私たちはこの音から創られているので、この音と繋がるに心に平安と満足感がもたらされるのです。この音を聞くと、私たち個人のすべてが変わり、人生観が大きく変わります」と述べています。

内在の光と神の光とは、「悟り」という言葉で呼ばれる同じ光を指しています。その光の強さは、かすかな光から何百万個の太陽の輝きにも及ぶものです。内在の光と音を通して、私たち

は神を認識するのです。

観音法門の印心は秘密の儀式とか、新しい宗教に入るための式典といったものではありません。印心の間に内在の光と内在の音のメデイテーション（座禪）について特別な注意事項が指示されます。そしてスプリームマスター チンハイがスピリチュアルな伝達をします。この最初の神聖な体験は沈黙の内に行われます。あなたのためにこのドアを開けるのにスプリームマスター チンハイがその場にいる必要はありません。このスピリチュアルな伝達は法門にとって欠くことのできない重要な部分です。マスターの恩恵なくして、方法それ自体は何ら利益をもたらすものではありません。

印心の最中に即座に内在の音を聞くことができたり、内在の光を見ることができたりするため、「即刻開悟」と呼ばれます。

スプリームマスター チンハイは、さまざまな背景や宗教を持つ人の印心も受け入れます。現在信じている宗教を変える必要もなければ、信仰を変える必要もありません。組織に入ることや要求されることもなく、現在の生活にそぐわない方法で活動するよう求められることもありません。

印心は無料で提供されます。生涯を通してビーガン（完全菜食）になることが、印心を受けるために必要な条件です。

印心を受けたあとで課せられることは、毎日観音法門のメデイテーション（座禪）をするこ

とと、五つの指針を守ることだけです。指針とは、あなた自身と他のあらゆる生き物も傷つけないようにするための指標となるものです。こうした実行が最初の悟りの体験をより深く、より強くしていくことでしょう。そして最終的には、最高の悟りを開くレベルに、また神性に達するのです。日々の修行を怠ると、悟ったことをまったく忘れてしまい、普通の意識レベルに戻ってしまいます。

スプリームマスター チンハイの目的は、私たちに自力で成し遂げることを教えることです。ですから、私たち誰もが自分でできる法門を教えているのです。何の小道具も、装置もいりません。スプリームマスター チンハイは追隨者や崇拜者、弟子を求めているわけではありません。会費制の組織でもありません。お金や贈り物を受け取らず、礼拝されることも望みません。そうしたことをする必要はまったくありません。

スプリームマスター チンハイはあなたの日々の生活においての誠実さと、聖人へと向上したというメデイテーション（座禅）の修行の誠実さだけを受け入れるのです。

五つの指針

- 一 殺生をしない
ビーガン（完全菜食）を守ること。肉類、乳製品、魚介類、家禽類、卵（有精卵、無精卵も）を食べてはいけない。また卵、乳製品、動物成分が含まれている食品も食べてはいけない。
- 二 嘘をつかない
- 三 盗みをしない
- 四 邪淫をしない
- 五 酒を飲まない
酒類、麻薬、タバコ、ギャンブル、ポルノ、過度の暴力映画や書物、テレビゲームなど、心身に悪影響を与えるものは用いないこと。

出版物の紹介

即刻開悟の鍵

中国語 (1~10 巻) 英語 (1~5 巻) オウラック語 (1~15 巻) 韓国語 (1~11 巻)
インドネシア語 (1~5 巻) スペイン語 (1~3 巻) タイ語 (1~6 巻) モンゴル語 (1, 6
巻) ポーランド語 ドイツ語 ポルトガル語 フランス語 (1~2 巻) 日本語 (1~5 巻)
ハンガリー語 スウェーデン語 フィンランド語 チベット語 (各1巻)

即刻開悟 問答集

中国語 (1~3 巻) 英語 (1~2 巻) オウラック語 韓国語 (1~4 巻) インドネシア
語 (1~3 巻) フランス語 ドイツ語 ブルガリア語 ポーランド語 ポルトガル語
チェコ語 日本語 ハンガリー語 ロシア語 (各1巻)

即刻開悟 マスターと弟子の往復書簡

中国語 (1~3 巻) 英語 (1 巻) オウラック語 (1~2 巻) スペイン語 (1 巻)

即刻開悟 神奇感應

中国語 オウラック語 (1~2 巻)

即刻開悟の鍵 特別編 1992年フォルモサ三地門、禅七

英語 オウラック語 (各1巻)

スプリームマスターチンハイ 1993年世界講演ツアー特別版

英語 中国語 (各1~6巻)

マスターが話す物語

中国語 英語 オウラック語 タイ語 スペイン語 韓国語 日本語 (各1巻)

平和への道 — 神と直接つながる

英語 中国語 オウラック語 (各1巻)

スプリームマスターチンハイによる智慧の漫画集

— 神はすべての面倒を見る

中国語 英語 オウラック語 韓国語 日本語 フランス語 (各1巻)

生命を彩るために

中国語 英語 オウラック語 (各1巻)

スプリームマスター チンハイ悟りの笑い話集

—光輪がきつすぎる！

中国語／英語 (CD付)

気軽に修行する秘訣

中国語 英語 オウラック語 (各1巻)

神と人間と — 聖書物語からの洞察

中国語 英語 (各1巻)

健康を理解する — 自然な正しい生き方に戻る

英語 中国語 オウラック語 (各1巻)

ドッグ イン マイライフ 1, 2

中国語 英語 オウラック語 韓国語 日本語 スペイン語 ポーランド語 ドイツ語

1, 2ともに500ページを超える、スプリームマスターチンハイが彼女の犬たちのために出版した美しい写真集

バード イン マイライフ

中国語 英語 オウラック語 フランス語 ドイツ語 モンゴル語 ロシア語 韓国語
インドネシア語 アラビア語 (各1巻)

美しい写真のイラスト集で、みなさんを鳥の世界へいざないます。人類とともに、この世間で共同生活をしている美しい鳥類の生来の誠実さと、情が深い性質をより理解することでしょう。

気高い野生動物

中国語 英語 オウラック語 ドイツ語 フランス語 韓国語 モンゴル語 (各1巻)

スプリームマスター チンハイが自ら一年余りをかけて、撰文と撮影をした一冊の湖畔生態日誌、人類の友である動物たちの天性の高貴なる品性を語り、人類の先頭に立ってかつてない新しい世界へと導きます。

スプリームマスター チンハイ 芸術創作集

中国語／英語

セレスチャルアート

中国語／英語 (各1巻)

音楽を通して、平和な一つの世界を

慈善コンサートのインタビューとミュージカル作品集

中国語／英語／オウラック語

セレスチャルクローズ集

英語／中国語

スプリームキッチン1 世界のベジタリアン料理集

英語／中国語／オウラック語 日本語訳 (別冊)

スプリームキッチン2 家庭料理集

英語／中国語

I Have Come To Take You Home

中国語 英語 オウラック語 フランス語 イタリア語 韓国語 モンゴル語 ギリシャ語 ブルガリア語 スペイン語 ドイツ語 ポーランド語 ハンガリー語 ロシア語 インドネシア語 チェコ語 ルーマニア語 トルコ語 アラビア語 (各1巻)

甘露法語1

中国語／英語 スペイン語／ポルトガル語 ドイツ語／フランス語 韓国語／英語 日本語／英語

甘露法語2 マスターによる永遠の智慧の宝石

中国語／英語

Thoughts on Life and Consciousness

Dr. Janez 著 中国語

危機から平和へ

オウラック語 中国語 英語 オランダ語 韓国語 フランス語 ハンガリー語 インドネシア語 日本語 ノールウェイ語 スペイン語 スウェーデン語 タイ語 ポルトガル語 ポーランド語 ロシア語 ルーマニア語 (各1巻)

沈黙の涙 マスター著作の詩集

ドイツ語／フランス語 中国語／英語 オウラック語 英語 スペイン語
ポルトガル語 韓国語 フィリピン語

その他にも講義録、音楽DVD、MP3、MP4シリーズがあります。中国語 英語 フィリピン語 フランス語 ドイツ語 スペイン語 ポルトガル語 ロシア語 アルメニア語 ルーマニア語 ブルガリア語 ギリシャ語 イタリア語 フィンランド語 ポーランド語 ハンガリー語 スロベニア語 チェコ語 スウェーデン語 ノルウェー語 ヘブライ語 クロアチア語 トルコ語 デンマーク語 アラブ語 カンボジア語 スリランカ語 モンゴル語 ペルシャ語 インドネシア語 タイ語 日本語 韓国語 ズールー語 広東語 ネパール語 マレーシア語の書籍が出版されています。

下記のサイトで、最新の出版物の一覧表や内容の紹介をご覧ください。

<http://www.smchbooks.com>

スプリームマスター チンハイの出版物を購入したいときは、下記のサイトで購入できます。

<http://www.thecelestialshop.com>

<http://www.edenrules.com>

≪即刻開悟の鍵≫ 各国語の小冊子 無料ダウンロードサイト (80カ国語)

<http://sb.Godsdirectcontact.net>

<http://www.direkter-kontakt-mit-gott.org/booklet>

私たちへの連絡方法

スプリームマスター チンハイ インターナショナルアソシエーション

中華民国 36899 苗栗西湖郵政九號信箱
P.O.Box730247, San Jose, CA95173-0247, U.S.A

スプリームマスターテレビジョン

E メール: Peace@SupremeMasterTV.com
Tel: 1-626-444-4385 / Fax: 1-626-444-4386
<http://www.suprememastertv.com>

スプリームマスターTVは主にポジティブな番組を放映する唯一のチャンネルです。新しい霊的視野を提供し、あなたの人生を充実させます。

書籍部

E メール: divine@Godsdirectcontact.org
マスターの出版物を各国言語に翻訳して下さる方を大歓迎いたします

ニュースグループ

E メール: lovenews@Godsdirectcontact.org

S.M. セレスチャル社

E メール: smclothes123@gmail.com; vegan999@hotmail.com
Tel: 886-3-4601391 / Fax: 886-3-4602857
<http://www.smcelestial.com> <http://www.sm-celestial.com>

スピリチュアルインフォメーションデスク

E メール: lovewish@Godsdirectcontact.org Fax: 886-946-730699

スプリームマスター チンハイ インターナショナルアソシエーション出版社

Eメール: smchbooks@Godsdirectcontact.org

Tel : 886-2-23759688/ Fax: 886-2-23757689

<http://www.smchbooks.com>

オンラインショップ

Celestial Shop: <http://www.theCelestialShop.com> (English)

Eden Rules: <http://www.EdenRules.com> (English,Chinese)

Loving Hut インターナショナルカンパニー

Eメール: service@lovinghut.com

<http://www.lovinghut.com/tw>

観音Webサイト

神と直接つながる…スプリームマスター チンハイ I. A. の観音Webサイトにアクセスしてください

<http://www.godsdirectcontact.org.tw/eng/links.htm>

即刻開悟の鍵 5

作 者 スプリームマスター チンハイ
翻 訳 日本翻訳グループ
出 版 社 スプリームマスター チンハイ
インターナショナル アソシエーション出版社
住 所 福爾摩沙台北市中正區忠孝路一段 72 號 8 樓 16
(郵便番号 100)
初 版 2017 年 7 月

The Supreme Master Ching Hai ©2007~2017

著作権者 スプリームマスター チンハイ

* 出版社の同意の上、本書の内容の転載は歓迎します

私たち The Supreme Master Ching Hai に学ぶ者は、究極の真理を探究するなかで、苦難を経験してきました。ですから、私たちはもともと内在している智慧を目覚めさせ、この真理を認識させる最高の法門を教えてくれる、完全に開悟した生きているマスターをみつけることが、どれほど困難で稀なことかを理解しています。そして、この法門は古代よりあらゆる真のマスターたちによって教えられてきたのです。この法門を実行することで、深い利益が得られることを体験してきた私たちは、一世での魂の永遠の解脱を心から望んでいる真の探究者や、人生や生死、靈的修行や真理に関するさまざまな疑問の答えを見いだそうとしている人々の手助けとなるよう、The Supreme Master Ching Hai が世界各国で行なった講演集をここに贈ります。